挿図番号	出土地点	器　種	法　　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形　態　・　手　法　の　特　徴	備　　考
112－9	ＳＫ40	脚　部	底径　11.5 （脚部 1/5存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	端部が肥厚して面をもち、1条の凹線文を施す 外面及び内面裾部ナデ調整、脚柱部ケズリ調整	
112－10	ＳＫ40	胴　部	（胴部破片）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②外面灰黄褐色、内面暗茶褐色　③普通	2ヶ1対と思われる穿孔あり 外面ナデ調整．内面指頭圧痕、ナデ調整	土製品の可能性あり
119－1	ＳＫ41	高　坏	口径　18.8 （口縁部 1/7存）	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など）含む　②外面灰黄褐色、内面黄橙褐色　③普通	湾曲して立ち上がる体部から内傾する口縁部に移行し、端部はしっかりした平坦面をもつ．口縁面には4条の凹線文を施し、上下及び2列あの凸帯に刻目を施す 内外面とも丁寧なナデ調整	
119－2	ＳＫ42	甕	口径　13.7 （口縁部 1/7存）	①1mm大の砂粒子（石英・角閃石など）少し含む　②外面暗黄橙褐色、内面黄橙褐色　③普通	なだらかな肩部から頸部は「く」の字状に屈折し口縁部に至る．口縁はわずかに上に肥厚する 口縁内外面ともナデ調整．外面肩部ハケ目調整、以下丁寧なナデ調整．内面頸部下ハケ目のちナデ調整、以下ケズリのちナデ調整	外面煤付着
119－3	ＳＫ43	壺	（口縁部破片）	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石・長石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	広口の口縁で、端部は上下に肥厚して面をもち、3条の凹線文を施す 内面ハケ目調整、外面風化著しく調整不明	口縁端面に黒斑あり
119－4	ＳＫ43	底　部	底径　6.0 （底部 1/8存）	①微砂粒子(石英･長石･角閃石など)含む ②外面暗茶褐色､内面にぶい黄褐色 ③普通	平底 内外面ともナデ調整	
119－5	ＳＫ44	甕	口径　15.2 （口縁部 1/8存）	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石など）含む　②淡黄褐色　③普通	口縁部がかなり拡張されて面をもち、風化著しいが3条の凹線文が確認できる 内外面ともナデ調整	
119－6	ＳＫ44	壺	口径　16.8 （口縁部 1/4存）	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石など）・含む　②黄橙褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は横に引き出す．肩部に貝殻原体による刺突文が観察される 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
119－7	ＳＫ44	甕	口径　20.0 （口縁部 1/6存）	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石・長石・金雲母など）含む　②にぶい灰黄褐色　③普通	なだらかな肩部から頸部はくり上げて口縁部に至る．口縁は上下に肥厚して面をもち、3条の沈線文を施す．肩部には1条の沈線を施す 外面頸部以上及び内面胴部上半以上ナデ調整、外面頸部以下ハケ目調整、内面胴部下半ケズリ調整	
119－8	ＳＫ45	甕	口径　25.5 （口縁部 1/7存）	①1～2mm大の砂粒子（石英など）含む ②にぶい黄褐色　③普通	なだらかな肩部から頸部「く」の字状に屈曲し口縁部に至る． 口縁は上下に肥厚して3条の凹線文を施す 口縁部内外面ともナデ調整、他風化著しく調整不明	
119－9	ＳＫ46	甕	口径　16.0 （口縁部 1/8存）	①微砂粒子（石英・角閃石など）含む ②外面黒褐色、内面暗黄褐色　③普通	なだらかな肩部から頸部「く」の字状にきつく屈曲し、口縁部に至る．口縁は上に肥厚して面をつくり2～3条の沈線文を施す 内外面とも頸部以上ナデ調整、以下ハケ目調整	外面煤付着
119－10	ＳＫ46	高　坏	口径　22.6 （口縁部 1/7存）	①微砂粒子（角閃石・石英など）含む ②にぶい黄褐色　③普通	浅く広がる坏部である．少々厚手で端部は丸くおさめる 外面ミガキ調整と思われる．内面風化著しく調整不明	
119－11	ＳＫ47	底　部	底径　5.3 （底部 1/4存）	①微砂粒子（石英・角閃石など）含む ②灰黄褐色　③普通	平底．内面の底面積小さいもの 底面及び内面ナデ調整、他風化著しく調整不明	
119－12	ＳＫ47	底　部	底径　7.0 （底部 1/7存）	①微砂粒子（石英・角閃石など）含む ②にぶい黄橙褐色　③普通	やや薄手の平底 底面及び内面ナデ調整、外面ミガキ調整	
119－13	ＳＫ48	甕	（口縁部破片）	①1mm大の砂粒子（石英・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄橙褐色　③普通	複合口縁で、端部は厚手に丸くおさめ、突出部は下に出る．口縁面には貝殻腹縁による擬凹線文を施したのち撫消しを部分的に行う 外面ナデ調整.内面頸部以上丁寧なナデ調整､以下ケズリ調整	
119－14	ＳＫ48	高　坏	脚柱部径　5.4 （脚接合部　完）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）多く含む　②暗灰褐色～にぶい黄褐色　③普通	坏部面のいきている脚柱部の付け根付近である．しっかりした凹線文が施され、1条の凸帯に刻目が施される 坏部内面ハケ目調整と思われる	
119－15	ＳＫ48	装飾壺	（胴部破片）	①微砂粒子（石英・長石など）含む ②外面淡黄橙褐色、内面黒褐色　③普通	器形が算盤状を呈するもので、胴部2条の削りだし突帯部分である．平行沈線文及び「く」の字のスタンプ文が施されている 風化著しく調整不明	
119－16	ＳＫ48	胴　部	（胴部破片）	①1mm以下の砂粒子(石英･長石･角閃石･金雲母など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	外面に平行沈線文及び竹管文が施されている 外面ハケ目調整と思われる．内面ケズリ調整	
126－1	ＳＤ11	壺	口径　16.0 （口縁部 1/6存）	①微砂粒子(石英･長石･角閃石など)含む ②淡黄褐色　③普通	上に拡張された口縁部は内傾し､口縁面には4条の沈線文を施す 外面ナデ調整、内面頸部ハケ目の痕跡観察される．他は風化著しく調整不明	
126－2	ＳＤ11	壺	口径　17.5 （口縁部 1/4存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）多く含む　②黄褐色　③普通	まっすぐにのびる頸部から口縁部に至る．口縁端部は欠損しているが、上下に拡張し、口縁面には現状で5条の凹線文が確認できる．頸部には8～10条の凹線文を施し、その下に貝殻腹縁による連続の刺突文を施す 外面ナデ調整．内面口縁部ナデ調整、2条の沈線入る．内面頸部ケズリのちナデ調整、胴部ケズリ調整	
126－3	ＳＤ11	甕	口径　17.8 （口縁部 1/6存）	①1mm以下の砂粒子（長石・石英・角閃石など）含む　②暗灰黄褐色　③普通	なだらかな肩部から頸部「く」の字状に屈折し、口縁部に至る．口縁は上に肥厚して面をもち2条の沈線文を施す 内外面とも頸部以上ヨコナデ調整、頸部以下外面タテナデ調整、内面不定方向のナデ調整	
126－4	ＳＤ11	甕	口径　15.7 （口縁部 1/7存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②黒褐色　③普通	なだらかな肩部から頸部「く」の字状に屈折し、すぐに口縁部に至る．口縁は上に拡張して面をもち3条の凹線文を施す 外面肩部上位以上ナデ調整、以下ハケ目調整．内面口縁部ヨコナデ調整、胴部上位荒いナデ調整、以下ケズリ調整	
126－5	ＳＤ11	底　部	底径　5.9 （底部 1/3存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②黒灰色　③普通	平底で、薄手の器壁となる 内面ケズリ調整、外面風化著しく調整不明	全体に黒っぽいのは黒斑？

挿図番号	出土地点	器　種	法　　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形　態　・　手　法　の　特　徴	備　　考
126－7	ＳＤ13	甕	（口縁部破片）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②暗黄褐色　③普通	複合口縁化しつつあり、口縁部が拡張されたもの．口縁面には3条の凹線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
126－8	ＳＤ13	甕	（口縁部破片）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②外面灰黄褐色、内面黄褐色　③普通	複合口縁で、端部はわずかに平坦ぎみにし、突出部は斜め下に出る 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	口縁部黒斑あり
126－9	ＳＤ13	高　坏	（坏部破片）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	口縁部が反り端部がかなり幅をもち少々厚手とするもの．口縁面には4条の沈線文が施される 外面口縁部及び内面端部ナデ調整．体部外面ミガキ調整、内面風化著しく調整不明	
125－1	ＳＤ14	甕	口径　21.2 （口縁部 1/9存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	胴部のほとんど張らないもので、頸部は「L」字状に屈曲し口縁部に至る．口縁はわずかに肥厚したかのように厚くなっている 内面及び外面頸部以上ナデ調整、胴部ハケ目調整	
125－2	ＳＤ14	甕	口径　29.0 （口縁部 1/7存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②暗黄褐色　③普通	やや肩部が張り頸部「く」の字状に屈折して口縁部に至る．口縁はわずか上に肥厚する 内面胴部ハケ目調整．他内外面ともナデ調整	外面口縁部煤付着
125－3	ＳＤ14	甕	口径　18.3 （口縁部 1/6存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄橙褐色　③普通	なだらかな肩部から頸部「く」の字状に屈折し、口縁部に至る.口縁は上に肥厚して面をもち、1条の凹線文と刻目を施す 内面及び外面頸部以上ナデ調整、以下ハケ目調整	
125－4	ＳＤ14	甕	口径　18.4 （口縁部 1/3存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）及び若干の1mm大の砂粒子含む　②黄橙褐色　③普通	なだらかな肩部から頸部「く」の字状に屈折し、口縁部に至る．口縁は複合口縁化しつつ、上に拡張して面をもち、3条の沈線文を施す 内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
125－5	ＳＤ14	甕	口径　18.0 （口縁部 1/6存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②暗黄褐色　③普通	頸部がやや長めで、口縁部は上下に拡張して面をもち、4条の凹線文を施す 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
125－6	ＳＤ14	甕	（口縁部破片）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は膨らんで丸くおさめ、突出部は下に出る．口縁面は風化著しいがわずかに沈線の痕跡うかがえる 口縁部内面ナデ調整、他風化著しく調整不明	
125－7	ＳＤ14	底　部	底径　8.6 （底部　完）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄橙褐色　③普通	しっかりした平底．1度くびれさせて形を整え、器壁を立ち上げていく 外面ナデ調整、内面風化著しく調整は不明だが、底部に指頭圧痕あり	外面黒斑あり
125－8	ＳＤ14	胴部～底部	底径　6.7 （底部 1/5存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む　②外面黄橙褐色、内面黒灰色　③普通	胴部の立ち上がりに対しては小さめの平底 底面ナデ調整．外面胴部ミガキ調整、内面縦方向の単位の明確なナデ調整	内面の黒灰色は黒斑？
125－9	ＳＤ14	底　部	底径　6.5 （底部 1/3存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む　②暗茶褐色　③普通	底部裾の広がった上げ底である．胴部はあまり広がらず筒状に立ち上がる 内外面ともナデ調整、特に外面は丁寧に行う	
125－10	ＳＤ14	底　部	底径　10.0 （底部　完）	①1mm大の砂粒子（石英・長石など）やや多く含む　②外面にぶい黄橙褐色、内面暗灰黄褐色　③普通	広くしっかりした平底で、内面は指押さえにより底面積を広げている 内面胴部ケズリ調整、外面風化著しく調整不明	
125－11	ＳＤ14	底　部	底径　8.5 （底部　ほぼ完）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②黄褐色　③普通	どっしりとした平底 底面ナデ調整．外面ミガキ調整、裾部ミガキのちヨコナデ調整．内面ナデ調整	
125－12	ＳＤ14	高　坏	口径　26.2 （坏部 1/7存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②外面暗黄茶褐色、内面にぶい黄褐色　③普通	湾曲した体部から屈曲して外傾し、複合口縁状の口縁部を有する．口縁面には5条の凹線文を施す 外面口縁部ナデ調整、体部ミガキ調整．内面口縁部ナデ調整、体部直立した部分ケズリのちナデ調整、以下丁寧なナデ調整	
126－11	ＳＤ16	底　部	底径　5.8 （底部 1/4存）	①1mm以下の砂粒子（石英・角閃石など）含む　②暗黄褐色　③普通	平底で、薄手の器壁へと立ち上がっていく 外面ナデ調整．内面底部ナデ調整、胴部ケズリ調整	
130－1	土器群18	装飾壺	最大径　18.8 （胴部 1/7存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	胴部に2条の削り出し突帯をつくり算盤状を呈するもので、削り出し突帯内には「く」の字状のスタンプ文、突帯以上には吉備系の鋸歯文、逆「Ｓ」字状のスタンプ文、3条の平行沈線文、突帯以下には3条の平行沈線文、逆「Ｓ」字状のスタンプ文、3～4条の平行沈線文を施す 内面ケズリ調整、外面風化著しく調整不明	外面朱塗りの痕跡わずかに確認できる
130－2	土器群18	壺	口径　16.4 （口縁部 1/10存）	①微砂粒子（石英・長石など）含む　②にぶい黄橙褐色　③普通	広口壺の口縁で、端部は肥厚して3条の凹線文を施す 風化著しく調整不明	朱塗り痕あり
130－3	土器群18	壺	口径　9.8 （口縁部 1/8存）	①1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む　②外面橙褐色、内面暗褐色　③普通	小型タイプである．直立した頸部に口縁部が水平に肥厚して面をもち、2条の凹線文を施す．肩部には連続の山形文が数条施されている 内面頸部丁寧なナデ調整、胴部ケズリのち丁寧なナデ調整、外面風化著しく調整不明	
130－4	土器群18	壺	口径　17.2 （口縁部 1/8存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②橙褐色　③普通	鉢状を呈して口径の広いものである．胴部から頸部へはメリハリなくなだらかに移行し、口縁部は上下に肥厚して面をもち3条の沈線文を施す．胴部最大径付近に刺突文を施す 内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整．外面風化著しく調整不明	
130－5	土器群18	壺	口径　14.3 （口縁部 1/8存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）及び若干の2mm大の砂粒子含む　②暗黄褐色　③普通	口縁部が上に拡張して面をもち3条の沈線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	

挿図番号	出土地点	器　種	法　　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形態・手法の特徴	備　考
130－6	土器群18	壺	口径　16.3 （口縁部 1/6存）	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ突出部はわずかに下に出る．口縁面には貝殻腹縁による7条の擬凹線文を施す．口縁部内面は平坦面をつくり受け口状となっている．胴部は器壁の薄いものとなる 外面及び内面口縁部ナデ調整、頸部荒いナデ調整、胴部ケズリ調整	
131－1	土器群18	甕	口径　18.5 （口縁部 1/6存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②淡黄褐色　③普通	なだらかな肩部から頸部「く」の字に屈曲し、口縁はわずかに上に肥厚する 内外面とも風化著しく調整不明	
131－2	土器群18	甕	口径　16.0 （口縁部 1/8存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②暗褐色　③普通	ほとんど張りのない肩部から頸部「L」字状に屈曲して口縁部に至り、口縁は上に肥厚して面をもち1条の凹線文を施す 内面及び外面頸部以上ナデ調整、以下タテハケ目が観察される	
131－3	土器群18	甕	口径　19.0 （口縁部 1/8存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）及び若干の1～2mm大の砂粒子含む　②黄褐色　③普通	なだらかな肩部からスムーズに口縁部に移行し、口縁は上下に肥厚して面をもち2条の凹線文を施す 内外面とも頸部以上ナデ調整、以下ハケ目調整	
131－4	土器群18	甕	口径　21.9 （口縁部 1/8存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②黄橙褐色　③普通	なだらかな肩から頸部「く」の字状に屈曲し口縁部に至る．口縁は上に肥厚して面をもち2条の凹線文を施す 内外面ともナデ調整	
131－5	土器群18	甕	口径　33.2 （口縁部 1/8存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	大型で厚手のタイプである．複合口縁で端部を丸くおさめ突出部は横へ引き出す．口縁面には4条の凹線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
131－6	土器群18	甕	口径　25.0 （口縁部 1/5存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）及び若干の2～3mm大の砂粒子含む ②淡黄褐色　③普通	やや大型で厚手のタイプである．複合口縁で端部を丸くおさめ、突出部は下に出る．口縁面には5条の凹線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
131－7	土器群18	甕	口径　17.3 （口縁部 1/4存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②外面暗褐色～暗黄褐色、内面にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は下に引き出す．口縁面には貝殻腹縁による6条の擬凹線文を施している 外面ナデ調整、内面頸部以上丁寧なナデ調整、以下ケズリ調整	
131－8	土器群18	甕	口径　21.7 （口縁部 1/5存）	①1mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石・橙褐色粒子など）含む　②淡黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は膨らませて丸くおさめ、突出部はわずかに下に出す．口縁面には貝殻腹縁による擬凹線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
131－9	土器群18	甕	口径　15.4 （口縁部 1/7存）	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②外面暗黄褐色、内面暗褐色 ③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は下に出る．口縁面には貝殻腹縁による7条の擬凹線文が波状に施され、上部はナデている 外面ナデ調整、内面頸部以上単位の狭い丁寧なミガキ状のナデ調整、以下ケズリ調整	
131－10	土器群18	甕	口径　15.2 （口縁部 1/4存）	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部はわずかに斜め下に出る．口縁面には小さな貝殻腹縁による擬凹線文が8条施される．肩部には刺突文が施されている 外面刺突文以上及び内面頸部以上ナデ調整、外面胴部ハケ目調整、内面頸部以下ケズリ調整	
131－11	土器群18	甕	口径　14.8 （口縁部　ほぼ完）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は膨らませて平坦ぎみに丸くおさめ、突出部はわずかに下に出る．口縁面には貝殻腹縁による8条の擬凹線文を施し、のちに全体をナデて浅くしている 外面ナデ調整．内面頸部以上ミガキ調整、以下ケズリ調整	
131－12	土器群18	甕	口径　19.9 （口縁部 1/4存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外面暗黄褐色、内面にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部はまわりを抉り込ませて下に強く引き出す．口縁面には8条の擬凹線文を施し、のち全体をナデている 外面ナデ調整．内面頸部以上ケズリのちミガキ調整、以下ケズリ調整	外面煤付着
131－13	土器群18	甕	口径　19.4 （口縁部 2/3存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は平坦面をなし、突出部はわずかに横に出す．口縁面には貝殻腹縁による約13条の擬凹線文を施し、のちに上部を部分的に撫消している．肩部には貝殻原体による簾状文を施す 外面ナデ調整、内面頸部以上丁寧なナデ調整、以下ケズリ調整	
132－1	土器群18	甕	口径　22.6 （口縁部 1/10存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）及び若干の1～2mm大の砂粒子含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部はほとんど出ない．口縁面には貝殻腹縁による5本単位の10条の擬凹線文が施される 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
132－2	土器群18	甕	口径　21.0 （口縁部 1/5存）	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②外面橙褐色、内面にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部はやや平坦ぎみに丸くおさめ、突出部はほとんど出ない．口縁面には約11条の擬凹線文を施し、のち全体をナデているため、上部が消されている部分あり．肩部には口縁部と同じ原体の平行沈線文が現状で6条施される 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	外面に煤付着観察できる
132－3	土器群18	甕	口径　19.8 （口縁部 1/6存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くゆるやかな平坦面をもち、突出部は膨らませて斜め下に出る．口縁面には貝殻腹縁による約10条の擬凹線文が施してある 外面ナデ調整.内面頸部以上丁寧なナデ調整、以下ケズリ調整	
132－4	土器群18	甕	口径　17.9 （口縁部 1/6存）	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）多く含む　②外面暗褐色、内面暗黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は膨らみ横に出る．口縁面には小さな貝殻腹縁による擬凹線文が14条施されている 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
132－5	土器群18	甕	口径　23.4 （口縁部 1/8存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は平坦ぎみに丸くおさめ、突出部はわずかに下に出る．口縁面には6条の擬凹線文を施し、のちに部分的に撫消しを行う 外面ナデ調整.内面頸部以上丁寧なナデ調整、以下ケズリ調整	
132－6	土器群18	胴　部	(胴部破片)	①1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む ②黄褐色　③普通	断面矩形の鍔状の貼付突帯文を有する胴部破片である．突帯の上に1点のみヘラキズあり 外面突帯はナデ調整、胴部及び内面ハケ目調整	

挿図番号	出土地点	器　種	法　　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形　態　・　手　法　の　特　徴	備　　考
132－7	土器群18	底　部	底径　7.2 （底部 1/3存）	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など)及び若干の2～3mm大の砂粒子含む　②暗黄褐色　③普通	しっかりした平底で、底部円盤を作り、そのまわりから粘土紐を巻き上げているのが観察できる 外面及び内面底部ナデ調整、胴部ケズリ調整	底面に黒斑あり
132－8	土器群18	底　部	底径　7.9 （底部 1/3存）	①1mm以下の砂粒子(石英･長石など)含む　②外面暗黄褐色、内面にぶい黄褐色　③普通	平底で、底部から胴部へはくびれを入れて立ち上がる 外面くびれ部及び底面ナデ調整、胴部ミガキ調整．内面ケズリ調整	底面に黒斑あり
132－9	土器群18	底　部	底径　5.1 （底部　完）	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・金雲母など）含む　②黄橙褐色　③普通	厚手の上げ底である 内外面とも風化著しく調整不明	
132－10	土器群18	底　部	底径　4.7 （底部 1/4存）	①微砂粒子（石英・長石など）含む　②暗黄褐色　③普通	底部としては薄手で、平底である．底面には網代痕残る 外面ナデ調整、内面ケズリ調整	
132－11	土器群18	底　部	底径　4.2 （底部　完）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②暗黄褐色　③普通	底面から指押さえにより上げ底にしている 外面ナデ調整．内面は底部中央を中心としてヘラ押さえにより絞り縮めている	
132－12	土器群18	底　部	底径　3.5 （底部　完）	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など)及び若干の2～3mm大の砂粒子含む　②暗橙褐色　③普通	小さい少々上げ底ぎみの平底である 内外面とも丁寧なナデ調整	
132－13	土器群18	底　部	底径　3.9 （底部　完）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②暗黄褐色　③普通	小さい平底で、器壁もやや薄手である 外面ハケ目調整、底面ナデ調整、内面ケズリ調整	
132－14	土器群18	底　部	底径　2.5 （底部　完）	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②外面黒褐色～橙褐色、内面にぶい黄褐色　③普通	稜線のあまい小さな平底で、器壁もやや薄手である 外面磨いたように丁寧なナデ調整、内面ケズリ調整、底面剝落していて調整不明	内外面に黒斑あり
132－15	土器群18	高　坏	（坏部破片）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②外面黒灰色～暗灰黄褐色、内面にぶい黄褐色　③普通	体部から直立ぎみに口縁部が立ち上がる．口縁端部は平坦面をもち、口縁面には5条の凹線文を施す 内外面ともナデ調整、特に内面は丁寧なナデ調整	外面に黒斑あり
132－16	土器群18	脚　部	底径　10.5 （脚部 1/8存）	①1mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②外面橙褐色、内面にぶい黄褐色　③普通	高坏か台付甕などの脚部である．端部は断面矩形で踏ん張り、面には4条の凹線文の痕跡が観察される．その上に現状で2ヶの透し孔あり 内面ナデ調整、外面風化著しく調整不明	搬入品？
132－17	土器群18	高　坏	底径　12.6 （脚部 1/3存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含み、緻密　②にぶい黄褐色　③普通	接合部に粘土塊が詰めてあり、また脚部も厚手のため全体にどっしりとしている．脚裾部は屈曲して複合口縁状を呈す 外面脚柱部ミガキ調整、裾部丁寧なナデ調整．内面脚柱部ナデ調整、裾部ケズリ調整	外面朱塗り
132－18	土器群18	鉢	口径　17.2 （口縁部 1/7存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石など）含む　②外面黒灰色～黄褐色、内面黄褐色　③普通	最大径が肩部にあり、口縁部はわずかに上下に肥厚して面をもつ 内外面とも頸部以上ナデ調整、外面以下ミガキ調整、内面以下ケズリ調整	外面に黒斑あり
133－1	土器群18	鼓形器台	底径　16.1 （脚部 1/5存）	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②黄橙褐色　③普通	脚部は複合口縁状で、面は貝殻腹縁による擬凹線文を施したのちに撫消しを行っている 外面脚部ミガキ調整、脚裾部及び内面裾部ナデ調整、脚部ケズリ調整	
133－2	土器群18	鼓形器台	底径　15.0 （筒部～脚部 ほぼ完）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・橙色粒子など）多めに含む　②にぶい黄橙褐色　③普通	脚部は複合口縁状で、面は風化著しく工具も確定できず、8条と思われる擬凹線文が施される．端部は膨らませて丸くおさめる．筒部はまだ長いものである 内面筒部縦方向のハケ目調整、脚部ケズリ調整．外面風化著しく調整不明	
133－3	土器群18	鼓形器台	底径　18.8 （1/2存）	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	脚部は複合口縁状で、面には貝殻腹縁による12条以上の擬凹線文を施し、下位は丁寧な撫消しを行っている．端部は丸くおさめる．筒部はまだ長いものである 外面筒部ミガキ調整、突出部まわりはヨコナデ調整．内面筒部から脚部ケズリ調整、脚裾部ナデ調整	
133－4	土器群18	鼓形器台	口径　26.0 （受部 1/6存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・橙色粒子など）含む　②黄橙褐色　③普通	受部は複合口縁状で、面は風化著しく工具も確定できず、部分的に8条の擬凹線文が観察できる程度．端部は丸くおさめる 内外面とも風化著しく調整不明	
133－5	土器群18	鼓形器台	口径　25.3 器高　24.6 底径　20.5 （4/5存）	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・橙色粒子など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	受部・脚部ともに複合口縁状で、面には貝殻腹縁による擬凹線文が、受部16条、脚部15条施され、端部はそれぞれ膨らませて丸くおさめる．筒部は長いタイプである 外面両複合口縁状部分及び突出部まわり、内面脚裾部ナデ調整.外面筒部及び内面受部ミガキ調整、筒部から脚部ケズリ調整	脚部内面に黒斑あり
133－6	土器群18	鼓形器台	口径　24.5 （受部 1/4存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	受部は複合口縁状で、面には貝殻腹縁よる擬凹線文を24条施し、端部は膨らませて平坦ぎみにおさめる 受部外面ナデ調整、内面ミガキ調整、他は風化著しく調整不明	133-7と同一個体の可能性あり
133－7	土器群18	鼓形器台	底径　20.6 （脚部　ほぼ完）	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄橙褐色　③普通	脚部は複合口縁状で、面には貝殻腹縁による17条の擬凹線文を施し、端部は膨らませて丸くおさめる．複合口縁状の面がやや長くなり始める 外面丁寧なナデ調整．内面筒部から脚部ケズリ調整、脚裾部ナデ調整	外面に朱塗り痕あり 133-6と同一個体の可能性あり
133－8	土器群18	鼓形器台	底径　20.6 （脚部 1/9存）	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む　②暗黄褐色　③普通	脚部は複合口縁状で、面には10条以上の擬凹線文を施したのち、下半部を撫消している 外面脚基部ケズリのちミガキ調整、内面風化著しく調整不明	
134－1	Ⅰ区 A5 Gr 不明 B5 Gr 11層	壺	口径　25.3 （口縁部 1/5存）	①1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む　②橙褐色　③普通	広口壺で、直立する頸部から口縁部が外反し、厚みのある端部は平坦面をなし、1ケ所貼り付け浮文がとれた痕跡あり．頸部にヘラ状工具により鋭角な三角形を描いている．43-1（ＳＤ10出土）の魚類の鰭と酷似している 風化著しいが内外面ともナデ調整と思われる	43-1と直接接合するものと考えたが、接点はなく、同一個体にはまちがいないと思うので43-1のサメとは別のサメ？と思われる

挿図番号	出土地点	器　種	法　　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形　態　・　手　法　の　特　徴	備　　考
134－2	Ⅰ区 A3 Gr 8層	壺	口径　26.9 (口縁部 1/8存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②暗灰黄褐色　③普通	広口壺で、口縁端部が鉤の手状に水平に肥厚して平坦面をつくり、3本線による斜格子文を、口唇部には刻目文を施す．また口縁部には現状で4条の刻目貼付突帯文をめぐらし、2本1対の棒状浮文を貼り付けている 外面ナデ調整、内面ハケ目調整	
134－3	Ⅰ区 B3 Gr 1層	壺	(口縁部破片)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい橙褐色　③普通	広口壺で、口縁端部が鉤の手状に水平に肥厚して平坦面をつくり、斜格子文を施したのち、外側に指頭圧痕文帯を内側に円形浮文を貼り付ける．口縁部には現状で3条の貼付突帯文をめぐらし、2本1対の棒状浮文を貼り付けている 内外面とも風化著しく調整不明	
134－4	Ⅰ区 B3 Gr 8層	壺	(口縁部破片)	①1mm以下の砂粒子(石英･長石･角閃石･金雲母など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	広口壺の口縁部先端付近の破片である．湾曲に広がった口縁部から端部は垂下するようである．口唇部には刻目を施し、口縁部にはヘラ状工具により2本で1本線を表現し、幅のある羽状文を施している 内外面ともナデ調整	
134－5	Ⅰ区 A4 Gr 8層	壺	(口縁部破片)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい灰黄褐色　③普通	広口壺で、端部が垂下するものである．口縁部には2段の波状文が、端面には斜格子文が施してある 内外面ともナデ調整	
134－6	Ⅰ区 A1 Gr 4層	壺	口径　18.0 (口縁部 1/9存)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）及び若干の2～3mm大の砂粒子含み、やや緻密　②外面暗灰黄褐色、内面灰黄褐色　③普通	広口壺で、張りのある胴部から直立外反した口縁部へと移行し、端部は垂下する．頸部には貼付突帯文が確認できる．おそらく指頭圧痕したものであろう．肩部に列点文を施す．外面頸部は指押さえにより外反させている 外面口縁部ナデ調整、頸部以下ハケ目調整．内面胴部ハケ目調整、他風化著しく調整不明	口縁部と胴部を接点なく想定でつなぎ合わせたもの
134－7	Ⅰ区 A3 Gr 8層	壺	口径　16.0 (口縁部 1/8存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む　②にぶい黄褐色　③普通	口縁部が上に肥厚して面をもち、3本線による斜格子文を施し円形浮文を貼り付ける．頸部には指頭圧痕文帯がめぐる 内外面ともナデ調整	
134－8	Ⅰ区 A2 Gr 4層	壺	口径　31.7 (口縁部 1/16存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②暗灰黄褐色　③普通	広口壺で、口縁端部が鉤の手状に水平に肥厚して平坦面をつくり、3条の凹線文及び凸部に刻目文を施し、円形浮文を貼り付ける．頸部には現状で2条の刻目貼付突帯文をめぐらす． 内外面ともナデ調整	
134－9	Ⅰ区 B3 Gr 8層	壺	口径　21.0 (口縁部 1/13存)	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	広口壺で、口縁端部が上下に肥厚して面をもち、3条の凹線文を施し、斜め縦方向で凹線文を縦切りするように沈線を入れ、2本1対の棒状浮文を貼り付ける．口唇部には刻目を施す 内外面ともナデ調整	
134－10	Ⅰ区 A4 Gr 8層	壺	口径　34.1 (口縁部 1/6存)	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②黄褐色、断面黒灰色　③普通	広口壺で、口縁端部は上下に肥厚して面をもち3条の凹線文を、口縁部には4条の凹線文を施す 内外面とも口縁部ナデ調整、頸部にはハケ目の痕跡あり	
135－1	Ⅰ区 B7 Gr 16層	壺	口径　15.4 (口縁部 1/7存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	外反した頸部から口縁部に移行し、口縁は上下に肥厚して面をもち、2～3条の凹線文を施す．外面頸部に2条の凹線文あり 内外面とも基本的にナデ調整であるが、外面頸部にナデ調整前のハケ目痕が認められる	
135－2	Ⅰ区 B4 Gr 16層	壺	頸部径　15.3 (胴部破片)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）多く含む　②にぶい黄褐色　③普通	頸部と胴部境に指頭圧痕文帯がめぐる外面ハケ目調整、内面所々ハケ目が観察できるが他は風化著しく調整不明	
135－3	Ⅰ区 A7 Gr 16層	壺	口径　31.0 (口縁部 1/6存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）多く含む　②暗黄橙褐色　③普通	頸部から外反して口縁部に至り、端部は上下に肥厚して面をもち2条の凹線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整．内面頸部に指頭圧痕あり	
135－4	Ⅰ区 A6 Gr 16層	壺	口径　20.0 (口縁部 1/5存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②黒灰色～にぶい黄褐色　③普通	頸部から外反して口縁部に至り、端部は上下に肥厚して面をもち2条の凹線状の凹みが施してある 外面口縁部ナデ調整．外面頸部及び内面頸部以上ハケ目調整、以下ケズリ調整	内外面に黒斑あり
135－5	Ⅰ区 A6 Gr 16層	壺	口径　23.0 (口縁部 1/5存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②淡黄褐色　③普通	頸部のやや短い壺で、口縁部は上下に肥厚して面をもち、3条の凹線文を施す 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
135－6	Ⅰ区 A4 Gr 8層	壺	口径　23.0 (口縁部 1/6存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）及び若干の2～3mm大の砂粒子含む　②にぶい黄橙褐色　③普通	頸部から湾曲して口縁部が立ち上がり、中程よりゆるく内湾していく．立ち上がった口縁面には3条の凹線文を施す 内外面とも風化著しく調整不明	
135－7	Ⅰ区 A4 Gr 8層 B5 Gr 3層	壺	口径　15.4 (口縁部 1/4存)	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	頸部から上に拡張して複合口縁となったもの．口縁面には4条の沈線文を施す．内面頸部に指頭圧痕あり 外面頸部ハケ目調整、内外面とも頸部以上ナデ調整．内面頸部以下ケズリ調整	
135－8	Ⅰ区 A1 Gr 不明	壺	口径　18.8 (口縁部 1/8存)	①微砂粒子（石英・長石など）及び1～2mm大の砂粒子含む　②外面暗茶褐色、内面にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は下に強く出る．口縁面には5条の凹線文が施される 内外面ともナデ調整	外面煤付着．甕の可能性あり
135－9	Ⅰ区 B3 Gr 8層	壺	口径　16.0 (口縁部 1/5存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む　②黒灰色　③普通	分厚い器壁の短い複合口縁で、口縁端部は丸くおさめ、突出部は下に出る．反った口縁面は無文である．頸部には4条の凹線文のちに波状文を施している 内面頸部ケズリ調整、以下ナデ調整	
135－10	Ⅰ区 A1 Gr 4層	壺	口径　17.9 (口縁部 1/6存)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）及び若干の1～2mm大の砂粒子含む　②にぶい黄褐色　③普通	上にのびた短い複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は膨らませたのみ．口縁面には貝殻腹縁による6条の擬凹線文が施され、のちに部分的に撫消されたところあり．肩部に貝殻原体による連続の刺突文あり 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	頸部に煤？付着

挿図番号	出土地点	器　種	法　　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形　態　・　手　法　の　特　徴	備　　考
135－11	Ⅰ区 B5 Gr 13層	壺	口径　19.6 (口縁部 1/10存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、口縁中程より急に外反し端部は丸くおさめ、突出部は下に出る．口縁面には貝殻腹縁による多条の擬凹線文を施したのち撫消しを行っている 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
135－12	Ⅰ区 B7 Gr 16層	壺	口径　30.2 (口縁部 1/10存)	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②外面にぶい黄褐色、内面暗灰黄褐色　③普通	厚手の複合口縁で、端部は膨らませて平坦ぎみに丸くおさめ、突出部は横に出る．口縁面には11条の擬凹線文が施されのちに上位のみ撫消している 外面ナデ調整．内面口縁部ナデ調整、頸部ナデのちハケ目調整、以下ケズリ調整	
136－1	Ⅰ区 B6 Gr 12層	壺	口径　16.0 (口縁部 1/5存)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）及び若干の1～3mm大の砂粒子含む ②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は膨らませて丸くおさめ、突出部は出ない．口縁面には貝殻腹縁による10条の擬凹線文を施したのちに上位のみ撫消しを行う 内外面ともナデ調整、特に内面は丁寧	外面頸部に煤付着
136－2	Ⅰ区 A6 Gr 12層	壺	口径　13.0 (口縁部 1/5存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部はわずかに下に出る．口縁面から頸部にかけて多条の浅い沈線文を施す 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	口縁部煤付着
136－3	Ⅰ区 B7 Gr 16層	壺	口径　18.0 (口縁部 1/8存)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄褐色、断面黒灰色 ③普通	複合口縁で、端部は平坦面をもち、少々太めの刻目を施す突出部は横に出る．頸部には2条の凹線文を施し、それを利用して有軸の羽状文を施す 内外面とも頸部以上ナデ調整、胴部ハケ目調整	
136－4	Ⅰ区 B6 Gr 9層	壺	口径　18.0 (口縁部 1/2存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄橙褐色　③普通	複合口縁で、端部は平坦面をもち、突出部は横に出る．口縁部に厚みをもち胴部は張り出すようである 外面頸部以上ナデ調整、以下ハケ目調整．内面口縁部ナデ調整、頸部ハケ目調整、胴部ケズリ調整	
136－5	Ⅰ区 B6 Gr 12層	壺	口径　14.0 (口縁部 1/8存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	袋状を呈する口縁部で、端部は反り上がる 内外面とも風化著しく調整不明	
136－6	Ⅰ区 B7 Gr 16層	壺	口径　15.1 (口縁部 1/4存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②淡黄褐色　③普通	袋状を呈する口縁部で、口縁部には鍔状の貼付突帯がめぐり、突出部と2段の突帯文のようである．端部は平坦ぎみに丸くおさめてある． 内面頸部は指押さえにより頸をのばしている．内面頸部以下はケズリ調整と思われる．他は内外面とも風化著しく調整不明	
136－7	Ⅰ区 B6 Gr 11層	壺	頸部径　13.9 (頸部 1/4存)	①1～2mm大の砂粒子（石英・角閃石など）含む　②黄橙褐色～にぶい黄褐色　③普通	頸部に斜格子文を施した貼付突帯文をめぐらせたものである．内面頸部に指頭圧痕あり 外面頸部ハケ目調整、胴部丁寧なナデ調整．内面頸部ハケ目調整、以下風化著しく調整不明	同様な斜格子文を施した貼付突帯文は79-1にも施されている．搬入品？
136－8	Ⅰ区 B5 Gr 16層	短頸壺	口径　9.4 最大径　13.5 器高　12.2 底径　9.4 (2/3存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい灰黄褐色　③普通	台付の短頸壺で、胴部は球状を呈する．頸部には1ヶ所穿孔されているが、残存状況から判断すると対称置にもう1ヶ所あったと思われる 底面丁寧なナデ調整、内面胴部ケズリ調整、他風化著しく調整不明	
136－9	Ⅰ区 A7 Gr 16層	直口壺	口径　9.9 (口縁部　完)	①1mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など）含む　②橙褐色　③普通	直立した口縁で、端部は平坦面をなし、口縁部には2孔2対の穿孔あり．胴部は球状に張り出すようである． 外面及び内面口縁部ナデ調整、内面頸部以下ケズリ調整	朱塗り痕あり
136－10	Ⅰ区 A6 Gr 16層	長頸壺	口径　11.7 (口縁部 1/2存)	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石など）多く含む　②外面淡黄褐色、内面暗灰黄褐色 ③普通	長い頸部が直立して立ち上がり、口縁部は外に湾曲させて内傾する．端部は丸くおさめる． 内面頸部に指頭圧痕を行う．他内外面とも風化著しく調整不明	
136－11	Ⅰ区 A8 Gr 不明	装飾壺	(胴部破片)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②淡黄褐色　③普通	算盤状を呈するもので、胴部2条の削り出し突帯部分である．突帯間には逆「く」の字状のスタンプ文、突帯上には同心円文のスタンプ文、4条の平行沈線文を、突帯下には数条の平行沈線文を施す 外面ナデ調整、内面ケズリ調整と思われる	
136－12	Ⅰ区 B1 Gr 4層	無頸壺	口径　18.4 (口縁部 1/18存)	①微砂粒子（石英・長石など）含む ②灰褐色　③普通	口縁端部はわずかに肥厚して平坦面をもつ．その下に2条の刻目貼付突帯文を施す 内外面とも口縁部ナデ調整、以下ハケ目調整	
136－13	Ⅰ区 B2 Gr 4層	無頸壺	口径　22.1 (口縁部 1/13存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②淡黄褐色　③普通	口縁部が内傾し、肥厚して平坦面をつくる．肥厚部分は粘土紐を継ぎ足しているため、内面稜線にその痕跡あり 外面胴部ハケ目調整、他は内外面ともナデ調整と思われる	
137－1	Ⅰ区 B3 Gr 8層	無頸壺	口径　10.0 (口縁部 1/4存)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	口縁端部は水平に肥厚して平坦面をつくり、急傾斜で胴部へ移行する 口縁部及び内面ナデ調整、外面ハケ目調整	
137－2	Ⅰ区 A3 Gr 8層	短頸壺	口径　10.0 最大径　14.0 (口縁部 1/5存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	薄手のカップ状を呈するものである．あるいは欠損している部分に把手があったかもしれない 外面上半ミガキ調整、下半ハケ目調整．内面上半ナデ調整、下半ケズリ調整	外面に黒斑あり
137－3	Ⅰ区 A3 Gr 8層	甕	口径　15.6 最大径　17.6 (口縁部 1/2存)	①1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む ②暗灰黄褐色　③普通	胴部上半に最大径があり、頸部はゆるく「く」の字状に屈折して口縁部に至る．全体に粗雑なつくりである 口縁部ナデ調整、外面胴部ハケ目調整、内面風化著しく調整不明	
137－4	Ⅰ区 B4 Gr 16層	甕	口径　15.8 (口縁部 1/6存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②暗黄褐色～にぶい黄褐色 ③普通	なだらかな胴部から頸部「L」字状に屈曲し口縁部に至る．口縁はわずかに上に肥厚する 内外面とも頸部以上ナデ調整、以下ハケ目調整	外面煤付着
137－5	Ⅰ区 B6 Gr 4層	甕	口径　15.9 (口縁部 1/8存)	①微砂粒子（石英・長石など）含む ②暗灰黄橙褐色　③普通	かなり薄手のもので、なだらかな胴部から頸部「く」の字状に屈曲し、口縁部に至る 内外面とも口縁部ナデ調整、外面胴部ハケ目調整、内面風化著しく調整不明	黒い付着物あり

挿図番号	出土地点	器　種	法　　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形　態　・　手　法　の　特　徴	備　　考
137－6	Ⅰ区 B4 Gr 16層	甕	口径　23.4 （口縁部 1/5存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②外面暗橙褐色、内面黒灰色 ③普通	なだらかな胴部から頸部「く」の字状に屈曲し口縁部に至る．口縁はほんのわずか上に肥厚する 内外面とも頸部以上ナデ調整、以下ハケ目調整	
137－7	Ⅰ区 B3 Gr 8層	甕	口径　15.8 （口縁部 1/6存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄橙褐色　③普通	なだらかな胴部から頸部「く」の字状に屈曲し口縁部に至る．口縁は上にわずかに肥厚して小さいながら面をもつ 内外面頸部以上ナデ調整、以下ハケ目調整	外面煤付着
137－8	Ⅰ区 B1 Gr 4層	甕	口径　16.2 （口縁部 1/8存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）及び1mm大の砂粒子少し含む　②黒灰色～暗赤褐色　③普通	なだらかな胴部から頸部指押さえにより成形してあり、口縁部は厚くなっていく．このため粗雑なつくりとなっている 内外面とも頸部以上ナデ調整、以下ハケ目調整	外面煤付着
137－9	Ⅰ区 B5 Gr 16層	甕	口径　18.2 最大径　21.2 （口縁部 1/2存）	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②暗黄褐色～にぶい黄褐色　③普通	胴部中央付近に最大径あり、なだらかな胴部から頸部ゆるい「く」の字状に屈曲して口縁部に至る．口縁は上にわずかに肥厚して面をもち、わずかながら凹みをつける 内外面とも頸部以上ナデ調整、以下ハケ目調整	外面煤付着
137－10	Ⅰ区 B5 Gr 16層	甕	口径　16.9 最大径　18.6 （口縁部 1/2存）	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	胴部がほとんど張らず筒状を呈する．頸部は「L」字状に屈曲して口縁部に至る．口縁は上にわずかに肥厚して面をもち凹みをつける 内外面とも頸部以上ナデ調整、以下ハケ目調整	
138－1	Ⅰ区 B5 Gr 13層	甕	口径　17.8 （口縁部 1/6存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色　③普通	ほとんど張りのない胴部から頸部「く」の字状に屈曲し口縁部に至る．口縁は上下に肥厚して面をもつ 内面及び外面頸部以上ナデ調整．外面胴部ハケ目調整	
138－2	Ⅰ区 A4 Gr 16層	甕	口径　19.5 （口縁部 1/8存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	胴部やや張りかげんで頸部も強い「く」の字状に屈曲して口縁部に至る．口縁は全体に肥厚して面をもつ 内外面ともナデ調整	
138－3	Ⅰ区 A3 Gr 16層	甕	口径　24.4 （口縁部 1/9存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	張りのある胴部から頸部「く」の字状に屈曲し口縁部に至る．口縁は上に肥厚して面をもち刻目を施す．頸部には口縁部側に貼り付けた薄地の指頭圧痕文帯をめぐらす．肩部に列点文あり 内外面とも頸部以上ナデ調整、以下ハケ目調整	
138－4	Ⅰ区 B2 Gr 4層	甕	口径　29.9 （口縁部 1/11存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石など）含む ②にぶい黄褐色　③普通	張りのある胴部から頸部「く」の字状に屈曲して口縁部に至る．口縁は上下に肥厚して面をもち貝殻腹縁による彫りの深い刺突文を施す．頸部には指頭圧痕文帯を貼り付ける 内外面ともナデ調整	
138－5	Ⅰ区 A2 Gr 4層	甕	口径　14.0 （口縁部 1/9存）	①微砂粒子(石英・長石・金雲母など)含む ②にぶい黄褐色　③普通	ゆるやかな胴部から頸部「く」の字状に屈曲して口縁部に至る．口縁ほんのわずかに肥厚して面をもち1条の凹線文を施す 内外面とも頸部以上ヨコナデ調整．胴部外面ハケ目調整、内面タテナデ調整	
138－6	Ⅰ区 B2 Gr 4層	甕	口径　20.0 （口縁部 1/10存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	ゆるやかな胴部から頸部「く」の字状に屈曲して口縁部に至り、口縁はわずかに上に肥厚して面をもち1条の凹線文と刻目を施す 内面頸部以下ハケ目調整、他内外面ともナデ調整	
138－7	Ⅰ区 A3 Gr 8層	甕	口径　19.4 （口縁部 1/8存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）少し含む　②にぶい黄褐色 ③普通	やや張りのある胴部から頸部「く」の字状に屈曲して口縁部に至る．口縁は上に肥厚して面をもち凹ませている 内外面とも頸部以上ナデ調整、外面胴部上半ミガキのちナデ調整、下半及び内面頸部以下ハケ目調整	外面煤付着
138－8	Ⅰ区 B4 Gr 8層	甕	口径　14.3 （口縁部 1/4存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外面橙褐色、内面にぶい黄褐色　③普通	ほとんど張りのない胴部から頸部「く」の字状に屈曲し、口縁部に至る．口縁は上下に肥厚して面をもち、2条の浅い沈線文を施す 内面及び外面頸部以上ナデ調整、以下ハケ目調整	外面煤付着
138－9	Ⅰ区 A3 Gr 16層	甕	口径　19.6 （口縁部 1/8存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）少し含む　②暗褐色～暗黄褐色　③普通	張りのない胴部から頸部「く」の字状に屈曲し口縁部に至る．口縁は上下に肥厚して面をつくり、2条の凹線文を施す 外面頸部以下ハケ目調整、他内外面ともナデ調整	外面頸部煤付着
138－10	Ⅰ区 A8 Gr 16層	甕	口径　19.2 （口縁部 1/5存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	張りのない胴部から頸部「L」字状に屈曲して口縁部に至り、口縁は上に肥厚して面をもち2条の凹線文を施す 内外面とも口縁部ナデ調整、他風化著しく調整不明	
138－11	Ⅰ区 A4 Gr 4層	甕	口径　22.8 （口縁部 1/10存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色　③普通	やや張った胴部から頸部「L」字状に屈曲し、口縁部に至る．口縁は上に肥厚して面をもち2条の凹線文を施す 内外面とも頸部以上ナデ調整．外面頸部以下ハケ目調整．他は風化著しく調整不明	外面煤付着
139－1	Ⅰ区 B4 Gr 8層	甕	口径　26.5 （口縁部 1/12存）	①1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む ②にぶい黄褐色　③普通	張りのない胴部から頸部の角度も鈍角に開いて口縁部へと移行する．口縁は上に肥厚して面をもち2条の凹線文を施す．頸部には指頭圧痕文帯が貼り付けてある 内外面とも口縁部ナデ調整、他は風化著しく調整不明	
139－2	Ⅰ区 B3 Gr 8層	甕	口径　23.9 （口縁部 1/3存）	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・橙褐色粒子など）含む　②黄褐色　③普通	張りのない胴部から頸部「く」の字状に屈曲して口縁部に至る．口縁は上下に肥厚して面をもち2条の凹線文らしき痕跡あり 内外面とも口縁部ナデ調整、他は風化著しく調整不明	
139－3	Ⅰ区 B2 Gr 4層	甕	口径　26.1 （口縁部 1/15存）	①微砂粒子（石英・長石など）含む ②暗黄褐色　③普通	やや張りぎみの胴部から頸部「く」の字状に屈曲し口縁部に至る．口縁は上に肥厚して面をもち2条の凹線文を施す．頸部には指頭圧痕文帯が貼り付けてある 内外面とも頸部以上ナデ調整．頸部以下外面ハケ目調整、内面斜め方向のナデ調整、単位が観察できる	
139－4	Ⅰ区 A4 Gr 8層	甕	口径　17.4 最大径　23.7 （口縁部 1/6存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石など）含む ②にぶい黄褐色　③普通	胴部中央に最大径があり、頸部は「L」字状に屈曲して口縁部に至る．口縁は上に肥厚して面をもち2条の凹線文を施す．胴部最大径に斜めに6点単位の列点文を施す 外面口縁部ナデ調整、胴部上半ハケ目調整、下半ミガキ調整．内面胴部上半以上ナデ調整、下半ケズリ調整	外面煤付着

挿図番号	出土地点	器　種	法　　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形　態　・　手　法　の　特　徴	備　　考
139－5	Ⅰ区 B4 Gr 8層	甕	口径　25.8 （口縁部 1/10存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい灰黄褐色　③普通	直線的な胴部から頸部ゆるい「く」の字状に屈曲して口縁部に至る．口縁は上下に肥厚して面をもち2条の凹線文を施す．頸部には指頭圧痕文帯を貼り付ける 内外面とも頸部以上ナデ調整、以下ハケ目調整	
140－1	Ⅰ区 B4 Gr 8層	甕	口径　28.0 最大径　29.9 （口縁部 1/6存）	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石・橙褐色粒子など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	丸く張った胴部から頸部「く」の字状に屈曲して口縁部に至る．口縁は上下に肥厚して面をもち1条の凹線文を施す．胴部最大径に6点単位の列点文を施している 内外面とも頸部以上ナデ調整、以下外面ハケ目調整、内面風化著しく調整不明	
140－2	Ⅰ区 B3 Gr 8層	甕	口径　16.1 （口縁部 1/5存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②暗灰褐色　③普通	なだらかな胴部から頸部「く」の字状に屈曲して口縁部に至り、口縁は上下に肥厚して面をもち2条の凹線文を施す 内外面とも頸部以上ナデ調整、以下外面ハケ目調整、内面ナデ、ハケ目調整	
140－3	Ⅰ区 B2 Gr 4層	甕	口径　18.0 （口縁部 1/6存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む　②明黄褐色　③普通	なだらかな胴部から頸部「く」の字状に屈曲して口縁部に至り、口縁は上下に肥厚して面をもち2条の凹線文を施す 外面頸部以上ナデ調整、内外面とも頸部以下ハケ目調整、内面口縁部風化著しく調整不明	
140－4	Ⅰ区 B3 Gr 4層	甕	口径　24.0 （口縁部 1/8存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②外面にぶい黄褐色、内面黒灰色～暗灰黄褐色　③普通	なだらかな胴部から頸部「く」の字状に屈曲して口縁部に至る．口縁は上下に肥厚して面をもち、2条の凹線文を凸帯部に刻目を施す 内外面とも頸部以上ナデ調整、以下ハケ目調整	外面に黒斑あり
140－5	Ⅰ区 B4 Gr 8層	甕	口径　24.0 （口縁部 1/9存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	なだらかな胴部から頸部は強いナデにより食い込んだようになっている．そのため湾曲して口縁部に至る．口縁は上下に肥厚して面をもち2条の凹線文を施す 外面頸部以上ナデ調整、以下ハケ目調整．内面風化著しく調整不明	
141－1	Ⅰ区 B5 Gr 16層	甕	口径　23.9 （口縁部 1/6存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	なだらかな胴部から頸部「く」の字状に屈曲して口縁部に至る．口縁は上下に肥厚して面をもち、2条の凹線文及び1条の沈線文を施す 内面及び外面頸部以上ナデ調整、以下ハケ目調整	
141－2	Ⅰ区 B2 Gr 4層	甕	口径　20.5 （口縁部 1/5存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・金雲母など）含む　②黒灰色～暗黄褐色　③普通	最大径が胴部中央よりやや下位にあり、頸部「く」の字状に屈曲して口縁部に至る．口縁は上下に肥厚して面をもち3条の凹線文を、胴部最大径に6点単位の列点文を2段に施す． 内外面とも頸部以上ナデ調整．外面頸部以下ハケ目調整．内面胴部上半指押さえ、ナデ調整、下半ケズリ調整	内面におこげ？付着 全体的に焼成を受けている
141－3	Ⅰ区 B2 Gr 4層	甕	口径　16.8 （口縁部 1/4存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②淡黄褐色　③普通	なだらかな胴部から頸部は強いナデにより食い込んだようになっている．そのため湾曲して口縁部に至る．口縁は上下に拡張して面をもち3条の凹線文を施す 内外面とも頸部以上ナデ調整、以下外面多条の沈線文状のハケ目調整、内面指押さえナデ調整	
141－4	Ⅰ区 B4 Gr 16層	甕	口径　24.0 （口縁部 1/12存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②淡灰黄褐色　③普通	頸部「く」の字状に屈曲して口縁部に至り、口縁は上下に肥厚して面をもち3条の凹線文及び長い刻目を施す．頸部には工具でつくったと思われる圧痕文帯が貼り付けてある 内外面ともナデ調整	
141－5	Ⅰ区 A2 Gr 4層	甕	口径　11.3 最大径　14.4 器高　15.1 底径　5.0 （2/3存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②暗褐色～暗灰黄褐色　③普通	平底の底部から最大径が胴部中央より上位にあり、頸部は湾曲して外反し口縁部に至る．口縁は上下に肥厚して面をもち4条の沈線文及び刻目を施す．胴部最大径に刺突文を組み合わせて羽状文状に施す 外面口縁部ナデ調整、胴部上半ハケ目調整、下半ミガキ調整、底面まわりナデ調整．内面口縁部ナデ調整、胴部上半ナデ、ハケ目調整、下半ケズリ調整．底面ナデ調整	
141－6	Ⅰ区 A1 Gr 4層	甕	口径　20.2 （口縁部 1/11存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②暗茶褐色　③普通	複合口縁状で、口縁面は上3条は浅い沈線文、下1条は凹線文を施す 内外面ともナデ調整、内面頸部凸部は丁寧なナデであるが凹部は不明	
141－7	Ⅰ区 A3 Gr 8層	甕	口径　21.9 （口縁部 1/9存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②淡黄橙褐色　③普通	口縁部が上下に拡張されて面をもち4条の凹線文を、また口縁部内面にも2条の沈線文を施す．頸部には指頭圧痕文帯を貼り付ける 内面頸部以下は風化著しく調整不明、他内外面ともナデ調整	
141－8	Ⅰ区 B5 Gr 3層	甕	（口縁部破片）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む　②にぶい黄褐色　③普通	小さな複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る．口縁面には2条の浅い沈線が施してある 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
141－9	Ⅰ区 B4 Gr 8層	甕	（口縁部破片）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む　②橙褐色　③普通	内傾した複合口縁で、端部は反りぎみ、突出部は出ない．口縁面に強いナデによる凹みと1条の凹線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	外面煤付着
141－10	Ⅰ区 A4 Gr 8層	甕	（口縁部破片）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②灰褐色　③普通	厚手で張りのある胴部から頸部「L」字状に屈曲し口縁部に至る．口縁はわずかに肥厚して面をもち3条の沈線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
141－11	Ⅰ区 A5 Gr 12層	甕	口径　17.7 （口縁部 1/8存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）及び若干の1～2mm大の砂粒子含む　②暗灰橙褐色　③普通	短い複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は出ない．口縁面は3条の沈線文が所々確認できる 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
141－12	Ⅰ区 B3 Gr 1層	甕	口径　20.0 （口縁部 1/11存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	短い頸部からすぐに口縁部に移行する．口縁は上下に拡張して面をもち3条の凹線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下風化著しく調整不明	
141－13	Ⅰ区 A4 Gr 8層	甕	口径　21.0 （口縁部 1/6存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②暗灰褐色　③普通	厚手で短い複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は下に出る．口縁面には2条の凹線文を施す． 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	

挿図番号	出土地点	器　種	法　　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形　態　・　手　法　の　特　徴	備　　考
142－1	Ⅰ区 A2 Gr 4層	甕	口径　24.8 （口縁部 1/5存）	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石・橙色粒子など）含む　②淡黄橙褐色 ③普通	丸く張った胴部から頸部「く」の字状に屈曲して口縁部に至る．やや内傾した複合口縁で、端部は斜めに平坦面をもち丸くおさめ、突出部は膨らんで斜め下に出る．口縁面には3条の凹線文を施す 内面頸部以下ケズリ調整、他風化著しく調整不明	
142－2	Ⅰ区 B5 Gr 13層	甕	口径　15.9 （頸部 1/5存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色　③普通	頸部から口縁にかけて広口状を呈し、複合口縁の端部は丸くおさめ、突出部は出ない．口縁面には3条の凹線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
142－3	Ⅰ区 B5 Gr 13層	甕	口径　14.5 （口縁部 1/4存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）多く含む　②黄褐色　③普通	厚手で短い複合口縁で、端部は膨らませて丸くおさめ、突出部はわずかに斜め下に出る．頸部は強く屈曲して胴部は張るようである 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
142－4	Ⅰ区 B4 Gr 8層	甕	口径　20.3 （口縁部 1/7存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・橙色粒子・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部丸くおさめ、突出部はわずかに下に出る．口縁面には貝殻腹縁による擬凹線文が6条施される 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
142－5	Ⅰ区 A5 Gr 13層	甕	口径　16.4 （口縁部 1/7存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る．口縁面には貝殻腹縁による擬凹線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	外面煤？付着
142－6	Ⅰ区 A7 Gr 不明	甕	口径　24.0 （口縁部 1/7存）	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、内面は頸部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、外面は幅をもって厚手としている．端部は平坦面をつくり、突出部は幅部分出ている．口縁面には貝殻腹縁による約10条の擬凹線文を2度に分けて施す 外面ナデ調整．内面頸部以上丁寧なナデ調整、以下ケズリ調整	
142－7	Ⅰ区 B3 Gr 4層	甕	口径　21.0 （口縁部 1/7存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は外に曲げて平坦ぎみに丸くおさめ、突出部は下に出る．口縁面には4～5条の擬凹線文を施したのち撫消しを行っている 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	外面に若干の煤付着痕観察される
142－8	Ⅰ区 A1 Gr 9層	甕	口径　14.0 （口縁部 1/2存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	短い複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は下に出る．口縁面には貝殻腹縁による擬凹線文を6条施す．肩部に3条の波線状の沈線文＋3条の沈線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
142－9	Ⅰ区 B4 Gr 8層	甕	口径　15.8 最大径　17.2 （口縁部 1/3存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②暗褐色～灰黄褐色　③普通	丸く膨らんだ胴部からなだらかに頸部に移行し、口縁部へと至る．複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部はわずかに下に出る．口縁面には貝殻腹縁による7条の擬凹線文が施される．肩部には貝殻原体による刺突文が施され、それに対して直角方向にヘラ描き状のものが施される 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
142－10	Ⅰ区 B4 Gr 8層	甕	口径　19.6 （頸部 1/6存）	①1mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など）含む　②暗褐色～にぶい黄褐色 ③普通	中央から折れたように外反する複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は下に出る．口縁面には貝殻腹縁による擬凹線文を13条以上施し、のちに上位を撫消している 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	外面煤付着
142－11	Ⅰ区 B5 Gr 16層	甕	口径　20.4 （口縁部 1/8存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は膨らませて丸くおさめ、突出部は横に出る．口縁面には7条以上の擬凹線文が施されたのち撫消しを行う 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
142－12	Ⅰ区 A3 Gr 8層	甕	口径　20.2 （口縁部 1/6存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②暗褐色～にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、内面は頸部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、外面は幅をもって厚手としている．端部は外に曲げて平坦ぎみに丸くおさめ、突出部は幅部分出ている．口縁面には貝殻腹縁による擬凹線文を9条以上施したのち上位を撫消している 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	外面煤付着
142－13	Ⅰ区 A7 Gr 不明	甕	口径　22.9 （口縁部 1/6存）	①1mm大の砂粒子（石英・橙色粒子・長石・角閃石など）含む　②淡黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は出ない．口縁面には11条の擬凹線文を肩部には貝殻原体？による刺突文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
142－14	Ⅰ区 B5 Gr 12層	甕	口径　15.8 （口縁部 1/6存）	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②暗黄橙褐色　③普通	だらりとした複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は出ない．口縁面には貝殻腹縁による10条以上の擬凹線文が所々波状に施され、部分的に撫消しを行う 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
143－1	Ⅰ区 A1 Gr 9層	甕	口径　37.5 （口縁部 1/15存）	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②暗灰黄褐色　③普通	大型品で分厚い複合口縁で、端部は丸くおさまり、突出部は斜め下に厚く引き出す．口縁面には貝殻腹縁による擬凹線文が約19条2～3回に分けて施文してある 外面及び内面頸部以上ナデ調整、特に内面は丁寧な仕上げ、以下ケズリ調整	
143－2	Ⅰ区 B2 Gr 4層	甕	口径　27.8 （口縁部 1/6存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・橙色粒子・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色 ③普通	厚手の複合口縁で、端部は膨らませて丸くおさめ、突出部は斜め下に出る．口縁面には貝殻腹縁による11条以上の擬凹線文を施したのち上位、下位に撫消しを行う 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	内面におこげ？付着
143－3	Ⅰ区 A7 Gr 不明	甕	口径　25.8 （口縁部 1/5存）	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・橙色粒子・角閃石など）含む　②淡黄褐色 ③普通	厚手の複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は出ない．口縁面には11条の擬凹線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	内面におこげ？付着
143－4	Ⅰ区 B5 Gr 13層	甕	口径　16.0 （口縁部 1/4存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石など）含む ②灰黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る．口縁面には約6条の擬凹線文を施す部分と指押さえの残る粗雑な部分とがある．内面口縁部にも指押さえ痕あり 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	内面煤？付着
143－5	Ⅰ区 B5 Gr 16層	甕	口径　14.9 （口縁部 1/4存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄橙褐色 ③普通	丸く張った胴部からゆるやかに中程から強く外反する複合口縁へと至り、端部は丸くおさめ、突出部は横に出る．口縁面には多条の平行沈線文が施されてのち撫消しを行う 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	外面に小黒斑あり

挿図番号	出土地点	器　種	法　　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形態・手法の特徴	備　考
143－6	Ⅰ区 B5 Gr 3層	甕	口径　19.5 （口縁部 1/7存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る．口縁面には12条の擬凹線文を施したのち撫消しを行う． 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
143－7	Ⅰ区 B5 Gr 3層	甕	口径　18.0 （口縁部 1/7存）	①1mm大の砂粒子(石英･長石･角閃石など)含む　②外面にぶい黄褐色、内面灰黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に強く引き出す．口縁面には貝殻腹縁による13条の擬凹線文を施したのち抉り込みの部分に撫消しを行う 内外面ともナデ調整	
143－8	Ⅰ区 A6 Gr 12層	甕	口径　9.2 最大径　13.2 器高　14.4 底径　2.6 (1/2存)	①1mm以下の砂粒子（石英など）含む ②黒灰色　③良好	小型のもので、複合口縁であるが、口縁部に関しては不馴れな作りである．胴部は丸く張り、底部はわずかに痕跡を確認することができるほとんど丸底状である 外面及び内面頸部以上は丁寧なナデにより精緻に仕上げている．以下はケズリ調整	
143－9	Ⅰ区 B6 Gr 12層	甕	口径　14.9 （口縁部 1/4存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②黄橙褐色　③普通	やや張った胴部から直立ぎみの複合口縁部へと至る．端部は外反して丸くおさめ、突出部は下に出る．口縁面には沈線の施文した痕跡がわずかに観察される．肩部には現状で4条の平行沈線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整のため器壁がかなり薄くなる	外面煤付着
143－10	Ⅰ区 A6 Gr 16層	甕	口径　14.9 （口縁部　完）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②黄褐色　③普通	やや張った胴部から頸部がきつく屈曲して複合口縁部へと至る．端部は引きのばして止め、突出部はわずかに横に出る、肩部には少々波打つ平行沈線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
143－11	Ⅰ区 B6 Gr 13層	甕	口径　15.8 （口縁部 1/2存）	①微砂粒子（石英・長石・橙褐色粒子・角閃石など）含む　②明黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は引きのばし、突出部はわずかに斜め下に出る 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
143－12	Ⅰ区 B6 Gr 13層	甕	口径　17.8 （頸部 1/3存）	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・橙褐色粒子・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に引き出す．頸部には6条以上の平行沈線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
144－1	Ⅰ区 A5 Gr 13層	甕	口径　16.5 （口縁部 1/6存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄橙褐色　③普通	複合口縁で、端部は引きのばし、突出部は斜め下に出る．頸部には現状で5条の平行沈線文を施す．口縁面には擬凹線文を施したのちに完全に撫消しを行っているのが観察できる 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
144－2	Ⅰ区 A7 Gr 16層	甕	口径　14.0 （口縁部 1/7存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色　③普通	胴の張る複合口縁で、端部は引きのばし、突出部は横に出る 内外面とも頸部以上ナデ調整、以下外面ハケ目調整、内面ケズリ調整	
144－3	Ⅰ区 B6 Gr 13層	甕	口径　17.7 （口縁部 1/9存）	①微砂粒子（石英・長石・橙色粒子・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る 内外面とも頸部以上ナデ調整、以下外面ナデのち縦方向の大きなハケ目調整、内面ケズリ調整	外面煤付着
144－4	Ⅰ区 B7 Gr 16層	甕	口径　14.2 （口縁部 1/2存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄橙褐色　③普通	複合口縁で、端部は引きのばし、突出部はほとんど出ない．肩部に8条の平行沈線文、「ノ」の字の連続刺突文が施される 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
144－5	Ⅰ区 B7 Gr 16層	甕	口径　17.6 （口縁部 1/8存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は引きのばし、突出部は横に出る．肩部に数条の平行沈線文観察できる 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
144－6	Ⅰ区 A7 Gr 16層	甕	口径　16.9 （口縁部 1/6存）	①微砂粒子（石英・角閃石・長石・橙色粒子など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	外反する複合口縁で、端部は引きのばし、突出部は斜め下に出る 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
144－7	Ⅰ区 B6 Gr 13層	甕	口径　15.8 （口縁部 1/6存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②黄橙褐色　③普通	複合口縁で、端部は引きのばし、突出部は斜め下に出る 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	外面煤付着
144－8	Ⅰ区 B6 Gr 13層	甕	口径　15.8 （口縁部 1/4存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・橙色粒子など）含む　②にぶい黄橙褐色　③普通	胴の張りのない複合口縁で、端部は引きのばし、突出部はほとんど出ない 内面頸部以下ケズリ調整、他は風化著しいがナデ調整と思われる	
144－9	Ⅰ区 A7 Gr 16層	甕	口径　20.6 （口縁部 1/7存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄橙褐色　③普通	複合口縁で、端部は平坦ぎみにおさまり、突出部は膨らみ横に出る 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
144－10	Ⅰ区 A2 Gr 4層	甕	口径　15.0 （口縁部 1/5存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色　③普通	薄手の複合口縁で、端部は引きのばし、突出部は斜め下に出る．内面口縁部は強いナデによる凹凸あり 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
144－11	Ⅰ区 A7 Gr 16層	甕	口径　17.1 （口縁部 1/8存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は引きのばして止め、突出部は強く横に引き出す．肩部には現状で7条の平行沈線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	外面肩部に黒斑あり
144－12	Ⅰ区 B8 Gr 16層	甕	口径　14.8 （口縁部 1/7存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄橙褐色　③普通	複合口縁で、端部は引きのばして止め、突出部は斜め下に強く引き出す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	口縁部に黒斑あり
144－13	Ⅰ区 A7 Gr 16層	甕	口径　19.7 （口縁部 1/5存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外面緑黒色～黄褐色、内面にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る 内外面とも頸部以上ナデ調整、以下外面ハケ目のちナデ調整、内面ケズリ調整	
144－14	Ⅰ区 B7 Gr 16層	甕	口径　17.9 （口縁部 1/4存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄橙褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は横に出る 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
145－1	Ⅰ区 B6 Gr 13層	甕	口径　17.8 （口縁部 1/5存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は膨らみ斜め下に出る 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	

挿図番号	出土地点	器　種	法　　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形態・手法の特徴	備　考
145－2	Ⅰ区 A6 Gr 12層	甕	口径　19.0 （口縁部 1/2存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・橙色粒子など）含む　②にぶい黄橙褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	外面口縁部に黒斑あり
145－3	Ⅰ区 B5 Gr 16層	甕	口径　17.9 （口縁部 1/7存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄橙褐色　③普通	複合口縁で、端部はまっすぐに引きのばし、突出部は横に出る．口縁面には波状文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
145－4	Ⅰ区 B7 Gr 16層	甕	口径　18.5 最大径　21.2 （口縁部 1/2存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②淡黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は引きのばして止め、突出部は斜め下に出る．肩部には平行沈線文、横位の刺突文、波状文を施す 外面胴部最大径以上ナデ調整、以下ハケ目調整．内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
145－5	Ⅰ区 B6 Gr 13層	甕	口径　16.7 （口縁部 1/9存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は引きのばし、突出部は斜め下に出る．肩部には貝殻腹縁による刺突文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
145－6	Ⅰ区 B8 Gr 16層	甕	口径　19.9 （口縁部 1/11存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に強く引き出す．肩部に平行沈線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
145－7	Ⅰ区 B6 Gr 13層	甕	口径　21.7 （口縁部 1/9存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は横に引き出す．頸部に平行沈線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
145－8	Ⅰ区 A2 Gr 4層	甕	口径　15.0 （口縁部 1/5存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色　③普通	薄手の複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る．肩部には平行沈線文、刺突文が施される 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
145－9	Ⅰ区 B7 Gr 16層	甕	口径　15.0 （口縁部 1/2存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい灰黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る．肩部に逆「ノ」の字状の刺突文施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
145－10	Ⅰ区 A7 Gr 16層	甕	口径　15.4 （口縁部 1/6存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄橙褐色　③普通	複合口縁で、端部は平坦面をもち、突出部は横に強く出す 内外面ともナデ調整	
145－11	Ⅰ区 B7 Gr 16層	甕	口径　15.6 （口縁部 1/5存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄橙褐色　③普通	複合口縁で、端部引きのばし、突出部わずかに横に出す 全体に風化著しいが、外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整と思われる	
145－12	Ⅰ区 B8 Gr 16層	甕	口径　17.0 （口縁部 1/5存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい灰黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は外に曲げて平坦面をつくり、突出部は斜め下に出る．肩部には平行沈線文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	外面煤付着
145－13	Ⅰ区 A7 Gr 16層	甕	口径　17.2 （口縁部 1/5存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は引きのばし、突出部は斜め下に出る 全体に風化著しいが、外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整と思われる	外面煤付着
146－1	Ⅰ区 A7 Gr 16層	甕	口径　14.6 （口縁部 1/4存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外面黒灰色～にぶい灰黄褐色、内面にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は外に曲げて平坦面をつくり、突出部は斜め下に出す．肩部には刺突文の上半部のみ残っている 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	外面黒斑あり
146－2	Ⅰ区 B5 Gr 13層	甕	口径　20.4 （頸部 1/5存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②淡黄橙褐色　③普通	なだらかな胴部からスムーズに複合口縁部に移行し、端部はわずかに平坦ぎみ、突出部は横に引き出す．肩部には平行沈線文の痕跡あり 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
146－3	Ⅰ区 A7 Gr 16層	甕	口径　15.5 （口縁部 1/2存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい灰黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は強く横へ引き出す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
146－4	Ⅰ区 A7 Gr 16層	甕	口径　17.6 （口縁部 1/7存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）及び若干の1～2mm大の砂粒子含む ②オリーブ褐色　③普通	複合口縁で、端部は外に曲げて平坦面をつくり、突出部は斜め下に引き出す 内外面とも頸部以上ナデ調整、以下外面ハケ目のちナデ調整、内面ケズリ調整	
146－5	Ⅰ区 A8 Gr 16層	甕	口径　14.4 （口縁部 1/3存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄橙褐色　③普通	複合口縁で、端部は外に曲げて平坦面をつくり、突出部は横に引き出す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
146－6	Ⅰ区 B8 Gr 16層	甕	口径　18.0 （口縁部 1/4存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄橙褐色　③普通	複合口縁で、端部は外に曲げて平坦面をつくり、突出部は横に引き出す．肩部に平行沈線文の痕跡あり 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
146－7	Ⅰ区 A7 Gr 不明	甕	口径　20.6 （口縁部 1/6存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）及び1～2mm大の砂粒子含む　②にぶい黄橙褐色　③普通	なだらかな胴部から頸部はわずかに屈曲して複合口縁に至る．端部は外に曲げて平坦面をつくり、突出部は横に強く引き出す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
146－8	Ⅰ区 A1 Gr 4層	甕	口径　25.0 （口縁部 1/7存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗黄橙褐色　③普通	複合口縁で、端部は幅広い平坦面をもち、突出部は横に引き出す 内外面ともナデ調整	
146－9	Ⅰ区 B7 Gr 16層	甕	口径　21.0 （口縁部 1/6存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は平坦面をもち、突出部は横に引き出す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	外面煤付着
146－10	Ⅰ区 A7 Gr 不明	甕	口径　35.0 （口縁部 1/12存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は幅のある平坦面をもち、突出部は横に出す 内外面ともナデ調整	
146－11	Ⅰ区 B5 Gr 12層	甕	口径　15.8 （口縁部 1/9存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石・橙色粒子・金雲母など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	短く直立ぎみの複合口縁で、端部は内面直線的に立ち上がり外傾斜して丸くおさまる．突出部は膨らんで横に出る 内外面とも頸部以上ナデ調整、以下外面ハケ目調整、内面ケズリ調整	

挿図番号	出土地点	器　種	法　　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形　態　・　手　法　の　特　徴	備　　考
147－1	Ⅰ区 A7 Gr 16層	胴　　部	(胴部破片)	①2mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）多く含む　②淡黄褐色　③普通	胴部上位から、平行沈線文、羽状文、平行沈線文、羽状文、平行沈線文とくり返している 内面ケズリ調整、外面風化著しく調整不明	
147－2	Ⅰ区 B3 Gr 8層	胴　　部	(胴部破片)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外面にぶい黄褐色、内面灰黄褐色 ③普通	荒いハケ目調整ののちに横位にヨコナデを入れ、その上に円形浮文を貼り付け、ヘラ描文を施す 内面ナデ調整	外面に黒斑あり
147－3	Ⅰ区 B3 Gr 不明	胴　　部	(胴部破片)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②黒灰色～にぶい黄褐色　③普通	上位は5条の凹線文を施し、凸帯部に「ノ」の字状の刺突文を幅狭く連続する．下位はヘラ描きにより幅狭い長めの刺突文を2段くり返す 外面ナデ調整、内面ケズリ調整	外面に黒斑
147－4	Ⅰ区 B4 Gr 16層	胴　　部	頸部径　13.9 (頸部 1/9存)	①微砂粒子（石英・長石など）含む ②外面にぶい黄褐色、内面暗灰黄褐色 ③やや不良	頸部に穿孔あり、器形は想定不可能 内外面ともナデ調整	内面焼成受けたようにボロボロしている
147－5	Ⅰ区 A1 Gr 9層	胴部～ 底部	最大径　24.5 底径　6.9 (底部　完)	①1～2mm大の砂粒子(石英・長石など)含む ②外面黄茶褐色、内面暗灰黄褐色　③普通	しっかりした平底で、胴部中央より上位に最大径のある胴張りに立ち上がる．横位に3段の列点文を施す 外面上位ハケ目調整、下位ミガキ調整．内面ナデ調整．底面風化著しく調整不明	外面胴部1ヶ所黒斑あり
147－6	Ⅰ区 A7 Gr 16層	胴　　部	頸部径　22.4 (頸部 1/7存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・橙色粒子・角閃石・金雲母など）含む　②淡黄褐色 ③普通	複合口縁を有する胴部である．上位より平行沈線文、逆「ノ」の字状の刺突文を連続に施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	
148－1	Ⅰ区 B4 Gr 8層	底　　部	底径　10.4 (底部 1/3存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色　③普通	しっかりした平底 外面胴部ミガキ調整、他内外面ともナデ調整	
148－2	Ⅰ区 B1 Gr 4層	底　　部	底径　9.7 (底部 1/3存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石など）少し含む　②外面暗橙褐色、内面暗黄茶褐色 ③普通	しっかりした平底 外面ミガキ調整、底面及び内面ナデ調整	底面に煤？付着
148－3	Ⅰ区 A8 Gr 16層	底　　部	底径　9.0 (底部 1/5存)	①微砂粒子(石英・長石・金雲母など)含む ②にぶい黄褐色　③普通	くびれをもつ平底である 底面中央にハケ目状の跡あり．内外面ともナデ調整	内面に黒斑あり
148－4	Ⅰ区 B3 Gr 8層	底　　部	底径　7.6 (底部　2/3存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石など）含む ②外面黒灰色～にぶい黄褐色、内面黒灰色 ③普通	どっしりとした平底 外面ナデ調整．内面底縁に指ナデによる凹みあり、胴部ハケ目調整	内外面黒斑
148－5	Ⅰ区 B4 Gr 16層	底　　部	底径　7.7 (底部　完)	①微砂粒子（石英・長石など）含む ②外面にぶい黄橙褐色、内面暗灰黄褐色 ③やや不良	どっしりとした平底 外面ミガキ調整、内面ナデ調整、底面風化著しく調整不明	外面煤付着、内面黒斑？
148－6	Ⅰ区 B5 Gr 16層	底　　部	底径　7.4 (底部　ほぼ完)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）多く含む　②暗黄茶褐色 ③普通	しっかりした平底 内外面ともナデ調整、内面には指頭圧痕観察できる	底面に黒斑あり
148－7	Ⅰ区 B3 Gr 8層	底　　部	底径　6.9 (底部　2/3存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外面黄橙褐色、内面暗灰黄褐色　③普通	上げ底で、胴部はくびれて細く筒状に立ち上がる 外面胴部ミガキ調整、底面及び底面まわり、内面ナデ調整、また内面には指頭圧痕あり	内面おこげ？付着
148－8	Ⅰ区 A4 Gr 16層	底　　部	底径　6.4 (底部　2/3存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②黒灰色～にぶい黄褐色　③普通	しっかりした平底．底面を円盤状に作ったのち縁から粘土紐を積み上げている 外面ミガキ調整．内面ナデ調整、指頭圧痕あり	内面におこげ？付着
148－9	Ⅰ区 A3 Gr 8層	底　　部	底径　6.3 (底部　4/5存)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）多く含む　②暗黄茶褐色　③普通	平底 外面胴部ミガキ調整．底面及び底面まわり、内面ナデ調整、指頭圧痕あり	
148－10	Ⅰ区 B3 Gr 16層	底　　部	底径　5.4 (底部　ほぼ完)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②外面黄橙褐色、内面黒灰色 ③普通	上げ底 内外面ともナデ調整、内面底部指押さえ痕あり	内面黒斑
148－11	Ⅰ区 B5 Gr 13層	底　　部	底径　4.6 (底部　完)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など）含む　②外面黄橙褐色、内面暗褐灰色 ③普通	平底、内面指押さえによる凹み部をつくる 外面胴部ミガキ調整、底面及び底面まわりナデ調整、内面ハケ目調整	外面に黒斑あり
148－12	Ⅰ区 A4 Gr 8層	胴部 ～底部	底径　7.7 (底部 2/3存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）及び若干の2～5mm大の砂粒子含む ②にぶい黄褐色　③普通	平底で、最大径が胴部中央以上にあるように立ち上がっていく 外面ミガキ調整、底面丁寧なナデ調整、内面ケズリ調整	底面～胴部黒斑あり
148－13	Ⅰ区 A4 Gr 8層	底　　部	底径　6.6 (底部 1/2存)	①1mm大の砂粒子(石英・角閃石など)含む ②外面にぶい黄褐色、内面暗黄茶褐色 ③普通	上げ底で、胴部はくびれて筒状に立ち上がる 外面胴部ミガキ調整．底面及び底面まわりナデ調整．内面底部指押さえ痕、胴部ケズリ調整	
148－14	Ⅰ区 A2 Gr 4層	底　　部	底径　6.2 (底部　完)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外面にぶい黄橙褐色、内面暗黄茶褐色 ③普通	上げ底で、胴部はくびれて筒状に立ち上がる．くびれ部から上へ凹線文が現状で4条施されている．底面は内外面よりナデにより平坦に仕上げてある 外面ナデ調整、内面ケズリ調整	
148－15	Ⅰ区 A5 Gr 16層	底　　部	底径　5.8 (底部　完)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色　③普通	薄手の平底 外面ミガキ調整．底面ナデ調整．内面底部指押さえ、ナデ調整、胴部ケズリ調整	
148－16	Ⅰ区 B7 Gr 16層	底　　部	底径　5.6 (底部　完)	①1～3mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②黒灰色～にぶい黄褐色　③普通	台状の平底は、粘土塊なのでずっしりと重量感あり 外面胴部ハケ目調整．底面ナデ調整．内面ケズリ調整、指頭圧痕あり	外面煤？付着
149－1	Ⅰ区 A2 Gr 4層	底　　部	底径　5.2 (底部　完)	①微砂粒子（石英・長石など）含む ②にぶい黄橙褐色　③普通	やや薄手の平底 外面ナデ調整、内面ケズリ調整	

挿図番号	出土地点	器　種	法　　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形態・手法の特徴	備　考
149－2	Ⅰ区 A3 Gr 8層	底　部	底径　5.0 (底部 1/3存)	①微砂粒子（石英・長石など）含む ②暗橙茶褐色　③普通	厚手のどっしりした平底で、胴の開きが少なく細く立ち上がる 外面ナデ調整．内面指押さえにより底部をつくり、ケズリ調整	内外面に黒斑あり
149－3	Ⅰ区 B5 Gr 16層	底　部	底径　4.8 (底部 1/2存)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②淡黄褐色　③普通	薄手の平底 底面ナデ調整、内面ケズリ調整、外面風化著しく調整不明	
149－4	Ⅰ区 A4 Gr 8層	底　部	底径　4.5 (底部　完)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②外面暗黄褐色、内面にぶい黄褐色 ③普通	底部に厚みのある平底で、安定感あり 外面胴部ミガキ調整.底面まわりナデ調整.底面指押さえのため凹凸あり、ナデ調整．内面底部に指頭圧痕あり、胴部ケズリ調整	外面に黒斑あり
149－5	Ⅰ区 B5 Gr 12層	底　部	底径　5.0 (底部 1/2存)	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②外面橙褐色、内面暗黄褐色 ③普通	やや上げ底ぎみの平底 外面ハケ目調整、内面ケズリ調整、底面風化著しく調整不明	
149－6	Ⅰ区 A4 Gr 16層	底　部	底径　3.8 (底部　完)	①微砂粒子（石英・長石など）少し含む ②黒灰色～にぶい黄橙褐色　③普通	厚みはあるが小さい平底 外面丁寧な縦方向のナデ調整、底面及び内面ナデ調整	外面に黒斑あり
149－7	Ⅰ区 B8 Gr 16層	底　部	底径　2.8 (底部　完)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外面黒灰色、内面暗黄褐色　③普通	小さな平底で、指押さえによりやや上げ底となる 外面ナデ調整、内面ケズリ調整	
149－8	Ⅰ区 B6 Gr 12層	底　部	底径　3.2 (底部　5/6存)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）及び若干の2～3mm大の砂粒子含む　②にぶい黄褐色　③普通	稜線のあまい小さな平底 外面ハケ目調整、内面ケズリ調整	外面煤付着
149－9	Ⅰ区 B7 Gr 16層	底　部	底径　3.0 (底部　完)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色　③普通	稜線のあまい小さな平底 外面ナデ調整、内面ケズリ調整	
149－10	Ⅰ区 B7 Gr 16層	底　部	底径　3.0 (底部　完)	①1mm大の砂粒子（石英・長石など）含む ②暗褐色　③普通	稜線のまだ明確な小さな平底で、焼成後に穿孔してあり、中央よりややずれている．底面は指ナデにより凹凸あり 外面ナデ調整、内面ケズリ調整	
149－11	Ⅰ区 A4 Gr 8層	底　部	底径　2.2 (底部　完)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②外面茶褐色、内面黒灰色 ③普通	稜線のあまい極小さな平底．底面まわりに指頭圧痕観察できる．内面底部も指押さえによる凹凸あり 外面ナデ調整、内面ケズリ調整	内面の黒灰色は黒斑と思われる
149－12	Ⅰ区 B6 Gr 13層	底　部	底径　1.8 (底部　完)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい灰黄褐色　③普通	稜線のあまい極小さな平底 外面ナデ調整、内面ケズリ調整	
149－13	Ⅰ区 B2 Gr 4層	高　坏	口径　27.7 (口縁部 1/10存)	①1mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む　②にぶい灰黄褐色　③普通	口縁端部が外水平に拡張して平坦な面をもち、口唇部もわずかに下に肥厚して面をもち刻目を施す 内外面ともミガキのような丁寧なナデ調整	
149－14	Ⅰ区 A7 Gr 16層	高　坏	口径　22.3 (口縁部 1/10存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗黄茶褐色　③普通	口縁端部が外水平に拡張して平坦面をもち、口唇部は丸くおさめる 内外面ともナデ調整	
149－15	Ⅰ区 A3 Gr 1層	高　坏	(坏部破片)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②暗灰黄褐色　③普通	口縁端部が水平に内外に肥厚して面をもち、3条の凹線文を施す．湾曲する体部には現状で5条の凹線文を施し、凸部2列に刻目を施す 風化著しく内外面とも調整不明	
149－16	Ⅰ区 A8 Gr 16層	高　坏	(坏部破片)	①微砂粒子(石英・角閃石・長石など)含む ②淡黄褐色　③普通	体部から口縁部にかけてゆるく「く」の字状に屈曲し、端部は肥厚して面をもち、口唇部に刻目を施す．口縁部には3条の凹線文が施され、凸部2列に刻目を施す 外面体部ミガキ調整、内面丁寧なナデ調整、他風化著しく調整不明	
149－17	Ⅰ区 B6 Gr 13層	高　坏	口径　17.3 (坏部 1/10存)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②淡黄褐色　③普通	やや湾曲して立ち上がる体部から直立ぎみの口縁部へと移行し、端部は断面厚のまま面をもち、2条の凹線文を、口縁部には5条の凹線文を施す 外面ナデ調整．内面ナデ、ハケ目調整	
149－18	Ⅰ区 A4 Gr 8層	高　坏	口径　19.0 (坏部 1/7存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい灰黄褐色 ③普通	湾曲した体部から口縁部が内傾して立ち上がり、端部はやや外側に肥厚して面をもち、口縁部には4条の凹線文を施す 内外面とも丁寧なナデ調整	外面に黒斑あり
149－19	Ⅰ区 B5 Gr 16層	高　坏	接合部径　6.9 (接合部　完)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②淡黄褐色　③普通	やや厚手の重量感のあるもので、脚部には多条の凹線文を施す．接合方法は、円盤充填法と思われるが、刺突孔がヘラにより1本ずつ付けられた十字状になっている．外面接合部まわりに指頭圧痕あり 外面ケズリのちミガキまたは丁寧なナデ調整、内面丁寧なナデ調整、部分的にハケ目調整	
149－20	Ⅰ区 A4 Gr 8層	高　坏	底径　15.2 (脚裾部 1/6存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②淡灰黄褐色　③普通	脚端部が外反して肥厚し面をもち、3条の凹線文を施す．脚部にはヘラ描きによる斜格子文、3条の凹線文を施す 内外面とも風化著しく調整不明	
149－21	Ⅰ区 A4 Gr 8層	高　坏	底径　12.6 (脚裾部 1/6存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②淡灰黄褐色　③普通	脚端部が外反して肥厚し面をもち、3条の凹線文を施す 外面ナデ調整、内面ケズリ調整	
149－22	Ⅰ区 B5 Gr 13層	高　坏	接合部径　7.1 (接合部 1/2存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②暗黄茶褐色　③普通	裾広がりの脚部で、径0.9cmの円形の透孔が2段に交互に穿ってある．現状で上段に2孔、下段に1孔 外面ハケ目調整、内面剝落しているがハケ目が少々観察される	
149－23	Ⅰ区 B5 Gr 13層	高　坏	底径　7.9 (脚部　5/6存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②黄橙褐色　③普通	脚部上位に4条の凹線文を施し、脚裾部は直立した複合口縁状で面をもち、凹みを施す．坏部は器壁の立ち上がり具合から深みのあるタイプと思われる 外面坏部ミガキ調整、他内外面とも風化著しく調整不明	外面一側縁に黒斑あり

挿図番号	出土地点	器　種	法　　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形　態　・　手　法　の　特　徴	備　　考
150－1	Ⅰ区 B8 Gr 16層	高　　坏	突出部径　34.2 （突出部 1/8存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい灰黄橙褐色　③普通	大型品で、直線的に立ち上がってきた体部から、削り出しによる突帯をつくり、ここから口縁部を立ち上げていく．突帯に小さな刺突文を施す 外面口縁部ナデ調整、体部ハケ目調整．内面ミガキ調整	
150－2	Ⅰ区 B7 Gr 16層	高　　坏	口径　　18.0 （突出部 1/6存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗橙褐色～にぶい黄褐色　③普通	やや湾曲して立ち上がる体部に、突帯状の突出部を有し、複合口縁状に立ち上がっていく．口縁端部には平坦面をもつ 外面口縁部及び体部突出部まわりナデ調整、以下ハケ目調整．内面ミガキ調整	
150－3	Ⅰ区 A3 Gr 16層	高　　坏	口径　　19.5 （坏部 1/5存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②外面黄橙褐色、内面暗灰色～黄橙褐色　③普通	薄手のもので、体部は丸く湾曲して立ち上がり、段をもち口縁部を外反させる．内面には段はなくスムーズに移行する．接合方法不明 内面坏部ミガキ調整、脚部ミガキ調整．外面風化著しく調整不明	
150－4	Ⅰ区 B5 Gr 16層	高　　坏	口径　　21.9 （坏部 1/3存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）多く含む　②黄橙褐色　③普通	碗形の坏部で、端部を外に曲げて丸くおさめる 内外面とも丁寧なナデ調整	
150－5	Ⅰ区 B8 Gr 16層	高　　坏	口径　　25.0 （坏部 1/2存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）多く含む　②黄褐色　③普通	湾曲した立ち上がりを見せるが、口縁部は外反して広がっていく 内外面ともナデ調整、特に内面は丁寧	
150－6	Ⅰ区 B8 Gr 16層	高　　坏	口径　　25.0 （坏部 1/4存）	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など）多く含む　②暗茶褐色～にぶい黄褐色 ③普通	湾曲した立ち上がり、口縁部は外反する．接合方法は円盤充填法である 内外面とも風化著しく調整不明	内面に煤が付着しているため、蓋として転用されたものと思われる
150－7	Ⅰ区 A7 Gr 不明	高　　坏	接合部径　4.2 （接合部　ほぼ完）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②灰黄橙褐色　③普通	接合方法は、ドーナツ状の坏部に下から脚部を差し込み、上から円盤を充填している 内外面ともミガキ調整	
150－8	Ⅰ区 A7 Gr 16層	高　　坏	接合部径　4.8 （接合部及び 脚柱部　ほぼ完）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②黄橙褐色　③普通	脚柱部が筒状にのび、裾部は開こうとしているところ．接合方法は円盤充填法 脚部内面ケズリ調整、他内外面とも風化著しく調整不明	
150－9	Ⅰ区 B6 Gr 13層	高　　坏	接合部径　5.2 （接合部及び 脚柱部　ほぼ完）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②黄橙褐色　③普通	やや幅の広い接合部から筒状にのびる．等間隔に約1センチの円形の透孔が穿たれている．坏部底面裏中央に浅い十字状の印あり 坏部内外面及び脚部外面ミガキ調整、内面ケズリ調整	脚部に朱塗り痕あり
150－10	Ⅰ区 A3 Gr 8層	高　　坏	口径　　12.0 （坏部 1/5存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	小型で浅い坏部である 外面ナデ、ハケ目調整、内面丁寧なナデ調整	
150－11	Ⅰ区 A7 Gr 不明	高　　坏	接合部径　2.8 （接合部　完）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	小型品 内外面とも風化著しく調整不明	
150－12	Ⅰ区 B6 Gr 12層	低 脚 坏	底径　　5.1 （脚部 1/2存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	小さな脚部 外面ナデ調整．坏部内面指押さえ、ナデ調整．脚部内面風化著しく調整不明	
150－13	Ⅰ区 A6 Gr 16層	低 脚 坏	底径　　5.6 （脚部 1/3存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）多く含む　②暗灰黄橙褐色　③普通	軽いふんばりをもつ脚部で、底面は平坦面をもつ、脚部中央に2ヶ所対になって小円孔が穿ってある 外面及び脚部内面ナデ調整、坏部内面ミガキ調整	蓋としても利用した可能性あり
150－14	Ⅰ区 B7 Gr 16層	低 脚 坏	底径　　5.4 （脚部　完）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	小さく外反する脚裾部を有する 外面ナデ調整、脚部内面ケズリ調整、坏部内面風化著しく調整不明	
150－15	Ⅰ区 A7 Gr 16層	低 脚 坏	底径　　6.5 （脚部　ほぼ完）	①微砂粒子（石英・長石など）含む ②淡黄褐色　③普通	精緻につくられた脚部である 外面ナデ調整、脚部内面ケズリ調整、坏部内面風化著しく調整不明	内外面に黒色の付着物あり、漆？
150－16	Ⅰ区 A5 Gr 13層	低 脚 坏	底径　　6.6 （脚部　完）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②暗灰黄褐色　③普通	精緻につくられたものである 坏部外面丁寧なナデのちハケ目調整、内面ミガキ調整．脚部外面ミガキ調整、内面ケズリ調整	
150－17	Ⅰ区 B2 Gr 4層	低 脚 坏	脚柱部径　4.7 （脚柱部　完）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②淡黄褐色　③普通	150-14・15に比べると精緻さに欠けるようである．脚部内面にナデ調整を行うので段ができている 外面ナデ調整、坏部内面風化著しく調整不明	
151－1	Ⅰ区 A4 Gr 8層	脚　　部	底径　　6.5 （脚部　ほぼ完）	①微砂粒子（石英・長石など）含む ②淡黄褐色　③普通	器の脚台部と思われる．脚部には5条の凹線文が施される 外面ナデ調整、脚台部内面ケズリ調整、他風化著しく調整不明	
151－2	Ⅰ区 A3 Gr 8層	脚　　部	接合部径　5.4 （接合部　完）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）多く含む　②にぶい黄褐色　③普通	接合部から幅広い脚部がのび、すぐに裾広がりとなる．内面に工具キズあり 外面ナデ調整．内面坏部ケズリ調整、脚部ナデ調整	
151－3	Ⅰ区 B5 Gr 13層	脚　　部	底径　　11.0 （脚部 1/4存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗灰黄褐色　③普通	短い脚部であるが、約1.2cmの円形の透孔が現状で2孔、本来は3孔穿たれている 外面ミガキのちナデ調整、内面上半ナデ調整、下半ケズリ調整	
151－4	Ⅰ区 A5 Gr 13層	鼓形器台	底径　　13.6 （脚部 1/3存）	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色～橙色 ③普通	厚手のもので、複合口縁状の脚部を有し、面には6条の凹線文が施される 外面ナデ調整．内面脚部ケズリ調整、筒部風化著しく調整不明	外面に朱塗り痕及び黒斑あり
151－5	Ⅰ区 B7 Gr 16層	鼓形器台	（脚部破片）	①1mm大の砂粒子（石英・長石など）少し含み、やや緻密　②にぶい黄褐色　③普通	脚部外面に貝殻腹縁による多条の擬凹線文が施される 外面及び内面裾部ナデ調整、脚部ケズリ調整	

挿図番号	出土地点	器　種	法　　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形　態　・　手　法　の　特　徴	備　　考
151－6	Ⅰ区 B6 Gr 12層	鼓形器台	突出部径　12.0 （突出部 1/5存）	①1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄褐色 ③普通	脚部外面に擬凹線文を施したのちに撫消しを行っている 内面ケズリ調整	
151－7	Ⅰ区 B6 Gr 12層	鼓形器台	（脚部破片）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②暗灰黄褐色　③普通	突出部下に径約4mmの列点文が現状で4点施されている．片側には連続していないので、グループ単位の施文方法と思われる 外面ナデ調整、内面ケズリ調整	
151－8	Ⅰ区 A6 Gr 16層	鼓形器台	底径　19.0 （脚部 1/6存）	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	脚部外面に小さな貝殻腹縁による多条の擬凹線文を施し、のち中央は撫消している 内面裾部ナデ調整、脚部ケズリ調整	
151－9	Ⅰ区 B8 Gr 16層	鼓形器台	筒部径　15.7 （筒部 1/4存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②淡黄褐色　③普通	大型のもので、筒部が短く幅広である． 脚部内面ケズリ調整、他風化著しく調整不明	
151－10	Ⅰ区 B7 Gr 16層	鼓形器台	突出部径　15.9 （突出部 1/6存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）及び若干の1～2mm大の砂粒子含む ②オリーブ褐色　③普通	少々厚手である 外面ナデ調整．内面受部丁寧なナデ調整、筒部・脚部ケズリ調整	
151－11	Ⅰ区 A2 Gr 4層	鼓形器台	底径　20.7 （脚部 1/6存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②黄橙褐色　③普通	シャープなつくりである 外面及び内面裾部ナデ調整、脚部ケズリ調整	
151－12	Ⅰ区 A7 Gr 16層	鉢	口径　24.0 （口縁部 1/12存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②オリーブ褐色　③普通	口縁端部が内外に水平に肥厚して面をもち、4条の沈線文を、口縁部には現状で4条の凹線文を施す 内外面ともナデ調整	
151－13	Ⅰ区 B5 Gr 13層 16層	鉢	口径　20.9 器高　9.5 底径　9.0 （口縁部 1/2存）	①1mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	こね鉢形をしている．やや分厚く粗雑なつくりである 外面ハケ目のちナデ調整、内面ナデ調整	外面に黒斑あり．煤付着．生産に関わる器？
151－14	Ⅰ区 B6 Gr 13層	鉢	口径　14.0 器高　9.9 底径　8.2 （1/4存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄褐色 ③普通	分厚いつくりで、コップ状を呈する．底部は丸底である．断面に粘土紐積み痕が観察できる 外面ケズリのちナデ調整、内面ケズリ調整	外面煤付着、生産に関わる器？
151－15	Ⅰ区 B3 Gr 31層	小型甕	口径　12.0 最大径　13.2 （口縁部 1/6存）	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む ②暗褐色　③普通	複合口縁で、端部を膨らませて丸くおさめ、突出部は横に出る．胴部最大径にヘラ描きによる刺突文を施す 外面及び内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整、横位に指ナデを入れている	
151－16	Ⅰ区 A7 Gr 16層	小型 無頸壺	口径　5.6 最大径　7.8 器高　5.6 底径　2.8 （1/2存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②灰橙褐色　③普通	口縁部が外反し、肩部が張る 外面横位のミガキの単位が観察される．底面及び内面風化著しく調整不明	外面煤付着
151－17	Ⅰ区 B4 Gr 8層	小型鉢	口径　8.0 （口縁部 1/5存）	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・橙色粒子など）含み、緻密　②明褐灰色　③普通	こね鉢状に外傾した胴部から屈折して内傾する口縁部へと移行する 内外面とも風化著しく調整不明	外面朱塗りの痕跡がわずかに観察される
152－1	Ⅰ区 A4 Gr 8層	蓋	つまみ径　5.5 （つまみ部分 ほぼ完）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②淡黄褐色　③普通	丸く平べったいつまみのついたもので、体部は欠損してないため器形は不明 つまみと体部境のくびれ部分にはタテハケ目のような跡観察され、のちナデ調整、体部内面に指頭圧痕あり．他風化著しく調整不明	
152－2	Ⅰ区 A8 Gr 16層	蓋	器高　3.8 底径　7.7 （完形）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	ヘルメット状で、天井に2孔1対の孔が穿たれている 外面ミガキ調整、内面風化著しく調整不明	
152－3	Ⅰ区 B2 Gr 4層	注口土器	注口長　5.8 先端口径　1.4 （注口部）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色　③普通	やや厚手で短めの注口部分である 外面ミガキ調整と思われる．内面調整は不明	
152－4	Ⅰ区 A3 Gr 4層	注口土器	注口長　6.9 先端口径　1.4 （注口部）	①微砂粒子（石英・角閃石・橙色粒子・長石など）含む　②淡黄橙褐色　③普通	シャープなつくりの注口部分である．注口周囲の胴部分に平行沈線文の痕跡あり 内外面とも風化著しく調整不明	
152－5	Ⅰ区 A1 Gr 1層	把　手	把手径　3.1 （把手部分）	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石など）多く含む　②にぶい橙褐色　③普通	縦方向で図化したが、残存する接合部分をまっすぐに置くと、横に曲がるので、器部分とは横方向に接合していた可能性あり 風化著しく調整不明	
152－6	Ⅰ区 試掘壙東 不明	脚部？	（小破片）	①微砂粒子（石英・長石など）含む ②にぶい黄褐色　③普通	四角形と思われる透孔あり、その下には2条の凹線文が施してある．端部は肥厚して面をもつ 端面指頭圧痕あり．内面ナデ調整、外面風化著しく調整不明	
152－7	Ⅰ区 A6 Gr 3層	須恵器 坏　身	口径　12.2 器高　3.5 底径　5.0 （完形）	①1mm大の砂粒子（長石・石英など）少し含む　②青灰色　③良好	体部丸みをおびて直立する口縁部に移行する．口縁端部は細くなる 外面ヨコナデ調整、底部ヘラ切りの切りっぱなしで、ヘラキズが多方向に入る．内面体部ヨコナデ、底部ナデ調整	
152－8	Ⅰ区 A1 Gr 1層	須恵器 坏　蓋	（つまみ破片）	①微砂粒子（長石など）若干含む ②青灰色　③良好	宝珠形のつまみ部分 内外面ともナデ調整	
152－9	Ⅰ区 B2 Gr 7層	須恵器 坏　蓋	最大径　15.0 （最大径部 1/13存）	①微砂粒子（長石など）若干含む ②暗灰色　③良好	かえりの付く蓋で、天井が低い低平なもの 外面体部ヨコナデ調整、天井部回転ケズリ調整．内面ナデ調整	
155－1	土器群20 （A5 Gr 11層）	壺	口径　15.3 （口縁部 1/3存）	①1mm大の砂粒子（石英・角閃石・橙色粒子・長石・金雲母など）多く含む ②にぶい黄橙褐色　③普通	直立した複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は下に引き出す．口縁面には貝殻腹縁による9条以上の擬凹線文を施したのち上位撫消しを行う．頸部下位には波状文を施す 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	

挿図番号	出土地点	器　種	法　　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形　態　・　手　法　の　特　徴	備　　考
155－2	土器群20 (A5 Gr 11層)	甕	口径　14.9 (口縁部 1/5存)	①微砂粒子（石英・長石・橙色粒子・角閃石など）多く含む　②にぶい黄褐色 ③普通	やや張った胴部から頸部「く」の字状に屈曲して口縁部に至る．口縁は上下に拡張して面をもち3条の沈線文を施す．胴部最大径付近に刺突文の痕跡あり 風化著しいが、内面胴部下位ケズリ調整、他内外面ともナデ調整と思われる	
155－3	土器群20 (A5 Gr 11層)	甕	口径　18.4 (口縁部 1/6存)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は外に曲げて平坦面をつくり、突出部は斜め下に出す 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
155－4	土器群20 (A5 Gr 11層)	台　部	接合部径　8.2 (接合部　完)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・橙褐色粒子など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	平らな体部に台が付いたもの．器形は想定できない．台部を体部からの粘土を貼り付けて指押さえで整形する 内面指押さえ・ナデ調整、外面及び台部内面ナデ調整	
156－1	土器群20 (A5 Gr 11層)	高　坏	口径　29.4 (坏部 1/6存)	①微砂粒子（石英・角閃石・長石・橙色粒子など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	湾曲した体部から口縁部やや内傾して立ち上がり、端部は肥厚して面をもち3条の凹線文を、口縁には5条の凹線文を施し、1番上の凸部に刻目を施す 外面及び内面口縁部ナデ調整、体部ミガキ調整と思われる	
156－2	土器群20 (B5 Gr 11層)	高　坏	脚柱部径　4.2 (脚柱部　ほぼ完)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）及び若干の2mm大の砂粒子含む　②にぶい黄褐色　③普通	脚柱部くびれ部に円形透孔現状で2孔あり、実際は3孔と思われる．外から内への穿孔で、内に向けて円錐形の孔となる．脚柱部の内筒部は坏底部の刺突孔ほどの孔からそのまま自然に脚が開く筒内径の小さなもの 脚部外面ミガキ調整と思われる．内面しぼり痕あり．他は風化著しく調整不明	
156－3	土器群20 (A5 Gr 11層)	鼓形器台	底径　18.9 (脚部 1/6存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②黄橙褐色　③普通	小型で縮約されたタイプのもの．円形透孔が1孔穿たれている．実際は何孔か不明 外面及び内面受部・筒部・脚裾部ナデ調整、脚部ケズリ調整	
156－4	土器群21 (B6 Gr 11層)	甕	口径　19.4 (口縁部 1/6存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②黄橙褐色　③普通	頸部「く」の字状に屈曲して口縁部に至る．口縁は上下に肥厚して面をもち2～3条の凹線文を施す 内外面ともナデ調整	
156－5	土器群21 (B6 Gr 11層)	甕	口径　19.4 (口縁部 1/2存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁で、端部は外反して丸く先尖りにおさめ、突出部は斜め下に引き出す．口縁面はヨコナデの強く入った部分が沈線状になっている 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	外面煤付着
156－6	土器群21 (A6 Gr 11層)	甕	口径　15.9 (口縁部 2/3存)	①1mm以下の砂粒子（石英・橙色粒子・長石・角閃石など）多く含む　②黄橙褐色 ③普通	複合口縁で、端部は引きのばし、突出部は斜め下に出る．肩部に波状文を施す 内外面とも頸部以上ナデ調整、以下外面荒いハケ目調整、内面ケズリ調整	
156－7	土器群21 (A6 Gr 11層)	甕	口径　21.0 (口縁部 1/3存)	①微砂粒子（石英・橙色粒子・角閃石・長石など）多く含む　②にぶい黄橙褐色 ③普通	複合口縁で、端部は外側をくびれさせ小さく丸くおさめ、突出部は下に出る．肩部に平行沈線文が観察される 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整と思われる	
156－8	土器群21 (B6 Gr 11層)	底　部	底径　2.1 (底部　ほぼ完)	①微砂粒子(石英・角閃石・長石など)含む ②外面黒褐色～暗褐色、内面にぶい黄褐色 ③普通	約6mmの底部穿孔土器である．底部は稜線の不明瞭な小さな平底である 外面ナデ調整、内面ケズリ調整	
156－9	土器群21 (B6 Gr 11層)	脚　部	底径　11.0 (脚部 1/2存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄橙褐色　③普通	短く裾広がりの脚台部である 内面ヨコナデ調整、外面風化著しく調整不明	
157－1	Ⅱ区 A4 Gr 現代溝	壺	口径　32.6 (口縁部 1/6存)	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・金雲母など）多く含む　②黒褐色　③普通	広口壺で、口縁端部は肥厚して面をもち、現状で1条の凹線文が確認できる．口縁部にも3条の凹線文を施す 内面ナデ調整、外面風化著しく調整不明	
157－2	Ⅱ区 B17 Gr 2層	壺	口径　9.5 (口縁部 1/3存)	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄褐色 ③普通	厚手で小型のものである．複合口縁状を呈し、丸みのある胴部である．肩部に不揃いの列点文あり 外面胴部上半以上ナデ調整、下半ハケ目のちミガキ調整．内面頸部以上ナデ調整、以下ケズリ調整	外面胴部下半に黒斑あり
157－3	Ⅱ区 A7 Gr 5層	甕	口径　15.2 (口縁部 1/9存)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	なだらかな胴部から頸部もゆるく外反して口縁部に至る．口縁は上下に肥厚して面をもち2条の凹線文、刻目を施す 内外面ともナデ調整	
157－4	Ⅱ区 A7 Gr 5層	甕	口径　20.6 (口縁部 1/13存)	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②黄橙褐色　③普通	頸部「く」の字状に屈曲して口縁部に至り、口縁は上下に肥厚して面をもち、2条の沈線文を施す 内面口縁部ナデ調整、他風化著しく調整不明	
157－5	Ⅱ区 B8 Gr 5層	甕	口径　18.7 (口縁部 1/7存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②外面暗黄茶褐色、内面にぶい黄褐色　③普通	頸部「く」の字状に屈曲して口縁部に至り、口縁は上下に拡張して面をもち1～2条の凹線文を施す 外面頸部以下ハケ目調整と思われる．他内外面ともナデ調整	外面頸部煤付着
157－6	Ⅱ区 B15 Gr 19層	甕	口径　19.3 (口縁部 1/6存)	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②外面暗褐色～にぶい黄褐色、内面にぶい黄褐色　③普通	ゆるくカーブする頸部から口縁部に至り、口縁は上下に肥厚して面をもち、3条の凹線文を施す 内外面とも風化著しく調整不明	外面煤付着
157－7	Ⅱ区 B6 Gr 不明	甕	口径　16.0 (口縁部 1/9存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②黄橙褐色　③普通	頸部「L」字状に屈曲して口縁部に至り、口縁は上に拡張して面をもち3条の凹線文を施す．頸部下には成形時のキズ跡あり 内外面ともナデ調整	
157－8	Ⅱ区 B5 Gr 9層	甕	口径　20.0 (口縁部 1/8存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②暗橙褐色　③普通	頸部「く」の字状に屈曲して口縁部に至り、口縁は上下に肥厚して面をもち3条の凹線文を施す．頸部には指頭圧痕文帯を貼り付ける 外面頸部以下ハケ目調整、他内外面ともナデ調整	
157－9	Ⅱ区 B6 Gr 不明	甕	口径　14.0 (口縁部 1/7存)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・橙色粒子など）含む　②暗褐色～にぶい黄褐色 ③普通	なだらかで最大径が胴部中央あたりにあり、頸部は丸みをおびて外反し、口縁部は上下に拡張して面をもち5条の凹線文を施す 外面頸部以上及び内面胴部上半以上ナデ調整、以下内外面ともハケ目調整	外面煤付着

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)	①胎土 ②色調 ③焼成	形態・手法の特徴	備考
157－10	Ⅱ区 B9 Gr 5層	甕	口径 15.5 (口縁部 1/4存)	①1～2mm大の砂粒子（長石・石英・角閃石など）含む ②暗褐色～にぶい黄褐色 ③普通	頸部が長くのびているので壺の部類かもしれない．複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に引き出す．口縁面には4条の凹線文を施す 外面及び内面口縁部ナデ調整、頸部細かいナデ調整、頸部以下ケズリ調整	
157－11	Ⅱ区 A7 Gr 5層	甕	口径 14.0 (口縁部 1/7存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②黒褐色～橙褐色 ③普通	小さな複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は下に出す．口縁面には3条の沈線文を施す 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	外面口縁部煤付着
157－12	Ⅱ区 B15 Gr 19層	甕	口径 24.4 (口縁部 5/6存)	①1～3mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部膨らませて丸くおさめ、突出部はわずかに出る．口縁面には貝殻腹縁による9条以上の擬凹線文ののち上位に撫消しを行う 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
157－13	Ⅱ区 B15 Gr 19層	甕	口径 20.0 (口縁部 1/11存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は膨らませて平坦ぎみにおさめ、突出部は斜め下に出す．口縁面には貝殻腹縁による11条の擬凹線文を施す 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整、特に口縁端部から内面にかけては丁寧	
157－14	Ⅱ区 A15 Gr 19層	甕	口径 25.8 (口縁部 1/13存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は丸くおさめ、突出部は斜め下に出る．口縁面には貝殻腹縁による14条の擬凹線文が2度に分けて施される 内外面ともナデ調整	
158－1	Ⅱ区 A15 Gr 19層	甕	口径 30.5 (口縁部 1/3存)	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・橙色粒子・角閃石など）含む ②外面淡黄褐色、内面淡黄褐色～暗褐色 ③普通	厚手の複合口縁で、端部は膨らませて丸くおさめ、突出部は斜め下に出る．口縁面には多条の沈線文の痕跡が残る．撫消し、風化により浅く薄くなったと思われる．頸部に成形時の沈線あり、肩部には幅広の刺突文が施される 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	内面おこげ付着． 158-9と同一個体の可能性あり
158－2	Ⅱ区 B5 Gr 5層	甕	口径 19.0 (口縁部 1/10存)	①1mm大の砂粒子（石英・橙色粒子・長石・角閃石など）含む ②淡黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は膨らませて丸くおさめ、突出部はわずかに下に出る．口縁面には多条の沈線文を施したのちに全体に撫消しているため条数は不明．頸部に2～3条の平行沈線文を施す 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
158－3	Ⅱ区 B5 Gr 9層	甕	口径 16.8 (口縁部 1/6存)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	頸部が強く屈曲した複合口縁で、端部は引きのばし、突出部はわずかに斜め下に出る．肩部に多条の平行沈線文が施される 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
158－4	Ⅱ区 B5 Gr 9層	甕	口径 17.0 (口縁部 1/8存)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石・金雲母など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	複合口縁で、端部は外に曲げ平坦ぎみな面を呈し、突出部は斜め下に出る 内面頸部以下ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
158－5	Ⅱ区 B5 Gr 9層	壺	(頸部破片)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②にぶい黄褐色 ③普通	ナデ調整後、深く施した現状で4条の凹線文、凹線文以上はタテハケ目調整で、荒いため文様のようである 内面ハケ目調整で工具を止めた跡あり	
158－6	Ⅱ区 A2 Gr 2層	装飾壺	(胴部破片)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②淡黄褐色 ③普通	胴部全体に貝殻腹縁による羽状文を細かく3段に施している．最上位はのちのミガキ調整により部分的に消えている 内面頸部ナデ調整、以下ケズリ調整	
158－7	Ⅱ区 A15 Gr 19層	底部	底径 6.1 (底部 1/3存)	①2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②外面黒灰色～暗黄褐色、内面にぶい黄褐色 ③普通	平底 内外面とも風化著しく調整不明	外面に黒斑あり
158－8	Ⅱ区 A6 Gr 5層	底部	底径 10.5 (底部 1/5存)	①1～3mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②外面暗橙褐色、内面にぶい灰黄褐色 ③普通	分厚くどっしりとした平底 外面ハケ目調整、内面ケズリ調整	
158－9	Ⅱ区 B15 Gr 19層	底部	底径 7.0 (底部 完)	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②淡黄褐色～にぶい黄褐色 ③普通	胴部の開き具合からは薄くて平べったい平底 外面基本的にナデ調整だが所々にハケ目が観察される．底面ナデ調整．内面ケズリ調整	外面黒斑あり． 158-1と同一個体の可能性あり
158－10	Ⅱ区 A7 Gr 5層	底部	底径 7.4 (底部 1/4存)	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む ②外面暗灰橙褐色、内面にぶい黄褐色 ③普通	平底 外面ミガキ調整．底面ナデ調整．内面底部指頭圧痕、ケズリ調整	
158－11	Ⅱ区 A7 Gr 5層	底部	底径 3.8 (底部 完)	①微砂粒子（石英・長石・角閃石など）及び若干の2mm大の砂粒子含む ②にぶい黄褐色 ③普通	小さく丸みのある底部で立ち上がりも急激であるので、ミニチュアではないかと思われる 外面ナデ調整、内面ケズリ調整	
159－1	Ⅱ区 A6 Gr 5層	底部	底径 3.2 (底部 完)	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）多く含む ②外面橙褐色、内面暗褐色 ③普通	稜線のあまい小さな平底で、中央に穿孔あり 風化著しく内外面とも調整不明	
159－2	Ⅱ区 A18 Gr 3層	高坏	口径 26.0 (坏部 1/4存)	①1mm大の砂粒子（石英・長石など）多く含む ②にぶい黄橙褐色 ③普通	湾曲して立ち上がる体部から口縁部に至り、口縁は外に水平に拡張する 外面鍔状口縁部ナデ調整、他内外面とも風化著しく調整不明	
159－3	Ⅱ区 A7 Gr 5層	高坏	口径 15.1 (坏部 1/7存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②淡黄褐色 ③普通	ボール状を呈し、口縁部は水平に肥厚して面をもち3条の凹線文を、体部にも3条の凹線文を施す 内面ナデ調整、外面風化著しく調整不明	
159－4	Ⅱ区 B15 Gr 3層	高坏	口径 13.2 (坏部 1/6存)	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②にぶい黄褐色 ③普通	小型のもので、湾曲する体部から直立気味に口縁部が立ち上がり、端部は肥厚して面をもつ．口縁部には4条の凹線文を、体部に1条沈線文を施す 内外面とも風化著しく調整不明	
159－5	Ⅱ区 B5 Gr 9層	高坏	口径 16.0 (口縁部 1/8存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②にぶい黄橙褐色 ③普通	直立に立ち上がる口縁部に4条の凹線文を施し、端部は肥厚して面をもつ 外面体部ミガキ調整、内面丁寧なナデ調整	
159－6	Ⅱ区 A7 Gr 5層	高坏	底径 12.5 (脚部 1/5存)	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む ②にぶい灰黄褐色 ③普通	脚端部が肥厚して面をもち1条の凹線文を施して外反するもの 内面ケズリ調整、外面剥落して調整不明	

挿図番号	出土地点	器　種	法　　量(cm)	①胎土　②色調　③焼成	形　態　・　手　法　の　特　徴	備　　考
159－7	Ⅱ区 A7 Gr 5層	高　　坏	口径　　13.7 （口縁部 1/9存）	①微砂粒子（石英・長石など）少し含む ②黄橙褐色　③普通	コップ状を呈し、短い脚の付くものと思われる 内外面とも口縁部ナデ調整、体部外面ミガキ調整、内面ハケ目調整	
159－8	Ⅱ区 A1 Gr 1層	器　　台	口径　　20.8 （受部 1/10存）	①1～2mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄橙褐色　③普通	複合口縁状の受部で、口縁面には5条の凹線文を施す 外面体部ミガキ調整と思われる．内面ケズリのちミガキ調整	口縁部に朱塗り
159－9	Ⅱ区 B9 Gr 9層	鼓形器台	底径　　16.5 （脚部 1/3存）	①1mm大の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	複合口縁状の脚部で、面には貝殻腹縁による13条の擬凹線文を施す 外面及び内面裾部ナデ調整、脚部ケズリ調整	外面朱塗り痕あり
159－10	Ⅱ区 AB-1 Gr 2層	鉢	口径　　17.4 （口縁部 1/7存）	①微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む ②外面黒褐色～暗褐色、内面暗褐色～にぶい黄褐色　③普通	頸部をナデにより内湾させ、口縁端部は水平に肥厚して面をもち浅い3条の凹線文を施す 内外面とも口縁部ナデ調整、胴部ミガキ調整	外面煤付着
159－11	Ⅱ区 A-0·1 Gr 2層	小 型 壺	口径　　7.3 （口縁部 1/3存）	①1mm以下の砂粒子（石英・長石・角閃石など）含む　②にぶい黄褐色　③普通	頸部を指頭圧痕により凹ませ、内面からは外反させる．丸みのあるミニチュア土器 内面胴部ケズリ調整、他内外面ともナデ調整	
159－12	Ⅱ区 A16 Gr 19層	蓋	つまみ径　6.3 （つまみ部　完）	①1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む ②淡灰黄褐色　③普通	中央に穿孔のある蓋 内面ケズリ調整、外面風化著しく調整不明	
159－13	Ⅱ区 B5 Gr 5層	須 恵 器 台　　部	底径　　10.2 （底部　完）	①微砂粒子（長石など）含む ②青灰色　③良好	台端部は外反する 内外面とも回転ナデ調整	

平成５年度調査その他一覧表

挿図番号	出土地点	器　種	遺存状態	長　さ(cm)	幅　(cm)	厚　さ(cm)	重　量(g)	備　考
９８－１	ＳＫ０５	古　銭 （文銭）	完　形	2.5	2.5	0.1	3	表：「寛永通寶」 裏：「文」
１２１－２	ＳＤ０２	古　銭 （古寛永）	完　形	2.5	2.5	0.1	3	表：「寛永通寶」 裏：　無文
１５３－１	Ⅰ区 Ｂ２　Ｇｒ １層	土　玉	１／３存	3.4	4.3	孔径　0.9	26	手捏でつくられている．中央に穿孔
１５３－２	Ⅰ区 Ｂ５　Ｇｒ ７層	土　玉	完　形	2.9	3.9	孔径　0.9	42	手捏だが丁寧に仕上げてある．中央に穿孔
１５３－３	Ⅱ区 Ｂ16　Ｇｒ ３層	土　玉	完　形	4.0	4.5	孔径　1.1	84	手捏でつくられている．中央に穿孔 （誤ってⅡ区の遺物掲載してしまう）
１５３－４	Ⅰ区 Ｂ６　Ｇｒ ８層	土　玉	完　形	2.9	3.8	孔径　0.9	41	手捏だが丁寧に仕上げてある．中央に穿孔
１５４－２	Ⅰ区 Ａ２　Ｇｒ １層	土　錘	完　形	4.1	1.1	1.1	5	
１５４－４	Ⅰ区 Ａ３　Ｇｒ １層	古　銭 （新寛永）	完　形	2.2	2.2	0.05	1	表：「寛永通寶」 裏：無文 「寛」と「寶」の足の根元が離れている
１５６－10	土器群２１ （Ｂ6 Ｇｒ 11層）	土　玉	完　形	3.3	4.1	孔径　1.0	60	手捏でつくられている．中央よりややずれて穿孔
１６０－１	Ⅱ区 Ｂ５　Ｇｒ ６層	土製紡錘車 未　成　品	完　形	4.6	5.0	0.4	13	土器を転用したもので、外面には列点文がある．まだ正円形ではないがほぼ中央に穿孔しようとしている 内面ハケ目調整、外面風化著しく調整不明
１６０－２	Ⅱ区 Ａ２　Ｇｒ ２層	土　玉	完　形	3.0	3.1	孔径　0.8	30	手捏でつくられている．中央に穿孔
１６０－３	Ⅱ区 Ａ15　Ｇｒ 19層	土　玉	完　形	3.7	4.5	孔径　1.2	79	手捏でつくられている．中央に穿孔．焼成前のキズ痕あり
１６１－２	Ⅱ区 Ａ12　Ｇｒ １層	古　銭 （新寛永）	完　形	2.2	2.2	0.07	2	表：「寛永通寶」 裏：無文 「寛」と「寶」の足の根元が離れている

平成５年度調査石器一覧表

挿図番号	出土地点	器　種	遺存状態	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
１１－６	ＳＫ１０	砥　石	完	凝灰岩	6.5	4.6	1.8	60	14面の研磨面
１３－13	ＳＫ１８	砥　石	ほぼ完	凝灰岩	5.7	3.1	0.9	18	表面に刃跡が多数観察できる
１３－14	ＳＫ１８	砥　石	ほぼ完	凝灰岩	6.9	3.5	2.5	65	５面使用
４１－１	ＳＤ１０	石　鏃	１／２欠	安山岩	1.2	1.7	0.4	0.9	薄手で縁辺部が鋭利
５９－15	土器群６	管　玉	一部欠	凝灰岩	2.5	0.9	0.9	2	風化著しい
７８－14	土器群１２	砥　石 （筋砥石）		砂　岩	12.3	12.4	5.2	1,080	片面に玉類を研ぐような溝が平行して３本ある もう片面は石皿状の凹みとなり中央には敲打痕あり
７８－15	土器群１２	砥　石	一部欠	緑色 凝灰岩	11.7	6.5	3.1	255	ほぼ全面使用
８５－11	土器群１４	敲　石	一部欠	安山岩	10.2	6.1	5.5	594	下面に敲打痕、表面わずかに研磨痕あり
８９－１	土器群１６	加工痕ある 剥　片	ほぼ完	黒曜石	3.4	1.7	0.9	3	表裏両面に細かい剥離痕あり
１０９－11	ＳＫ３８	多・孔　石		泥　岩	5.0	6.2	3.3	64	２つの溝状を中心に孔が数ケ所穿けてある
１２１－１	ＳＤ０２	管　玉	１／２存	碧　玉	1.2	0.5	0.5	1	
１２６－６	ＳＤ１１	砥　石	完	凝灰岩	6.9	3.3	2.8	105	全面使用
１２６－10	ＳＤ１４	磨製石器	完	安山岩	8.0	5.7	1.8	109	局部磨製石斧か
１５３－５	Ⅰ区 Ａ４　Ｇｒ ８層	磨製石斧	刃部破片	泥　岩	4.6	5.0	1.8	22	鋭利な刃部
１５３－６	Ⅰ区 Ｂ５　Ｇｒ ３層	環状石斧	１／５存	砂　岩	6.5	4.6	1.3	52	表裏面及び円孔部分研磨してある
１５３－７	Ⅰ区 Ｂ４　Ｇｒ 不明	偏平片刃 石　斧	基部欠	凝灰岩	3.6	4.1	0.5	13	小型品で、全面研磨された精製品
１５３－８	Ⅰ区 Ｂ６　Ｇｒ ３層	剥　片	完	黒曜石	5.2	5.5	1.7	46	裏面は自然面
１５３－９	Ⅰ区 Ａ８　Ｇｒ 不明	砥　石	完	砂　岩	10.6	8.8	1.2	164	表面、下側面は研磨、縁辺部は角度の鈍い剥離が施される
１５３－10	Ⅰ区 Ａ７　Ｇｒ 16層	砥　石	上下欠	凝灰岩	5.2	1.8	0.7	13	表面、両側面使用
１５３－11	Ⅰ区 Ｂ５　Ｇｒ 16層	砥　石	一部欠	泥　岩	5.2	2.4	2.1	43	下側面欠損後にも使用．全面使用
１５３－12	Ⅰ区 Ａ１　Ｇｒ １層	砥　石	上下欠	凝灰岩	6.1	3.5	1.3	39	全面使用
１５３－13	Ⅰ区 Ｂ８　Ｇｒ 16層	砥　石	ほぼ完	凝灰岩	6.5	1.7～2.6	1.5～2.6	41	表裏両側面は研ぎ込み湾曲している．下面荒研ぎ、上面に切れ込みあり
１５３－14	Ⅰ区 Ａ４　Ｇｒ ８層	敲　石	完	安山岩	8.1	2.4～4.1	2.5	105	上下両端に敲打痕あり
１５４－１	Ⅰ区 Ｂ３　Ｇｒ ８層	剥　片	完	不　明	2.2	1.8	1.1	3	上下両端に平坦面をもち、細かい剥離が施されているので、楔として使用されたものか
１５４－３	Ⅰ区 Ｂ４　Ｇｒ 不明	管　玉	完	緑色 凝灰岩	1.9	0.5	0.5	1	
１６０－４	Ⅱ区 Ａ20　Ｇｒ １層	匂　玉 未成品	完	凝灰岩	2.9	1.9	1.2	7	匂玉の形に削り出しているが、まだ無穿孔
１６０－５	Ⅱ区 Ａ16　Ｇｒ 19層	磨製石斧 未成品	完	安山岩	7.8	4.5	1.5	84	刃部のみ研磨
１６０－６	Ⅱ区 Ａ15　Ｇｒ ３層 Ａ16　Ｇｒ ３層	石　鋸	両端欠	凝灰岩	4.0	4.0	0.5	12	全面研磨

挿図番号	出土地点	器　種	遺存状態	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
１６０－７	Ⅱ区 A16　Gr 3層	石　鋸	基部、左側欠	凝灰岩	5.0	4.8	0.8	32	全面研磨．刃部が横位方向に磨滅
１６０－８	Ⅱ区 A20　Gr 1層	石　鋸	基部、左側欠	凝灰岩	6.2	4.2	0.8	31	刃部はあまり鋭利でない
１６０－９	Ⅱ区 A14　Gr 19層	石　核	完	玉　髄	4.5	4.1	4.0	78	
１６０－10	Ⅱ区 A７　Gr 5層	船形石器	完	凝灰岩	6.4	3.1	1.9	27	長楕円形に凹みをつけ船形を呈する．用途不明
１６０－11	Ⅱ区 A10　Gr 1層	砥　石	完	凝灰岩	3.7	1.8	1.5	17	全面使用だが、上面は荒研ぎ
１６１－１	Ⅱ区 A10　Gr カクラン溝	石　鏃	完	安山岩	2.3	1.6	0.4	2	無茎で三角形を呈する

6．平成５年度調査のまとめ

白枝荒神遺跡編年案

白枝荒神遺跡では、弥生時代中期から古墳時代初頭の土器が多く出土した。壺・甕を中心にその変遷を捉えることが可能なため１～９期に分類した。おおよそ既存の松本編年[註1]、草田編年[註2]と併行が可能なため、あえて併行関係で捉えておいた。白枝１期は松本Ⅲ様式をひとつにしている。新古相に分類も可能であるが、良資料に不足しているため分類しなかった。また他の時期も細分可能なものもあるが線引きするには良資料にこれも不足しているため、新古相の注記のみに留めておいた。

白枝１期

松本Ⅲ様式に併行する。

壺には広口壺（43－1）、ラッパ状口縁壺（134－2）、短頸壺（87－1）、無頸壺（136－12）などがある。口縁端部は肥厚し、口縁面は無文のもの、134－2のように斜格子文などの櫛描文を施すものがある。また134－2タイプのものは頸部に多条の断面三角形貼付突帯文をめぐらし棒状浮文などを貼り付ける。突帯文の突出部は鋭利なものから新相を呈すものは退化する。内面及び外面上位はナデ調整もみられるがタテハケ目調整を多用している。外面下位は縦方向のミガキ調整が主流を占めるようである。内面底部から下位にヘラケズリ調整が観られるものもある。甕は頸部が「く」の字状に屈曲し口縁端部がわずかに肥厚して面をもち始める段階のものである。口縁面は平坦なものとわずかに凹みをつけるものとがある。新相を呈するものには、口縁面に刺突文などを施文したり、頸部に指頭圧痕文帯をめぐらすものが出現する。胴部の張りは弱く下半部はすぼまりしっかりした平底となる。壺と同じ調整方法である。

高坏は水平に拡張された鍔状の口縁部を有するもので、北部九州の系譜を引くものである。

白枝２期

松本Ⅳ－１様式に併行する。この時期を特徴づけるものは、凹線文の導入である。壺・甕をはじめ高坏などにも用いられる。

壺には広口壺、ラッパ状口縁壺（134－8）などがあるが、１期の貼付突帯文、櫛描文が凹線文に凌駕され装飾的なものが減少する。内傾する甕の口縁端部は上・下または上下にわずかに肥厚して面をもち１～２条の凹線文を施す。口縁面長の平均値（48個体）は0.98cm、平均条数は1.8条。胴部は張り出し、最大径付近に列点文、刺突文などが施される。１期同様の調整方法だが、内面ケズリ調整が徐々に上がり始める。

椀状の高坏（159－3）である。口縁端部が水平方向に肥厚して面をもち、その面及び体部に凹線文を施す。

白枝３期

松本Ⅳ－２様式に併行する。

壺はにぎにぎしく飾るものはなくなり、広口壺（50－2、134－10）も最終段階となり、甕と同

型のものが出始める。甕は２期と特徴を異にすることは、口縁端部が肥厚して３～４条の凹線文を施すようになり、内面ケズリ調整が胴部上位にまで施されるようになることである。口縁面長の平均値（34個体）は1.4 cm、平均条数は3.1条。

高坏の形態が２期とは変化し、口縁部が屈折し内湾して立ち上がり、多条の凹線文を口縁部及び脚部に施すようになる。脚裾部は外反し肥厚して面をもちここにも凹線文を施す。112－３のみは内面ハケ目調整であるが、他はナデ調整、ミガキ調整を行う。

白枝４期

草田１期に併行する。

壺・甕の口縁端部が拡張して複合口縁となり３～４条の凹線文を施し、頸部以下の内面調整は例外なくケズリ調整を行い器壁を薄くし始める。以降内面頸部以下の調整はケズリ調整となる。甕の口縁面長の平均値（23個体）は1.7 cm、平均条数は2.9条。胴部最大径付近にあった文様は肩部へと移動する。壺のバラエティー、甕頸部の指頭圧痕文帯はなくなる。

高坏も口縁部が複合口縁となって面をもち凹線文を施す。

白枝５期

草田２期に併行する。

壺・甕の口縁部は、上へ拡張して擬凹線文[註3]を施し４期より多条化するようになる。また無文のものもかなりみられる。甕の口縁面長の平均値（51個体）は2.6 cm、平均条数は7.4条。内傾していた口縁部は直立するものとなり、端部は膨らみ、突出部は下またはわずかに横に出る。完形品がなくプロポーションは不明確だが、土器群18出土の底部からすると底部径が小さくなりつつあるよう。内面口縁部はミガキ調整であるのか、ナデ調整であるのか判断しがたいくらい丁寧である。この時期にスタンプ文を施した胴部が張り算盤状、玉葱状を呈した装飾壺が供伴する。

鼓形器台が登場する。壺・甕同様複合口縁状の受部・脚部を有し、同様の工具で擬凹線文を施す。外面ナデまたはミガキ調整、内面受部はミガキ調整、以下はケズリ調整である。高坏も鼓形器台と近似した器形変化をするはずだが、白枝荒神遺跡ではこのタイプの高坏は確認していない。

白枝６期

草田３期に併行する。

壺・甕の口縁部は、５期より更に拡張して直立から外傾するようになる。口縁端部はまだ膨らみを残し、突出部は下または斜め横に出る。口縁面の擬凹線文は櫛状工具へと代わり浅い沈線状となる。と同時に擬凹線文を撫で消すようになる。甕の口縁面長の平均値（30個体）は3.5 cm、平均条数は10.8条。93－９のように器壁がかなり薄く底部は小さいものとなる。外面頸部に平行沈線状のヨコハケ目調整が施されようになる。内面調整は５期と同様である。

鼓形器台は全体に縮約して、受部、脚部の面は伸び筒部に文様を施すものもある。

白枝７期

草田４期に併行する。

壺・甕の口縁端部はわずかに膨らみを残すが、引きのばし始め、外傾する。口縁面には擬凹線文の名残りが観られるものもある。甕の口縁面長の平均値（36個体）は3.0 cm。143－８、67－14の

ように胴が張り球状のプロポーションを呈するもの、67－10、143－9のように肩の張るものもある。内面口縁部の調整は4・5期のような丁寧さはなくなる。

高坏は無文となり、口縁部に段をもって外反する。鼓形器台は全体に縮約が進み器壁も薄くなり、受部、脚部が長く、筒部の短いものとなり、各外面には平行沈線文が観られる。白枝荒神遺跡ではこの時期から低脚坏が出現する。

白枝8期

草田5期に併行する。

壺・甕の口縁部は端部を引きのばし先細りとし、外傾する。突出部は斜め下または横へ引き出す。甕の口縁面長の平均値（148個体）は3.5cm。93－13のような球状、93－11、17－3のような倒卵形のプロポーションを呈する。肩部への平行沈線文からの波状文、刺突文、列点文などが施される。新相のものは口縁端部が再び丸味を帯びる。

高坏は坏口縁部が突出して外傾する複合口縁状のもの150－2、坏内面口縁部にわずかな段をもち外反するもの96－3～6、70－2とがあり、後者が主流を占める。新相を呈するに従い内面の段が不明瞭になる。鼓形器台は、古相のものには若干の文様が施されるが、文様はなくなり縮約も少しずつ進む。

白枝9期

草田6期に併行する。

壺・甕の口縁端部を外に曲げて平坦面をつくるようになる。突出部は横へ引き出す。甕の口縁面長の平均値（26個体）は3.6cm。

高坏は内外面ともに段、稜線はもたないものとなる。

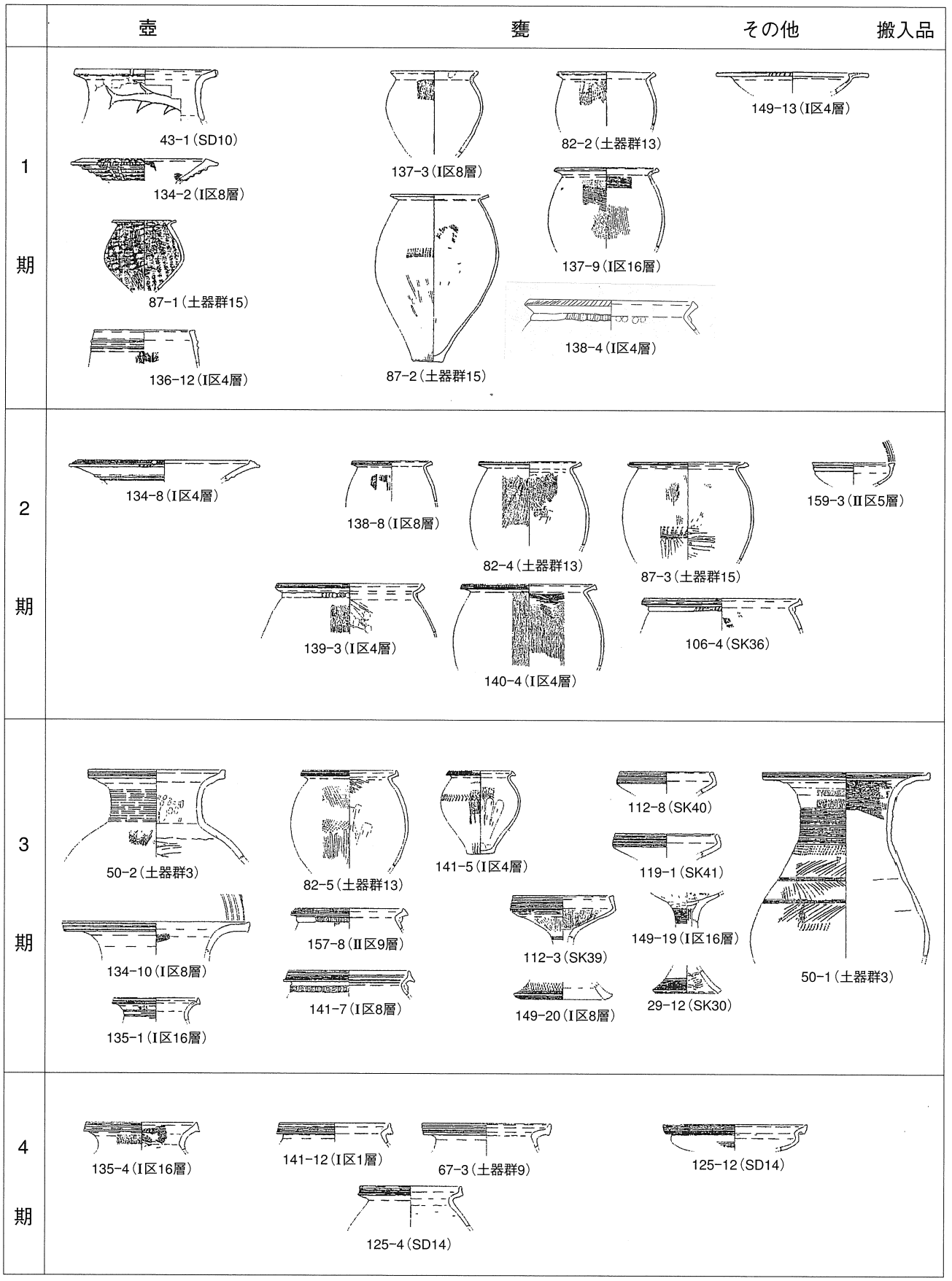
平成5年度白枝荒神遺跡検出遺構時期設定

以上白枝荒神遺跡の編年案を試みたが、次に平成5年度白枝荒神遺跡Ⅰ区・Ⅱ区の検出遺構の時期設定を行う。弥生時代中期から古墳時代初頭にかけてと土師器・須恵器破片を出土する古墳時代以降と中・近世にかけての遺構に大別される。

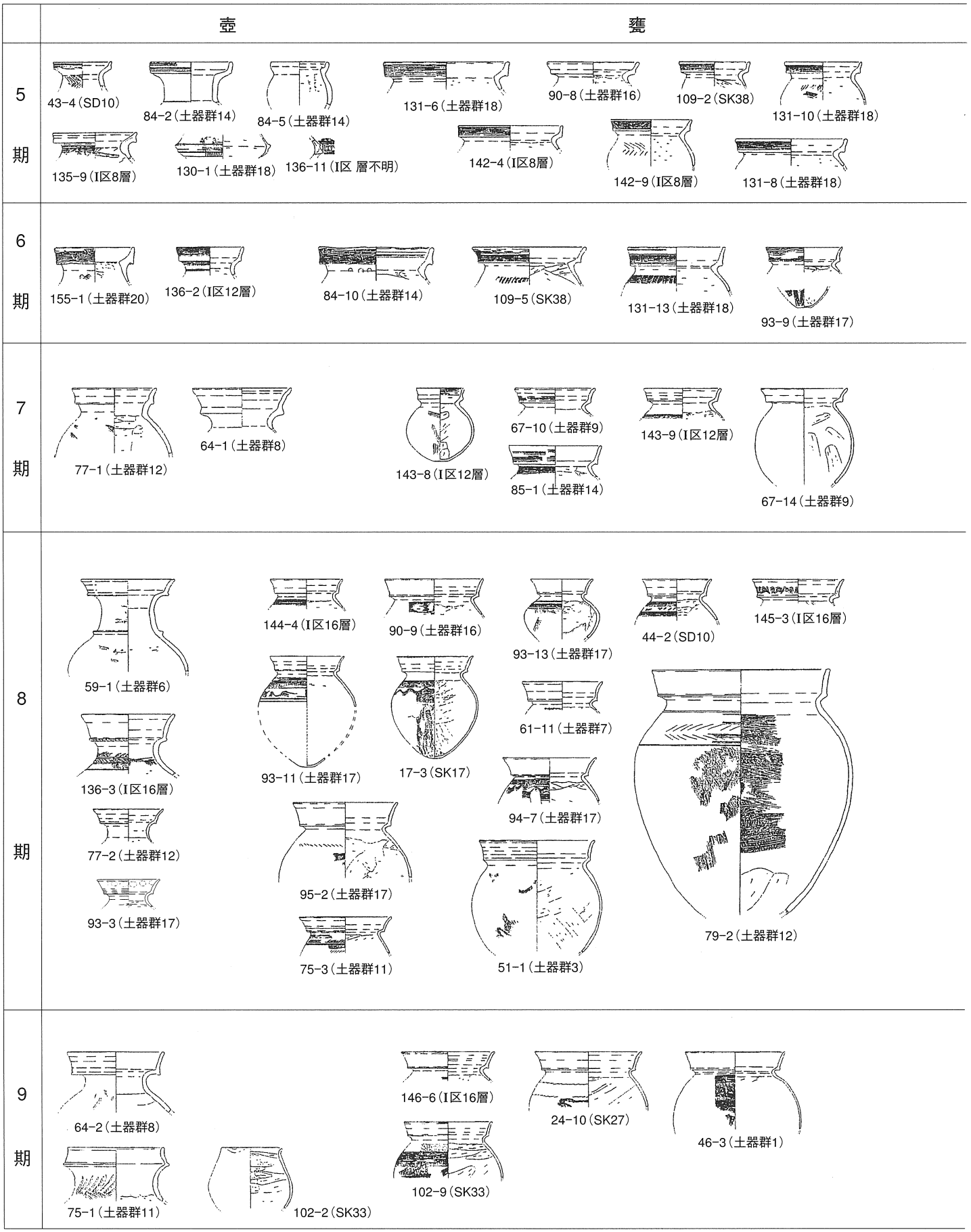
中・近世は、ＳＫ01～08、ＳＤ01～03が相当する。最も新しい耕作土を堆積土としており、寛永通宝が出土している。

土師器・須恵器破片を出土する古墳時代以降のものは、ＳＫ09・21、ＳＤ04・05・07・08・17が相当する。堆積土が黒褐色砂質土で方向がほぼ一致し並行関係にある。時期を確定するまでの根拠がなく中・近世まで下らないものとする。

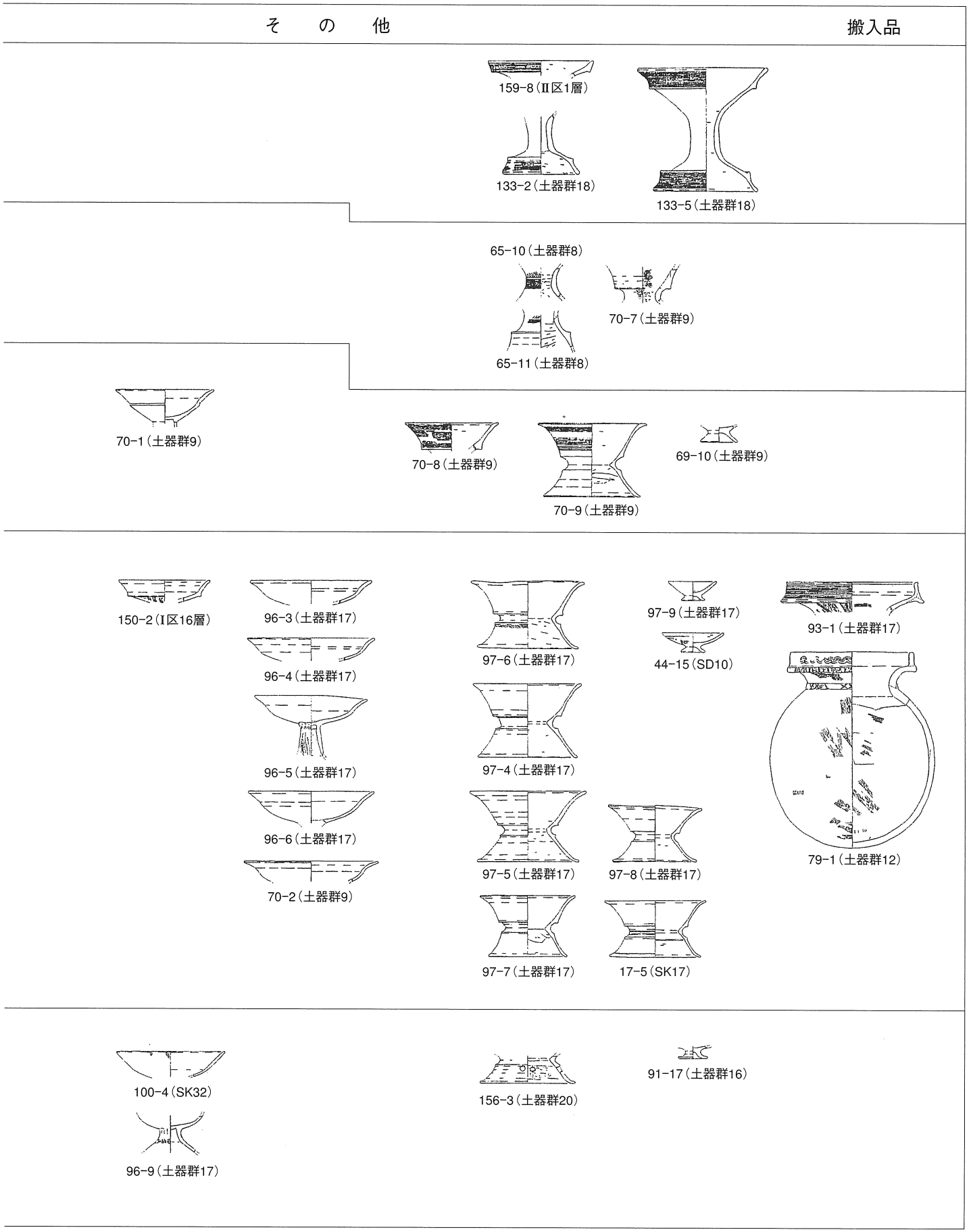
またＳＫ11・16・23・25・36・47・49、ＳＤ12・13・16は、前記した遺構に比べるとしっかりした落ち込みで、弥生土器の小破片が出土しているものもあるので、確実な時期は特定できないが弥生時代の遺構である。



第162図　白枝荒神遺跡遺物変遷図1（S=1/10）

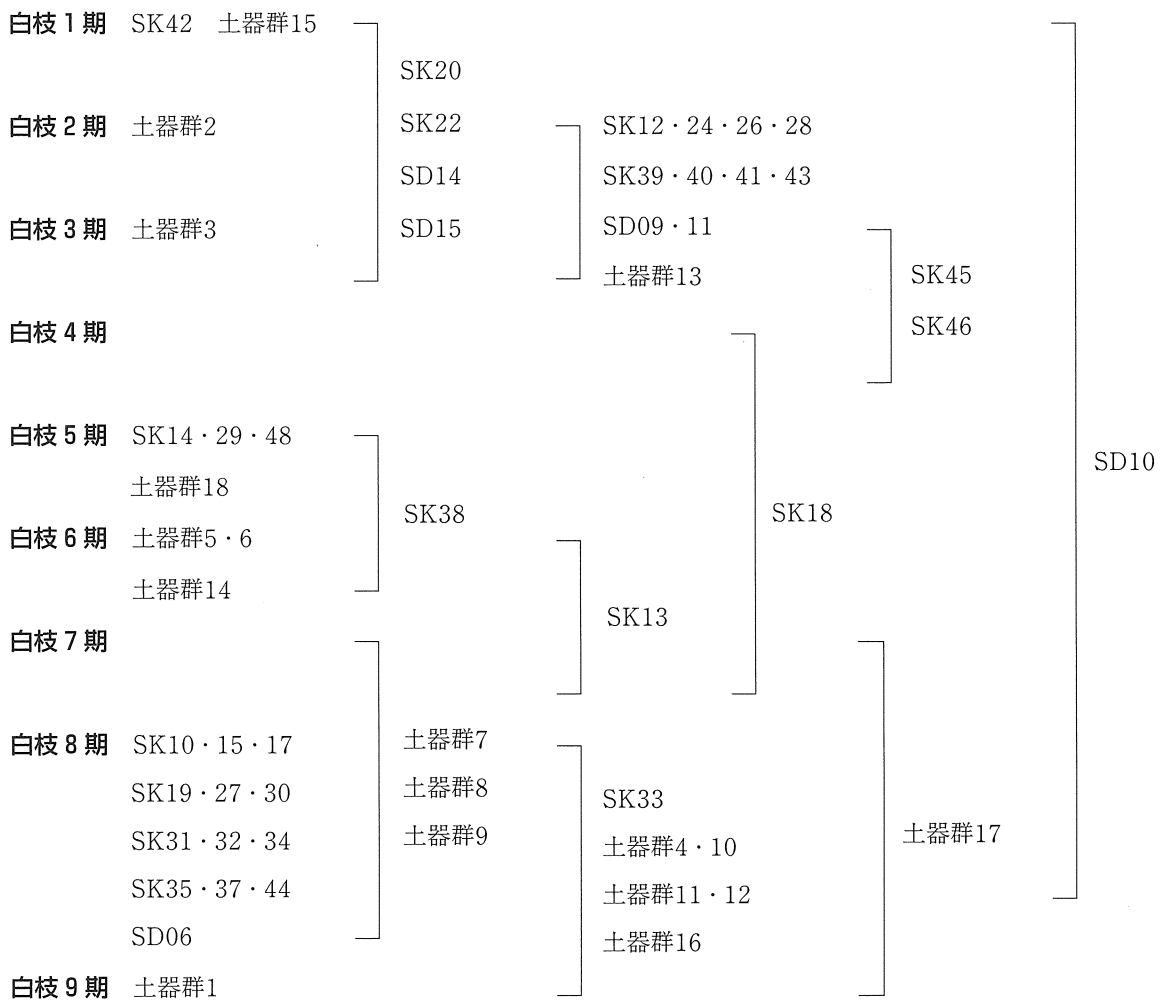


第163図　白枝荒神遺跡遺物変遷図2（S=1/10）



第164図　白枝荒神遺跡遺物変遷図3（S=1/10）

以下は白枝編年案の範疇の遺構を表化して表す。



註１　松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』　1992

註２　赤澤秀則「南講武草田遺跡」『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書』５　1992　鹿島町教育委員会

註３　擬凹線文の定義であるが、凹線文はそれぞれを１本ずつ施しその断面が半円形であるのに対して、擬凹線文は１度に数条施す沈線文である。白枝荒神遺跡では、擬凹線文の断面が矩形であることから貝殻腹縁を利用したものと判断した

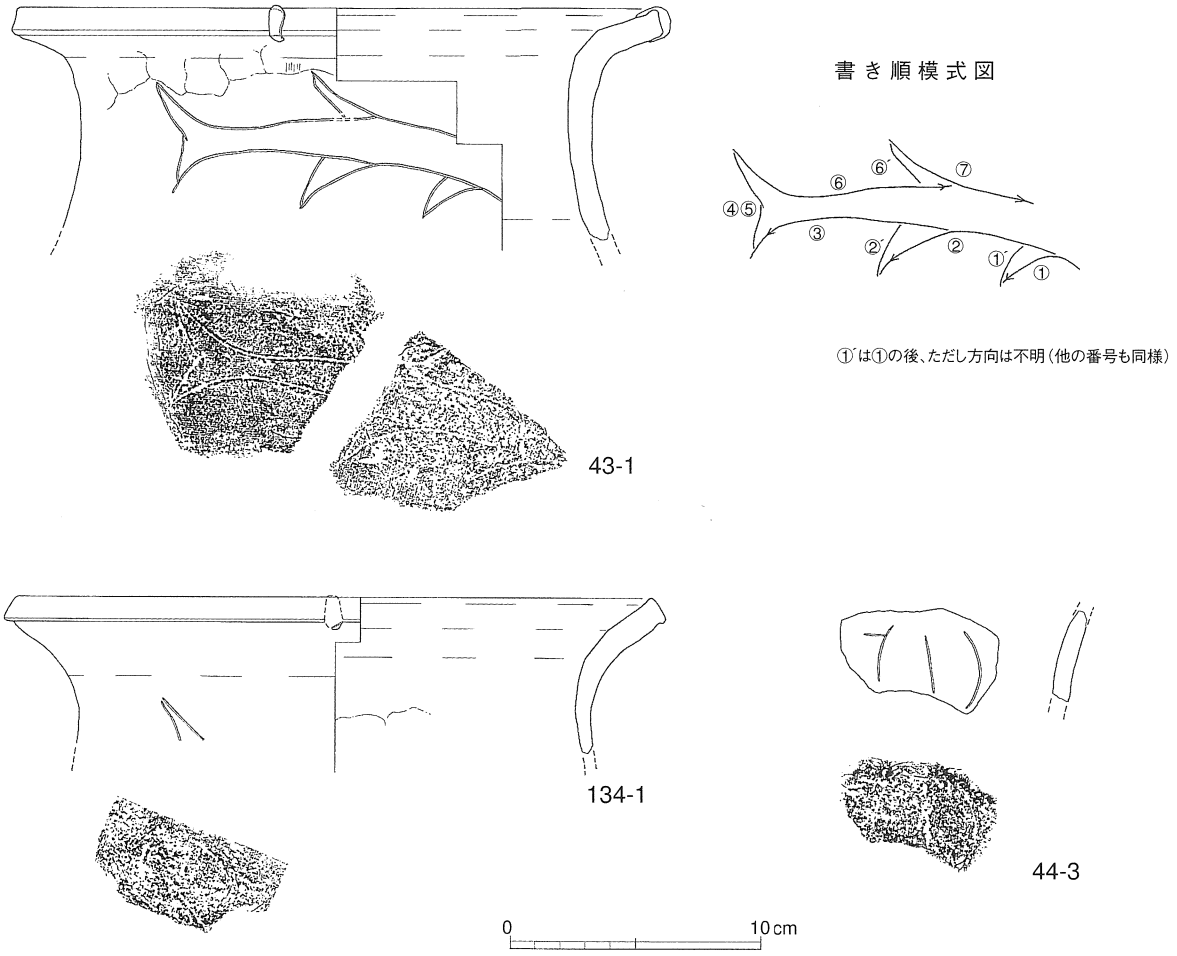
7．一　考　察

白枝荒神遺跡からは、絵画土器・スタンプ文土器・特殊土器・西部瀬戸内系複合口縁壺が出土しており、当遺跡の性格を握る鍵として、それぞれ一考しておく。限られた期限・紙面などによりまた筆者の力量不足・怠惰のせいにより、狭量であることをお許し願いたい。

絵画土器

当遺跡から出土した明らかな絵画土器としては、ＳＤ10出土43－１・44－３、Ｂ５Ｇｒ11層出土134－１の３点である。すでにこの３点は資料紹介[註1]をしているので重複することを断っておく。

43－１はＡ５Ｇｒ11層出土の破片と接合したものである。口縁端部が肥厚して面をもち若干の凹みをつけただけのもので弥生中期中葉の広口壺である。その頸部は、まるでキャンバスでも表現して



第165図　白枝荒神遺跡出土絵画土器（S=1/3）

いるようにまっすぐに立ち上がり平坦な面を呈している。

このキャンバス状の頸部に１匹の魚類が線刻によって描かれている。この魚類は頭部を欠いているが現存胴長に対して同幅の狭いこと、背鰭・腹鰭・Ｙ字状の尾鰭にシャープさがありサメ（鮫）とみなされる。サメは、現存長15cm×幅５cm（鰭部分を含む）であり、今にも泳ぎだしそうな躍動感あふれるタッチで表現してある。

線の新旧関係、砂粒の動きなどから観察すると、この線刻画は、腹側頭部方向より前腹鰭にかけて１本の曲線を描きその後もう１本の鰭線を描いている。次にはこの腹鰭の前側の付け根から同じ方法で繰り返し尾鰭まで描いている。尾鰭の２本の線は腹側より背側方向に描かれているとも思われるが、不確定である。そして背側は、腹側とは逆に尾鰭線から後ろ背鰭の付け根にかけて１本の曲線を描いたのち、背鰭のもう１本の線を描き、次同じようにこの背鰭の頂点より前背鰭方向に１本の曲線を描いている。このように観察してくると、この絵画を描いた工人の右から左へと曲線を描く癖が認められる。また、土器を回転（移動）させつつ描いていたことがうかがわれる。

134－１はＡ5Gr 層不明出土の破片と接合したものである。口縁端部が肥厚して面をもち若干の凹みをつけただけのもので弥生中期中葉の広口壺である。破片下隅の方をよく観察すると２本の線で左に傾いた細い山状のものが線刻してある。43－１のサメの画と比べてみるとわかるように、サメの背鰭であろう。土器自体が両者酷似しているので同一個体と思われ、43－１の欠けている背鰭とまずは考えたが、どうしてもうまく接合せず、あるいは貼付浮文が２コ１対のものと考えるとひとつの壺に２匹のサメが描かれていたと想定したい。

44－３は横６cm×幅５cmの弥生土器の破片である。表面に木の葉状の線刻が施されている。

以上当遺跡から出土した絵画土器の概要を示した。現在県内で確認されている絵画土器は、平田市美談神社遺跡出土の広口壺[註2]で頸部に３頭以上の鹿が細いタッチで描かれている。口縁端部が肥厚して面をもち３条の凹線文を施すので、弥生中期後葉のものである。また鳥取県では淀江町稲吉角田遺跡出土の広口壺[註3]があり、太陽状のもの、ゴンドラ状の船、高床の倉庫、切妻の家、円形のものをぶら下げている樹木状のもの、鹿が頸部に連続して描かれている。中期後葉のもの[註4]である。

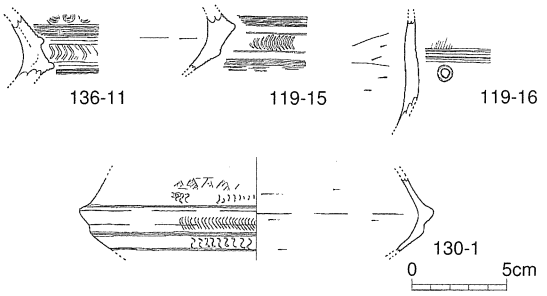
絵画土器は九州地方では弥生時代前期から描かれている例もある[註5]が、弥生時代中期中葉頃から描かれ始め、徐々に類例が増加し中期後葉に盛行する。そして後期にはいると絵画よりもむしろ記号化した記号文が盛行するようになる[註6]。また中心地域は大和の特に唐古・鍵遺跡、清水風遺跡に集中しており出土総数の40パーセントを占めているという[註7]。

全国的な絵画土器の出土地域・時期状況を橋本裕行氏の集成した図が『原始の造形　縄文・弥生・古墳時代の美術』に掲載されている[註8]。それによると当遺跡で描かれているような魚類を題材にしている遺跡は、兵庫県川西市下加茂遺跡、大阪府大阪・八尾市亀井遺跡、茨木市東奈良遺跡、奈良県田原本町唐古・鍵遺跡２例、天理市清水風遺跡２例の５遺跡であり、これに当遺跡のサメを加えると６遺跡８例目となる[註9]。表現方法を求めると、東奈良遺跡のそれと近いものを感じる。当遺跡は日本海沿岸までおよそ５km、神門水海は生活圏内であり、サメをみる機会は多かったはずである。神門水海を形成している砂丘上にある上長浜貝塚からはメジロザメ、アオザメの歯が出土している[註10]。しかし当時の画材としては美談神社遺跡、稲吉角田遺跡でも描かれているように圧倒的に霊獣としての鹿[註11]が

多く、類例の少ない魚類を描くということは当遺跡に住んだ人々の海に対する信仰心の篤さを感じることができる。また前記したように時期としては中期中葉（橋本Ⅲ）の範疇の壺であり、初期の絵画土器といえる。

スタンプ文土器

当遺跡から、Ⅰ区A8Gr出土136－11、ＳＫ48出土119－15･16、土器群18出土130－1の計4点が出土した。119－16は竹管文であるが、山枡雅美・原田雅弘氏によると[註12]1重の同心円スタンプ文として分類してあるので仲間に加えておく。



第166図　白枝荒神遺跡出土スタンプ文土器（S=1/4）

残り3点は、いわゆる算盤状、玉葱状とよばれている壺の器形を呈するもので、文様にも共通するものがある。突帯文と突帯文の間、間帯に「く」の字状文が、突帯文の上下には平行沈線文が施される点である。また136－11の上体部には山枡・原田分類の4である3重の同心円スタンプ文が施されている。130－1にはいわゆる吉備系の鋸歯状スタンプ文、逆「S」字状の、言い換え鳥形スタンプ文[註13]を施している。

スタンプ文を有する土器の分布は、出雲・備後以東から越中・加賀・越前、大和以西の間の地域を示す[註14]。名越勉・甲斐忠彦氏の分類[註15]によると弥生時代のスタンプ文には、鳥形文、鋸歯文、同心円文、S字状渦文の4種類があるという。当遺跡では、S字状渦文は出土しなかった。また名越・甲斐

第167図　スタンプ文土器出土分布図

氏が同一個体に異種のスタンプで施文する場合は、鳥形文と鋸歯文、同心円文とＳ字状渦文が組合わさると指摘された[註16]ごとく、130－1は鳥形スタンプ文と鋸歯文の組合せである。同様な組合せの出土例には、鳥取県倉吉市中峯遺跡[註17]、岡山県中央町大道乢遺跡[註18]、同町三明寺遺跡[註19]、倉敷市上東遺跡[註20]がある。

また当遺跡以外の出雲平野からのスタンプ文施文の土器及び算盤状または玉葱状を呈する壺の出土は分布図に示したように、出雲市上長浜貝塚[註21]、同正蓮寺周辺遺跡[註22]、同小山遺跡[註23]、湖陵町庭反Ⅱ遺跡[註24]、松江市間内越１号墓・間内越遺跡[註25]、安来市島田黒谷Ⅰ遺跡[註26]、西郷町大城遺跡[註27]以上８遺跡である。そのうち鳥形スタンプ文を有するのは白枝荒神・大城、鋸歯状スタンプ文を有するのは白枝荒神・島田黒谷Ⅰ、同心円スタンプ文を有するのは白枝荒神・上長浜・小山・間内越・大城、Ｓ字状渦文を有するのは上長浜・島田黒谷Ⅰである。同心円スタンプ文は普遍的にゆきわたり、鳥形スタンプ文・鋸歯状スタンプ文特に鳥形スタンプ文の出土は希有である。

特殊土器

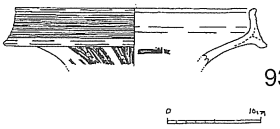
土器群17より吉備地方から搬入したと思われる特殊土器93－1が出土した。口縁部破片のため詳細は不明であるが特殊壺または吉備系の器台である。土器群17は白枝７～８期（草田４～５、松本Ｖ－４併行)[註28]を中心とした土器が集中したブロックである。出土状況よりこれらの土器とほぼ同時期に廃棄されたものと考えられる。

出雲平野には、吉備の特殊器台・特殊壺を出土した四隅突出型墳丘墓の西谷墳墓群[註29]がある。３号墓からは、分割型の文様を呈した特殊器台の破片、３条の突帯が施されている特殊壺などが出土しており、宇垣第１型式[註30]である。供伴する在地の土器としては草田３（松本Ｖ－３）が出土しており吉備との併行関係と捉えうる。また矢野遺跡[註31]からも特殊器台・特殊壺が出土しており、西谷３号墓出土の特殊壺と類似しているためほぼ同時期のものであろう。

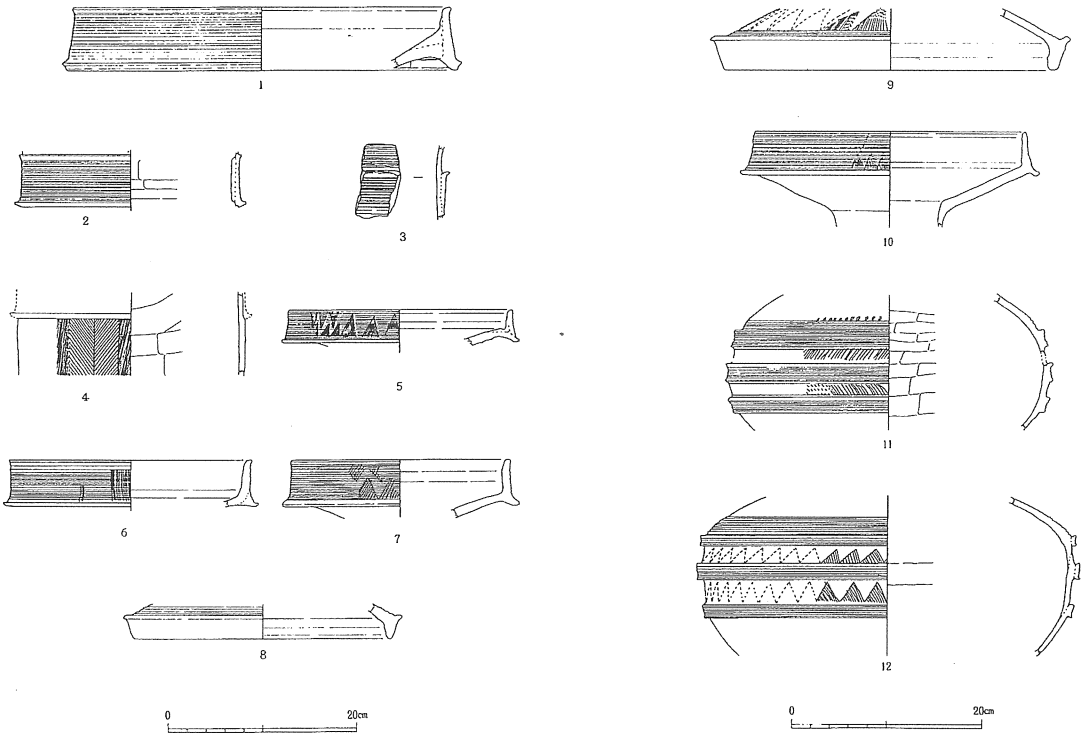
同じ出雲平野の当遺跡出土の特殊土器と西谷3号墓、矢野遺跡出土の特殊土器とは供伴する在地の土器に若干のずれを感じる。ただし『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』によると吉備では高畑Ｖ－５期[註32]から特殊土器が「出現し始める時期」としてあり、松本Ｖ－４と併行関係にあるという。以上より西谷３号墓及び矢野遺跡にはかなり早く初期の特殊土器が搬入され、白枝荒神遺跡には盛時に搬入されたと解釈しておきたい。

西部瀬戸内系複合口縁壺

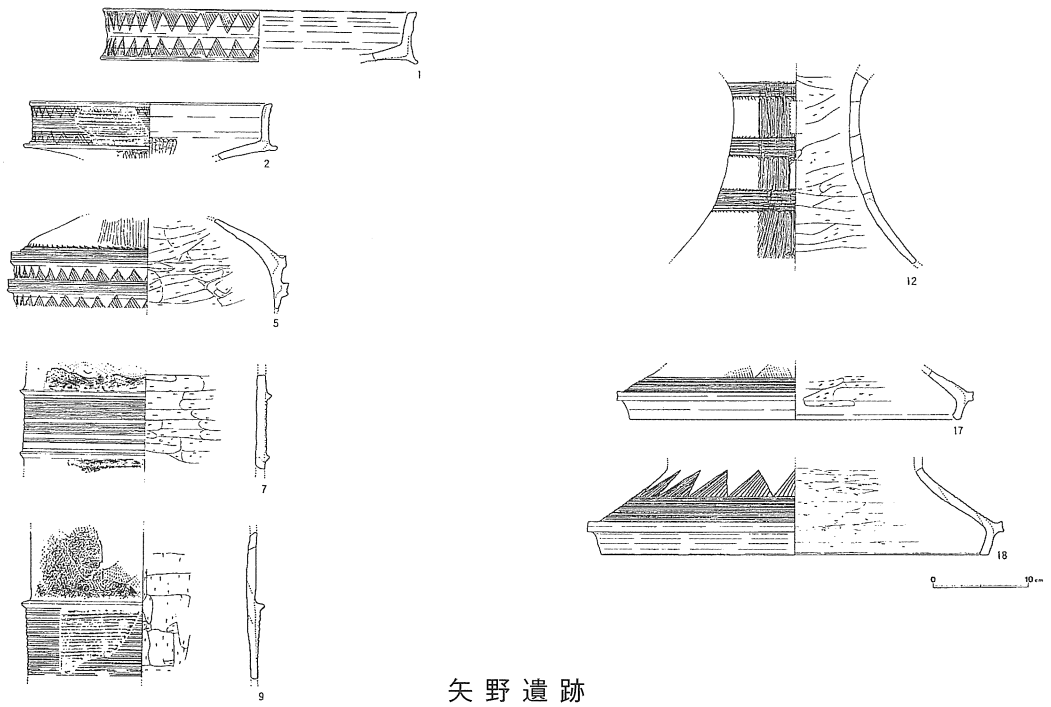
弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる西部瀬戸内系複合口縁壺79－1が１個体出土した。土器群12から在地の土器と重なり合って出土しているので、同時期に当地に持ち込まれたものであろう。白枝８～９期（草田５～６）の段階のものと考えられる。



白枝荒神遺跡



西谷3号墓



矢野遺跡

第168図　白枝荒神遺跡、西谷3号墓、矢野遺跡出土特殊土器

この壺の祖形は北部九州の袋状口縁壺、あるいはＴ字状口縁壺から独自に発達したもの[註33]で、湾曲する口縁部に内傾する複合部を貼り付けた複合口縁をもち、口縁面には波状文を中心に平行沈線文・鋸歯文・列点文などを施すものもある。丸味のあるプロポーションで、頸部及び胴部下半にはクシ状工具による文様を施した突帯文を貼り付けている。その分布域は、周防・長門を中心に、豊後・伊予北部・安芸西部に集中しており、西部瀬戸内系と呼称する。

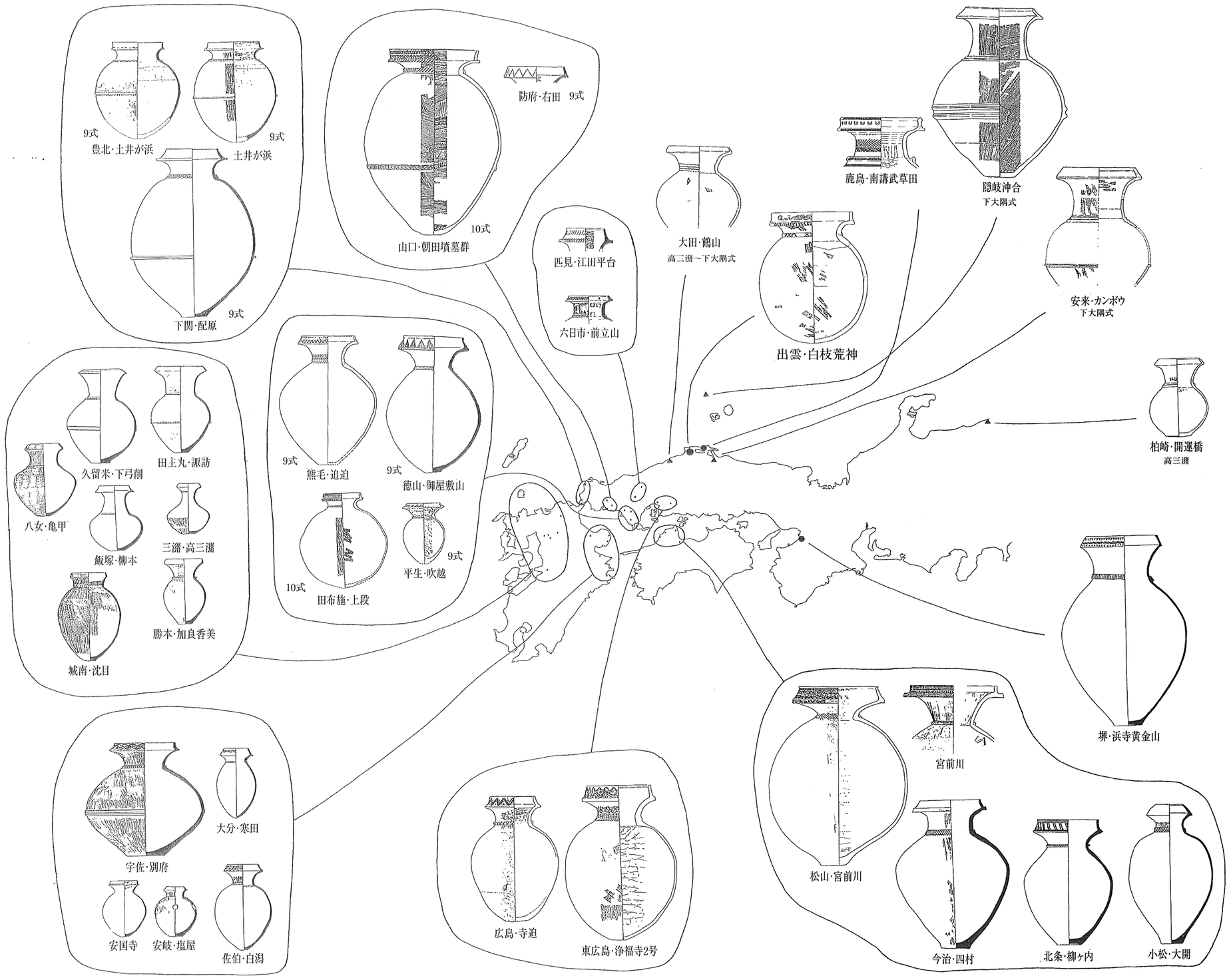
県内からの出土例は希で、石見西山間部地域の六日市町前立山遺跡[註34]（白枝６期、草田３、松本Ｖ－３）、匹見町江田平台遺跡[註35]（白枝５期、草田２、松本Ｖ－２）出土土器が類似した形態的特徴を有している。地理的に隣接している地域であるので河川を介しての搬入であろう。また鹿島町南講武草田遺跡[註36]から形態的には類似する壺が出土しているが、口縁面に「Ｕ」字状のスタンプ文、頸部に貝殻原体による羽状文などを施すところが在地的である。時期は出土地であるＳＤ03の在地系土器が草田１～７期のものであると記述してあり特定できない。

第169図は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての西部瀬戸内系壺と北部九州系の壺（いわゆる高三潴式、下大隈式）の分布をグルーピングしたものである。前者は、前記した５グループの他に長門・周防の中間域、石見西山間部を加えたものである。後者は、北部九州域をひとまとめにし、日本海沿岸域出土地をドット化したものである。

北部九州系複合口縁壺の日本海沿岸出土遺物の紹介・検討を常松幹雄氏が論述されている[註37]ので、それを参考に県内出土品及び最北端出土地である越後から出土した壺を紹介する。大田市鶴山遺跡から出土した壺[註38]は在地のもので北部九州系壺の模倣であろうと常松氏は指摘している。ただし模倣にはそのモデルがあったはずという。ここに北部九州系壺が他に存在していた可能性を示唆する。安来市カンボウ遺跡出土壺[註39]・隠岐島沖合いから引き上げられた壺[註40]は北部九州から搬出されたものである。ともに下大隈式のものである。松江市平所遺跡からは下大隈式の直口壺[註41]が出土しているが、ここでは複合口縁壺を扱っているため煩雑になるので割愛した。最後に遠く越後開運橋遺跡から出土した壺[註42]は高三潴式の搬入土器である。その他当遺跡でも山持川川岸遺跡[註43]でも袋状口縁の破片が出土、

<table>
<tr><th>白枝</th><th>北部九州</th><th>山本1982</th><th>松本1992</th><th>草田1992</th></tr>
<tr><td>2</td><td rowspan="2">須
玖</td><td rowspan="2">6</td><td>Ⅳ－1</td><td rowspan="2"></td></tr>
<tr><td>3</td><td>Ⅳ－2</td></tr>
<tr><td rowspan="2">4</td><td rowspan="2">高
三
潴</td><td>7</td><td rowspan="2">Ⅴ－1</td><td rowspan="2">1</td></tr>
<tr><td rowspan="2">8</td></tr>
<tr><td>5</td><td rowspan="2">下
大
隅</td><td>Ⅴ－2</td><td>2</td></tr>
<tr><td>6</td><td>9</td><td>Ⅴ－3</td><td>3</td></tr>
<tr><td>7</td><td rowspan="3">西
新</td><td rowspan="2">10</td><td rowspan="2">Ⅴ－4</td><td>4</td></tr>
<tr><td>8</td><td>5</td></tr>
<tr><td>9</td><td rowspan="2">11
12
13</td><td rowspan="2"></td><td>6</td></tr>
<tr><td></td><td>7</td></tr>
</table>

表2　編年対応表



第169図　西部瀬戸内系複合口縁壺、北部九州系壺出土分布図

確認しているが、北部九州系とするにはいまいち確定するものがなく保留としておく。

弥生時代後期から古墳時代初頭に西部瀬戸内で分布する複合口縁壺及び北部九州系袋状口縁壺を紹介してきたが、かなり地域色豊かな、地域間意識の強い壺である。西部瀬戸内はむろん、日本海沿岸域への交流手段として、隠岐島沖合い出土の壺からわかるように海を媒介してのダイナミックな交流を行っていたのであろう。

最初に戻るが、サメの絵画土器もそれを物語っている。

註1　米田美江子「白枝荒神遺跡出土の絵画土器」『動物考古学』第4号　1995　動物考古学研究会

註2　平田市教育委員会の原俊二氏のご厚意により実見させていただいた

註3　佐々木謙「鳥取県淀江町出土弥生土器の原始絵画」『考古学雑誌』67－1　1981

註4　清水真一「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年　山陰・山陽編』　1992

註5　橋本裕行「弥生絵画に内在する象徴性について」『原始の造形　縄文・弥生・古墳時代の美術』日本美術全集第1巻　1994

註6　佐原真「弥生時代の絵画」『考古学雑誌』66－1　1980

註7　橋本裕行「弥生土器絵画研究の展望」『東アジアの古代文化』85号　1995

註8　白枝荒神遺跡も掲載されているが、今回土器観察において前記したように中期中葉としたい

註9　註5で確認した他に、田原本町教育委員会「清水風遺跡第2次発掘調査および出土遺物について」1996より1点確認した．まだ未報告例が何例かあるらしい

註10　松井章・宮路淳子「上長浜貝塚出土の脊椎動物遺存体」『上長浜貝塚』　1996　出雲市教育委員会

註11　『弥生人の鳥獣戯画』　1996　香芝市二上山博物館編

註12　山枡雅美・原田雅弘「弥生土器のスタンプ文について」『秋里遺跡（西皆竹）』　1990　(財)鳥取県教育文化財団

註13　土器群18註1に記したように鳥形文として扱う

註14　桑原隆博「広島県内出土のスタンプ施文法による連続渦文を有する土器について」『芸備』第11集　1981

註15　名越勉・甲斐忠彦「スタンプ施文土器の新例」『考古学雑誌』58－4　1973

註16　註15と同じ

註17　註15と同じ

註18　河本清「絵画土器、人形・鳥形スタンプ文土器」『吉備の考古学的研究（上）』　1992　山陽新聞社

註19　註15・18と同じ

註20　註18と同じ

註21　川上稔　『上長浜貝塚』　1996　出雲市教育委員会

註22　出雲市教育委員会により1995年度より調査開始され現在も調査中．広口壺の口縁内面に1重の同心円スタンプ文が縦に3ヶ2列が一組で二組まで確認できる．またいわゆる算盤状または玉葱状の胴部に直立する口縁部と脚をもち、スタンプ文ではないが緻密な装飾を施した装飾壺が出土している。

註23　出雲市教育委員会により1996年度調査、小破片に径1.3cmの4重の同心円スタンプ文が3点施されている。

註24　杉原清一『庭反Ⅱ遺跡』　1986　湖陵町教育委員会

註25　中尾秀信ほか『間内越1号墓・間内越遺跡』　1989　松江市教育委員会

註26　大庭俊次・丹羽野裕・池淵俊一「島田黒谷Ⅰ遺跡」『一般国道（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』9　1995　島根県教育委員会

註27　『'79特別展　隠岐の国』　1997　八雲立つ風土記の丘資料館

註28　6.平成5年度調査のまとめ　註1・註2による

註29　渡辺貞幸ほか「西谷墳墓群の調査」『山陰・山陽地方における弥生時代墳丘墓の比較研究』1991

『出雲・西谷墳墓群シンポジウム　四隅突出型墳丘墓の謎にせまる』　1995　出雲市教育委員会

註30　宇垣匡雅「特殊器台・特殊壺」『吉備の考古学的研究（上）』

註31　出雲考古学研究会「出雲平野の集落遺跡Ⅱ－矢野遺跡とその周辺－」『古代の出雲を考える』5　1986

田中義昭ほか「出雲市矢野遺跡の発掘調査」『古代出雲文化の展開に関する総合的研究－斐伊川下流域を中心として－』　1989　島根大学

註32　高畑知功「備中地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』

註33　山本一郎「防長の弥生式土器」『山口県の弥生式土器－集成と編年－』　1979　周陽考古学研究所

註34　卜部吉博・内田律雄ほか「前立山遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』　1980　島根県教育委員会

註35　松本岩雄「石見地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』

註36　註28と同じ

註37　常松幹雄「本州島域における北部九州の壺型土器」『福岡考古』第16号　1994　福岡考古懇話会

註38　大国晴雄「鶴山遺跡」『大田市埋蔵文化財発掘調査報告書2　川南遺跡群』　1982　大田市教育委員会

註37と同じ

註39　丹羽野裕ほか「石田遺跡・カンボウ遺跡・国吉遺跡」『一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅶ　1994　島根県教育委員会

註37と同じ

註40　註37と同じ

註41　前島己基・松本岩雄ほか「平所遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ　1977　島根県教育委員会

岩橋孝典「山陰地域内出土の外来系土器について」『一般県道米子伯太線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　石田遺跡』　1994　島根県教育委員会

註42　註37と同じ

註43　川上稔『山持川川岸遺跡』　1996　出雲市教育委員会

参考文献

＊『特別展弥生人のメッセージ　絵画と記号』　1986　橿原考古学研究所付属博物館

＊資料「清水風遺跡第2次発掘調査および出土遺物について」　1996　田原本町教育委員会

＊藤田憲司　「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』64－4　1979

＊小林行雄・杉原荘介編『弥生式土器集成』　1958・1964　日本考古学協会

＊「朝田墳墓群Ⅲ－B・Ⅳ　糸米遺跡」『山口県埋蔵文化財調査報告』第45集　1979

＊「宮前川遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告書』第18集　1986　愛媛県埋蔵文化財調査センター

＊「追迫遺跡」『山口県埋蔵文化財調査報告』第107集　1988　山口県教育委員会

＊谷口哲一『山口県埋蔵文化財センターニュース　陶塤』⑥　1993　山口県埋蔵文化財センター

＊常松幹雄「伊都国の土器、奴国の土器」『古代探叢』Ⅲ　1991　早稲田大学考古学会

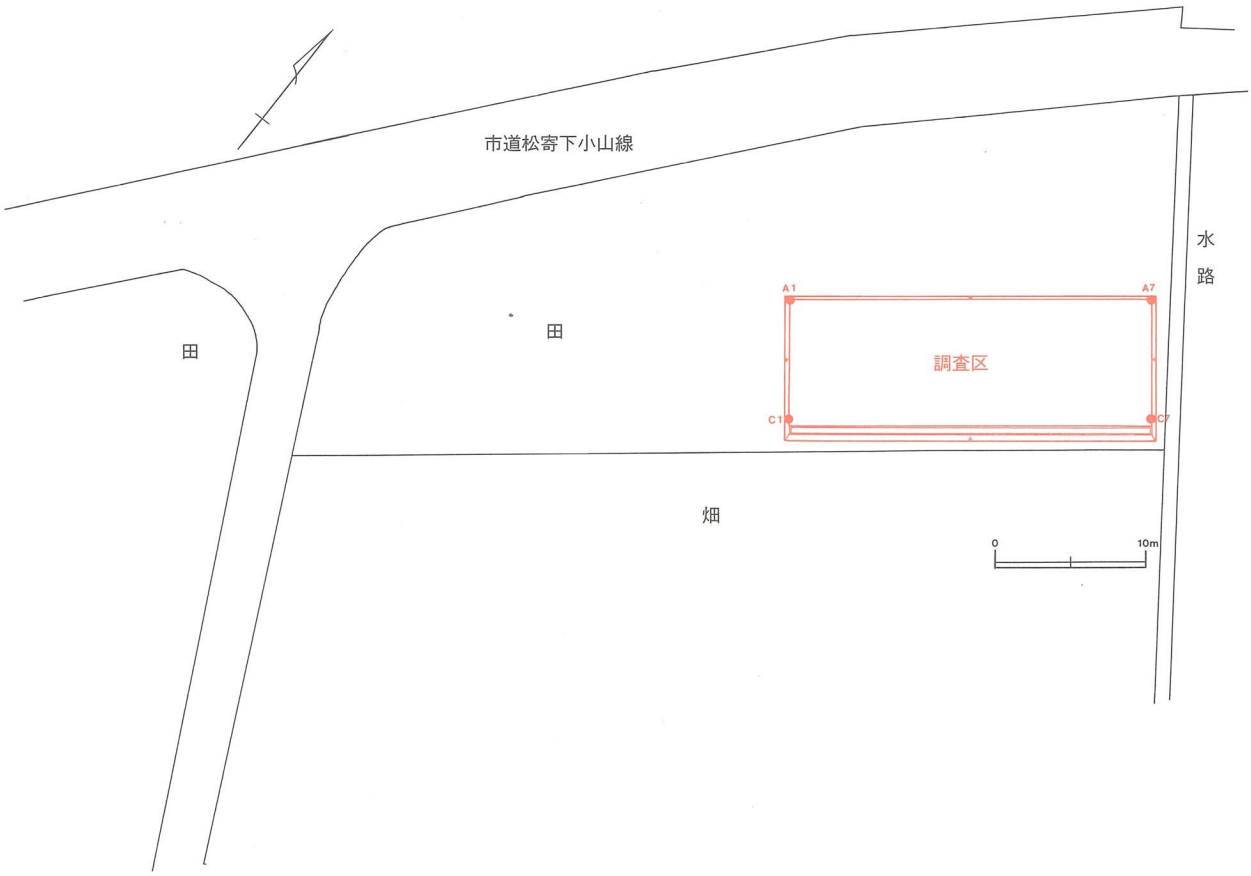
＊山本一郎・前島高雄『山口県の古代遺跡Ⅰ　集落・墳墓編』　1995　古代遺跡教材化研究会

第４章　平成６年度調査の概要

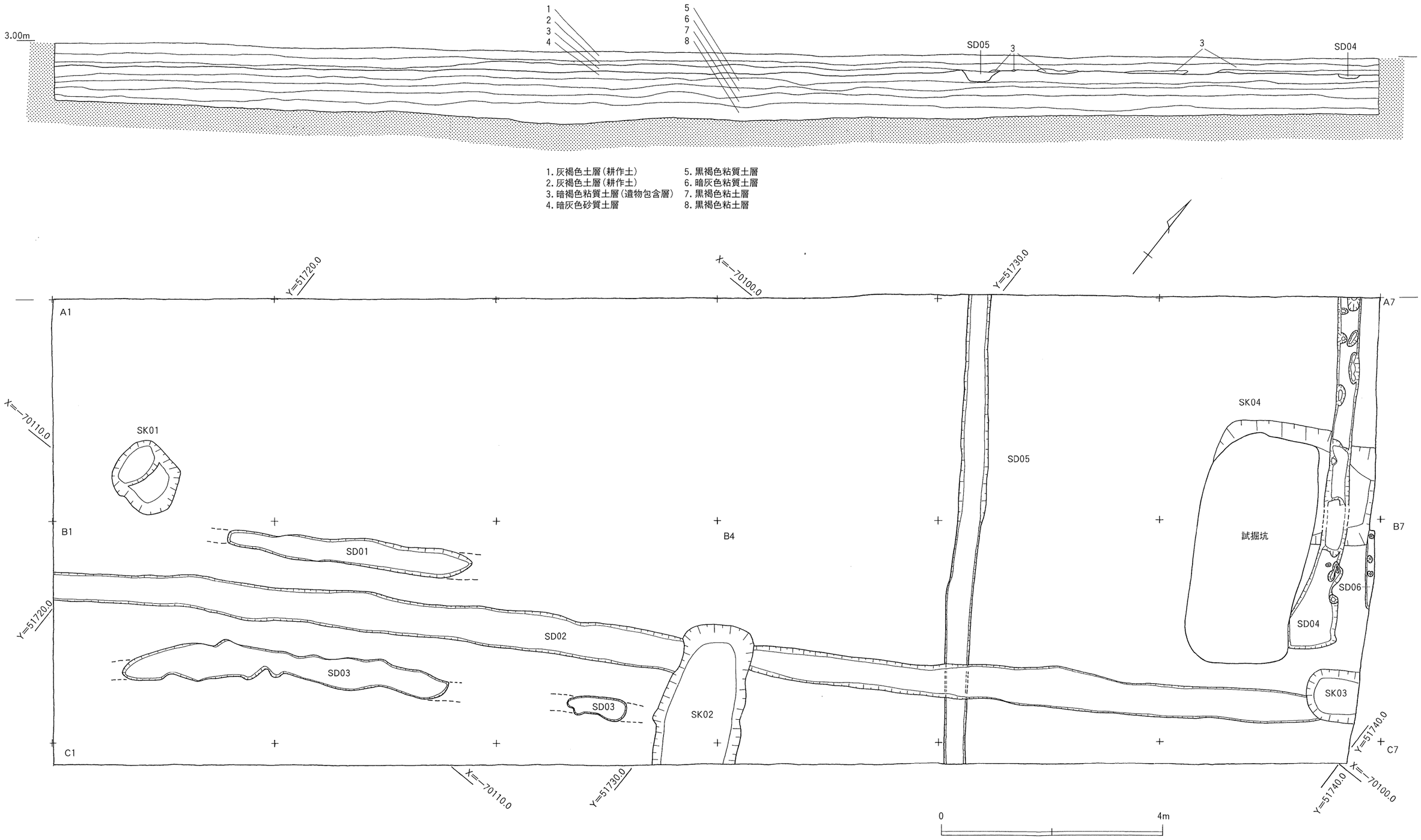
１．平成６年度調査の概要

白枝荒神遺跡の西端にあたる東西25ｍ×南北12ｍの300㎡の調査を平成６年度に実施した。水田として利用されていたため表土から40cm程度の耕作土を重機により掘削し、その後、４ｍ×４ｍのグリッドを12区画設定した。また、調査区の南壁沿いに幅50cmのサブトレンチを設け、層序を確認すると同時に排水溝として利用した。

調査地での層序は、上層から１灰褐色土層（耕作土）、２灰褐色土層、３暗褐色粘質土層、４暗灰色砂質土層、５黒褐色粘質土層、６暗灰色粘質土層、７・８黒褐色粘土層となっており、この内遺物包含層は３暗褐色粘質土層のみであった。この調査により土師器、須恵器などの小片を中心にコンテナ１箱分の遺物が出土しているが、そのほとんどはこの層から出土したものである。また、この層の下に堆積している４暗灰色砂質土層上面から遺構が検出された。遺構からの出土遺物はほとんどなく、覆土から弥生土器の小片が数点出土しているものもあるが、いずれも時期の確定には至らなかった。



第1図　平成6年度調査区位置図（S=1/400）



第2図　平成6年度調査区遺構置図（S=1/60）

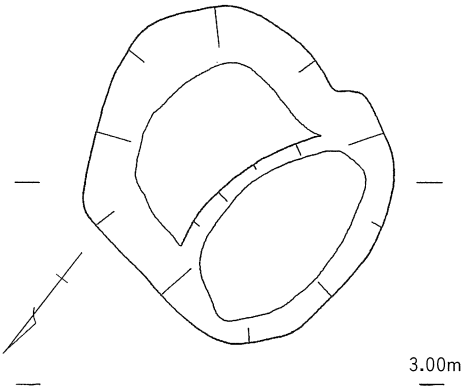
2．遺構と遺物

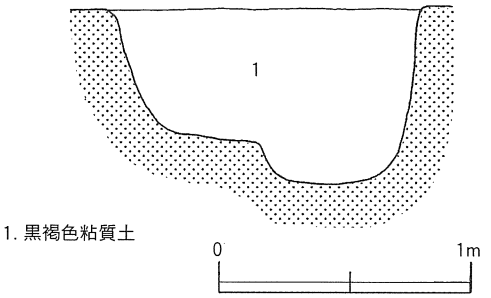
土坑

平成６年度調査では、４基の土坑を検出した。Ａ１グリッドから検出したＳＫ01以外のＳＫ02・03・04は形態、規模に共通点がみられる。

ＳＫ01（第３図）

ＳＫ01は東西方向を長軸とした土坑で長さ130cm、幅106cm、深さ70cmを測る。底から20cmの高さの段が東半分を占める二段堀りの土坑である。覆土は灰褐色粘質土をブロック状に含んだ１黒褐色粘質土のみであることから、埋め戻して廃棄されたようである。出土遺物が全くなく、遺構の時期については不明である。





第3図　SK01実測図（S=1/30）

ＳＫ02・03・04（第４図）

ＳＫ02は調査区中央の南壁際で確認した。隅丸長方形の平面プランであると考えられ、長さ220cm以上、幅140cm、深さ90cmの大型の土坑である。坑底は平坦であり、側壁は急な角度で立ち上がる。また、ＳＤ02を切っている。

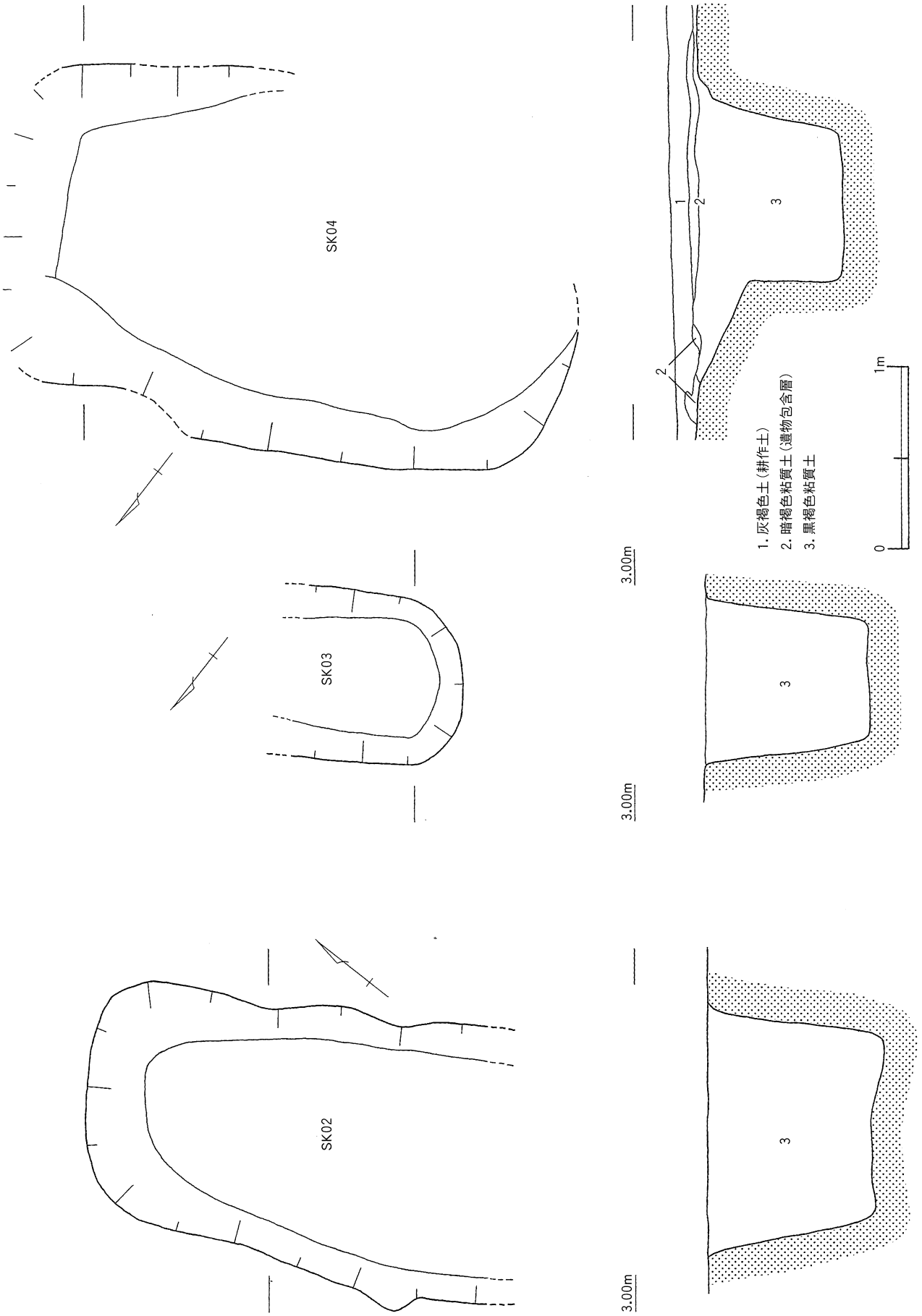
ＳＫ03はＢ６グリッドで検出した。調査区東壁以東にも遺構が続いており、遺構の一部の検出にとどまったが、平面プランは隅丸長方形であることが窺える。規模は長さ90cm以上、幅94cm、深さ90cmを測る。坑底は平坦であり側壁は急角度で立ち上がり、ＳＤ02を切っている。

ＳＫ04は調査区東壁際中央で検出した。長さ320cm程度、幅210cm、深さ80cmの大型の土坑である。平面プランの一部は調査区東壁の外に延びており、また、試掘坑により底まで大きな攪乱を受けているが、底の平面プランは全範囲確認できているため、隅丸長方形であることが窺える。坑底は平坦で、南の側壁は急な角度で立ち上がるが、北の側壁は急角度で立ち上がり中程で緩やかな傾斜に変化する。切り合い関係からＳＤ04より古い遺構であることが確認されている。

ＳＫ02・03・04のうち、ＳＫ03はやや規模が小さいが、平面プランが隅丸長方形である点、坑底の標高が1.7mから1.8mであり平坦である点、側壁が急角度で立ち上がる点、覆土が灰色砂、暗褐色粘質土、灰色粘質土ブロックを含んだ３黒褐色粘質土で一度に埋められている点などの共通点がある。いずれも出土遺物がなく時期は不明であるが、同じ使用目的を持って築かれたものではないかと考えられる。降水量の多い冬場の調査で地下水位が上昇していたと考えられるが、湧き水もあまりなく、井戸である可能性は低い。

溝状遺構

平成６年度調査では溝状遺構を６条検出している。いずれも深さが10cm未満と浅く、後世の削平



第4図　SK02・03・04実測図（S=1/30）

により底の一部のみの確認にとどまったものもある。これらの溝状遺構からは数点の弥生土器を出土するものもあるが、その数が少ない点、検出面の上に弥生土器片を包含するが、須恵器片、磁器片なども若干含む土層が堆積している点などから弥生時代の遺構ではないと考えられる。

ＳＤ01・02・03（第２図）

ＳＤ01は溝状遺構の底の一部が確認されたものである。検出面から底までの深さは10cmと浅く、幅は40cm程度である。底面は平坦で、覆土は灰褐色土であり出土遺物はなかった。

ＳＤ02は調査区の西壁からＳＫ03に切られるまでの約22m間にわたり検出した。幅50cmから70cm、深さは9cmで底は平坦である。覆土の灰褐色土中から、底からは浮いた状態で、弥生土器の甕の胴部の小片が２点出土している。

ＳＤ03は溝状遺構の底の一部が確認されたものである。幅35cm～70cm、深さは6cmで底は平坦である。覆土は灰褐色土で出土遺物はない。

ＳＤ04（第５図）

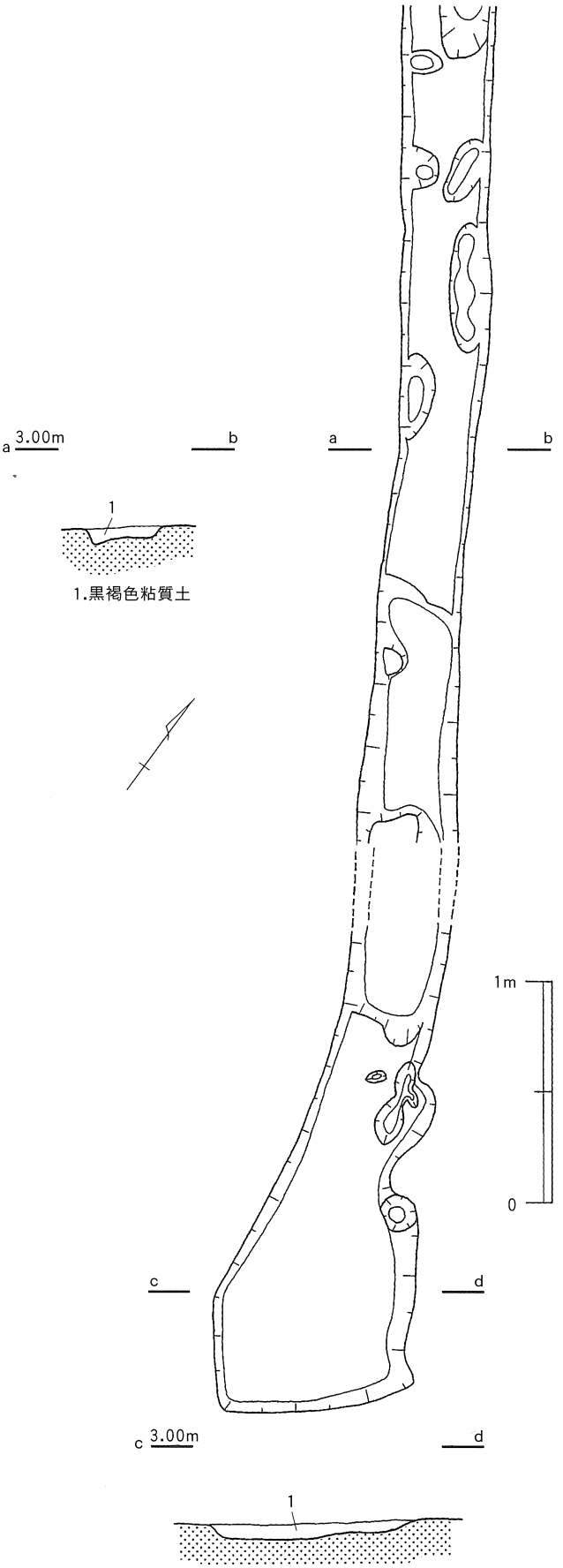
ＳＤ04は調査区東壁沿いで確認した。検出面からの深さは6cmと浅く、底は小さな凹凸が多数あった。覆土の黒褐色粘質土からは弥生時代中期の甕の小片などが数点出土した。

ＳＤ05（第２図）

ＳＤ05はＡ５、Ｂ５グリッドで検出した。検出面から平坦な底面までは10cmを測り、幅50cmのほぼまっすぐに伸びた溝状遺構である。切り合い関係からＳＤ02より古い時期の遺構であることを確認している。覆土から弥生土器と思われる甕の頸部小片１点が出土している。

ＳＤ06（第２図）

ＳＤ06は調査区の東壁間際で確認された。深さは3cm程度と浅く、底面には小さな凹凸がある。平面プランのごく一部の検出にとどまり、出土遺物もないことから詳細は不明である。



第5図　SD04実測図（S=1/30）

3．遺構外の出土遺物

平成６年度調査区は白枝荒神遺跡の西端にあたるため、出土遺物は少なくコンテナ１箱分にとどまった。そのうち遺構内出土遺物を除くほとんどの出土遺物は遺構検出面を覆う３暗褐色粘質土層からの出土であり、この層を覆う現代の耕作土からは、近代の陶器片が数点出土している。３暗褐色粘質土層からの出土遺物はほとんどが弥生土器であるが須恵器や石器も数点混じっていた。４暗灰色砂質土層以下からの出土遺物は全くなかった。

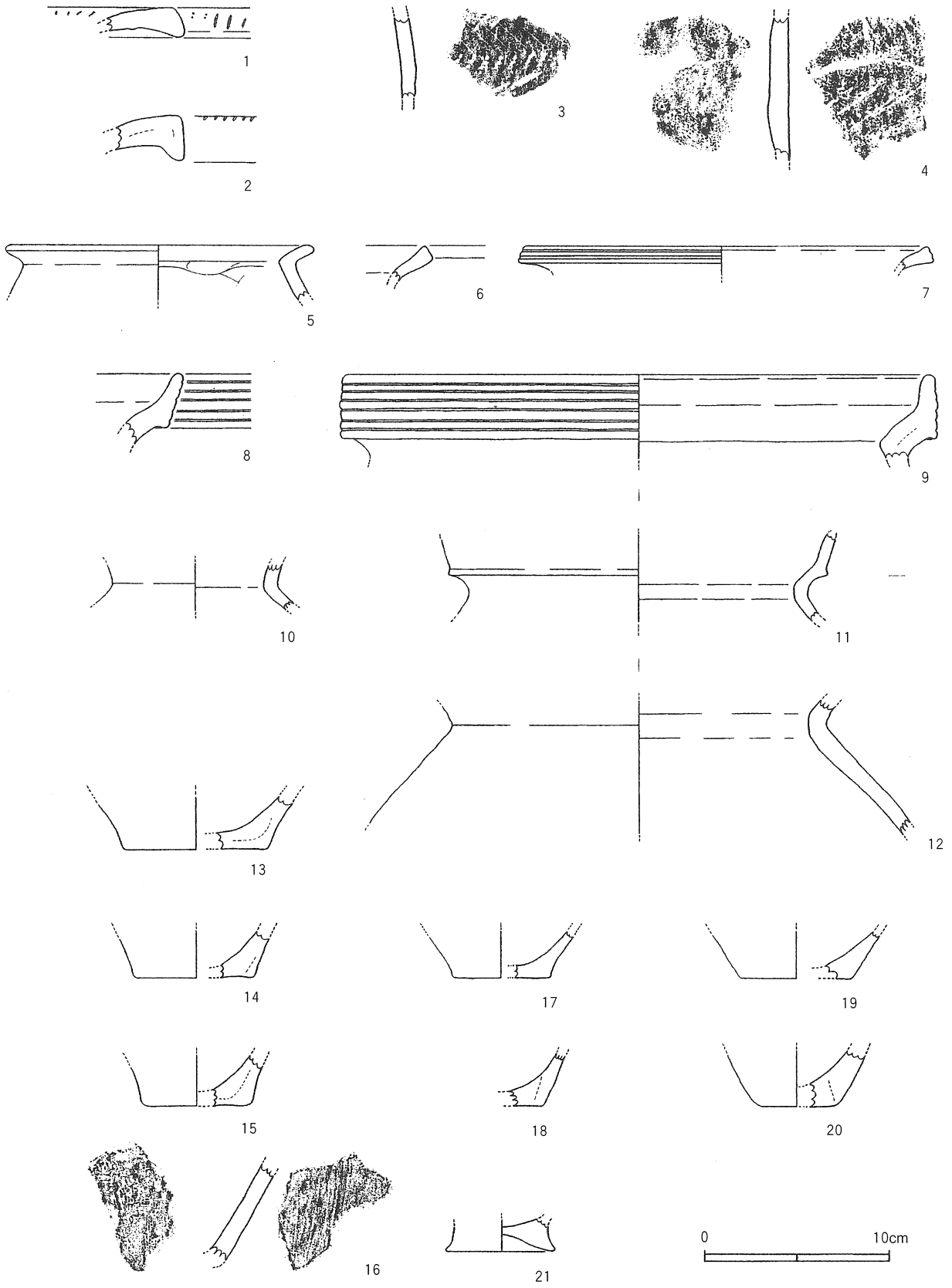
弥生土器

３暗褐色粘質土層出土の弥生土器は松本編年の第Ⅲ様式から草田４期のものが出土しているが、松本編年の第Ⅲ、第Ⅳ様式のものが中心である。いずれも小片で磨滅しているものが多いが、このうち図化可能なものについて取り上げると次のようになる。

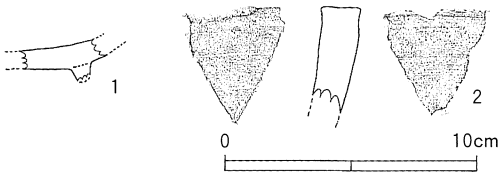
６－１・２は口縁部が大きく朝顔状に開く広口壺の口縁部である。６－１は口縁端部が下方に拡張しており、口縁端部の平坦面及び口縁部内面に櫛状工具によると思われる列点文を施す。また、口縁部外面には突帯文をめぐらせている。６－２は大型で器肉は厚い。口縁端部が下方に拡張し端部の上方に刻目を施している。６－３は大型の壺の胴上部片と思われる。櫛状工具による列点文の上下に綾杉状に連続刻目文を施している。６－４は大型壺の頸部付近の破片と思われる。外面に羽状文がヘラ描きされている。

６－５～12は甕である。６－５は口縁部が比較的緩く「く」字状に屈折する。外面は風化のためはっきりしないがナデ調整のようである。頸部以下の内面はナデ調整がなされている。平成６年度調査区出土の弥生土器のなかでもっとも古いものであり、松本Ⅲ－２に該当するものと思われる。図化不可能な小片の多くもこの時期から松本Ⅳ－２までのものが多いようである。６－６は口縁端部やや肥厚し平坦面をもつ。内外面ともナデ調整で、端部に施文はない。６－７は口縁端部はやや上方へ拡張し、２条の凹線が施されている。６－８は複合口縁部に５条の凹線文を施している。複合部の稜は下方に突出する。６－９は複合口縁部に６条の凹線が施されている。口縁端部は丸く、複合部の稜は下方に突出している。器肉は厚く、大型の甕である。頸部以下はケズリが施され、そのため頸部内面の屈折は鋭くなっている。６－10は頸部の破片で外面及び内面上部はヨコナデ、頸部以下の内面はケズリが施されている。６－11は複合口縁部が無文で、複合部の稜は斜め下方に突出している。草田４期に該当するものと思われ、平成６年度調査区出土の弥生土器のなかではもっとも新しいものであるが、この時期と確認できるものはこの１点のみである。６－12は頸部から肩部にかけての破片である。調整は頸部外面にヨコナデが施されていること以外は風化のため不明である。

６－13～21は底部である。６－13は平底の底面にナデが施されていること以外は風化のため不明である。６－14は外面と底面にナデが施されている。６－15は平底であるが風化が著しく調整不明である。６－16は底部付近の破片である。外面は荒いハケで調整された後ナデられたようである。内面も荒いハケ調整がなされている。６－17は平底であるが風化が著しく調整不明である。６－18は外面は風化しているが、内面と底面はナデ調整がなされている。６－19も風化のため調整不明である。６－20は低径の小さい平底で器肉は厚い。６－21は低脚坏の脚部と思われる。脚端部は薄く引き出されている。



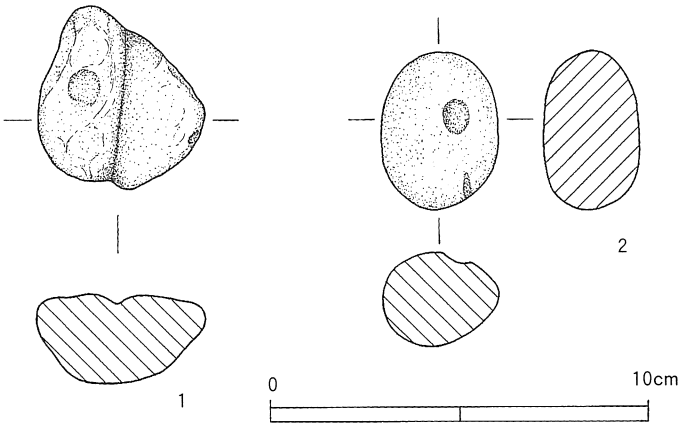
第6図　第3層出土弥生土器実測図（S=1/3）



第7図　第3層出土須恵器実測図（S=1/3）

須恵器

3暗褐色粘質土層からは須恵器片が数点出土している。そのうち図化可能なものは次の2点のみである。7－1は高台付きの坏の底部である。底面及び内面は回転ナデがなされている。底部の外縁よりやや内側に高台が付けられている。7－2は器種は不明であるが、口縁端部の破片である。端部は平坦で内外面は回転ナデで調整されている。



第8図　第2層、第3層出土石器実測図（S=1/2）

石　器

石器は2灰褐色土層（耕作土）及び3暗褐色粘質土層からそれぞれ1点ずつ出土している。8－1は軽石を加工した浮子と思われる。中央に掘り窪められた筋状の溝がある。実際に水に浮べてみた結果、浮力があることが確認されている。8－2は表面の若干の窪みが唯一人為的なものようである。2灰褐色土層（耕作土）中の出土であるため時期など詳細は不明である。

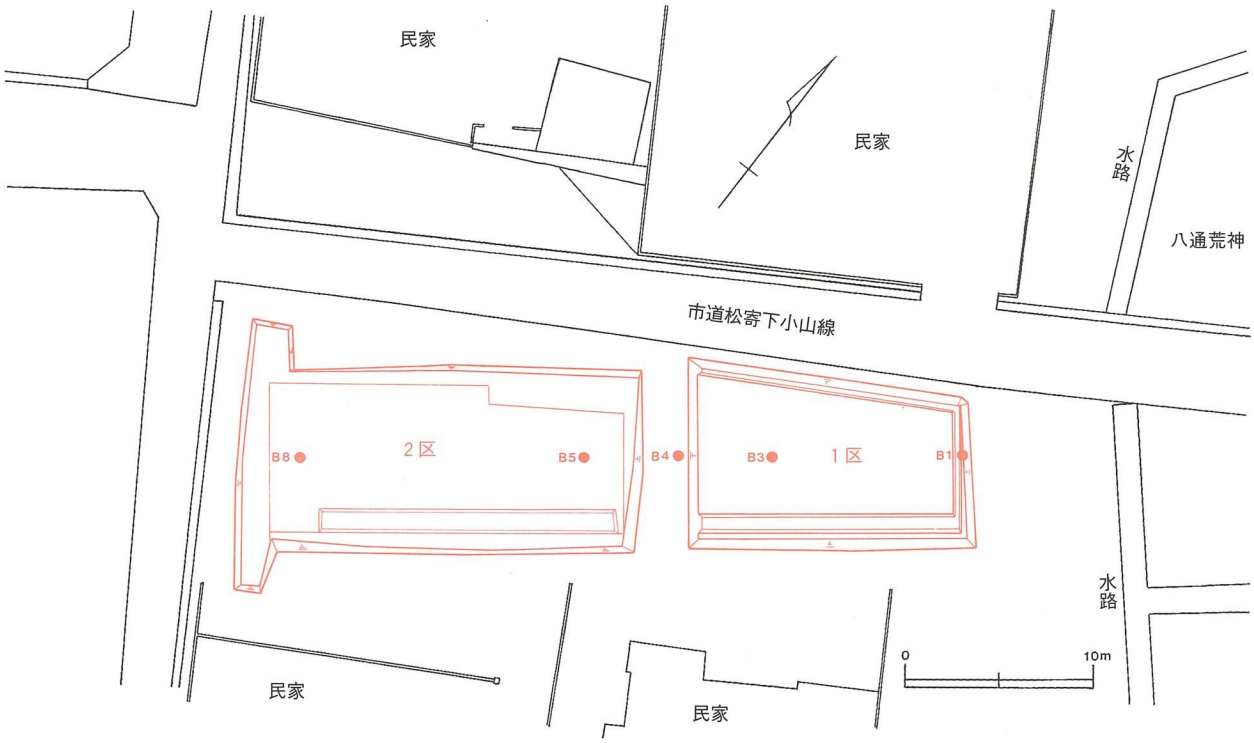
第５章　平成７年度調査

１．平成７年度調査の概要

平成５年度調査地以西の東西50ｍ×南北12ｍの600㎡の発掘調査を平成７年度に実施した。調査地は宅地として利用されていたが、調査時には道路予定地の南側に民家は移築していた。このため、市道から民家への進入路などを確保する必要があったため、その箇所を除き調査を実施した。表土から約60cmの造成土を重機により掘削した後、調査区の東西軸に中心線Ｂラインを設定し、南北軸に平行に東から西へ１ラインから順次５ｍ間隔で南北ラインを設定した。また、Ｂラインに平行に南へＡライン、北にＣラインを５ｍ間隔で想定し５ｍ×５ｍグリッドを設定したが、道路からののり面などを確保するため５ｍに満たない箇所では必要に応じ随時Ａ１′などの基準杭を設置した。当初は、平成８年度調査地も平成７年度実施予定であったため、南北ラインは15ライン設定した。便宜上１ラインから４ラインまでを１区、４ラインから９ラインまでを２区、10ラインから15ラインまでを平成８年度調査区とした。いずれも重機掘削後、調査区南壁沿いにサブトレンチを設定し層序を確認しながら徐々に手堀により掘削し遺構の検出に努めた。

１区（第９・10図）

１区の層序は上層から造成土、１暗灰褐色粘質土層（旧耕作土）、１′暗灰褐色粘質土層、２緑灰褐色粘質土層、３黒褐色粘質土層、４～７砂層、８～12粘土層となっている。粘土層の下では、標高60cmあたりで旧神戸川が三瓶山から運んできた石英安山岩の砂層の上面を確認している。また、１暗灰褐色粘質土層（旧耕作土）は昭和30年代の田の耕作土と考えられ、上面からはそれを裏付ける稲株の跡を確認している。



第9図　平成7年度調査区位置図（S=1/400）

1区の遺物は、1暗灰褐色粘質土層（旧耕作土）及びその下に堆積する1′暗灰褐色粘質土層から現代のガラス片、近世以降の陶磁器片などに混じり須恵器片、土師器片、弥生土器片などがコンテナ1箱分出土するが、そのほとんどは磨滅した弥生土器の小片である。それに対し2緑灰褐色粘質土層は弥生土器のみを包含する層である。

1区の遺構は、2緑灰褐色粘質土層上面及び3黒褐色粘質土層上面で検出した。2緑灰褐色粘質土層からはピットを13基を検出した。また、3黒褐色粘質土層上面からは土坑3基、溝状遺構1条、ピット2基を検出している。3黒褐色粘質土の下に堆積する砂層以下の層からは遺構、遺物ともに検出できなかった。

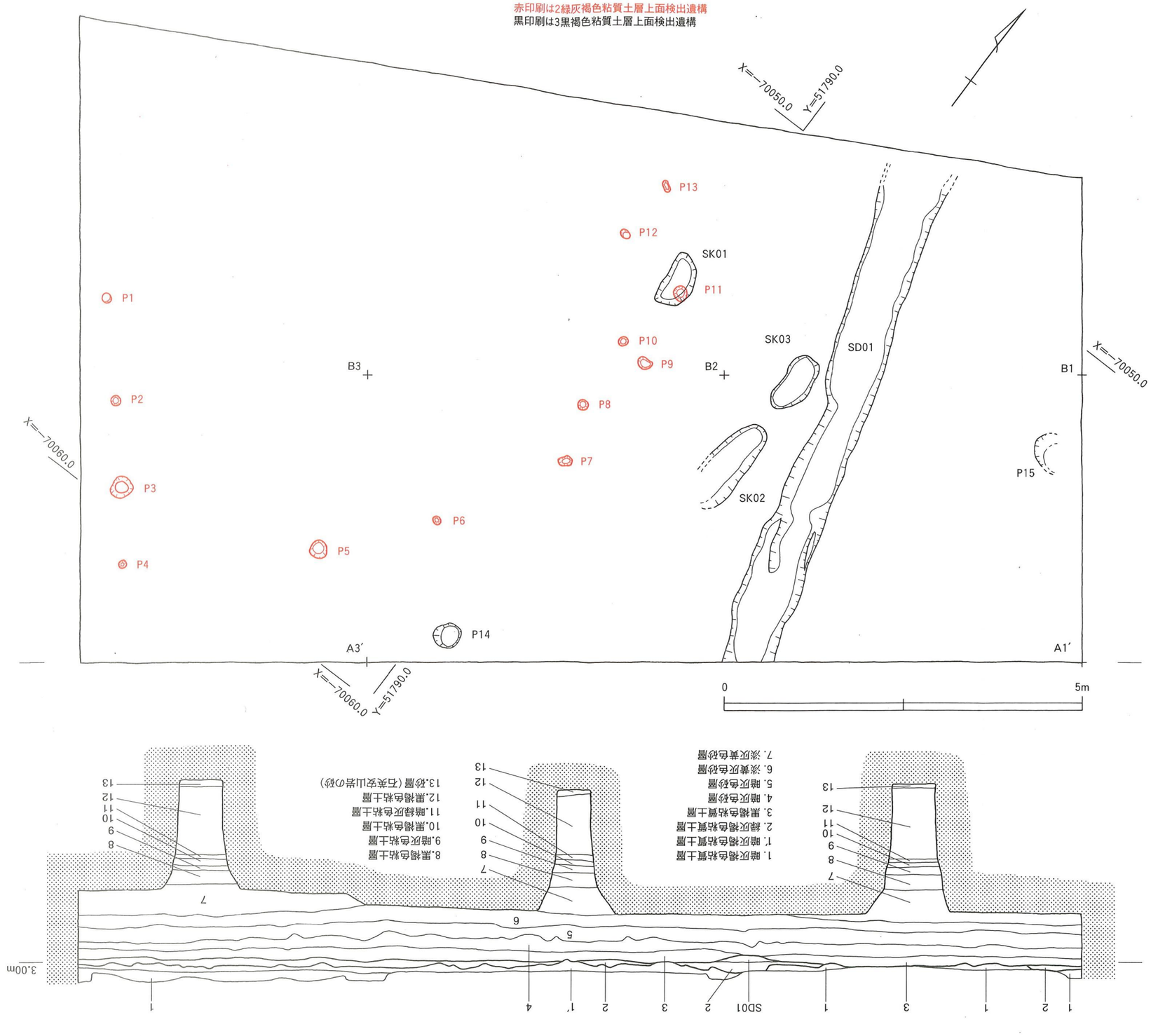
2区（第9・11図）

2区の層序は、おおむね1区のそれと同じであるが、若干層の数が増えている。この場合1区の層序と対応させるため1区で確認できなかった層に対しては、例えば「3′黒褐色粘質土層」という具合に記述している。2区は1区の西に、つまり「神門水海」寄りに位置しているため、旧神戸川の沖積作用により層が形成されるにあたり、若干層が厚みを増しながら堆積するためこのような結果になったと考えられる。

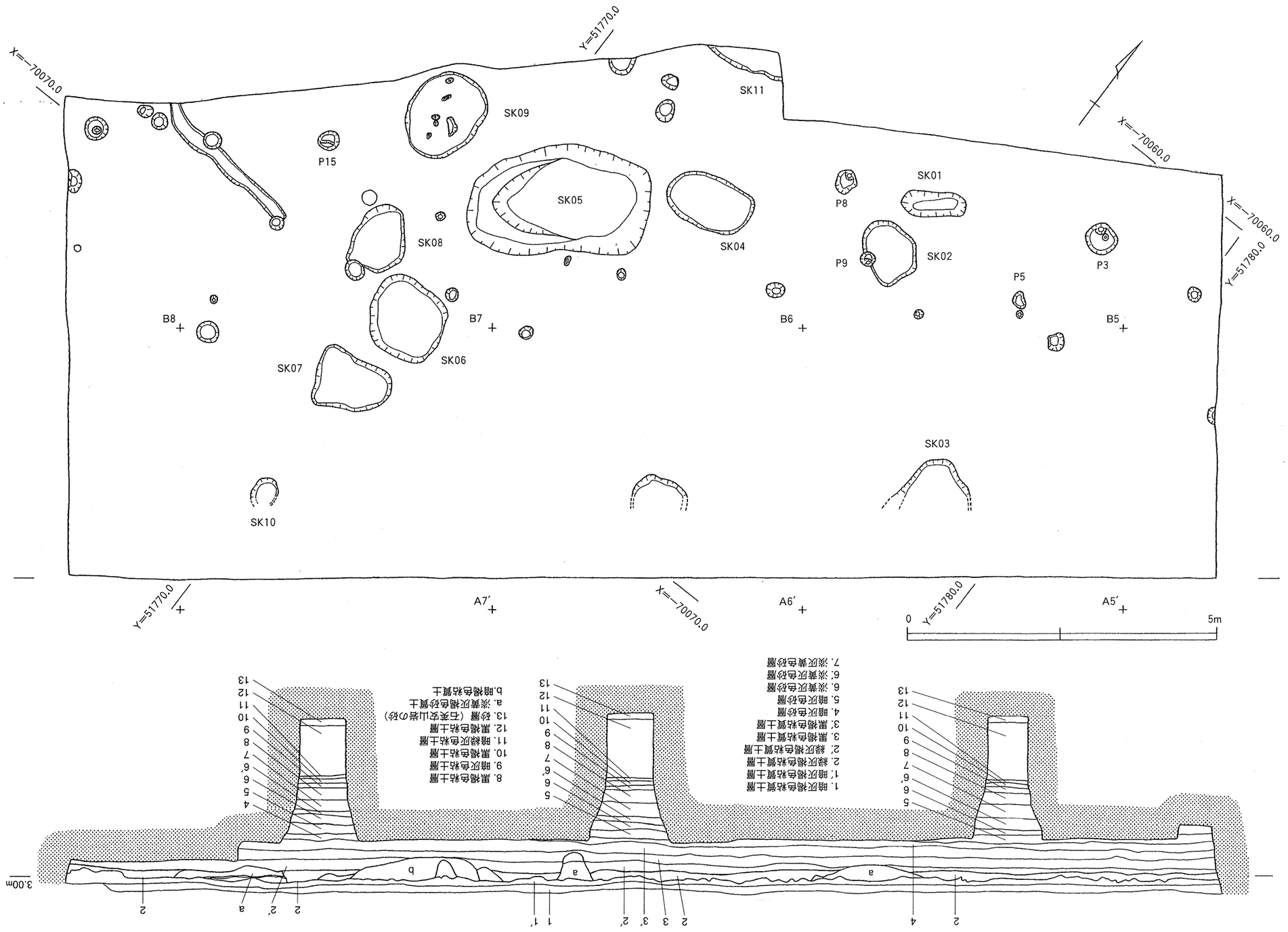
2区の遺物の出土状況も1区のそれと同じであるが、量は増える。1暗灰褐色粘質土層（旧耕作土）及び1′暗灰褐色粘質土層から弥生土器片を中心とした遺物がコンテナ2箱分出土した。また、2緑灰褐色粘質土層からもコンテナ1箱分の弥生土器片が出土した。

2区の遺構は、2′緑灰褐色粘質土層上面から、土坑11基、溝状遺構1条、ピットを31基を検出した。1区で遺構を検出した2緑灰色粘質土層からは調査時に遺構が検出できなかったが、南壁セクションを観察すると、2緑灰色粘質土層上面から遺構が掘り込まれていることが確認できた。しかし、2緑灰色粘質土層が弥生土器を包含すること、また、2′緑灰色粘質土上面から落ち込んでいたと思われる遺構があることから、2区も1区同様に弥生土器のみを包含する2緑灰色粘質土層に覆われた遺構が存在する可能性を示している。

赤印刷は2緑灰褐色粘質土層上面検出遺構
黒印刷は3黒褐色粘質土層上面検出遺構



第10図　平成7年度調査1区遺構配置図（S=1/60）



第11図　平成7年度調査2区遺構配置図（S=1/60）

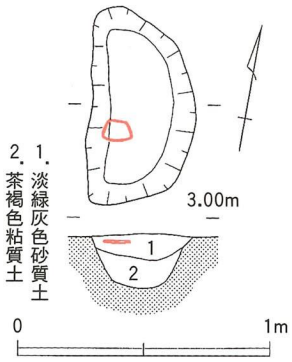
2．1区の遺構と遺物

土　坑

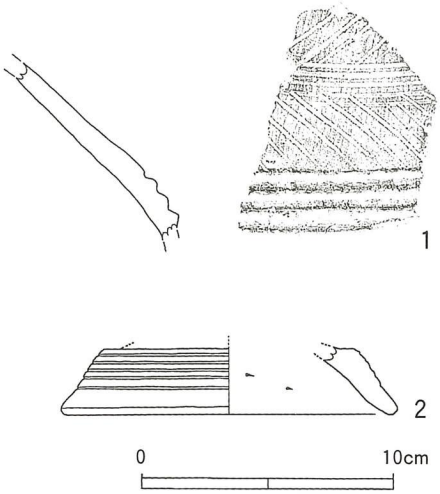
平成7年度調査1区からは3黒褐色粘質土層上面から掘り込まれたＳＫ01～03の3基の土坑を検出した。

ＳＫ01（第13・14図）

Ｂ2グリッドから検出したＳＫ01の平面プランはいびつな楕円形を呈しており、ほぼ南北を長軸としている。長さ79cm、幅42cm、深さ22cmを測る。坑底は緩やかに丸い。覆土は1淡緑灰色砂質土とやや締まりのある2茶褐色粘質土の2層に分かれ、前者から弥生土器片が数点出土している。13－1は最大径が胴部中央やや下方で、口縁が朝顔状に開く大型長頸壺の胴上部片と思われる。断面が三角形の突帯を削り出してめぐらせ、その上に5条の平行沈線をめぐらせた後にそれを中心に羽状文を施している。13－2は高坏あるいは器台の脚部である。外面は5条の凹線をめぐらせ、内面はケズリが施されている。



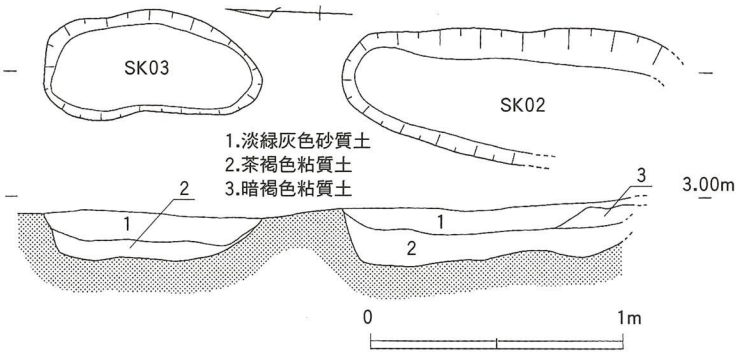
第12図　1区SK01実測図（S=1/30）



第13図　1区SK01出土弥生土器実測図（S=1/3）

ＳＫ02・03（第14図）

Ａ1グリッドからＳＫ02・03を検出した。ＳＫ01からの距離は約2mという近さである。ＳＫ02・03ともほぼ南北を長軸とし、それぞれの長軸が直線上に重なる配置となり、30cmという至近距離に築かれている。ＳＫ02は長さ140cm（推定）、幅55cm、深さ20cmを測り、楕円形の平面プランと思われる。ＳＫ03は長さ86cm、幅40cm、深さ18cmを測り、いびつな楕円形を呈している。規模は両者で異なるが、形態は両者とも南の側壁は坑底から緩やかに立ち上がるが、その他の側壁は急に立ち上がっているという共通点がある。覆土はＳＫ01と基本的に同じであるが、ＳＫ02は1淡緑灰色砂質土と2茶褐色粘質土の間に3暗褐色粘質土が入っていた。両者とも出土遺物は少なく弥生土器の小片を数点ずつ出土しているのにとどまる。



第14図　1区SK02・03実測図（S=1/30）

これらの3基の土坑は覆土、長軸の方向が同じであることなどから同時期に築かれ、埋まったものと考えられる。その用途についてはいずれも出土遺物が少なく即断はできないが、これら以西の平成7年度調査2区及び平成8年度調査区から土坑墓と思われる遺構が確認されている点から、土坑墓の

可能性が指摘できる。時期についてはＳＫ01の出土遺物である13－1が弥生時代中期のものであるのに対し、13－2が弥生時代後期前半のものであること、また、これらの土坑を弥生時代中期から後期後半の土器を包含する2緑灰褐色粘質土層が覆っていることから考えると、弥生時代後期前半に築かれ、弥生時代後期後半に埋まったものと推測できる。

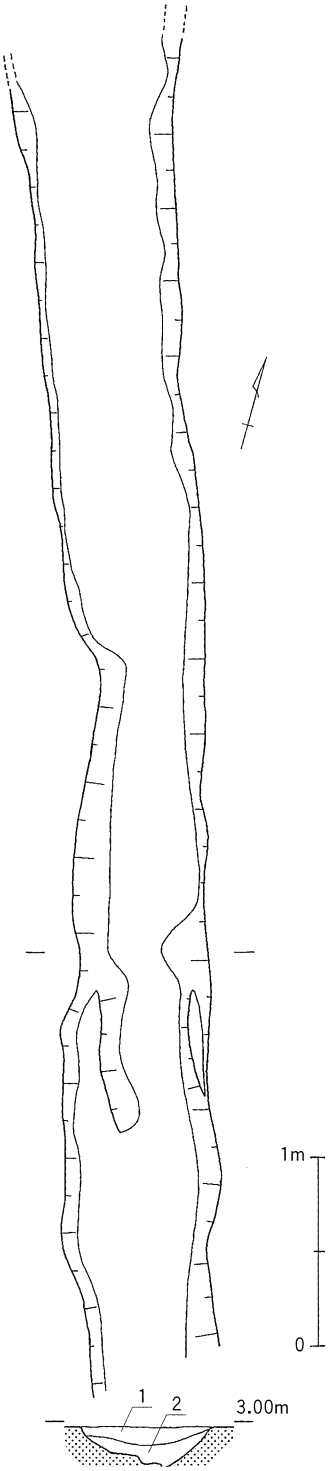
溝状遺構

平成7年度1区からは3黒褐色粘質土層上面から溝状遺構を1条検出した。

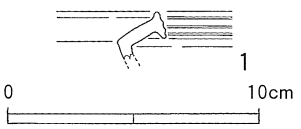
ＳＤ01（第15・16図）

Ａ1、Ｂ1グリッドからほぼ南北に伸びるＳＤ01を約7m間にわたり検出した。幅は56cm～90cmで深さは約20cmを測り、断面は緩やかなＵ字状である。覆土は先述の土坑ＳＫ01などと同じであり、1淡緑灰色砂質土の下に2茶褐色粘質土が堆積している。この覆土を観察する限り水が流れていた形跡はないが、ＳＤ01の底のレベルは北と南では6cmの差があり、仮に水が流れていたとするなら南から北への水の流れが推測される。出土遺物は16－1に挙げる松本Ⅳ－2様式と思われる、甕の口縁の破片1点のみである。口縁端部は上下に拡張し、3条の凹線文が施されている。頸部は「く」字状に屈折しており、口縁は内外面ともナデ調整されている。頸部以下の残存はわずかであるが、内面にケズリの痕跡は見あたらない。小片であるため口径の復元は不可能であるが、器肉の厚さから中型の甕と推定できる。これをもって時期を即断することは不可能であるが、覆土が先述の土坑ＳＫ01などと同じであることに着目すると、弥生時代後期前半に築かれ弥生時代後期後半に埋まったものと推測できる。

用途については不明だが、ＳＤ01以東の平成5年度調査区で弥生土器片の出土が飛躍的に多くなる点、また、以西の平成7年度調査2区及び平成8年度調査区から土坑墓と思われる遺構が十数基確認されると同時に出土する弥生土器片が増加し、平成6年度調査区では遺構、遺物ともに減少する点、水が流れていた形跡がない点などを勘案すると、ＳＤ01は以東の生活域と以西の墓域をわけ隔てる区画溝であった可能性も指摘できる。



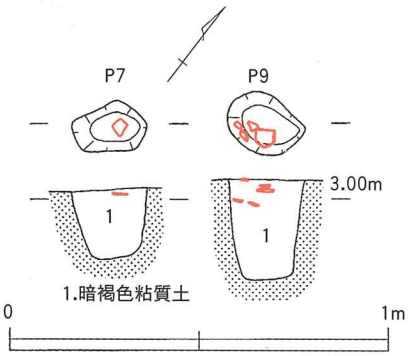
第15図　1区SD01実測図（S=1/40）



第16図　1区SD01出土弥生土器実測図（S=1/3）

ピット

平成７年度調査１区からは２緑灰褐色粘質土層上面から13基、３黒褐色粘質土層上面から２基のピットを検出した。Ｐ１からＰ４が直線上に並ぶこと以外はいずれのピットも規格性が見受けられず、また、出土遺物も少ないため詳細は不明である。



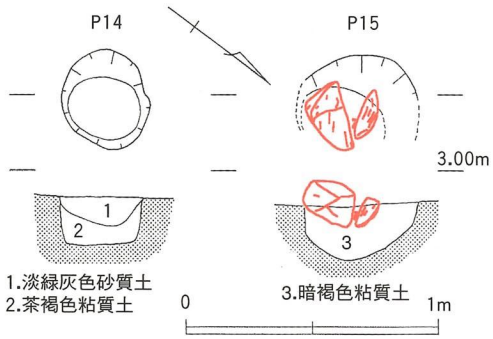
第17図　1区P7・9実測図(S=1/20)

Ｐ７・９（第17図）

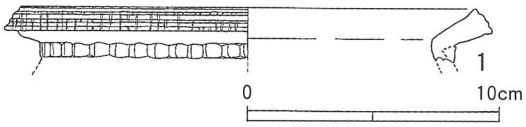
２緑灰褐色粘質土層上面検出の13基のピットはいずれも覆土が１暗褐色粘質土であるが、このうち、遺物が出土したものはＰ７・９の２基である。Ａ２グリッドで検出したＰ７の平面プランは長径20cm、短径12cmのいびつな楕円形で、深さは18cmである。出土遺物は弥生土器の甕の胴部片と思われるものが１点出土している。Ｐ９はＢ２グリッドで検出した。平面プランは長径20cm、短径15cmのいびつな楕円形で深さは26cmを測る。出土遺物は弥生土器の甕の胴部片が１点ある。外面は列点文が施され、内面は部分的にケズリが確認できる。その他数点の土器片が出土しているが、小片のため時期は不明である。

Ｐ14・15（第18・19図）

３黒褐色粘質土層上面で次の２基のピットを検出した。Ｐ14はＡ２グリッドの調査区南壁付近で検出し、平面プランは直径30cmの円形を呈しており、深さは19cmを測る。覆土はＳＫ01やＳＤ01と同じものであり、１淡緑灰色砂質土の下に２茶褐色粘質土が堆積している。出土遺物は１淡緑灰色砂質土から19－１に挙げる弥生土器片が１点出土している。口縁端部は肥厚し上下に若干拡張する。口縁端面には３条の凹線文をめぐらせた後、それに直交するように刻目文を施している。頸部には張り付けによる指頭圧痕文帯をめぐらせており、内面は「く」字状に屈曲する。松本Ⅳ様式の甕の口縁部と考えられる。



第18図　1区P14・15実測図(S=1/30)



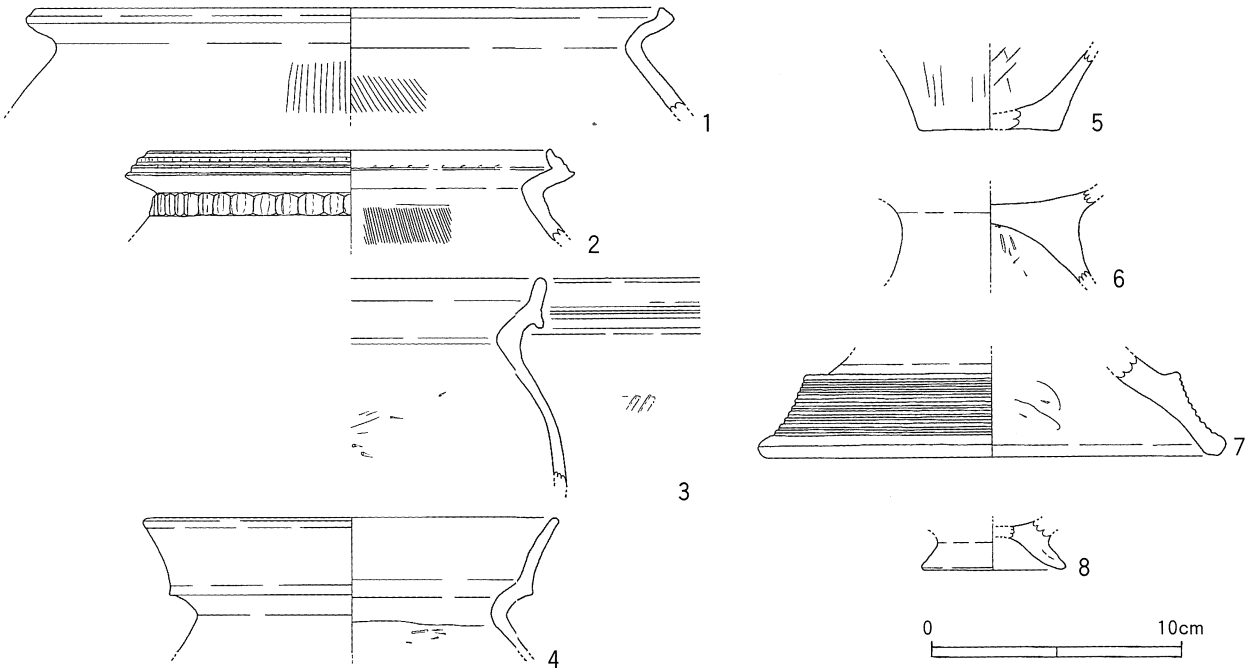
第19図　1区P14出土弥生土器実測図(S=1/3)

Ａ１グリッドの調査区東壁付近でＰ15を検出した。東壁に土層観察のために設定したサブトレンチで一部破壊してしまったが、その断面にＰ15の痕跡がなかったため規模は推定可能である。直径50cmの円形プランを呈していたと考えられ、深さ22cmを測る。底は丸く築かれており、覆土は他の３黒褐色粘質土層上面検出遺構とは異なり、１暗褐色粘質土であった。この覆土の上層に数点の磨滅した土器片が出土しているが、いずれも小片で詳細は不明である。また、20cmと25cm大の自然石も同時に出土している。Ｐ15は調査時、２緑灰褐色粘質土層上面の精査で確認できなかったが、覆土がこの層上面で検出した他のピットと類似しているため、それらと同時期に埋まったものの可能性もある。

3．１区遺構外の出土遺物

平成７年度調査１区では、１暗灰褐色粘質土層（旧耕作土）、1′暗灰褐色粘質土層及び２緑灰褐色粘質土層から出土遺物があり、３黒褐色粘質土層以下の土層から遺物はまったく出土しなかった。１・1′暗灰褐色粘質土層からは、近世以降の陶磁器片などに混じり須恵器片、土師器片、弥生土器片が出土している。また、２緑灰褐色粘質土層からは弥生土器片のみが出土している。全体でコンテナ１箱分の土器が出土しているが、そのほとんどは弥生土器片であり、陶磁器片や須恵器片はビニール袋半分にも満たない。１区の東に隣接する平成５年度調査区の出土遺物量と比較すると、格段に減少するが、西の２区ではまた増加の傾向をみせている。

20－１は甕の口縁部である。口縁端部は上方にのみ拡張し、口縁部内外面ともヨコナデで整えられている。肩部外面には縦方向、内面には斜め方向のハケメが認められる。20－２の端部は上方に拡張し逆「く」字状に屈折する。拡張部外面に３条の凹線文を施した後に刻目を直交するように刻んでいる。また、拡張部内面には刺突文が施されている。頸部外面には突帯が貼り付けられており、施文は工具によるものと思われる。頸部以下の内面はハケメ調整である。20－３は口縁部外面に２条以上の凹線をめぐらせて、肩部外面には列点文に類する施文がなされているが、風化によりはっきりしない。頸部以下の内面はケズリが施されている。20－４の複合口縁の甕である。口縁端部は引き出されたままで平坦面をもたず、複合部の稜はやや斜め下方に突出する。口縁外面の施文はなく、頸部以下の内面はケズリが認められる。草田４期に該当すると考えられる。20－５の底部外面には、縦方向のミガキが認められる。内面は斜め上方に向かうケズリが確認できる。20－６は高坏の坏底部から脚部にかけての破片である。脚部内面には上から下のケズリが確認できる。20－７は器台あるいは高坏の脚の裾部片と思われる。外面に10条の平行沈線をめぐらせており、内面にはケズリが認められる。脚端部の接地面は平坦面を有している。20－８は低脚坏と思われる。脚端部は先細りの断面を呈している。



第20図　１区遺構外出土弥生土器実測図（S=1/3）

4．２区の遺構と遺物

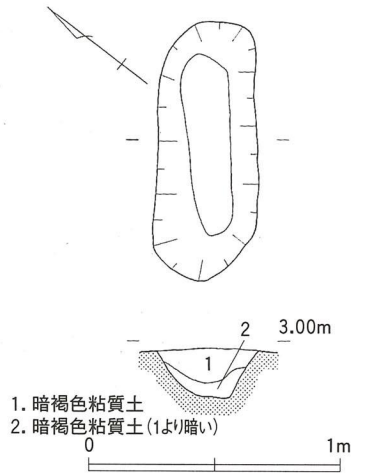
１区の調査では暗褐色粘質土を覆土にもつ遺構は２緑灰色粘質土層から、淡い色調の砂質土を覆土にもつ遺構は３黒褐色粘質土層からそれぞれ落ち込んでいることを確認しているが、２区では２層上面では遺構が検出できず、2′層上面ですべての遺構を検出した。しかし、南壁セクションを観察すると淡い色調の砂質土を覆土にもつ遺構でも２緑灰褐色粘質土層上面から落ち込むものがあることが確認された。上面で遺構を検出した2′層は１区には存在しない層であるが、上面のレベルは標高300cmから280cmであり、これは１区での３層上面のレベルに近い。また、２区での３層上面のレベルは290cmから270cmであり、西に若干下がりながら土層が堆積している様子がみてとれる。さらに１区の３層上面検出遺構及び２区の2′層上面検出遺構がいずれも標高290cm前後で検出されていることなどから次のように考えられる。３層、2′層の順に西下がりに土が堆積した後に、2′層上位から遺構が掘り込まれる。その後、標高290cm前後で削平され２層が堆積した後に、２層上位から遺構が掘り込まれる。このように、１区、２区の遺構が形成されたと思われるが詳細は後述する。

土　坑

平成７年度調査２区からは2′緑灰褐色粘質土層上面で10基余りの土坑を検出した。調査時には検出できなかったが、調査区南壁のセクションを観察すると、２緑灰褐色粘質土層上面から掘り込まれた遺構があったことが認められる。

ＳＫ01（第21図）

Ｂ５グリッドから検出したＳＫ01の平面プランは整った形を呈しており、坑底には平坦面を有す。北東を主軸とし長さ104cm、幅40cm、深さ29cmを測る。微量の炭化物を含む暗褐色粘質土の覆土からの出土遺物のなかには、弥生時代中期の甕の口縁部の破片と確認できるもの１点あるが、その他は磨滅した小片である。２層上面精査時にプランが確認できなかったため2′層上面から落ち込む遺構と考えられる。

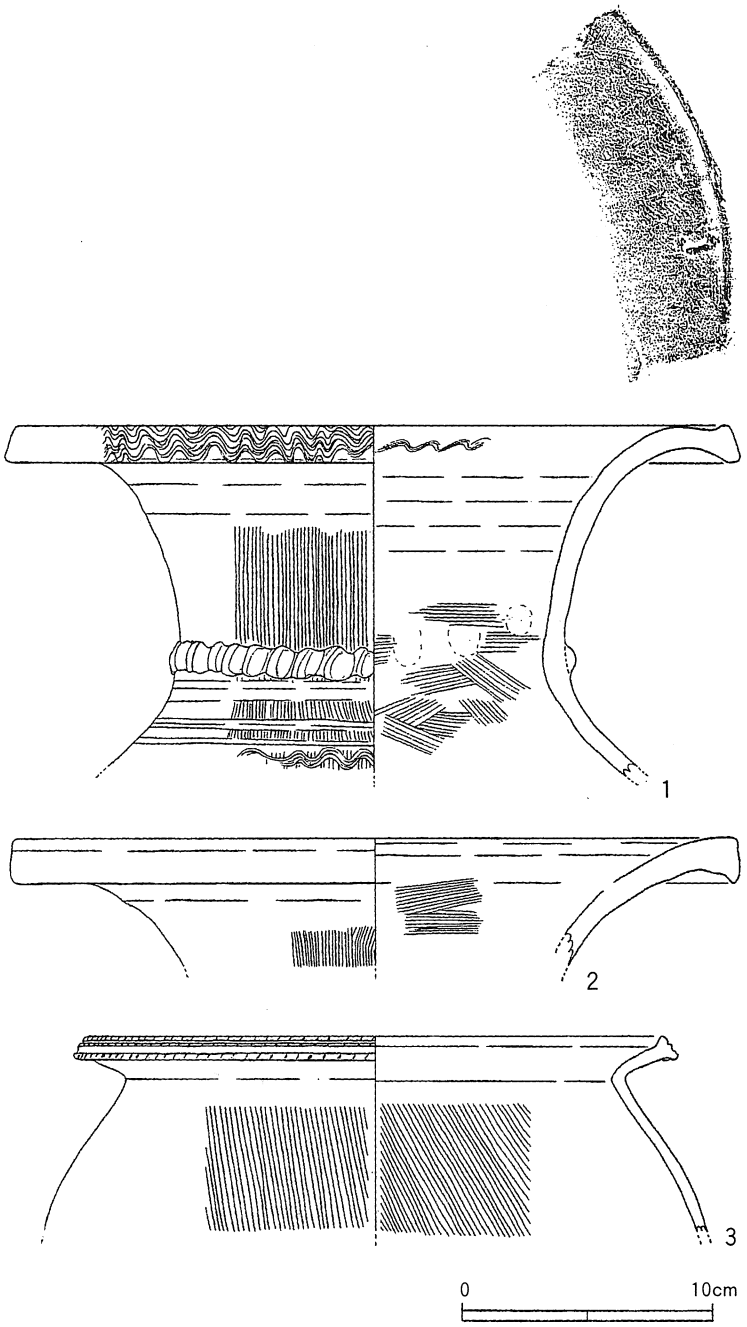


第21図　2区SK01実測図（S=1/30）

ＳＫ02（第22・23図）

Ｂ５グリッドのＳＫ01の30cm南でＳＫ02を検出した。長さ104cm、幅70～80cm、深さ７cmを測り、いびつな平面プランを呈する。坑底は平坦で側壁は緩やかに立ち上がる。覆土は１淡黄灰褐色砂質土で１区の３黒褐色粘質土層上面検出遺構の覆土に類似するが、検出面の上位から比較的大きな弥生土器片がまとまって出土しており、これらがＳＫ02に伴う遺物と判断できること、また、２層上面精査時に若干土質の違いを確認していたことなどから、この遺構は２層上面から落ち込んでいたと考えられる。検出面より下位から出土した遺物はいずれも小片であり、弥生時代中期の甕

第22図　2区SK02実測図（S=1/30）

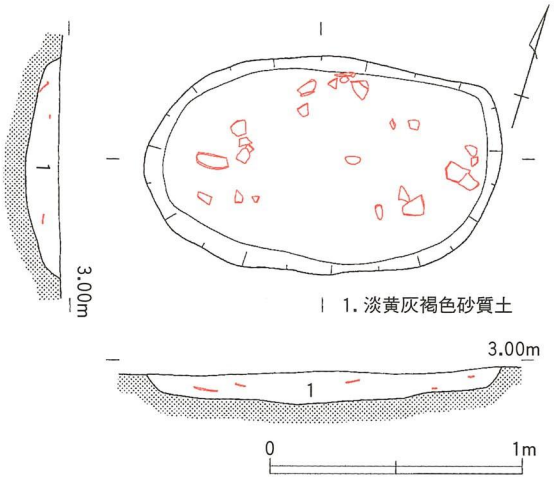


第23図　2区SK02出土弥生土器実測図（S=1/3）

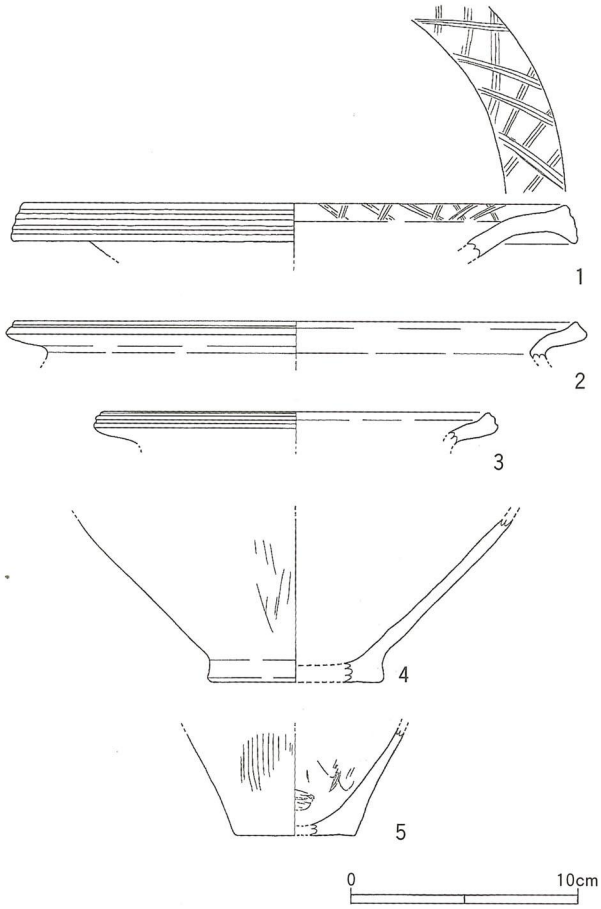
の口縁と確認できるものが１点あるのにとどまる。検出面より上位のこの遺構の出土遺物と判断できるものは次に挙げるとおりである。23－１は口径28.5cmを測る大型の広口壺である。口縁端部は肥厚し、平坦面、口縁部内面、肩部外面には波状文を施している。特に口縁部内面には２列施されている。頸部外面には器面を縦方向にハケで調整後、指頭圧痕突帯を張り付けている。頸部内面は横方向にハケで調整されており、指頭圧痕も認められる。肩部外面は縦方向にハケ調整で、内面は斜め方向のハケ調整が認められる。23－２も口径29cmを測る大型の広口壺である。口縁端部は下方へ拡張するが上方への拡張は認められない。端部の平坦面はヨコナデで調整されている。口縁外面はヨコナデで調整されており、肩部以下は縦方向のハケメが認められる。口縁内面は横方向にハケで調整後ナデられている。23－３は口径が23cmの甕である。口縁端部は上下に拡張し、端面に２条の凹線文をめぐらせた後に連続して刻目を施している。頸部は「く」字状に屈曲しているため稜をもつ。肩部内外面は斜め方向に荒いハケメで調整されている。全体の大きさと比較し、器肉は薄手である。

ＳＫ04（第24・25図）

Ｂ６グリッドからＳＫ04を検出した。ほぼ東西方向を主軸とした楕円形の平面プランであり、長さ142cm、幅88cm、深さ13cmを測る。坑底は緩やかに丸く側壁も緩やかに立ち上がる。覆土は１淡黄灰褐色土で２層上面から落ち込んでいたと考えられる遺構である。遺物は他の遺構に比べ若干多く、中期の弥生土器片と思われる破片がビニール袋１袋分出土している。このうち図化可能なものは次に挙げるとおりである。25－１は口径24cmを測る。口縁部が朝顔状に大きく開く大型の広口壺である。口縁端部は上下に拡張し、平坦面に３条の凹線をめぐらす。口縁部内面には複線斜格子文が施文されている。25－２は口径24.8cmを測る甕である。口縁部は肥厚し、端面に１条の凹線文を施している。



第24図　2区SK04実測図（S=1/30）

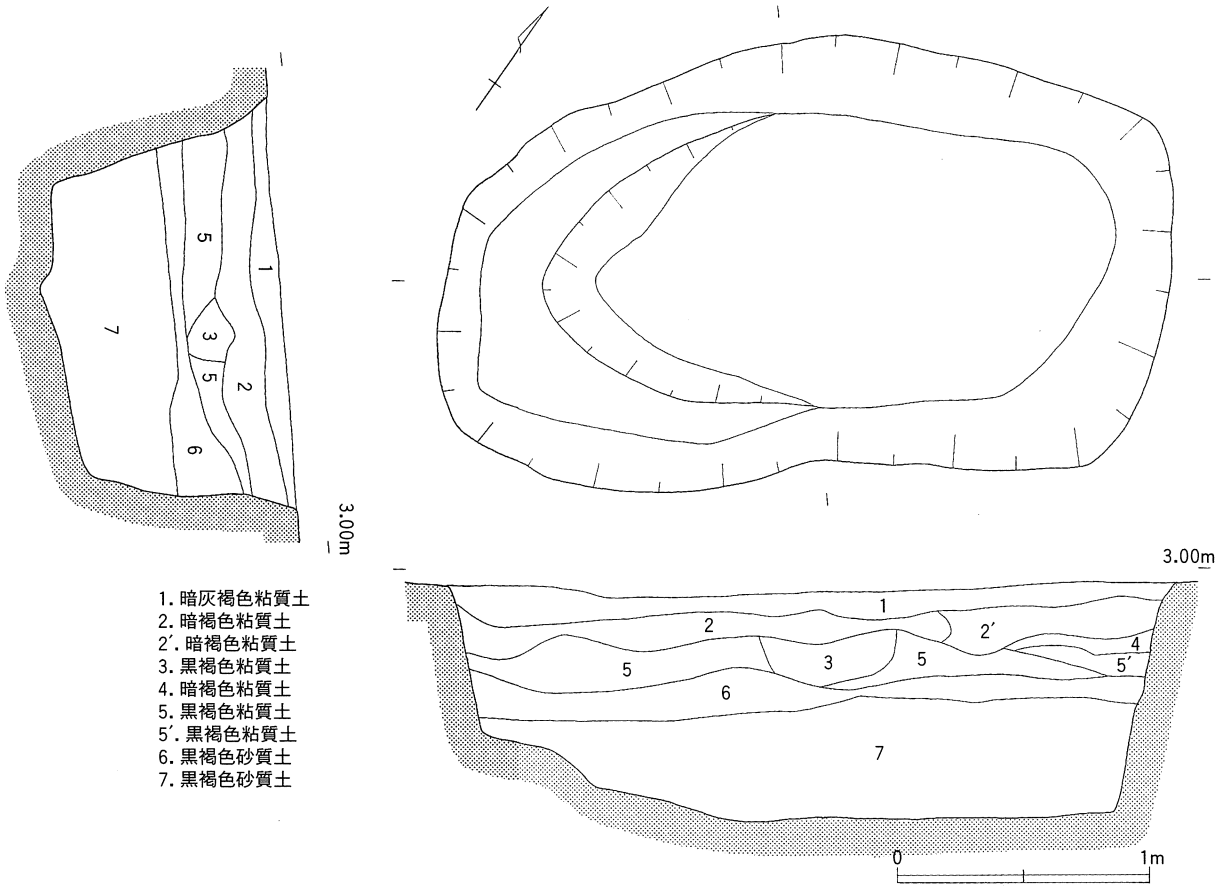


第25図　2区SK04出土弥生土器実測図（S=1/3）

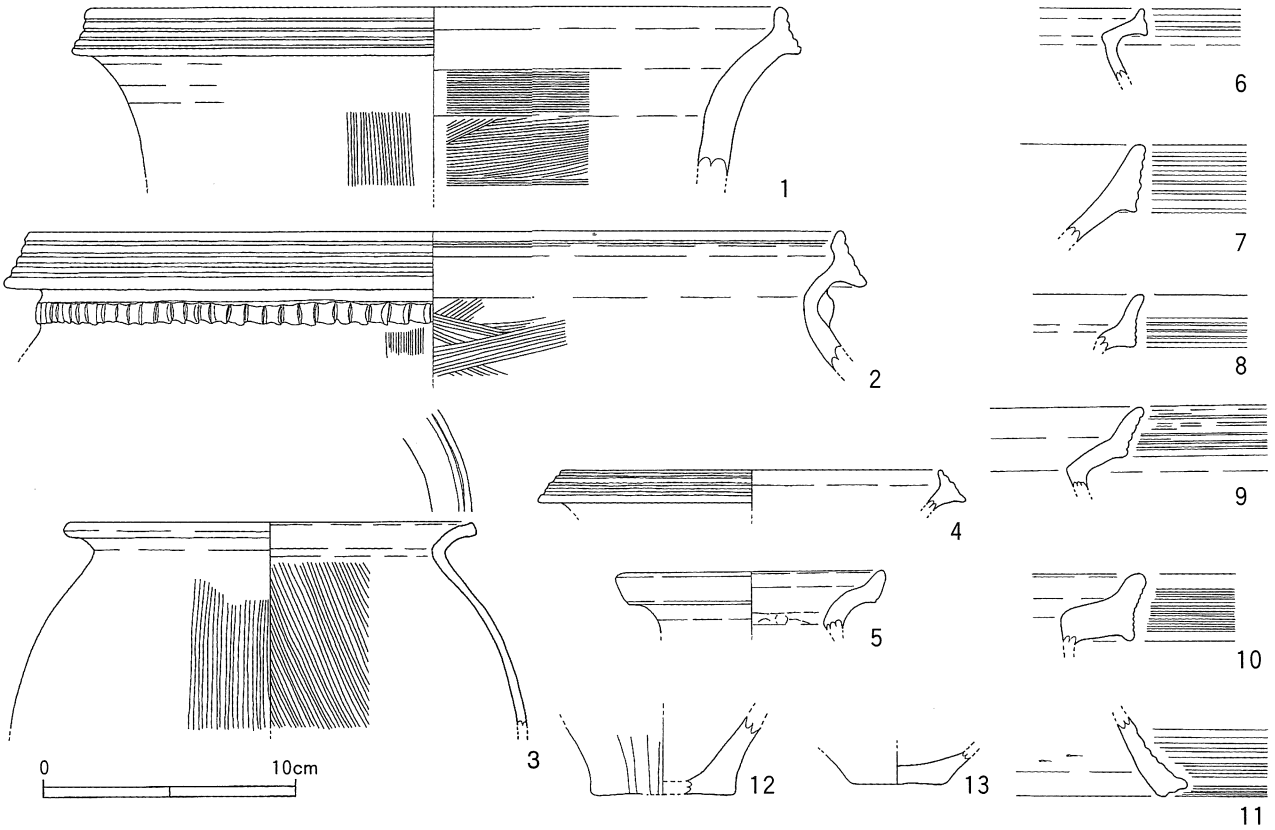
内外面ともヨコナデで調整されており、頸部内面は「く」字状に屈曲するため稜をもつ。25－3は口径17cmを測る甕である。口縁部は肥厚しやや内傾気味に上部にのみ拡張し端面に2条の凹線文をめぐらせている。25－4は底径7.8cmを測る底部である。器壁がやや内弯して立ち上がった後に、胴部にかけて大きく開く。外面は底面付近まで縦方向にミガキが認められる。25－5は底径5.2cmの底部である。器壁は底面から胴部にかけて単調に立ち上がる。外面はミガキ、内面はケズリで調整されている。

ＳＫ05（第26・27・28図）

Ｂ6、Ｂ7グリッドからＳＫ05を検出した。長さ288cm、幅170cm、深さ90cmを測る大型の遺構であり、ほぼ北東を主軸とする。平面プランの規模のみならず、削平を受け底の一部がかろうじて浅く残っている他の遺構に比べ、格段に深く掘り込まれているのがこの遺構の特徴である。2層上面から掘り込まれ、南西の半分は2段堀になり坑底から約30cmの高さに段を有し、その段からは坑底に向かい緩やかな傾斜で落ち込み、北東半分のほぼ平坦な坑底に達する。その他の側壁はすべて坑底から急な角度で立ち上がる。形態、規模は平成6年度調査区で検出したＳＫ02、ＳＫ03と類似するが、弥生土器片を中心とした出土遺物が多いこと、また、一度に埋められた形跡がないなどから性格を異にしている部分が多い。覆土は9層に分層でき、各層から遺物が出土しているが、弥生土器片がその大半を占めている。いずれも小片で詳細は不明であるが土師器片も若干混じっているようである。27－1は大型の壺と思われる。口縁端部は上下に拡張し、端面に4条の凹線文をめぐらせている。頸部外面は縦方向にハケ調整が認められる。口縁内面はヨコナデで整えられ、残存する頸部上半は横方向にハケメが認められる。下半も同じ原体を使用しているようであるが、かなり荒いハケメでケズリ調整の意図が感じられる。27－2の口縁端部は上下に内傾して拡張する。頸部外面に指頭圧痕状の突帯を張り付けており、それ以下に縦方向のハケメが認められる。内面は斜め方向にハケメが確認でき

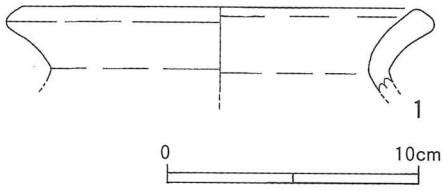


第26図　2区SK05実測図（S=1/30）



第27図　2区SK05出土弥生土器実測図（S=1/3）

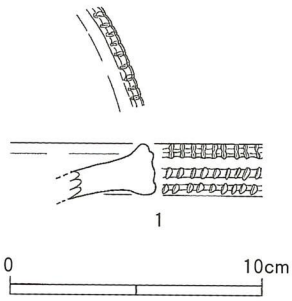
る。27－3は単純口縁の甕である。口縁部は強く外反し端部は曲面を有する。端部付近の内面には1条の浅い凹線が施されている。頸部以下は内外面ともハケメが認められるが、頸部付近ではナデ消されている。器肉は全体的に薄い。27－4は甕の口縁部と思われる。口縁端部は上方に拡張され、平坦面及び内面はナデで整えられている。頸部以下の内面の残存は少ないが、ケズリが施されているようである。27－11は高坏の脚の裾部である。外面に6条、脚端部に2条の平行沈線を施している。内面は横方向のケズリが認められるが、端部付近ではナデられている。28－1は土師器の甕の口縁部である。ＳＫ05の遺物で唯一土師器と確認できるものである。



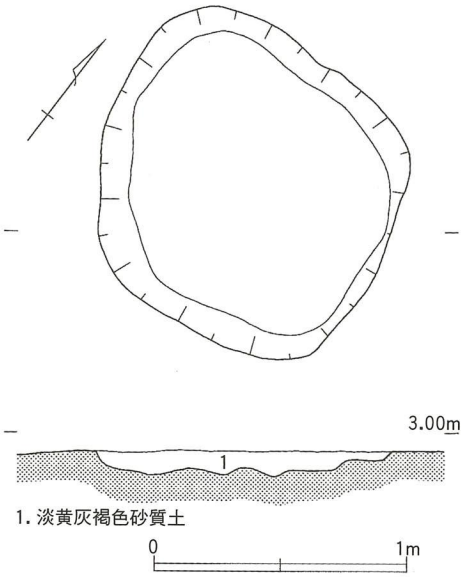
第28図　2区SK05出土土師器実測図（S=1/3）

ＳＫ06（第29・30図）

Ａ7グリッドからＢ7グリッドにかけてＳＫ06を検出した。長径145cm、短径123cmのいびつな楕円形プランを呈している。削平を受けたものと考えられ、検出面から坑底までの深さは10cm程度である。側壁は小さな凹凸のある坑底から緩やかに立ち上がる。2層上面精査時に確認できなかったため、2′層上面から落ち込む遺構と考えられる。覆土は1淡黄灰褐色砂質土のみである。出土遺物は少なく、弥生土器片の数点の出土にとどまる。30－1は広口壺の口縁部の破片である。端部は肥厚し、平坦面に3条の凹線文をめぐらせた後に、中央の凹線を境に上下2段に分けて連続刻目文を施している。内外面ともヨコナデで整えられ、内面には調整後波状文が施文されている。

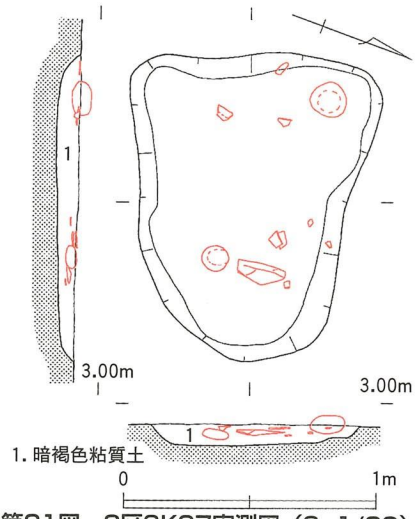


第30図　2区SK06出土弥生土器実測図（S=1/3）

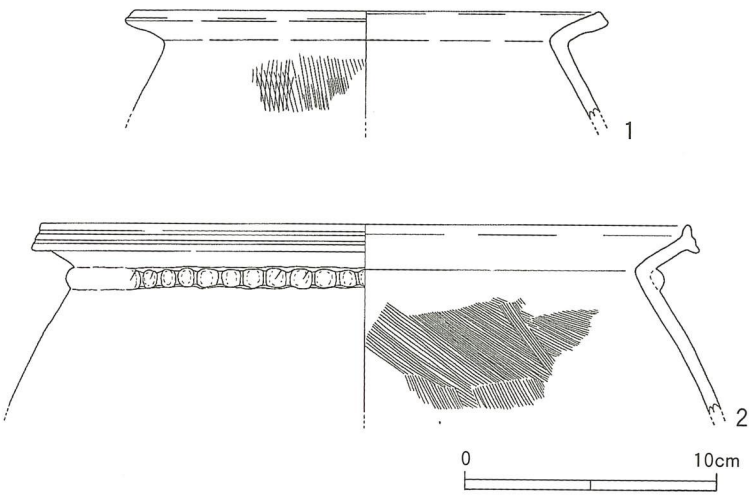


第29図　2区SK06実測図（S=1/30）

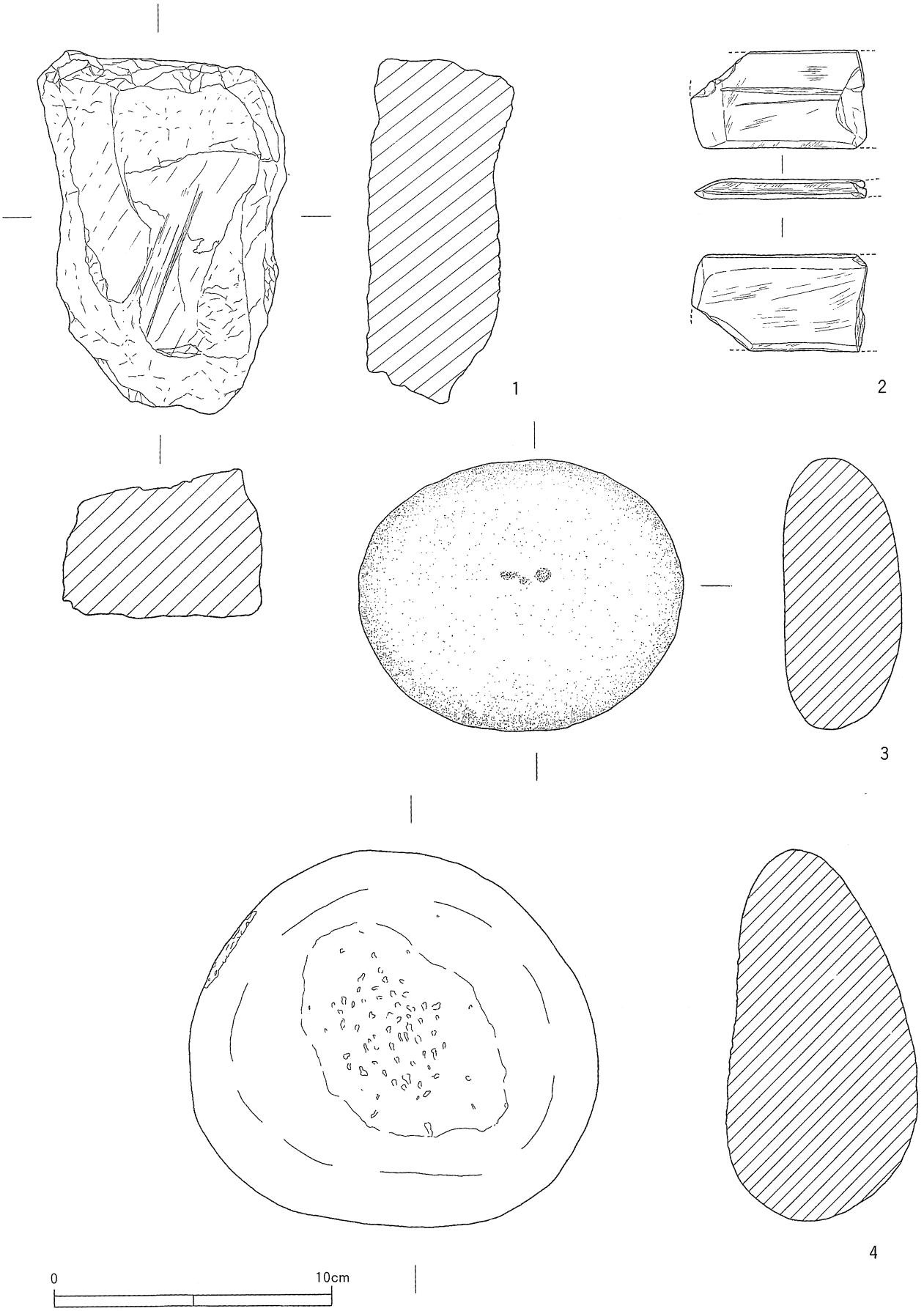
ＳＫ07（第31・32・33図）



第31図　2区SK07実測図（S=1/30）



第32図　2区SK07出土弥生土器実測図（S=1/3）

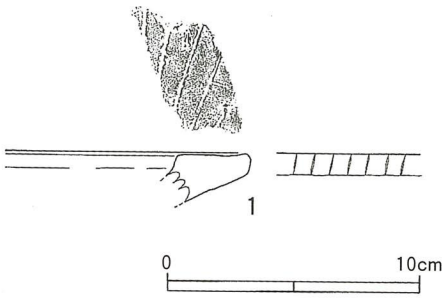


第33図　2区SK07出土石器実測図（S=1/2）

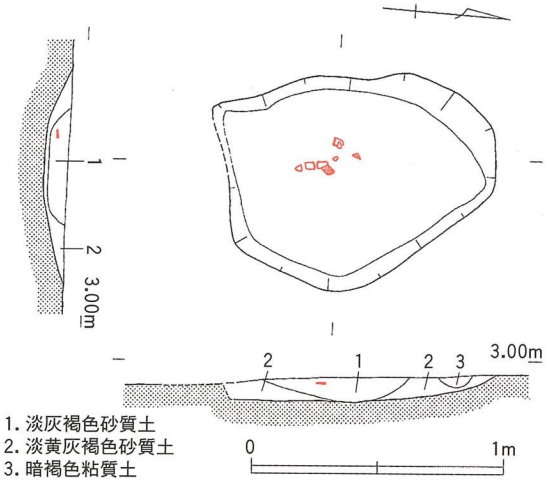
Ａ７グリッドからＳＫ07を検出した。北東を主軸とし二等辺三角形の角を丸くしたような平面プランを呈する。長さ122cm、幅80cmから100cm、深さ９cmを測る。覆土の１暗褐色粘質土から弥生土器片や石器が出土している。32－１の口縁端部は上方に若干拡張する。頸部以下の外面にはハケメが認められる。32－２は口縁端部が上下に拡張し、頸部内面は「く」字状に屈曲し稜をもつ。頸部外面に張り付けられた突帯の凹部に右手の親指の爪の跡が確認できることから、凸部は指でつまみ上げて形成されたようである。33－１は凝灰岩の大型砥石の破片である。磨面には３条の磨き筋が残る。33－２は磨製で小型の扁平片刃石斧である。33－３は敲石もしくは磨石と思われる。扁平な円礫の片面及び縁に使い込んで磨耗した痕跡が残る。33－４は台石と思われる。片面の中心付近に集中して使用した跡が残る。

ＳＫ08（第34・35図）

Ｂ７グリッドからＳＫ08を検出した。一部は後世のピットにより切られている。ほぼ南北を主軸とし、長さ107cm、幅85cm、深さ10cmを測る。覆土は炭化物を含む１淡灰褐色砂質土、２淡黄灰褐色砂質土、３暗褐色粘質土であり、１淡灰褐色砂質土から弥生土器片が数点出土した。35－１は鍔状の口縁を持つ高坏と思われる。水平に引き出された鍔部の上面には斜め方向に沈線が連続して施されている。



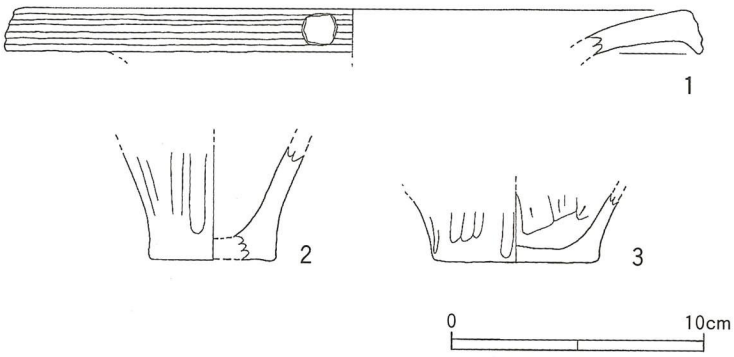
第35図　2区SK08出土弥生土器実測図（S=1/3）



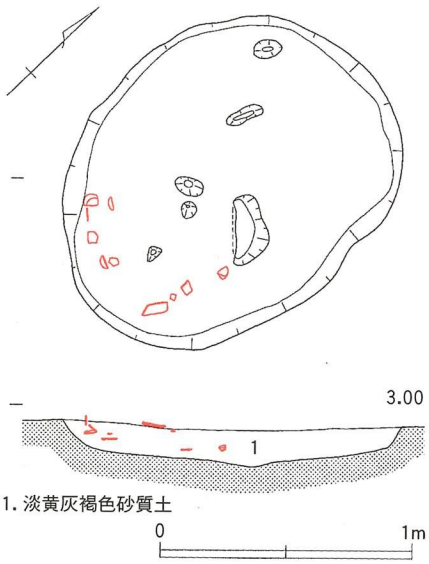
第34図　2区SK08実測図（S=1/30）

ＳＫ09（第36・37図）

Ｂ７グリッドからＳＫ09を検出した。ほぼ南北を主軸とし長さ144cm、幅115cm、深さ12cmを測る。側壁の傾斜は緩やかで、坑底は中央に向かい若干レベルが下がっていく。覆土は１淡黄褐色砂質土のみで、弥生土器片数点が出土した。37－１は口径26.5cmを測る広口壺の口縁部である。口縁端部は下方にのみ拡張し、端面には３条の凹線文が施され、円形浮文が貼り付けられている。器表は内外面ともナデで整えられている。37－２・３



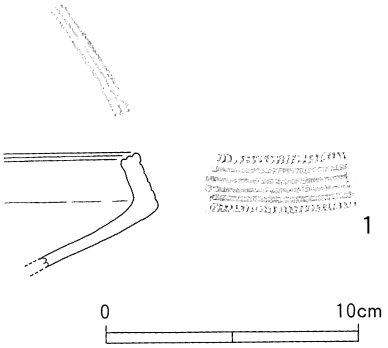
第37図　2区SK09出土弥生土器実測図（S=1/3）



第36図　2区SK09実測図（S=1/30）

は底部の破片である。両者とも外面はミガキで調整され、37－3は内面にケズリが認められる。

SK10（第11・38図）

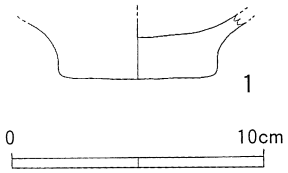


第38図　2区SK10出土弥生土器実測図（S=1/3）

A7グリッドからSK10を検出した。精査時に確認できず、調査区の南壁沿いに設けたサブトレンチで大部分壊してしまった。南壁に2層上面から落ち込み調査区外に続く遺構が確認できるが、この遺構とは違う遺構と思われる。遺物は弥生土器片が数点出土している。38－1は高坏の口縁部である。やや内傾気味に立ち上がり、端部に2条、側面に5条の凹線文をめぐらせた後に上下端に刻目を施している。内面はナデ、外面はミガキで調整されている。

ピット

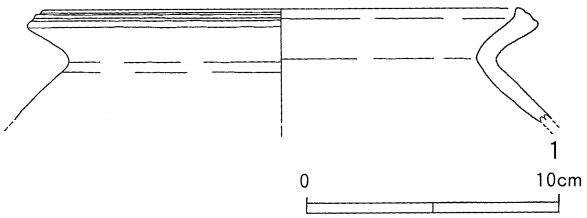
P3（第11・39図）



第39図　2区P3出土弥生土器実測図（S=1/3）

B5グリッドの2′層上面でP3を検出した。直径50cmの円形の平面プランである。深さは5cmを測り、覆土は暗褐色粘質土である。坑底でさらに小さな直径15cmと10cmのピットを有する。遺物は弥生土器片の小片が2点出土した。39－1の器壁は底面からほぼ垂直に立ち上がった後に胴部にかけて大きく開いている。器壁に比べ底部の器肉は厚い。

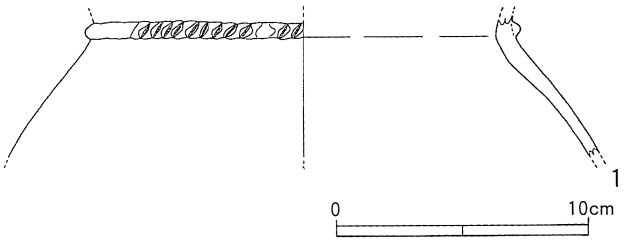
P5（第11・40図）



第40図　2区P5出土弥生土器実測図（S=1/3）

2′層上面から落ち込むP5をB5グリッドから検出した。半月状の平面プランで長径が27cmのピットである。深さは4cmと浅く、暗褐色土を覆土にもつ。磨滅した土器のごく小片とともに40－1が出土した。口縁端部は肥厚し上方へ若干拡張している。端面に2状の凹線文を施している。

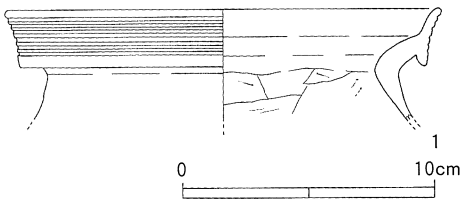
P8（第11・41図）



第41図　2区P8出土弥生土器実測図（S=1/3）

B5グリッドのP8は長径40cm、深さ8cmの暗褐色粘質土を覆土に持つピットであり、2′層上面から掘り込まれている。弥生土器の小片が10数点出土した。41－1は甕の頸部である。貼り付けた突帯には、ヘラ状工具あるいは貝殻により連続して刻目が施されている。

P15（第11・42図）



第42図　2区P15出土弥生土器実測図（S=1/3）

B7グリッドでP15を検出した。直径33cm、深さ20cmのピットである。暗褐色粘質土を覆土にもち土器片が数点出土した。42－1の口縁部外面には6条の沈線がめぐらされている。複合部の稜は下方に突出している。

5．２区遺構外の出土遺物

平成７年度調査２区の遺構外の遺物の出土状況は１区と同様であるが、出土量は増加しコンテナ４箱分に上る。堆積層ごとに遺物をみると、１暗灰褐色粘質土層（旧耕作土）及び1′暗灰褐色粘質土層は弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器などを包含し、２緑灰褐色粘質土層は松本Ⅲ－２を上限とする弥生土器のみを包含している。この２層の出土遺物の大半が中期のものであること、また、弥生中期の遺物を出土する遺構が多いことなどから、２区の2′緑灰褐色粘質土層上面で検出した遺構は、弥生時代中期から後期にかけての遺構である可能性が高い。おそらく、２層で覆われた遺構は弥生時代中期のもので、２層上面から落ち込み弥生土器のみを出土する遺構は弥生時代後期の遺構と考えられる。このことは、１区の３黒色粘質土層上面検出遺構でも同様であると思われる。しかし、２区のＳＫ05のように大半弥生土器を出土しながら、土師器片が１点出土するという事例があるため、２層上面から落ち込む遺構は、弥生土器のみを出土していても、他の時期の遺物の絶対数が少ないため、偶然に弥生土器しか入り込まなかった可能性が指摘でき、全体的に時代が下がることも考えられる。

弥生土器（第43・44・45図）

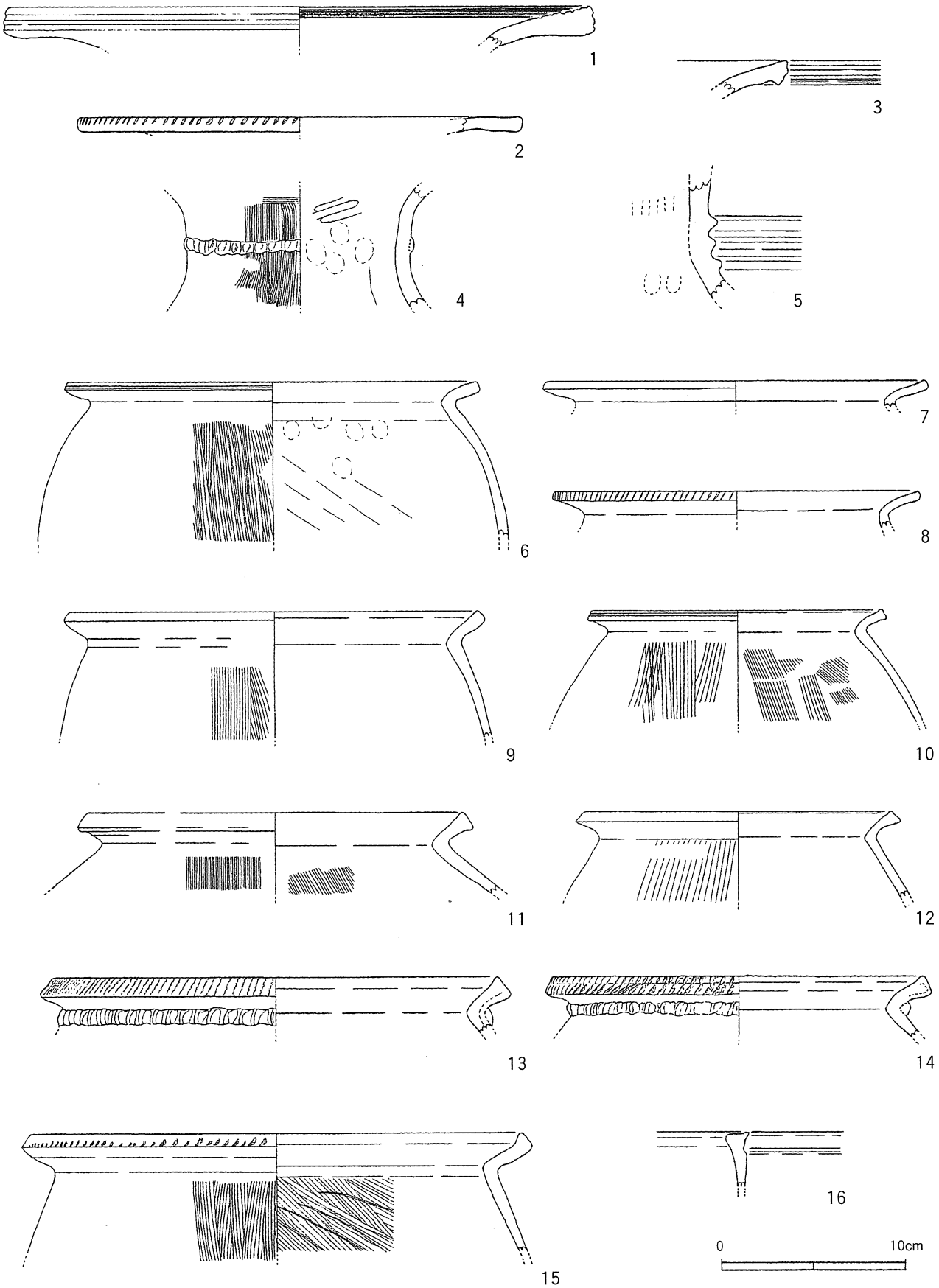
43－１は口縁端面に２条の凹線文をめぐらせており、口縁内面に同心円の６条の沈線を施している。43－４は外面をハケメ調整後、突帯を貼り付け指でつまみ上げながら凸部を形成したものと考えられ、凹部には爪の跡のような痕跡が残っている。43－５は頸部外面に断面が三角形の突帯を３本めぐらせている。突帯間には強いナデが認められる。

甕は中期から後期のものが出土するが、中期のものが量的に多い。実測図で示せば43－６などが最も古く、44－23などが最も新しい。つまり、松本Ⅲ－２様式から草田４期のものが出土するが、松本Ⅲ－２から松本Ⅳ－２様式のものが多く出土する。出土遺物の量から考えると白枝荒神遺跡の中核の時期は弥生時代中期後半と考えられるが、平成５年度調査区では弥生時代終末から古墳時代初めの遺物も出土することから、平成７年度調査１区以西とは下限の時期が異なる。

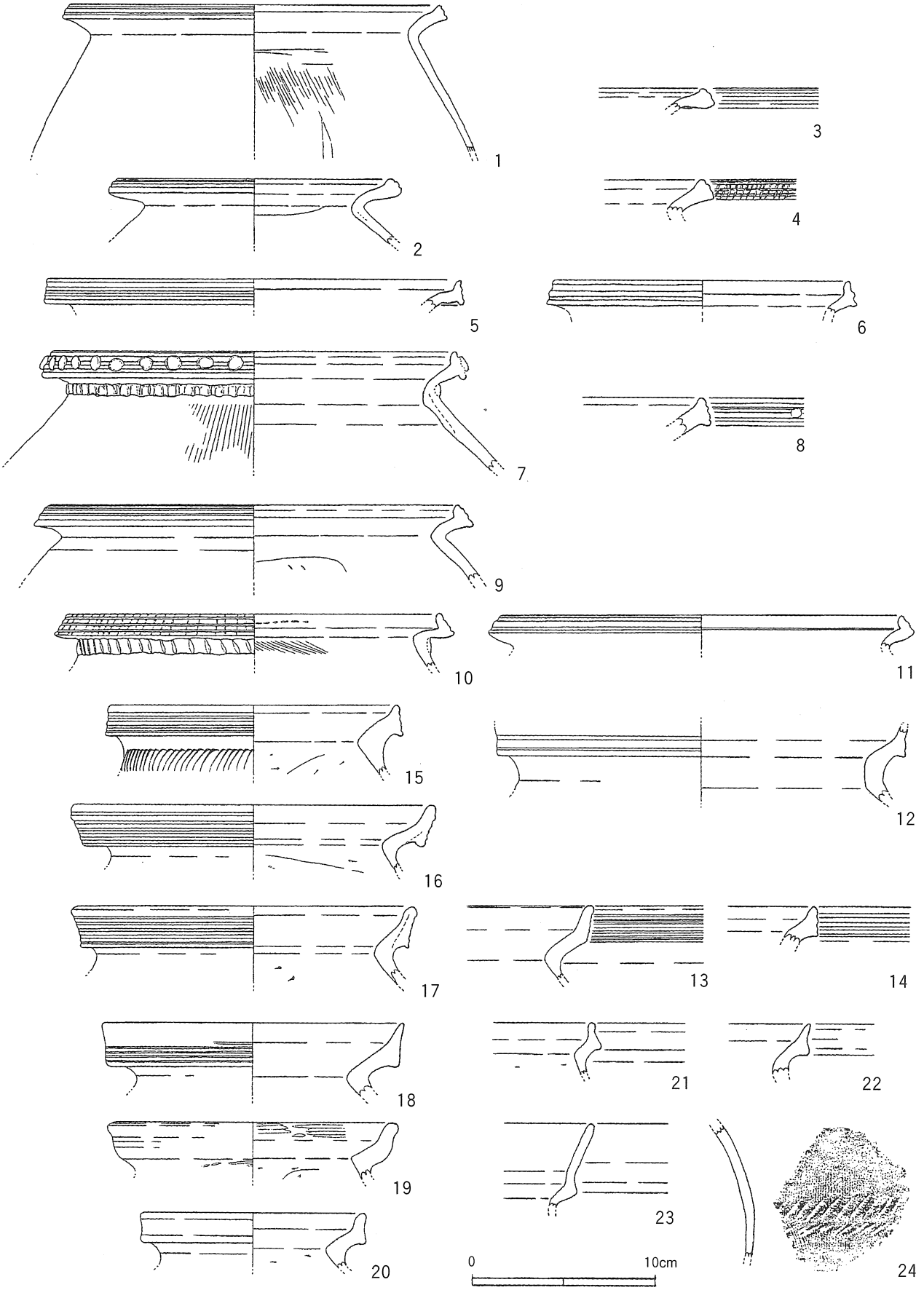
壺、甕以外の器種の出土は少なく45－18の高坏、45－20の低脚坏、45－21の注口土器などにとどまるが、特筆すべきものとして、45－22の分銅形土製品が挙げられる。瀬戸内地方を中心に分布する土製品であるが、出雲市内の遺跡では矢野遺跡、古志本郷遺跡に次ぎ３例目の出土であり、正蓮寺周辺遺跡で４例目の出土が確認されている。平成８年度調査区でも３点出土しており、白枝荒神遺跡全体の出土数は４点である。

土師器、陶磁器（第46図）

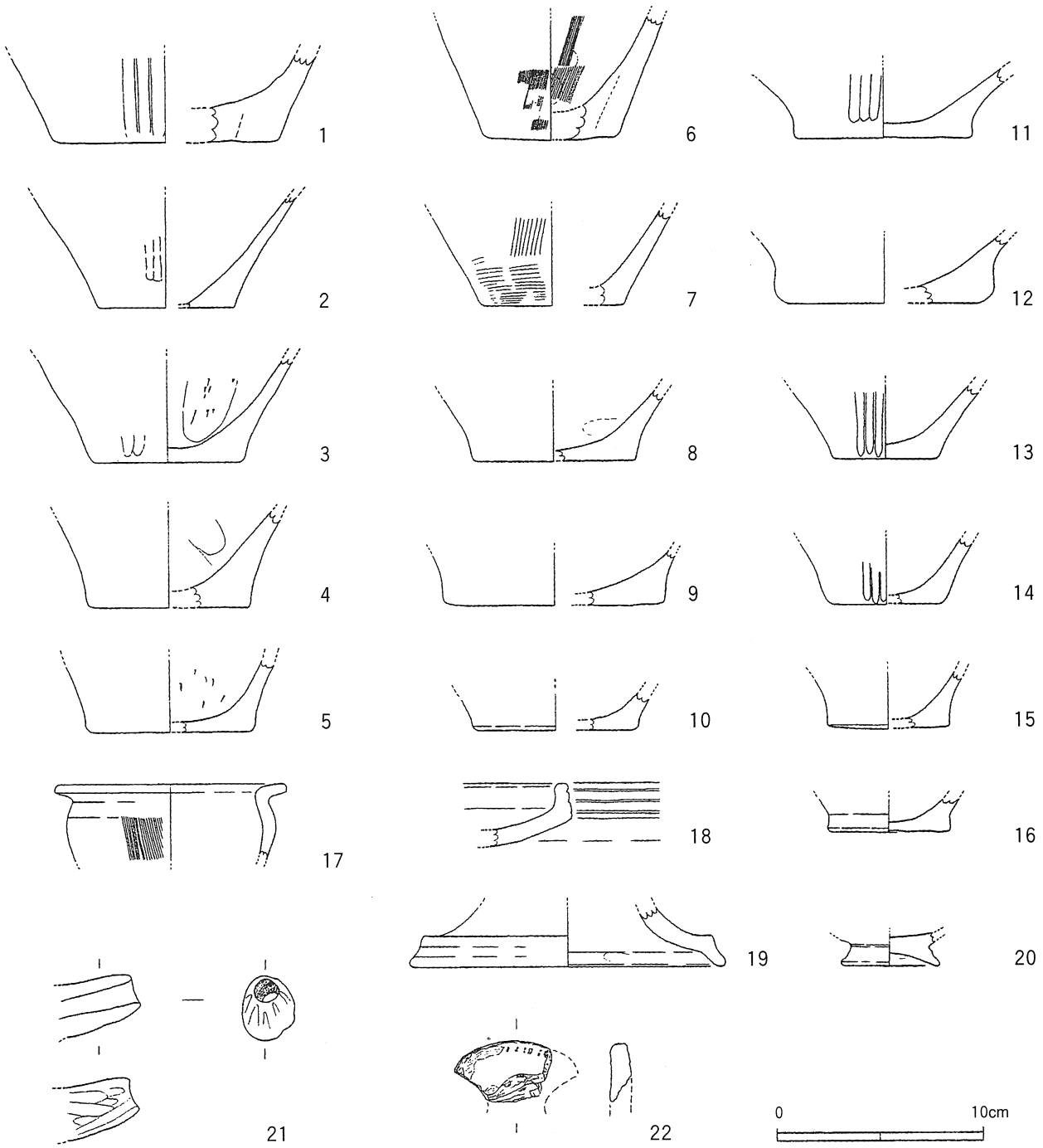
１層及び1′層からは、弥生土器の他に数は少ないが須恵器、土師器、陶磁器などが出土している。46－９は土師器の甕の口縁部と思われる。器肉は厚く、端部はさらにやや肥厚する。内面は細いヘラミガキが認められる。46－７の坏は中世のものと思われる土師器である。平底で底部から口縁部にかけて広がり、器肉は薄くなっていく。46－１の磁器の内面には染め付けが認められるが、絵柄は不明である。口縁端部が一部残っているが、屈曲が認められるため、単純な円形ではないようである。46－３は高台の付く青磁の碗と思われる。46－４・５・６は唐津焼きの底部と思われる。いずれも高台は削り出されているようである。



第43図　2区遺構外出土弥生土器実測図1（S=1/3）



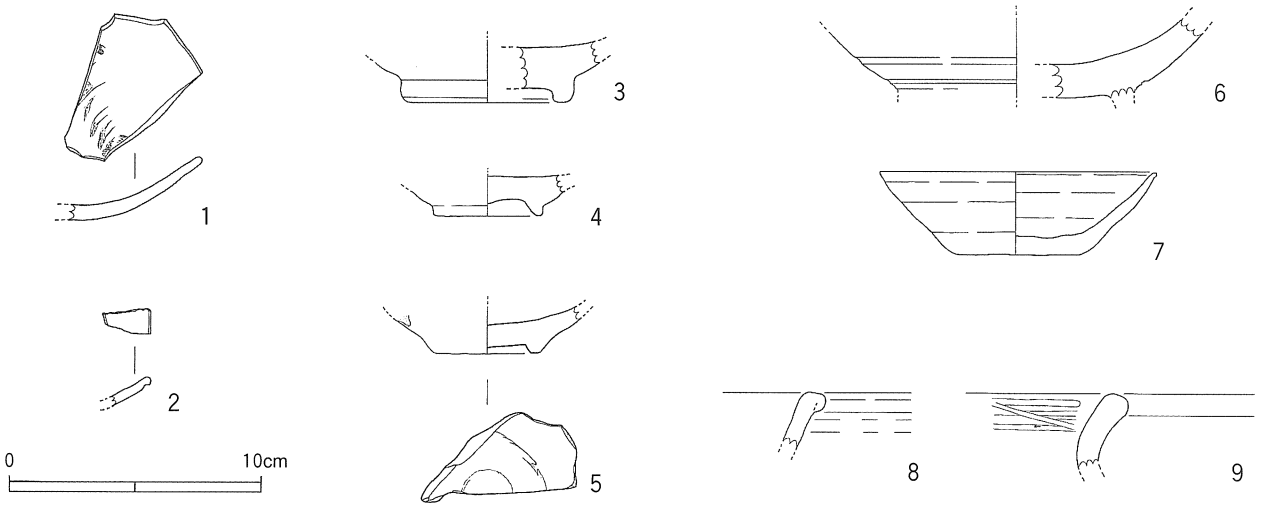
第44図　2区遺構外出土弥生土器実測図2（S=1/3）



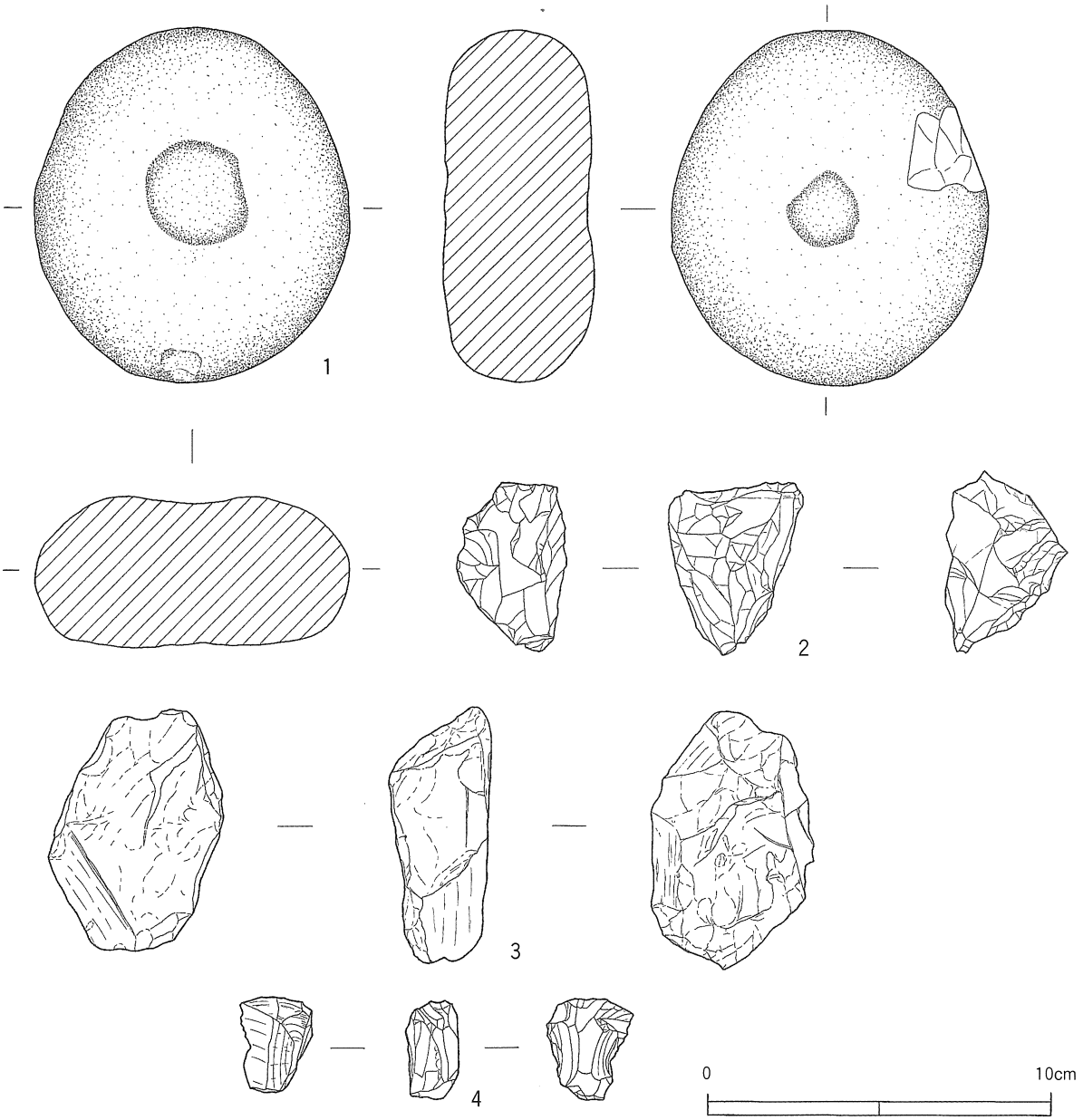
第45図　2区遺構外出土弥生土器実測図3（S=1/3）

石器（第47図）

1層、1′層、2層からは土器以外に量は少ないが石器も出土している。47－1は硬質の安山岩の凹石である。丸く扁平な石の両面中央に凹みが認められる。また、片面には磨った痕跡、縁には敲いた痕跡が認められ、磨石や敲石などに転用されていたものと考えられる。47－2は質の悪い碧玉である。47－3は砥石で、2箇所に研磨面を残している。流紋岩の風化したものを使用している。47－4は桂乳石と思われ一部に剥離面が残っている。色は乳白色であるが一部茶色がかっている。第47図に挙げるもの以外に、黒曜石の剥片なども数点出土している。



第46図　2区遺構外出土土師器・陶磁器実測図（S=1/3）

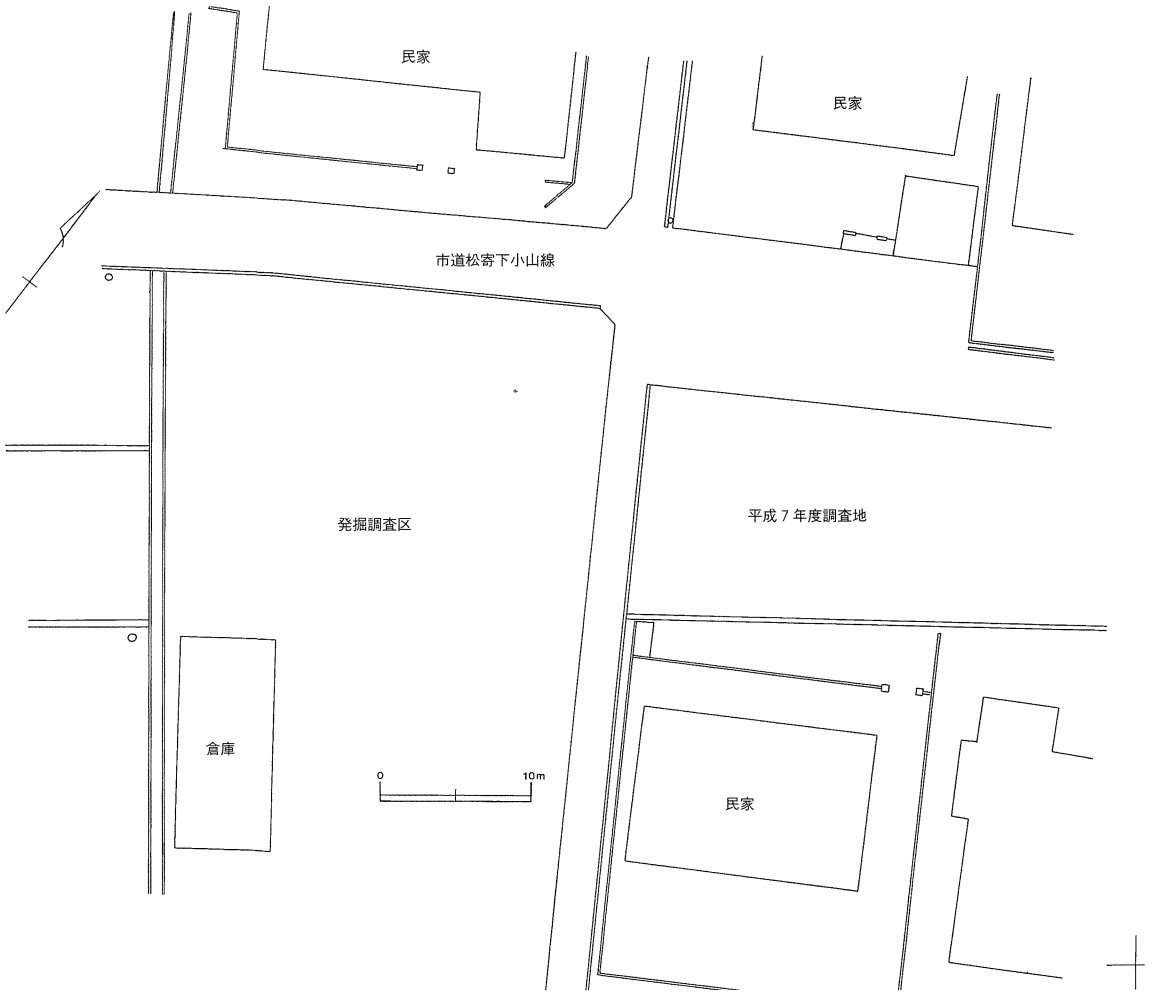


第47図　2区遺構外出土石器実測図（S=1/2）

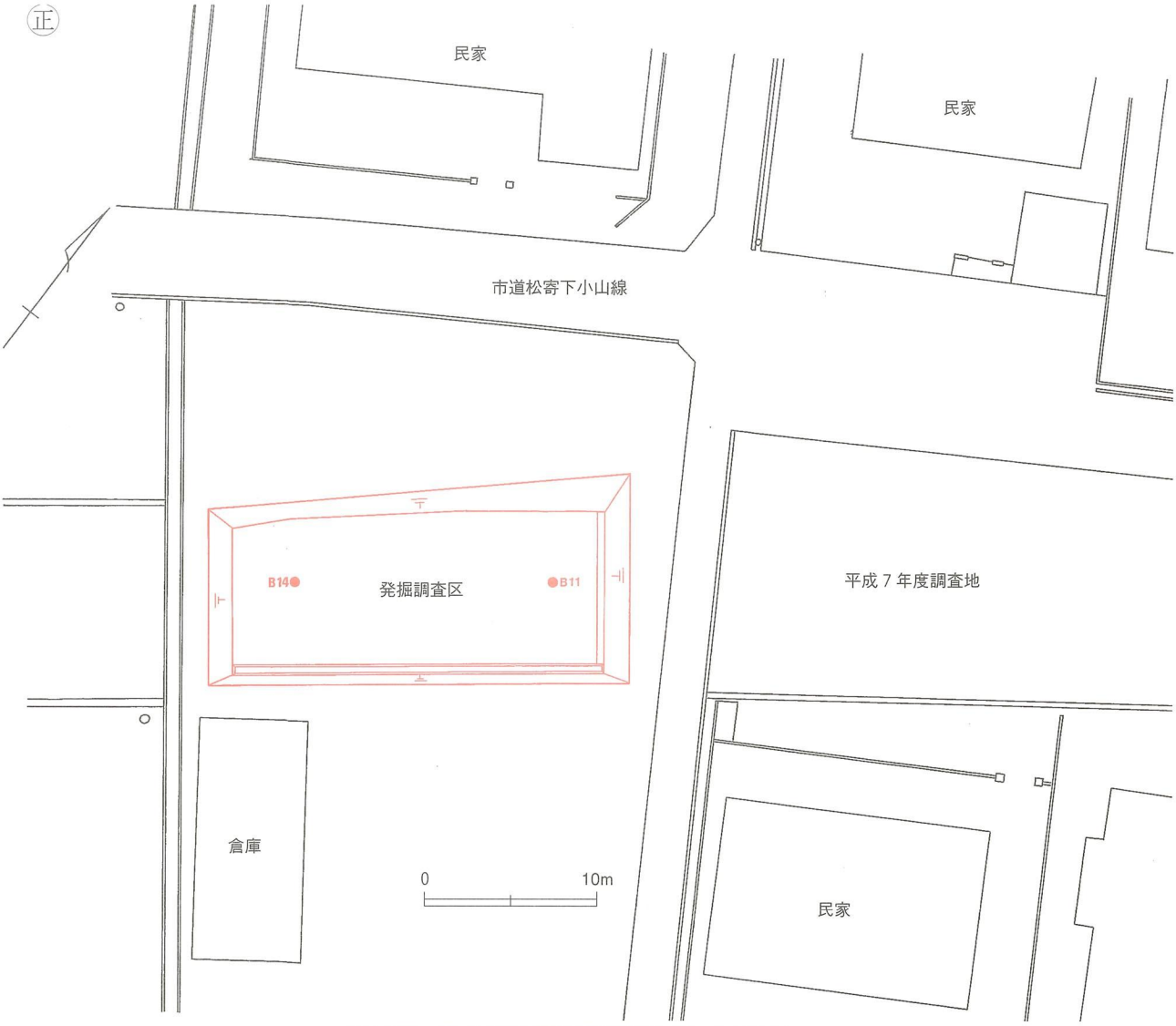
第６章　平成８年度調査

１．平成８年度調査の概要

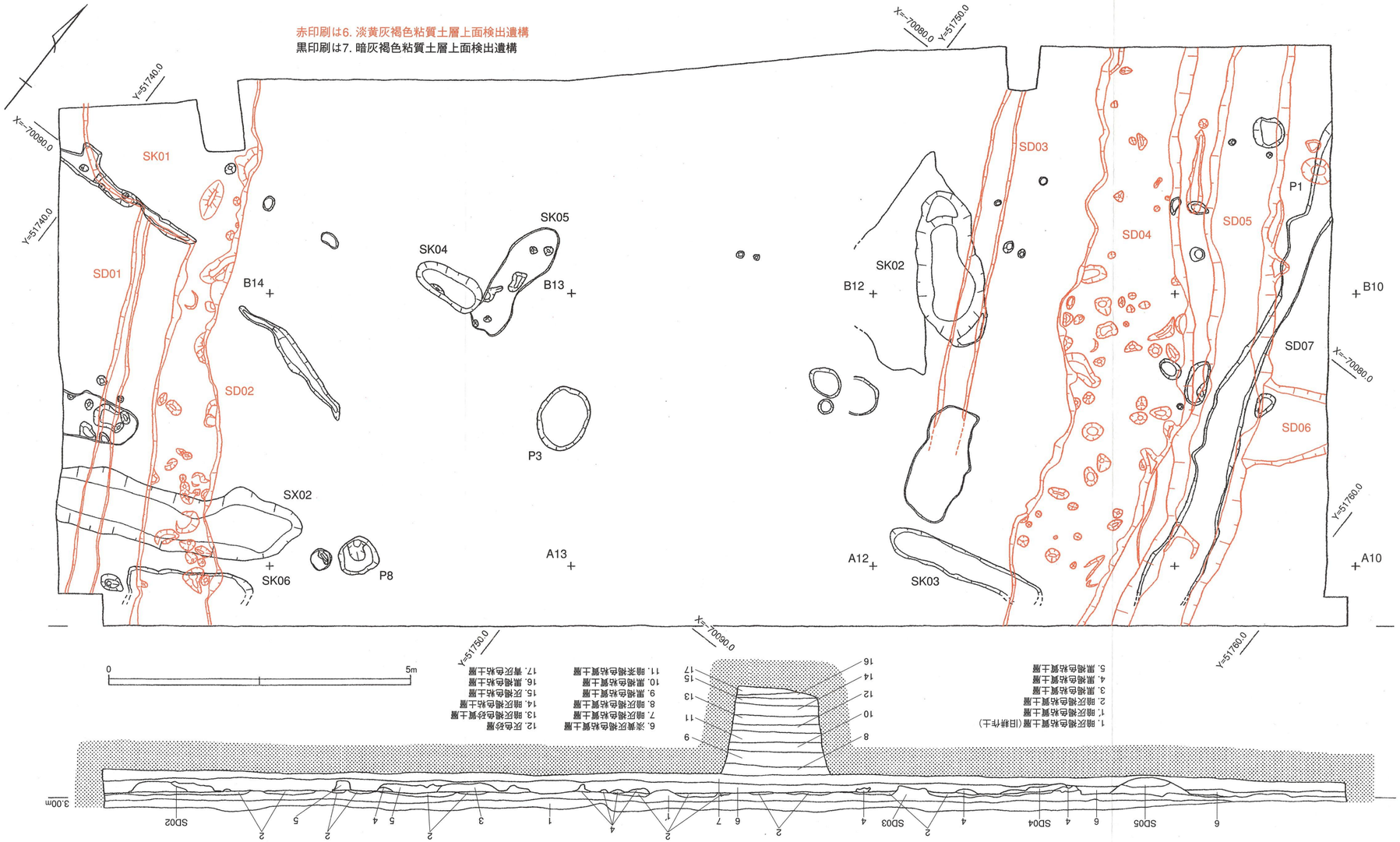
平成６年度調査地と平成７年度調査地の間に位置する東西30ｍ×南北12ｍの360㎡の調査地を平成８年度に実施した。この調査地は平成７年度調査予定であったが、民家の移築が遅れたために平成８年度に繰り越された。したがって、基準杭の設置も平成７年度調査地と同時に設定したため、調査区の中心線Ｂラインは１区、２区のＢラインの延長線上にあり、５ｍ間隔での設置の仕方も共通性をもたせている。宅地のための造成土は表土から約80cmあったため、これについては重機により掘削した。その後、調査区の南壁に沿ってサブトレンチを設定し、層序を確認しながら徐々に手堀により一層ずつ遺構の検出に努めた。２区の西の調査区であるが、道路により分断されており、また、調査時期が異なるためすべてを対応させることはできなかったが、２区１層と１暗灰褐色粘質土層（旧耕作土）、２区1′層と1′暗灰褐色粘質土層、２区９層と15灰褐色粘土層、２区10層と16黒褐色粘土層、２区11層と17青灰色粘土層は同一の土層と考えられる。遺構については、６淡黄灰褐色粘質土層及び７暗灰褐色粘質土層の上面から土坑、溝状遺構、ピットなどを検出した。７層上面からは弥生時代中期の土坑墓と思われる遺構を標高270cmで検出している。これにより、当時の生活面が標高３ｍ前後であったことが窺える。平成８年度調査区全体での出土遺物の量は、弥生時代中期の土器片を中心にコンテナ８箱分であり、平成７年度調査区より増える傾向にあった。



第48図　平成8年度調査区位置図（S=1/400）



第48図　平成8年度調査区位置図（S=1/400）



第49図　平成8年度調査区遺構配置図（S=1/60）

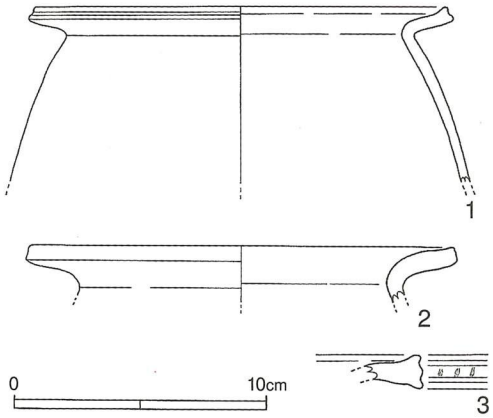
2．遺構と遺物

土　坑

6淡黄灰褐色粘質土層上面で1基、7暗灰褐色粘質土層上面で8基の土坑を検出した。

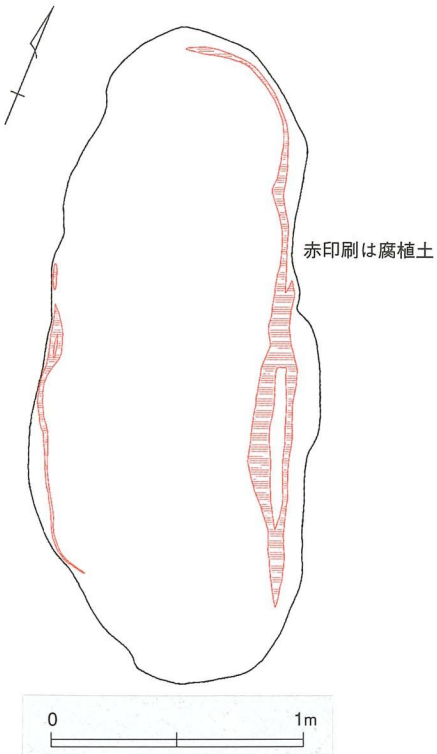
ＳＫ01（第49・50図）

Ｂ14グリッドでＳＫ01を検出した。ほぼ円形の平面プランと思われるが遺構の一部は調査区外に続いており、また、ＳＤ01・02に切られているため詳細は不明である。深さは8cmと浅く、覆土は暗灰褐色粘質土である。坑底は平坦であるが、柱穴などは検出されず、竪穴住居跡である可能性は低い。覆土からは弥生土器と思われる小片が出土している。50－1の口縁端部は上方に拡張し、端面には1条の凹線をめぐらせている。器肉は全体的に薄い。50－2の口縁は頸部から単純に折り曲げられており、端部は若干上方に引き出されている。50－3の口縁端部は肥厚し、端面には2条の凹線が施し、凹線の間には刻目を施す。

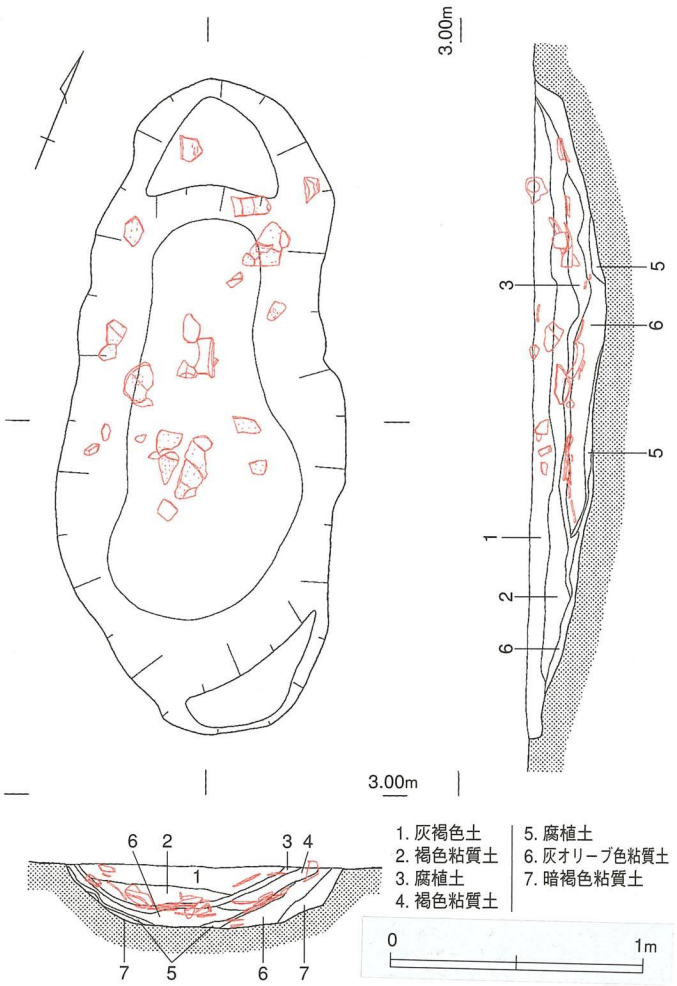


第50図　SK01出土弥生土器実測図（S=1/3）

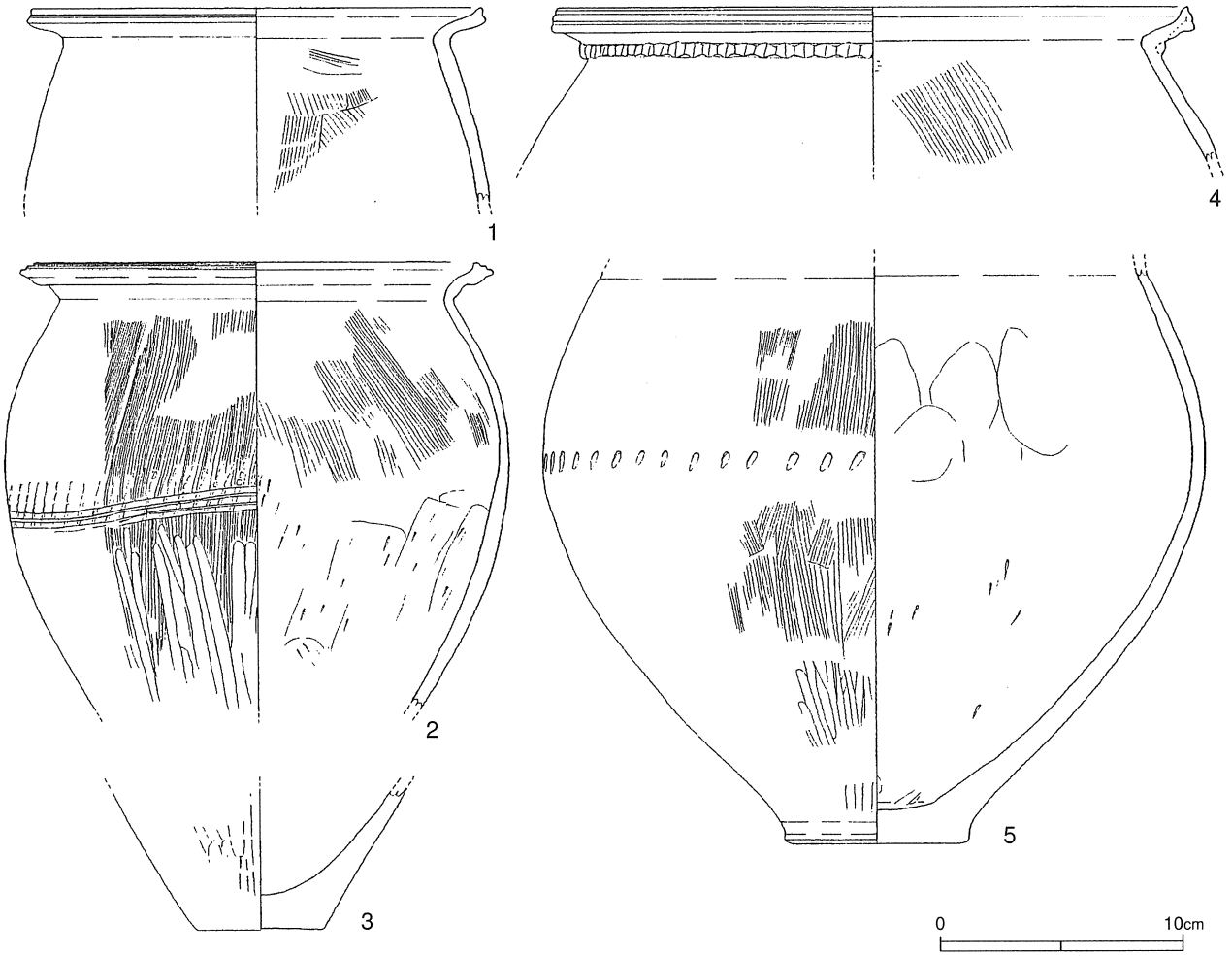
ＳＫ02（第51～54図）



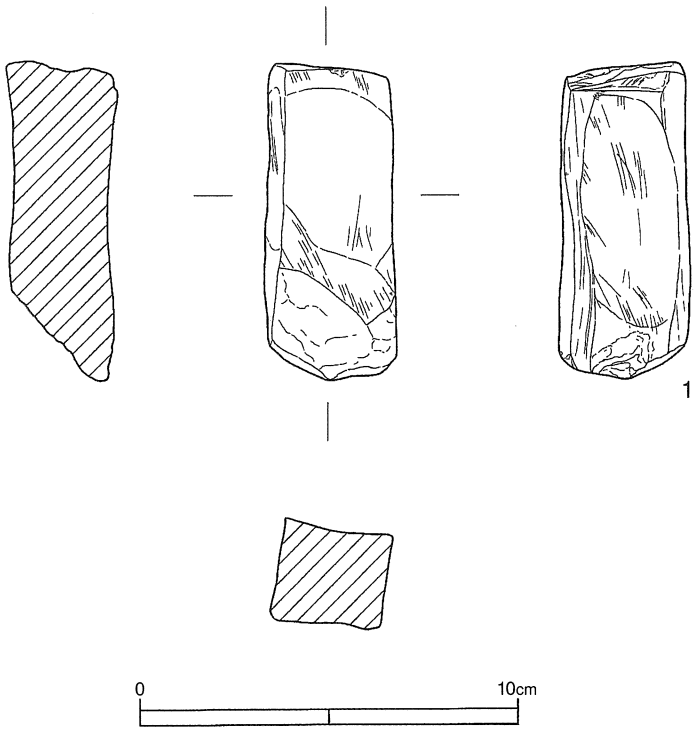
第51図　SK02平面プラン実測図（S=1/30）



第52図　SK02実測図（S=1/30）



第53図　SK02出土弥生土器実測図（S=1/3）



第54図　SK02出土石器実測図（S=1/2）

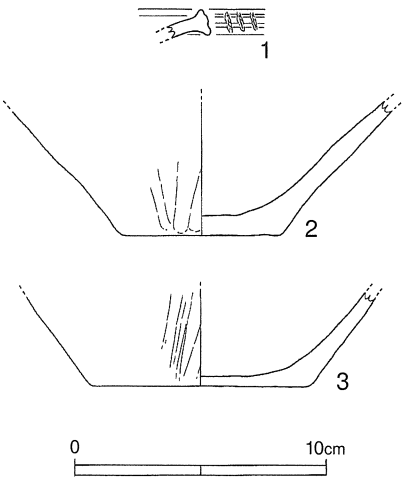
Ａ11グリッド及びＢ11グリッドの７暗灰褐色粘質土層上面でＳＫ02を検出した。北西を軸とし長さ261cm、幅110cm、深さ28cmを測り、土坑墓と考えられる。検出時に、とぎれてはいるが腐植土が平面プランを縁取るように確認された。この腐植土は遺構内で層状に堆積している。覆土は１灰褐色土、２褐色粘質土、３腐植土、４褐色粘質土、５腐植土、６灰オリーブ色粘質土、７暗褐色粘質土である。

平面プランで確認された腐植土は３と５であり、坑底に草や藁などが敷かれた可能性も考えられる。覆土中から中期の弥生土器と石器が出土している。53－

１の口縁端部は上方に拡張し、端面には１条の凹線をめぐらせている。頸部外面は強くナデつけられている。53－２の口縁端部は上方に内傾気味に引き出されている。口縁外面は、作製時に端面より折り返されたと思われる粘土が雑にナデつけられており、ふくらみをもつ。胴部最大径あたりの外面には原体を引きずりながら施文されたと思われる列点文が施され、それ以下は縦方向のミガキが認められる。胴部内面上半には斜め方向のハケメ、下半にはケズリが認められ、ケズリの後にハケメで調整されている。53－５の胴部外面には最大径あたりで列点文がめぐらされている。また、底部付近ではミガキが認められる。胴部内面上半には指頭圧痕が残り、下半はケズリが確認できる。54－１は凝灰質頁岩あるいは泥岩の砥石である。４面に使用痕が残る。

ＳＫ03（第49・55図）

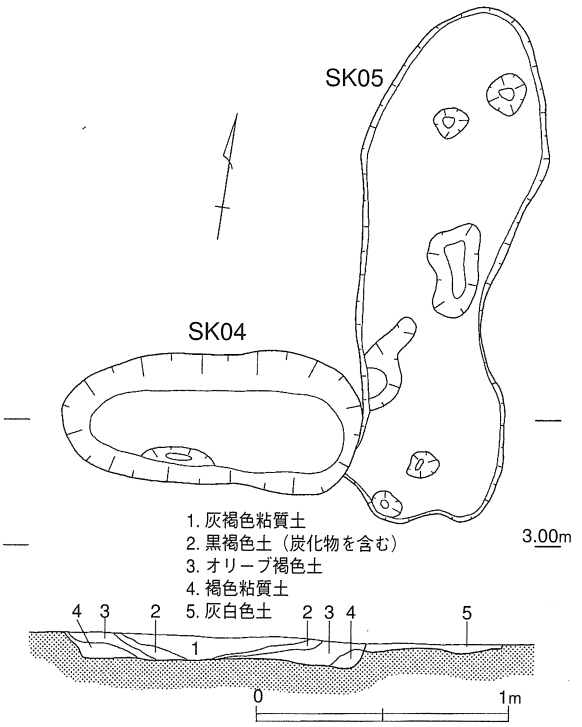
Ａ11グリッドの南壁際の７暗灰褐色粘質土層上面でＳＫ03を検出した。ほぼ東西を主軸としている。一部サブトレンチにより壊してしまったが、規模を知る上で問題はなく長さ約280cm、幅48cm、深さ６cmを測る細長い遺構である。灰褐色砂質土を覆土に持ち、弥生土器を出土する。55－１の口縁端部は上下に拡張し、端面には２条の凹線を施文後、連続的に刻目をめぐらせている。55－２は底径6.2cmを測る底部である。外面には縦方向のミガキが認められ、内面は風化が著しいがケズリで調整されているようである。55－３は8.6cmの底径を測り、比較的大きめの底面である。外面は縦方向のミガキが確認できる。



第55図　SK03出土弥生土器実測図（S=1/3）

ＳＫ04・05（第56図）

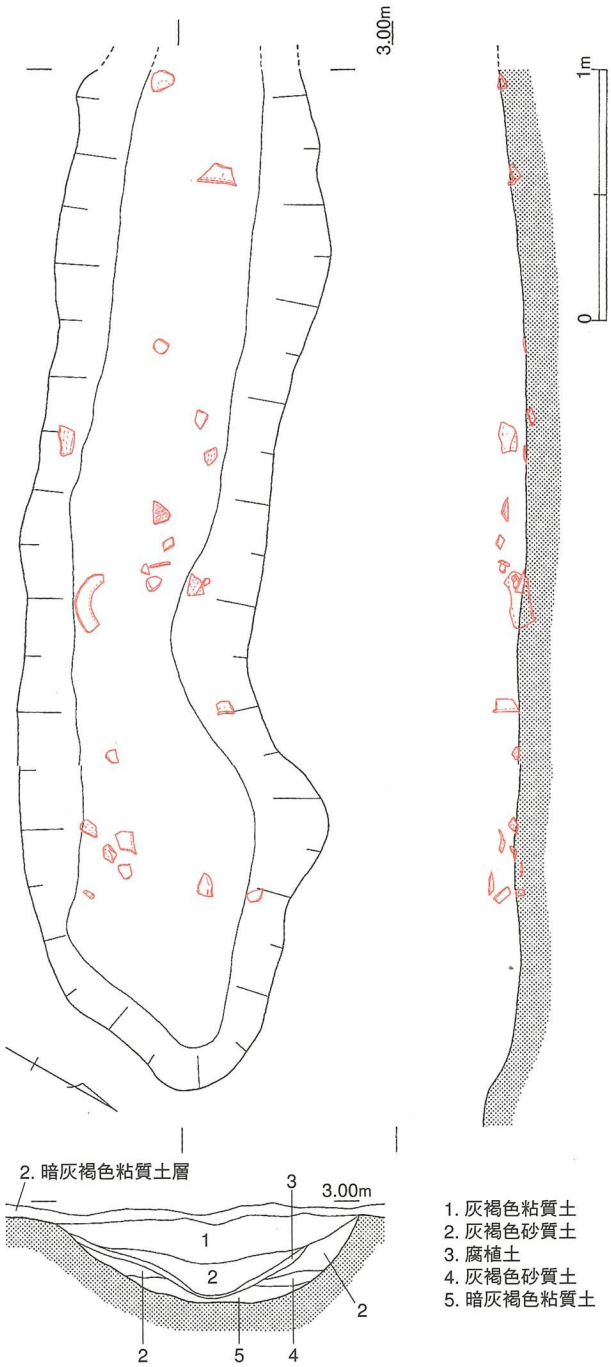
Ａ13グリッド及びＢ13グリッドの７暗灰褐色粘質土上面でＳＫ04・05を検出した。切り合い関係が認められ、ＳＫ04がＳＫ05を切っている。ＳＫ04はほぼ東西を主軸とする楕円形の平面プランである。検出規模は長さ120cm、幅52cm、深さ９cmを測り、坑底は平坦である。覆土は１灰褐色粘質土、炭化物を含む２黒褐色土、３オリーブ褐色土、４褐色粘質土、５灰白色土である。２黒褐色土は腐植土であり、遺構内に覆土が堆積したときに形成されたものと思われ、後述のＳＸ02などにも観察された。覆土からは２本の突帯をめぐらせた広口壺の頸部など、弥生土器の小片と思われる土器片が出土している。一方ＳＫ05はほぼ南北を主軸とする長さ208cm、幅50cm～75cm、深さ２cm～４cmの浅い遺構である。覆土は５灰白色土のみで、出土遺物はなかった。



第56図　SK04・05実測図（S=1/30）

ＳＫ06（第49図）

調査区南西の隅で検出したＳＫ06は北東を主軸とし、長さ205cm、深さ7cmを測る。サブトレンチ掘削時に検出できず半分程度破壊してしまい正確な幅は分からないが、調査区南壁でこの遺構の断面が確認できないことから80cmと推定する。覆土の灰褐色砂質土からは弥生土器と思われる底部の破片などが出土している。平成7年度調査区2区のＳＫ07に類似する平面プランを呈するものと思われる。

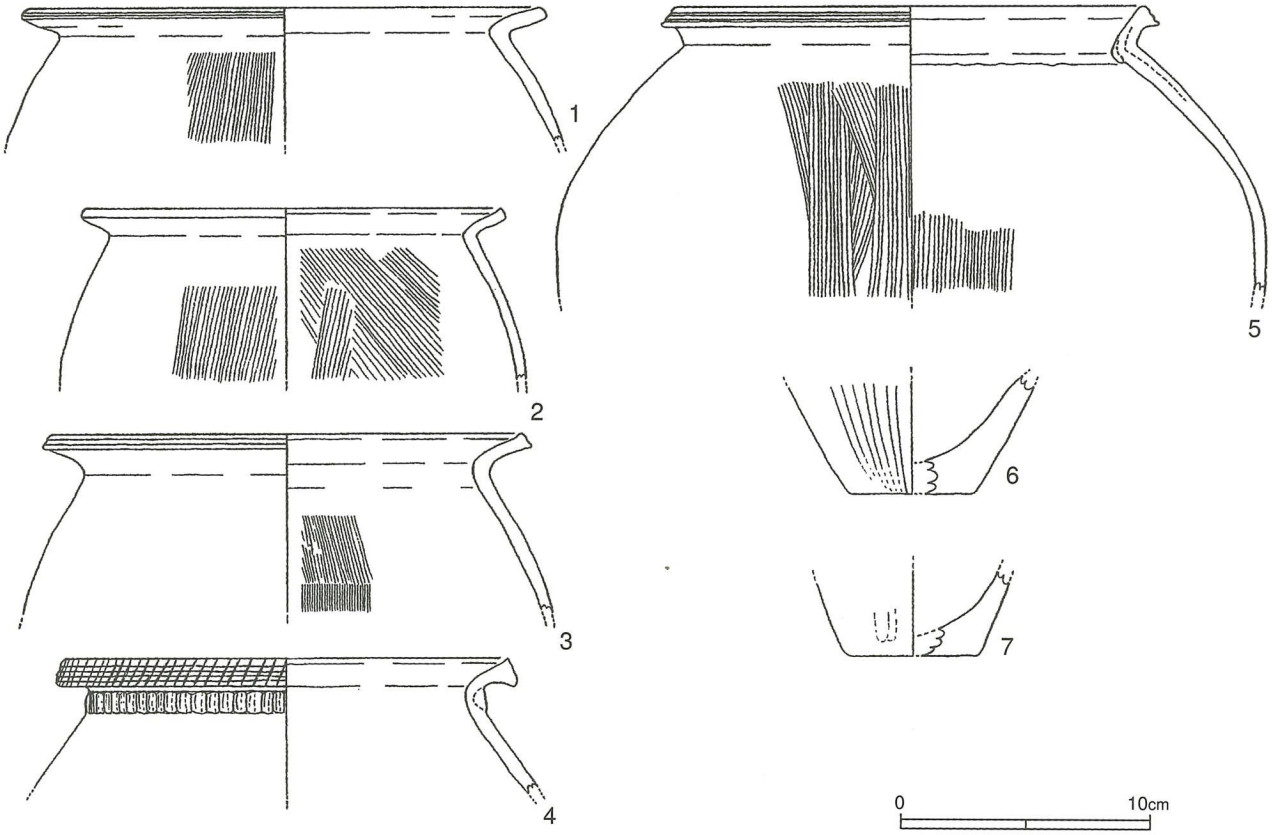


第57図　SX02実測図（S=1/30）

ＳＸ02（第57・58図）

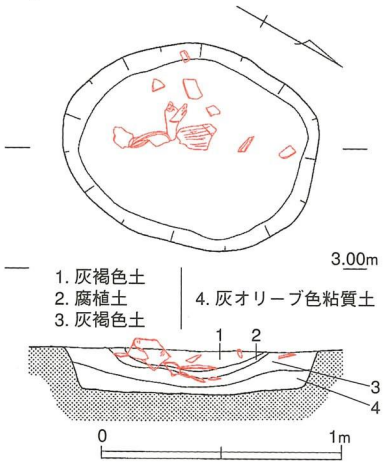
Ａ14グリッドの7暗灰褐色粘質土上面でＳＸ02を検出したが、調査区西壁の断面の確認により6端黄灰褐色粘質土層上面から落ち込んでいることを確認した。北東を主軸とした細長い遺構であり、調査区外に一部遺構が続いている。検出規模は長さ405cm以上、幅88cm～109cm、深さ19cmを測るが、深さについては西壁の観察により31cmであることを確認している。坑底は平坦で、側壁の立ち上がりは緩やかである。覆土は1灰褐色粘質土、2灰褐色砂質土、3腐植土、4灰褐色砂質土、5暗灰褐色粘質土であるが、これらからは、他の遺構より比較的大きめの弥生時代中期の土器片が出土している。この遺構でもＳＫ04などと同じように腐植土が観察された。平面プラン検出時に、遺構の内側を縁取るようにライン状に観察されたが、遺構内では4灰褐色砂質土や5暗褐色粘質土などを切り込んで層状に薄く堆積していた。この堆積状況からＳＸ02は一度掘り返された後に、腐植層が形成されたものと思われる。

出土遺物は弥生土器片のみである。58－1は口縁端面に1条の凹線がめぐらされている。頸部は「く」字状に強く屈曲し、頸部以下の外面には縦方向のハケメが認められる。58－2は口縁端部が上方に若干引き出されている。口縁端面に施文は認められない。頸部は「く」字状に屈曲し、頸部以下の内面は斜め方向の強いハケ調整が認められ、外面は縦方向のハケ調整である。58－3の口縁端部は上方にやや内傾気味に引き出されている。頸部の屈曲は比較的緩やかで



第58図　SX02出土弥生土器実測図（S=1/3）

ある。頸部以下の内面にはハケメが観察できる。58－4は口縁端部が肥厚し、端面に2条の凹線がめぐらされた後に連続的に刻目を施している。また、頸部外面には突帯が貼り付けられ、突帯上に施文後、上方は強くナデつけられて、器表になじまされている。58－5の口縁端部は下方にのみ若干引き出されている。端面には2条の凹線がめぐらされている。頸部内面に段があり、口縁部形成時のものと思われる。



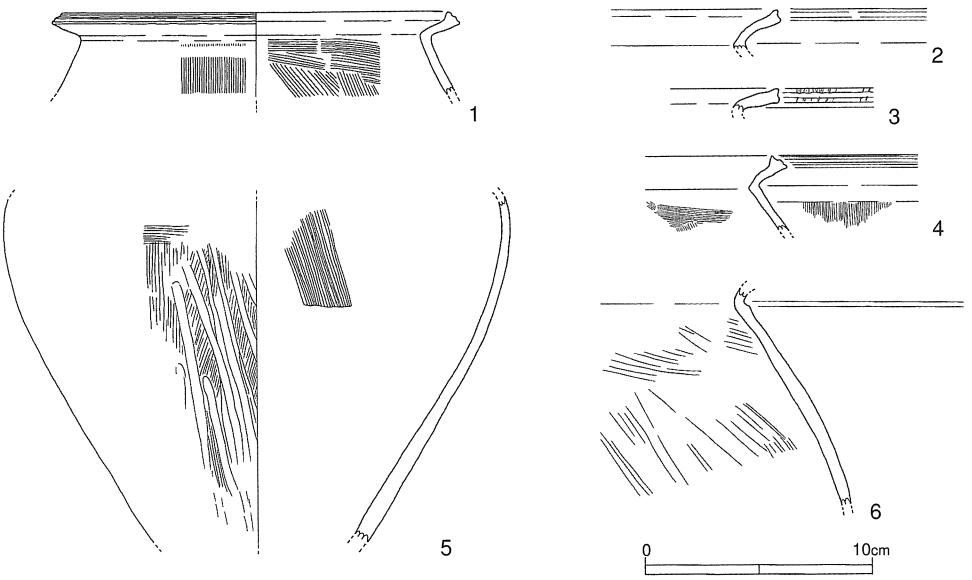
第59図　P3実測図（S=1/30）

P3（第59・60図）

A12・A13グリッドの7暗灰褐色粘質土層上面でP3を検出した。規模的に土坑として取り扱った方が適当と思われるのでここで取り上げる。長径106cm、短径85cm、深さ18cmを測り、楕円形の平面プランを呈する。坑底は平坦で側壁の立ち上がりは急角度である。覆土は、1灰褐色土、2腐植土、3灰褐色土、4灰オリーブ色粘質土であり、2腐植土は平面プランでも確認された。

出土遺物は中期の弥生土器片のみで、他の遺構に比べ比較的大きめのものが出土した。60－1の口縁端部は上方へのみやや内傾気味に拡張する。端面には2条の凹線がめぐらされている。頸部は鋭「く」字状に屈折し内面に稜をもつ。頸部以下の外面は縦方向のハケメが認められ、内面は頸部付近で横方向、それ以下は斜め方向のハケ調整である。器肉は全体的に薄い。60－2の口縁端部は上方への若干の拡張が認められる。端面には1条の凹線文が施される。口縁部の器肉は薄いが、頸部以下では

やや厚くなるようである。60－3は口縁端部が上方へ若干拡張する。端面には1条の凹線がめぐらされた後に、連続的に刻目が施されている。60－4の口縁端部は上方にやや内傾気味に拡張する。端面に2条の凹線がめぐらされている。頸部が鋭く「く」字状に屈折するため内面に稜をもつ。頸部以下の外面には縦方向、内面には斜め方向のハケメが認められる。60－5は甕の胴部片である。外面には縦方向のハケメが認められ、ハケ調整の後に、荒く縦方向に細いヘラ状工具によるミガキ調整がなされている。内面には煤が付着している。60－6は甕の頸部から胴部にかけての破片である。外面は風化が著しく調整は不明であるが、煤の付着が認められる。内面は頸部付近で一部横方向、それ以下では斜め方向のハケメが観察できる。



第60図　P3出土弥生土器実測図（S=1/3）

溝状遺構

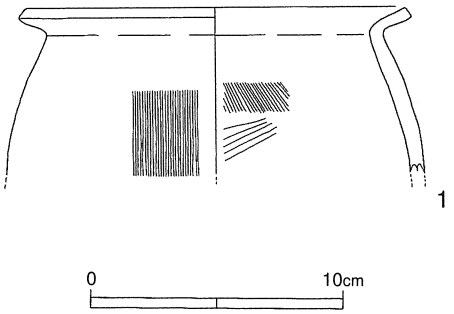
6淡黄灰褐色粘質土層上面で6条の、7暗灰褐色粘質土層上面で1条の溝状遺構を検出した。前者はＳＤ01～06であり、後者はＳＤ07である。ＳＤ06以外はいずれもほぼ北西方向を主軸としている。

ＳＤ01（第61図）

Ａ14・Ｂ14グリッドの6淡黄灰褐色粘質土層上面でＳＤ01を検出した。調査区の南壁から北壁までの820cm間にわたり確認し、幅16cm～46cm、深さ5cm程度と浅い。南壁付近と北壁付近では、底の標高差が5cmあり、北壁付近の底の方が高い。覆土は1灰褐色粘質土のみで、ここから、弥生土器と思われる磨滅した土器片が若干出土するが、平面プラン精査時にＳＫ01を切った形で検出されており、時期については即断できないが、比較的新しい遺構という印象を受けた。

ＳＤ02（第61・62図）

Ａ14・Ｂ14グリッドの6淡黄灰褐色粘質土層上面でＳＤ02を検出した。主軸はＳＤ01とほぼ平行しており、ＳＫ01を切っている。調査区の南壁から北壁までの920cm間にわたり検出しており、幅56cm～140cm、深さ16cm程度を測る。南壁付近と北壁付近の底の標高差は8cmで、北壁付近の底の方が高い。覆土は、1、2とも淡黄灰褐色粘質土ブロックを含む黒褐色粘質土であるが、2黒褐色粘質土の方が1黒褐色粘質土よりブロックを密に含んでいる。この覆土からは弥生土器と思われる磨滅した小片が出土するが、図化可能なものは次に挙げる1点のみである。62－1の口縁端部は若干



第62図　SD02出土弥生土器実測図（S=1/3）

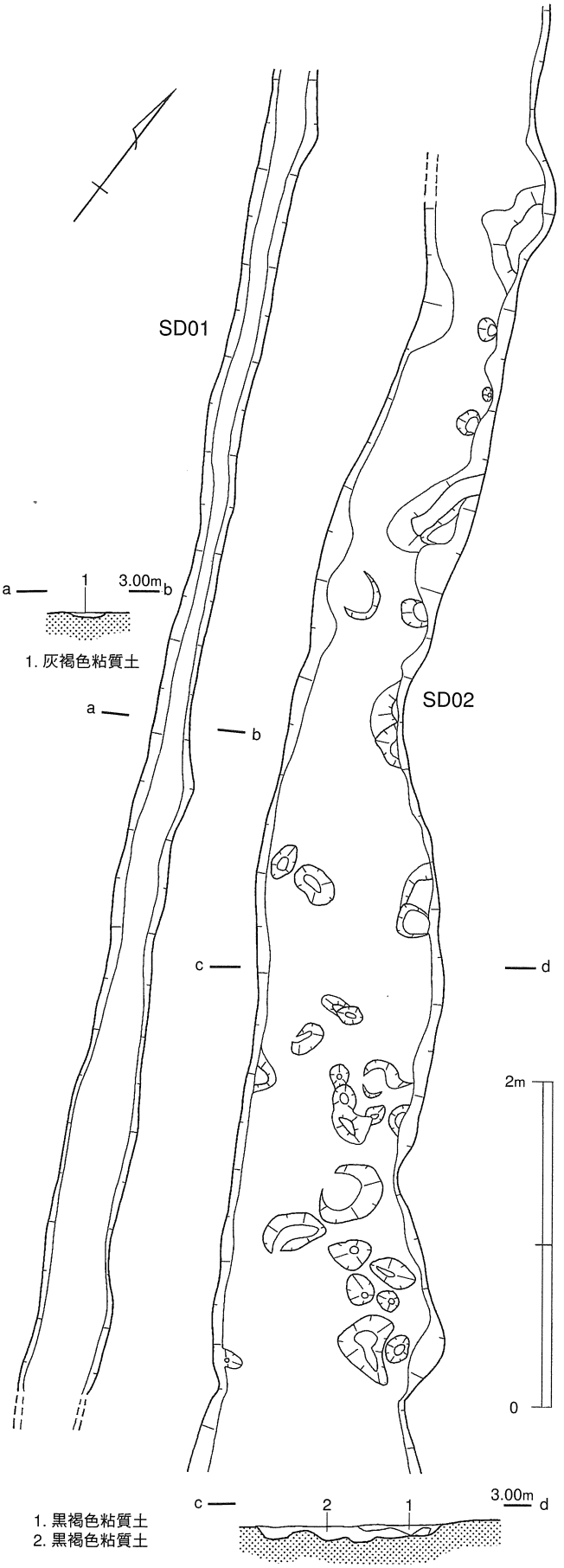
肥厚し、端面に施文は認められない。頸部の屈曲はあまり鋭くなく、頸部以下の外面には縦方向、内面には斜め方向のハケメが認められる。内外面ともに煤が付着している。

ＳＤ03（第63・64図）

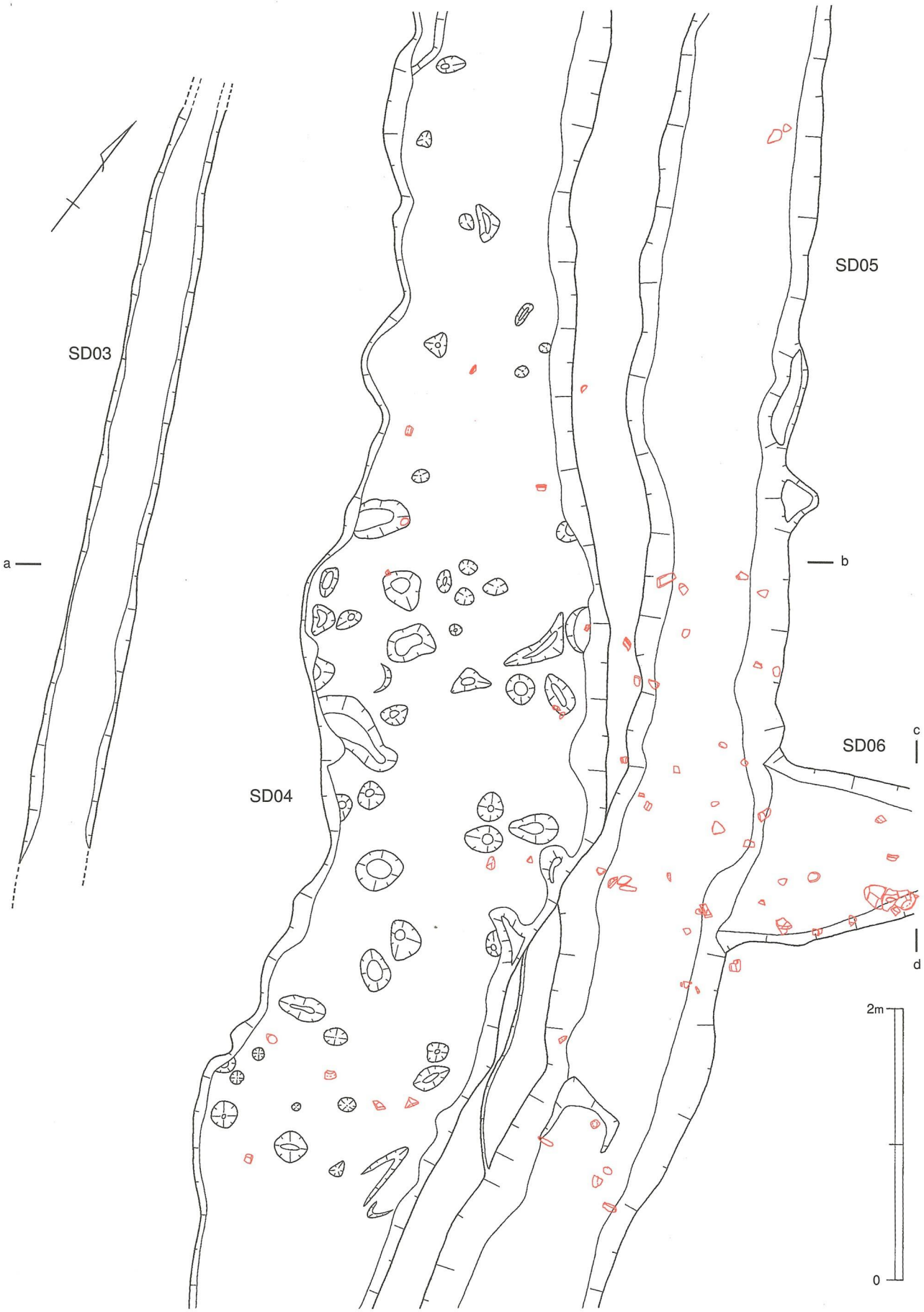
Ａ11・Ｂ11グリッドの６淡黄灰褐色粘質土層上面でＳＤ03を検出した。調査区の北壁から570cm間にわたり確認し、幅46cm、深さ４cmを測り、底の標高差はない。1′暗灰褐色粘質土層がＳＤ03に入り込んでおり、弥生土器と思われる土器の小片が出土するが、この遺構は昭和30年代の耕作によるものと思われる。

ＳＤ04（第63～65図）

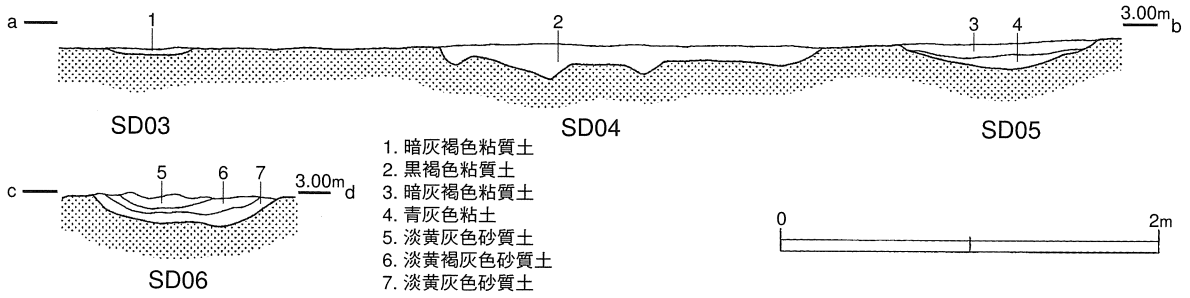
Ａ11・Ｂ11グリッドの６淡黄灰褐色粘質土層上面でＳＤ04を検出した。調査区の北壁から南壁までの970cm間にわたり確認し、幅120cm～210cm、深さ10cm程度であり、主軸がやや湾曲した平面プランを呈す。南壁付近と北壁付近では底の標高差が10cm程度あり、南壁付近の方が高い。また、底には多数の凹凸がある。覆土は淡黄褐色粘質土ブロックを含を多く含む２黒褐色粘質土である。この覆土から弥生土器の小片が出土する。65－１は壺の口縁端部である。頸部からほぼ垂直に立ち上がり、端面は水平になると考えられる。頸部から胴部にかけては張るものと思われる。調整は風化により不明である。65－２の口縁端部は上方に若干拡張する。頸部は「く」字状に屈折し、外面には突帯



第61図　SD01・02実測図（S=1/40）

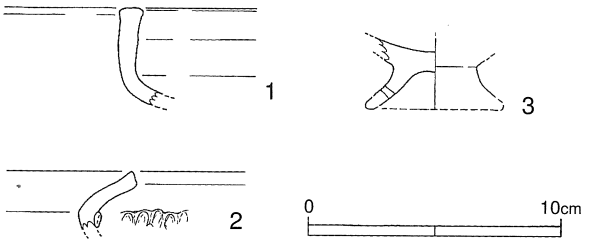


第63図　SD03～06実測図（S=1/40）



第64図　SD03～06断面実測図（S=1/40）

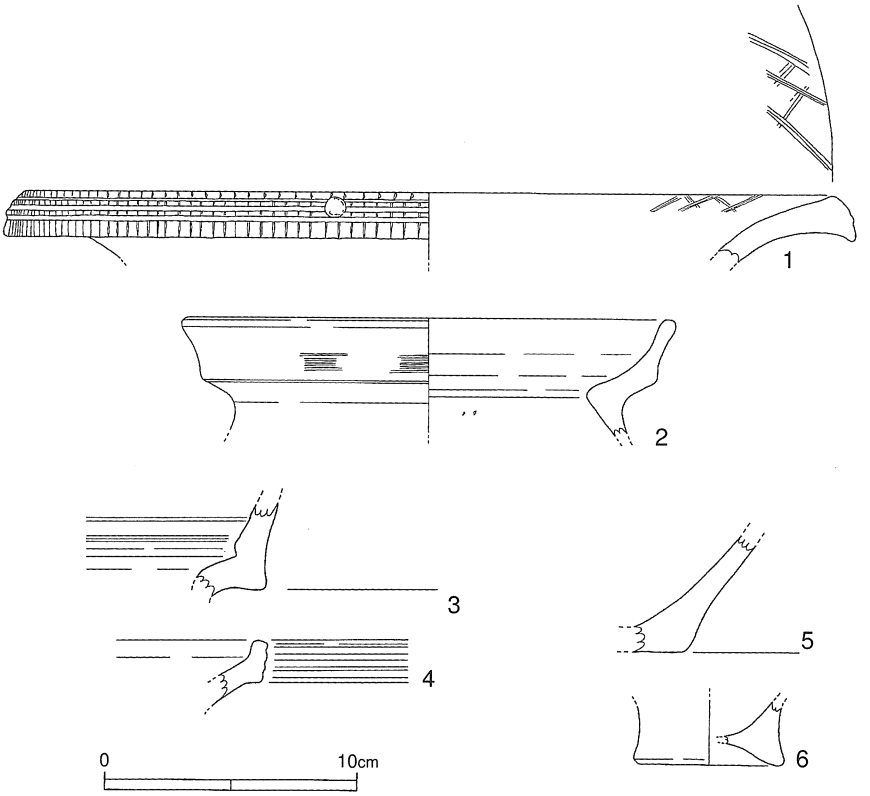
が貼り付けられている。65－3は低脚坏である。坏部内面はナデられており、脚部には1ヶ所に穿孔が認められる。



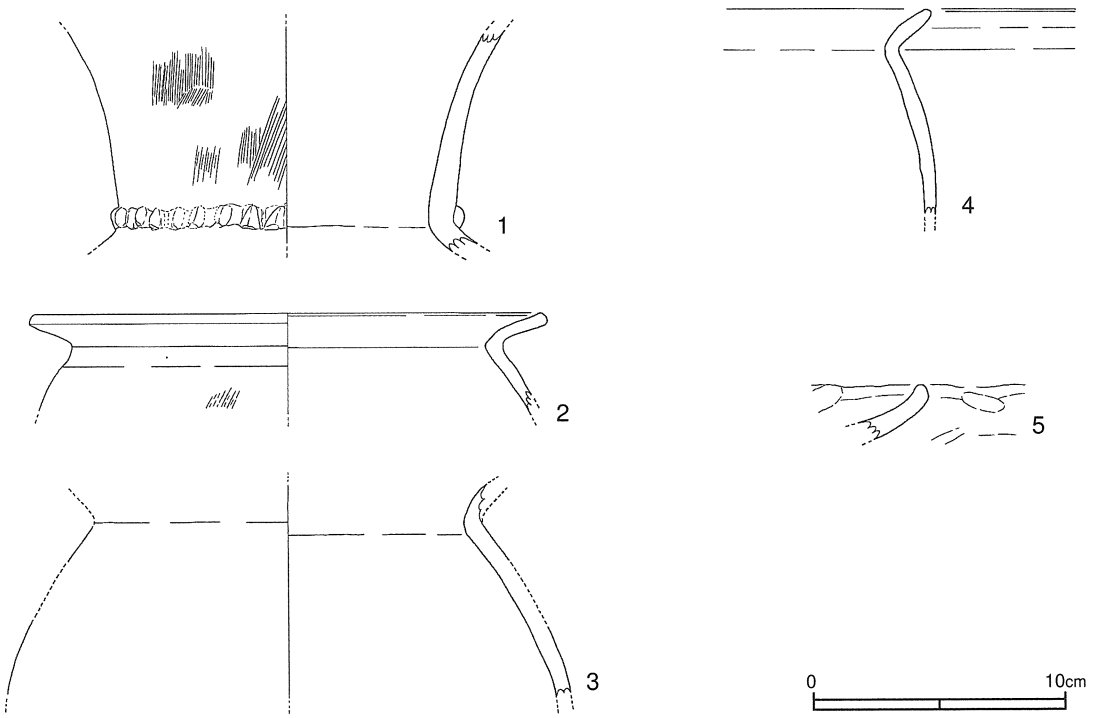
第65図　SD04出土弥生土器実測図（S=1/3）

SD05（第63・64・66図）

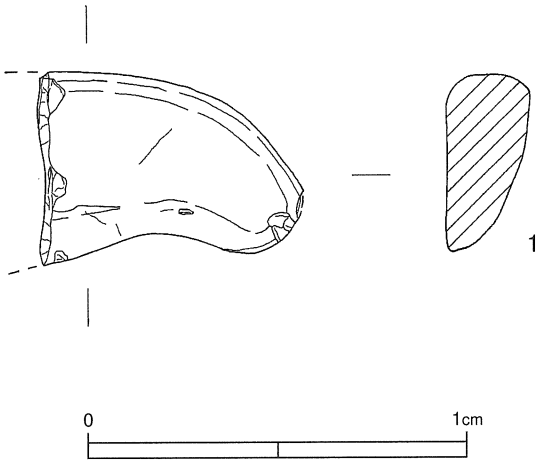
A10・B10グリッドの6淡黄灰褐色粘質土層上面でSD05を検出した。一部をSD04に切られ、SD06を直交する形で切っている。調査区の北壁から南壁までの970cm間にわたり確認し、幅100cm～130cm、深さ10cm～18cmを測り、主軸がやや湾曲した平面プランを呈しており、SD04と類似している。南壁付近と北壁付近では底の標高差が6cmあり、北壁付近の方が高い。覆土は淡黄灰褐色粘質土をマーブル状に含む3暗灰褐色粘質土、淡黄灰褐色砂を含む4青灰色粘土である。この覆土から弥生土器片が出土する。66－1は広口壺の口縁部片である。口縁端部は下方に拡張している。口縁端面には3条の凹線がめぐらされており、連続的に刻目が施されている。この土器片は10cm程度の残存であるが、1ヶ所に円形浮文が貼り付けられている。また、口縁内面には斜格子文が施されている。66－2は複合口縁の甕である。口縁外面には風化により明確ではないが5条以上の沈線が確認できる。頸部以下の内面にはケズリが認められる。66－3の口縁部は、外面に施文は観察できないが、内面に2条の沈線が認められる。頸部から口縁部の境の内面は、強くナデつけら



第66図　SD05出土弥生土器実測図（S=1/3）



第67図　SD06出土弥生土器実測図（S=1/3）



第68図　SD06出土石器実測図（S=1/3）

れているためくびれを有する。66－4の口縁部外面には3条の凹線がめぐらされている。66－6は上げ底の底部である。底壁は中心部にかけてごく薄くなっている。

SD06（第63・64・67・68図）

A10グリッドの6淡黄灰褐色粘質土上面でSD06を検出した。SD05と同様に6淡黄灰褐色粘質土上面から掘り込まれている様子が調査区の東壁で確認できた。東壁からSD05に切られるまでの150cm間の検出にとどまり、また、SD05以西にこの遺構のつながりが確認できなかったため、溝状遺構であるかどうか不明である。他の溝状遺構とは主軸の方向が異なっており、幅94cm～144cm、深さ10cmを測り、底もほぼ平坦である。覆土は5淡黄灰色砂質土、6淡黄褐灰色砂質土、5よりやや色調が暗い7淡黄灰色砂質土となっており、弥生土器片及び石器が出土した。67－1は壺の頸部片である。外面にはハケメが認められる。貼り付け突帯の凹部は工具により削り取られて形成されていると思われ、完全に削り取られてもとの器表が観察できる部分もある。67－2の口縁端部は若干肥厚する。頸部は「く」字状に屈折し、内面に稜を持つ。器肉は全体的に薄い。67－3の頸部から口縁部にかけては単純に外反する。内面はナデ調整であるが、外面は器表が剥落しており詳細は不明である。67－4の口縁部は端部にかけて先細りになっており、内外面とも横方向のナデで調整されている。67－5は浅い坏状の土器の口縁部と思われる。口縁端部付近の内外面はナデられている。以上の土器は弥生中期のものと考えられるが、他の遺構の中期の土器と比べ若干古いようである。68－1は用途不明であるが石器と思われる。縁に磨ったような使用痕と思われる痕跡が認められる。

ＳＤ07（第49図）

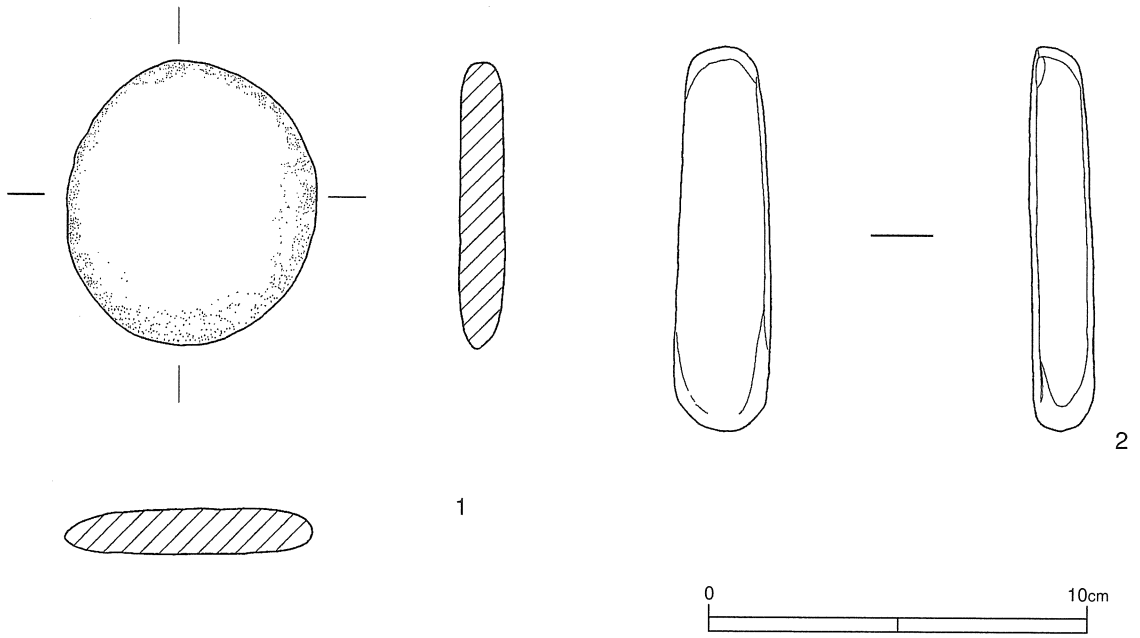
Ａ10・Ｂ10グリッドの７暗灰褐色粘質土層上面でＳＤ07を検出した。調査区の東壁で７暗灰褐色粘質土層上面から落ち込んでいる様子を確認したが、水が流れていたような痕跡は観察できなかった。７暗灰褐色粘質土層上面から落ち込む溝状遺構はＳＤ07のみであるため、平成８年度調査区の溝状遺構のなかでは最も古いものと言える。ほぼ北北西を主軸としており、ＳＤ04・ＳＤ05などとは方向を異にしている。東壁から南壁のまでの760cmにわたり検出したが、大部分はＳＤ05により攪乱を受けていた。幅26cm～92cm、深さ２cm～６cmを測るが、底の標高差はほとんどない。覆土は上から灰褐色粘質土、淡黄灰色砂質土の２層の堆積が認められる。これらの覆土からの出土遺物は少なく、弥生土器片と思われる土器片が数点出土しているが、時期及び器種を確認できるもは、弥生時代中期の甕の口縁部片１点のみである。

ピット

平成８年度調査区では、遺構の底で検出したものを除いて20基程度のピットを確認している。これらは大小様々な規模及び形態を示しており、規格性のあるものはなく、建物の柱穴であるかどうかなど詳細は不明である。遺物を伴うものも少なく、先述したＰ３を除いて、６淡黄灰褐色粘質土層上面で検出したＰ１から石器、７暗灰褐色粘質土層上面で検出したＰ４～８から土器片が出土しているだけである。Ｐ８から弥生時代中期の甕の口縁部片と確認できるものが２点出土しているが、他のピットからは時期及び器種不明の小片の１～３点の出土にとどまっている。

Ｐ１（第49・69図）

Ｂ10グリッドの６淡黄灰褐色粘質土層上面でＰ１を検出した。長径50cm、短径40cm楕円形の平面プランを呈し、深さは12cmである。覆土から、時期及び器種不明の土器片１点の他に石器が２点出土した。69－１は安山岩の磨石と思われる。薄い円盤状の礫の片面に研磨面が残っている。69－２は安山岩の砥石である。断面はほぼ長方形であり、４面に研ぎ面が残っている。



第69図　Ｐ1出土石器実測図（S=1/2）

3．遺構外の出土遺物

平成８年度調査区の遺構外の出土遺物は弥生時代中期の土器片を中心にコンテナ４箱分出土している。遺物を出土するのは６淡黄灰褐色粘質土層以上で、７暗灰褐色粘質土層以下からは全く遺物が出土しない。弥生土器以外の出土遺物として、石器、須恵器などが挙げられるがごく少量の出土にとどまる。須恵器などの出土がみられるのは５黒褐色粘質土層以上の層で、６淡黄灰褐色粘質土からは、土器としては弥生土器のみの出土となる。これらの出土状況から、７暗灰褐色粘質土層上面で検出された遺構は弥生時代中期から後期にかけてのものである可能性が高い。

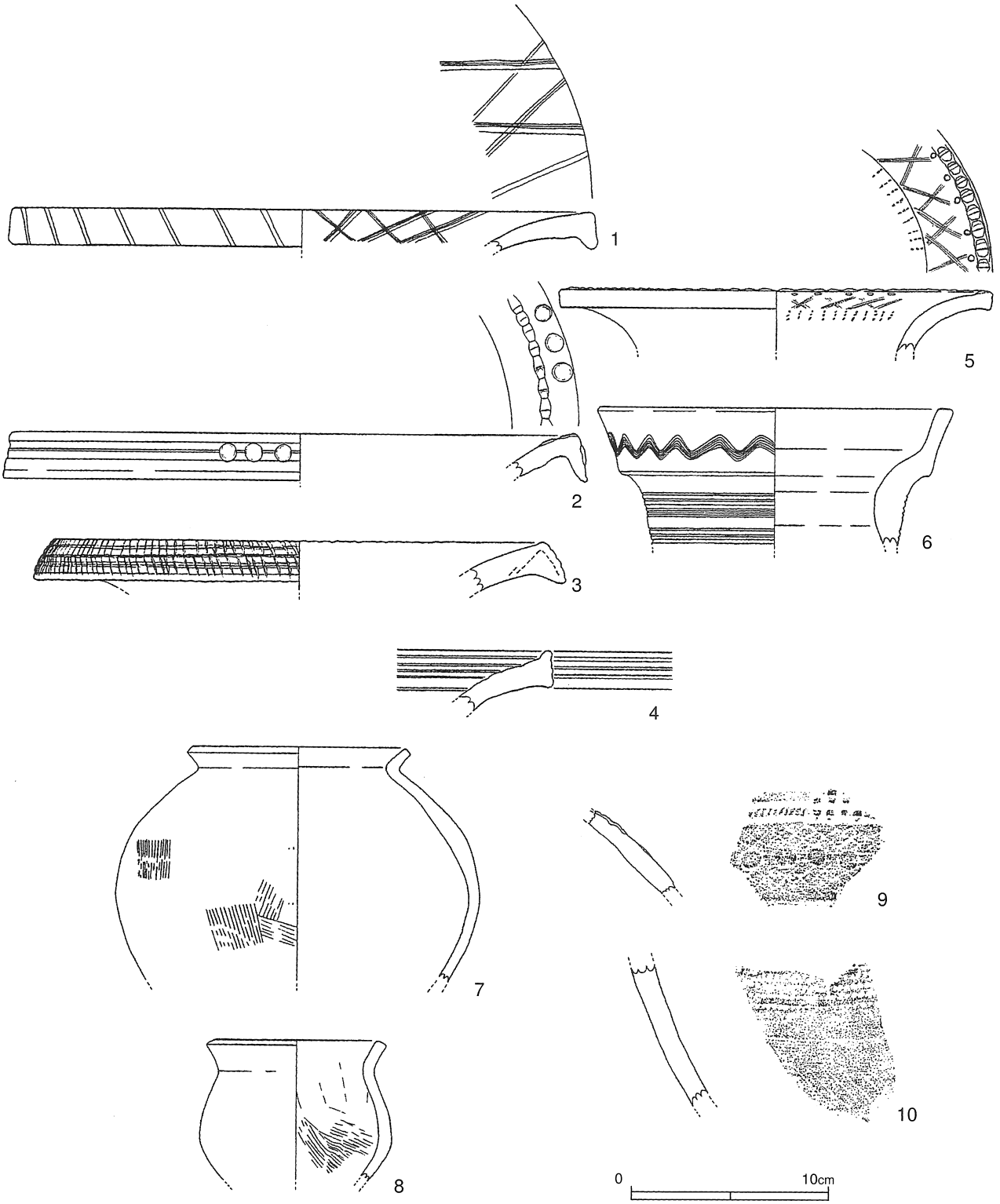
弥生土器（第70～72図）

70－１～５は広口壺である。70－１の口縁端部は下方にのみ拡張する。口縁端面には２本１組で連続的に斜行文を施し、口縁内面には複合斜格子文を施している。70－２は下方にのみ大きく拡張する。口縁端面には３条の凹線をめぐらせ、３個の円形浮文を貼り付けており、これらの上方の口縁部内面の端部付近にも同様に円形浮文を３個貼り付けている。また、内側の同心円上には突帯めぐらせている。70－３は口縁端部が下方に拡張し、端面に４条の凹線文を施した後に、上下２段に連続的に刻目を入れている。70－４は口縁端部が上下に拡張する。端面には３条の凹線をめぐらせており、口縁内面にも同心円上に凹線を施している。70－５の口縁端部は若干肥厚する。口縁内面の端部付近には突帯を貼り付け、その内側には連続的な穿孔、斜格子文、列点文を施している。70－６は複合口縁の壺である。口縁部外面には波状文を施文しており、頸部外面には８条以上沈線をめぐらせている。70－７は口縁が単純に短く外反する壺である。胴部外面にはハケメが認められる。70－８は小型の壺と思われる。口縁部が単純に外反し、胴部内面にはハケメが認められる。70－９は装飾性に富む壺の上胴部片と思われる。破片上部に２条の凹線をめぐらせ、凹線間に刻目を入れた後に棒状浮文を施している。また、その下位には斜格子を入れた後に一部を帯状にナデ消し、その上に円形浮文を連続的に施文している。70－10は壺の頸部片と思われる。破片上部には４段の列点文、中央には６条の沈線をめぐらせている。羽状文あるいは綾杉文の一部と思われる施文が認められる。

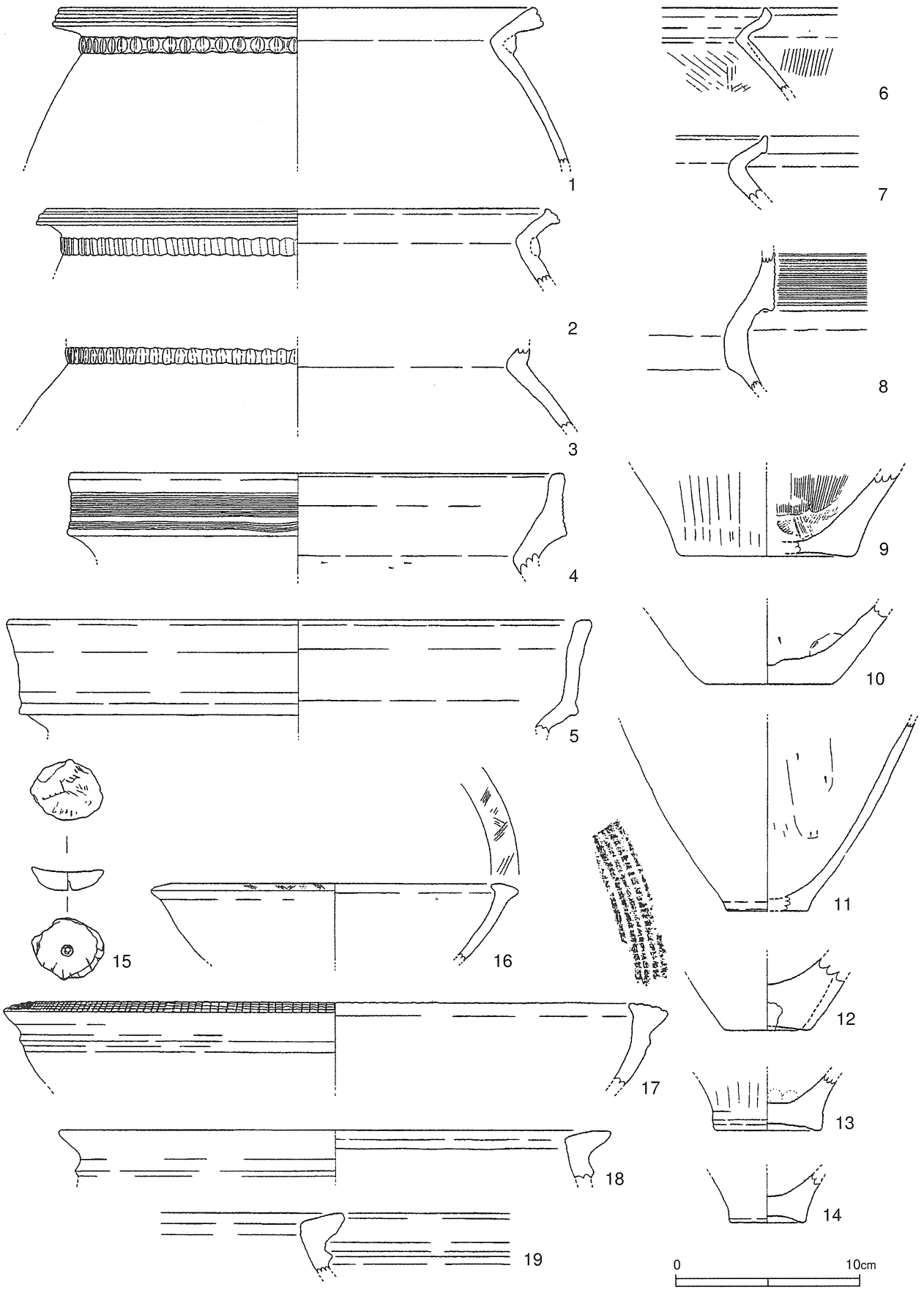
71－１～８は甕である。中期のものを中心に出土しているが、71－４・５・８など後期のものも出土している。71－１は口縁端部が肥厚し、端面に２条の凹線をめぐらせている。また、頸部の外面には突帯を貼り付けている。内面及び頸部の外面以下には煤の付着がみられる。71－２の口縁端部は上下に拡張し、端面に２条の凹線がめぐらされている。頸部外面には突帯が貼り付けられている。71－４は、口縁部外面に10条以上の沈線が施されている。複合部の稜は斜め下方に突出している。頸部以下の内面には横方向のケズリが認められる。71－５は口縁端部は平坦部を有し、複合部の稜は斜め下方に突出している。大型の甕であるため草田５期に相当するものと考えられ、平成８年度調査区出土の弥生土器の中では最も新しいものである。71－６の口縁端部は上方に若干内傾気味につまみ上げられ拡張している。器壁は全体的に薄い。71－８の口縁部外面には12条以上の沈線がめぐらされている。複合部の稜は斜め下方に突出している。頸部以下の内面はケズリが認められる。頸部がやや長く壺の可能性もある。

底部は丸底のものは出土せず、71－９～12などのような平底、あるいは、71－13・14などのような上げ底のものの出土にとどまっている。

高坏の出土は少ないが71－15～17などが挙げられる。71－15は円盤充填法によって作られた高坏底部の詰め土盤である。外面のほぼ中央に径6mm、深さ5mmの穴がある。71－16は口縁端部がほぼ水平方向に拡張し、端面に斜格子文が施されている。71－17も口縁端部が水平方向に拡張する。口縁端面には4条の凹線をめぐらせた後に、連続的に刻目を入れている。また、外面には削り出しによる突帯が施されている。71－18・19は鉢と思われる。口縁部は「く」字状に折り曲げられ、削り出しによる突帯を有する。71－18・19は同一個体の可能性もある。

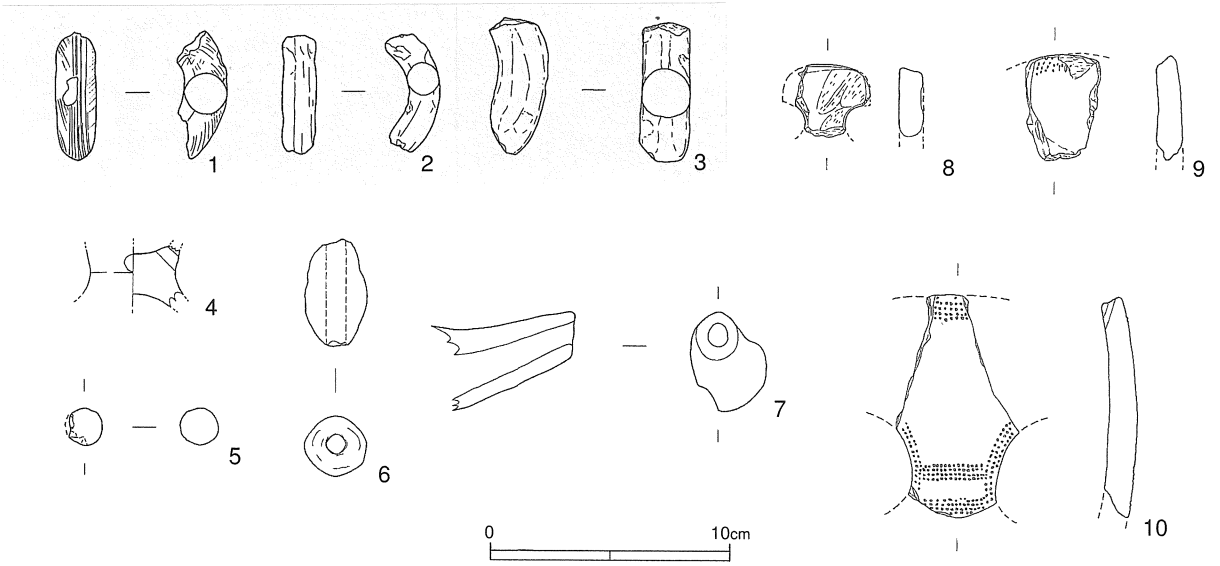


第70図　遺構外出土弥生土器実測図1（S=1/3）



第71図　遺構外出土弥生土器実測図2（S=1/3）

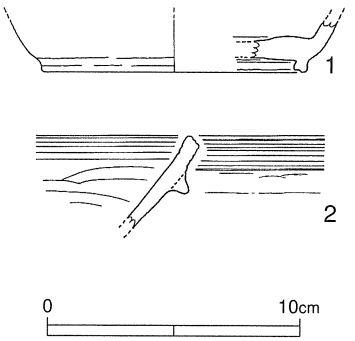
72－1～3は把手である。断面はいずれもほぼ円形である。72－1は中央部縦方向に5条の沈線が施され、その脇にはハケメが認められる。72－2は縦方向にヘラ状工具による調整痕のようなものが見受けられる。72－3は明確な施文及び調整は認められない。72－4は蓋あるいは低脚坏である。残存片では1ヶ所に穿孔がある。72－5は穿孔のない球形土製品である。72－6は管状紡錘形土錘である。8－1の浮子とともに漁撈にかかわる生産活動を示す資料であるが、出土数は2点と少ない。72－7は注口である。縦方向にヘラによる調整痕らしきものが残っている。72－8～10は分銅形土製品である。72－8は小型のもので、表面は剥落しており、施文など詳細は不明である。裏面は平坦である。72－9はやや大型のものと思われる。一部に表面を縁取る列点文が認められる。断面は反りを呈している。72－10も大型のものである。表面を縁取りように列点文が施され、上端部から裏面に貫通する穿孔が2箇所に認められる。断面は反りを呈している。平成7年度調査2区遺構外出土の45－22とあわせて計4点が出土している。



第72図　遺構外出土弥生土器実測図3（S=1/3）

須恵器（第73図）

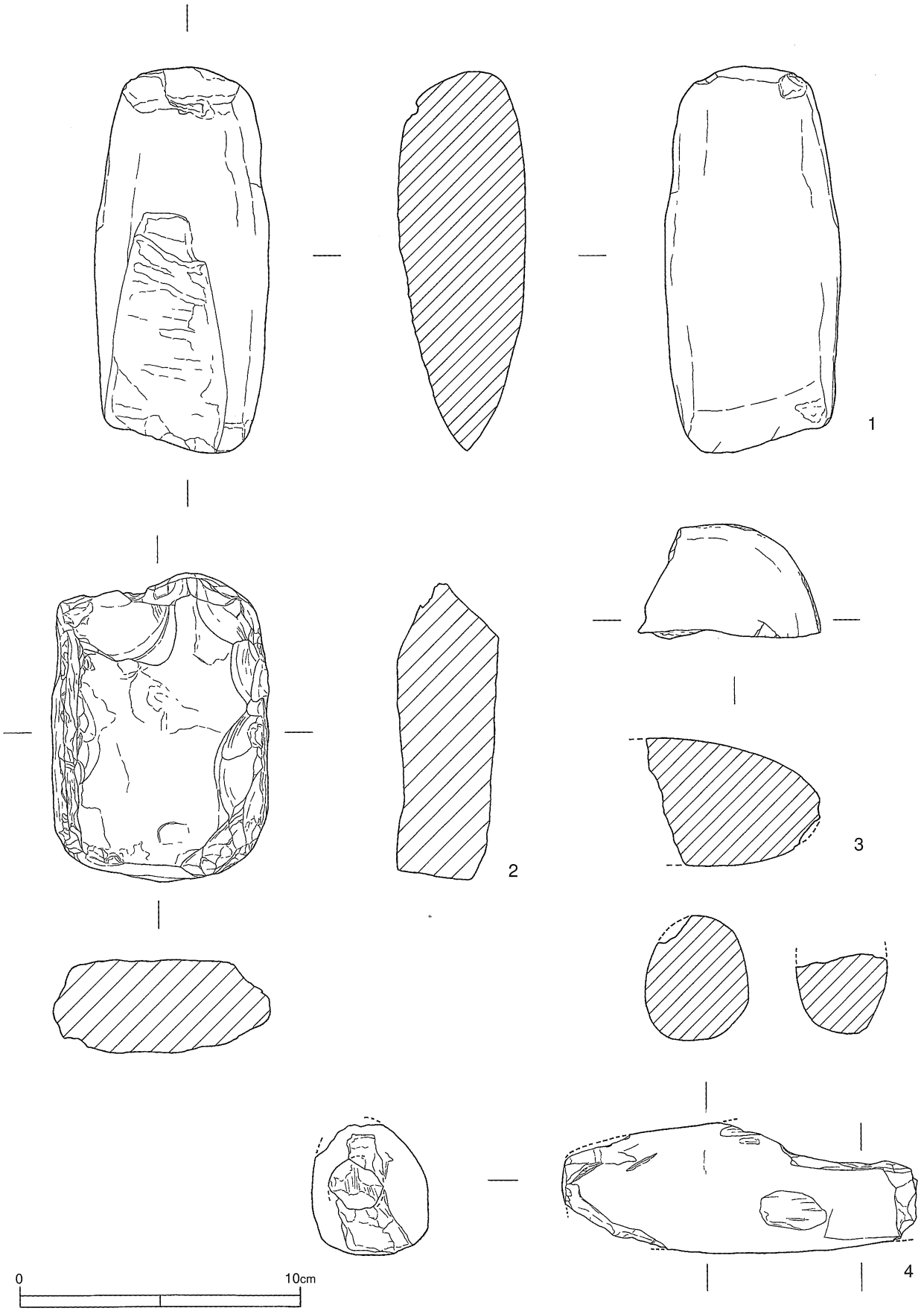
5黒褐色粘質土層以上の層からは点数はごく少ないが須恵器も出土する。73－1は高台付の坏である。高台の端部は1条の溝を有しており、断面は凹状になっている。坏部は内外面とも回転ナデで調整されている。73－2は器種不明であるが口縁部片と思われる。内外面とも回転ナデが認められる。



第73図　遺構外出土須恵器実測図（S=1/3）

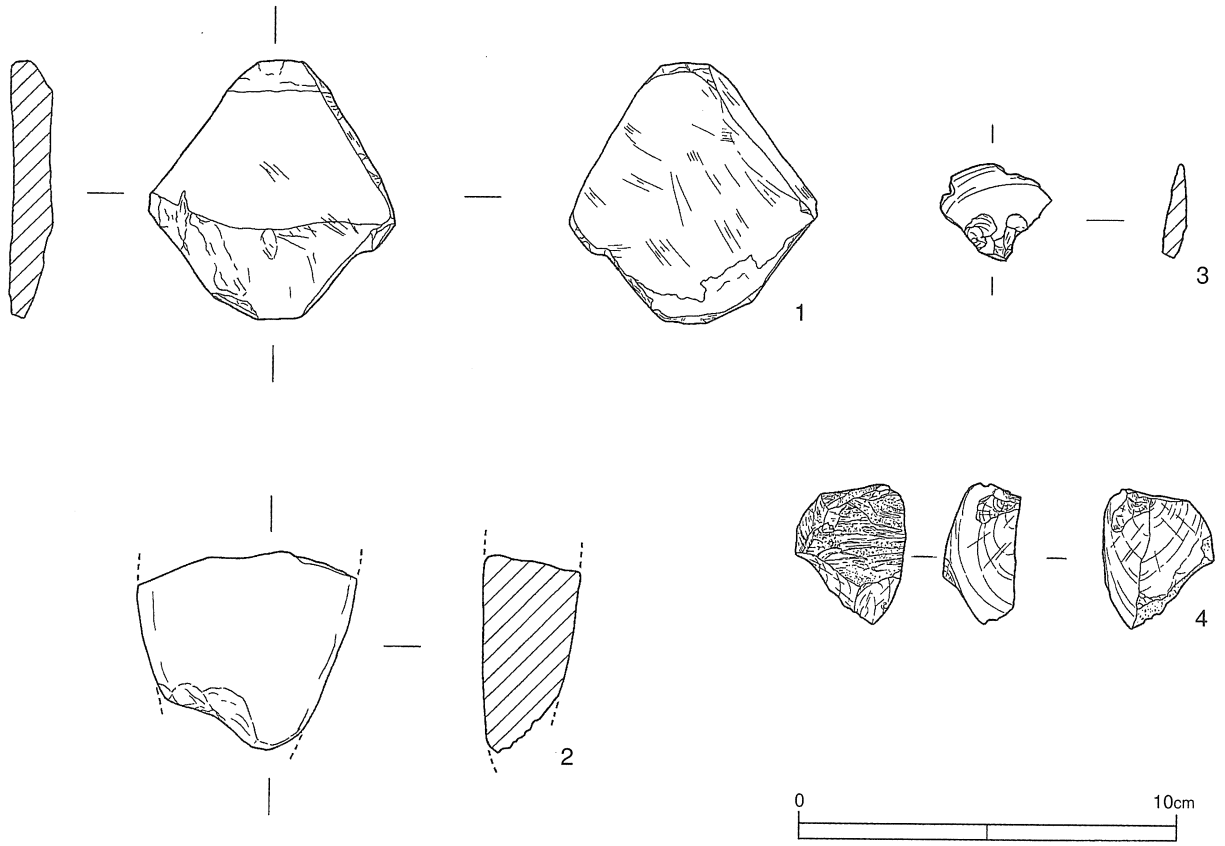
石器（第74・75図）

6淡黄灰褐色粘質土層以上からは石器及び剥片も出土している。74－1は安山岩の太型蛤刃石斧である。柄の装着部には段を有している。74－2は器種は不明であるが石器の未製品である。葉理構造をもつシルト岩であり、縁に打ち欠いた痕跡が多数残っている。74－3は石英安山岩の敲石である。もとは楕円の扁平な石であったと思われる。一部に敲いた使用痕が残っている。74－4は刃の部分が欠けているが緑色片岩の乳棒状石斧と思われる。柄の装着用の段をわずかに有す



第74図　遺構外出土石器実測図1（S=1/2）

る。75－1は泥岩の砥石である。3面で使用痕が確認できる。75－2は泥岩の端に両面から打ち欠いた痕跡が残るため、石錘と思われる。75－3は玉髄の剥片と思われるが、弧状の縁には一部刃をつけた痕跡らしきものが残っている。75－4は黒曜石の石器の未製品と思われる。黒曜石はこのほかに1cm～7cm大のものが20点程度出土しているが、明らかに石器と思われるものは認められない。



第75図　遺構外出土石器実測図2（S=1/2）

土　器　観　察　表

挿図番号	器　種	出土地点	法　量（cm）	形態・文様の特徴	手法の特徴	①胎土　②焼成　③色調	備　考
6－1	弥生土器 広口壺	A5 3層	不　明	口縁部内面及び口縁端面には列点文を施す。口縁部外面に削り出し突帯文を施す。	不明	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰白色	
6－2	弥生土器 広口壺	B5 3層	不　明	口縁端面の上端に連続刻目文を施す。	内外面：不明	①2mm以下の砂粒を多く含む ②普通　③にぶい黄褐色	
6－3	弥生土器 壺？ （胴部）	B4－B5 セクションベルト 3層	不　明	列点文の上下に羽状の連続刻目文を施す。	外面：不明 内面：ナデ	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	
6－4	弥生土器 壺 （頸部）	A5 3層	不　明	外面にヘラ描きによる羽状文を施す。	不明	①3mm以下の砂粒を多く含む ②普通 ③にぶい黄橙色	
6－5	弥生土器 甕	B4 3層	口径　16.0	頸部は「く」字状に屈曲する。	外面：不明 内面：ナデ	①3mm以下の砂粒を含む ②普通　③黒褐色	
6－6	弥生土器 甕	B5 3層	不　明	口縁端部はやや肥厚する。	内外面：ナデ	①0.5cm以下の砂粒を含む ②良好　③にぶい黄橙色	
6－7	弥生土器 甕	B5 3層	口径　21.6	口縁端部は上方へ拡張し、端面に2条の凹線文を施す。	内外面：ナデ	①2mm以下の砂粒を含む ②普通　③灰白色	
6－8	弥生土器 甕	B5 3層	不　明	口縁部外面に5条の凹線文を施す。 複合部の稜は下方に突出する。	内外面：ナデ	①0.5cm以下の砂粒を少し含む ②普通　③橙色	
6－9	弥生土器 甕	B5 3層	口径　31.4	口縁部外面に6条の凹線文を施す。 複合部の稜は下方に突出する。	口縁部 外面：ナデ？ 内面：ナデ 頸部以下 内面：ケズリ	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	器肉が厚い。
6－10	弥生土器 甕（頸部）	B6 3層	不　明	頸部の屈曲は緩やかである。	外面：ナデ 頸部以下 内面：ケズリ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	
6－11	弥生土器 甕	A5 3層	口径　21.4	口縁部の外面は無文で、複合部の稜は斜め下方に突出する。	外面：ナデ 頸部以下 内面：ケズリ？	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	
6－12	弥生土器 甕	A5 3層	不　明	胴部はやや強く張り出す。	口縁部 外面：ナデ？ 内面：ナデ 頸部以下 外面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③にぶい黄褐色	胎土が他のものとやや異なる。
6－13	弥生土器 底　部	B5 3層	底径　7.6	平底。	外面：不明 内面：ケズリ？ 底面：ナデ	①1mm以下の砂粒を多く含む ②普通 ③褐灰色	
6－14	弥生土器 底　部	B5 3層	底径　6.4	平底。	外面：ナデ 内面：ナデ？ 底面：ナデ	①4mm以下の砂粒を含む ②普通 ③浅黄橙色	
6－15	弥生土器 底　部	B5 3層	底径　6.0	平底。	不明	①1mm以下の砂粒を少し含む ②普通　③にぶい橙色	
6－16	弥生土器 底　部	A5 3層	不　明	平底？	外面：荒いハケ後ナデ？ 内面：ケズリ後ハケ？	①1mm以下の砂粒を含む ②良　③褐灰色	
6－17	弥生土器 底　部	B6 3層	底径　5.4	平底。	内外面：ナデ？ 底面：ナデ？	①2mm以下の砂粒を少し含む ②普通　③にぶい黄橙色	外面に焼成時の黒斑が残る。
6－18	弥生土器 底　部	A1 3層	不　明	平底。	外面：不明 内面：ケズリ後ナデ 底面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を多く含む ②普通　③外面・底面：黒色 内面：灰白色	
6－19	弥生土器 底　部	B6 3層	底径　6.0	平底。	内外面：ナデ？ 底面：ナデ？	①2mm以下の砂粒を含む　②普通 ③外面・底面：にぶい橙色 内面：灰黄褐色	
6－20	弥生土器 底　部	B5 3層	底径　4.4	平底。	外面：ハケ？ 内面：ナデ？ 底面：ナデ？	①0.5mm以下の砂粒を少し含む ②普通　③外面・底面：褐灰色 内面：にぶい黄橙色	
6－21	弥生土器 低脚坏？ （脚部）	A5 3層	脚端径　4.6	脚端部を薄く引き出す。	外面：ナデ 坏部 内面：ナデ 脚部 内面：ナデ？	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄色	
7－1	須恵器 高台付坏	B1 3層	不　明	底部外縁付近に外反気味に低い高台が付く。	内外面：回転ナデ 底部：糸切り	①0.5mm以下の砂粒を微量に含む ②普通　③青灰色	
7－2	須恵器 不　明 （口縁部）	B5 3層	不　明	口縁端部は平坦である。	内外面：回転ナデ	①0.2mm以下の砂粒を微量に含む ②良 ③青灰色	器肉が厚い。
13－1	弥生土器 壺 （肩部）	1区 SK01	不　明	5条の平行沈線を軸にして、ヘラ描きによる羽状文を施し、その下に削り出し突帯をめぐらす。	外面：ハケ 内面：不明	①3mm以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい黄橙色	

挿図番号	器　種	出土地点	法　量（cm）	形態・文様の特徴	手法の特徴	①胎土　②焼成　③色調	備　考
13－2	弥生土器 器台(脚部)	1区 ＳＫ０１	脚端径 13.0	脚部外面に５条の凹線文を施す。	外面：ナデ 内面：ケズリ	①３㎜以下の砂粒を少し含む ②普通　③浅黄橙色	
16－1	弥生土器 甕	1区 ＳＤ０１	不　明	口縁端面に３条の凹線文を施す。頸部は「く」字状に屈曲する。	内外面：ナデ	①0.5㎜以下の砂粒を含む ②普通　③浅黄橙色	
19－1	弥生土器 甕	1区 Ｐ１４	口径　18.0	口縁端面に３条の凹線文を施した後に、連続刻目文を施す。 頸部外面に貼り付け突帯文を施す。	内外面：ナデ	①0.5㎜以下の砂粒を少し含む ②良 ③灰黄褐色	
20－1	弥生土器 甕	1区 不明	口径　25.0	口縁端部は上方に拡張する。 頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 肩部 内外面：ハケ	①１㎜以下の砂粒を含む ②良好 ③黄灰色	口縁部外面は焼成時に黒色化している。
20－2	弥生土器 甕	1区不明	口径　16.0	口縁端部は上方に内傾気味に拡張する。外面に３条の凹線文と刻目文を施し、頸部に突帯を貼り付ける。	口縁部 内外面：ナデ 肩部 内面：ハケ	①密 ②良好 ③灰白色	
20－3	弥生土器 甕	Ａ１ ２層	不　明	口縁部外面に２条以上の沈線を施す。複合部の稜は斜め下方に突出する。肩部外面に列点文らしき文様あり。	口縁部 内面：ナデ 頸部以下 内面：ケズリ	①３㎜以下の砂粒を多く含む ②普通 ③にぶい黄橙色	外面の一部煤が付着している。
20－4	弥生土器 甕	Ａ１ ２層	口径　16.2	口縁部は端部に向かい先細りとなる断面を呈し、外面は無文である。複合部の稜は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内面：ケズリ	①1.5㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	
20－5	弥生土器 底　部	Ａ２ ２層	底径　5.6	平底。	外面：ミガキ 内面：ケズリ 底面：ナデ	①２㎜以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい黄橙色	底面の一部煤が付着している。
20－6	弥生土器 高　坏 (坏底部)	Ａ１ ２層	不　明	坏部と脚部を別々に成形し接合している。	坏部 内面：ナデ 脚部 内面：ケズリ	①３㎜以下の砂粒を多く含む ②普通 ③浅黄橙色	脚部は裾部に向かい大きく広がるようである。
20－7	弥生土器 器台or高坏 (脚裾部)	Ａ１ ２層	脚端径 18.0	裾部外面に10条の平行沈線を施す。端部は厚く丸味を帯びている。	脚裾部 内面：ケズリ	①１㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	
20－8	弥生土器 低脚坏 (脚部)	Ａ１ １層	脚端径　5.4	脚端部は先細りの断面を呈している。	坏部 内面：ナデ 脚部 内外面：ナデ	①0.5㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③灰白色	
23－1	弥生土器 広口壺	２区 ＳＫ０２	口径　28.5	口縁端部は肥厚し、端面、口縁部内面、肩部外面に波状文を施す。頸部には突帯文を貼り付ける。	口縁部 内外面：ナデ 頸部 外面：ハケ 内面：オサエとハケ 頸部以下 内外面：ハケ	①1.5㎜以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい橙色	口縁端部は焼成時に黒色化している。
23－2	弥生土器 広口壺	２区 ＳＫ０２	口径　29.0	口縁端部は下方に拡張する。	口縁部 外面：ナデ 内面：ハケ後ナデ 頸部 内外面：ハケ	①２㎜以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい黄褐色	口縁端部は焼成時に黒色化している。
23－3	弥生土器 甕	２区 ＳＫ０２	口径　23.0	口縁端部は上下に拡張し、端面に２条の凹線文と刻目文を施す。 頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内外面：ハケ	①１㎜以下の砂粒を少し含む ②良 ③にぶい黄橙色	
25－1	弥生土器 広口壺	２区 ＳＫ０４	口径　24.0	口縁端部は上下に拡張し、端面に３条の凹線文を施す。また、内面には複線斜格子文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①2.5㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③灰白色	
25－2	弥生土器 甕	２区 ＳＫ０４	口径　24.8	口縁端部は肥厚し、端面に１条の凹線文を施す。 頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ	①0.5㎜以下の砂粒を含む ②良 ③浅黄色	
25－3	弥生土器 甕	２区 ＳＫ０４	口径　17.0	口縁端部は上方に拡張し、端面に２条の凹線文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①0.3㎜以下の砂粒を含む ②普通　③浅黄橙色	
25－4	弥生土器 底　部	２区 ＳＫ０４	底径　7.8	平底。器壁は底面から胴部にかけて大きく開く。	外面：ミガキ 内面：ナデ？ 底面：ナデ	①１㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③褐灰色	内面に煤が付着している。
25－5	弥生土器 底　部	２区 ＳＫ０４	底径　5.2	平底。	外面：ミガキ 内面：ケズリ 底面：ナデ	①２㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③褐灰色	内面に煤が付着している。
27－1	弥生土器 壺	２区 ＳＫ０５	口径　27.1	口縁端部は上下に拡張し、端面に４条の凹線文を施す。	口縁部 外面：ナデ 内面：ハケ後ナデ 頸部 内外面：ハケ	①２㎜以下の砂粒を含む ②良好 ③灰白色	頸部内面はケズリを意図したような荒いハケ調整である。
27－2	弥生土器 甕	２区 ＳＫ０５	口径　32.0	口縁端部は内傾気味に上下に拡張し、端面に４条の凹線文を施す。頸部外面に突帯文を貼り付ける。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内面：ハケ	①１㎜以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい黄褐色	

挿図番号	器　種	出土地点	法　量（cm）	形態・文様の特徴	手法の特徴	①胎土　②焼成　③色調	備　考
27－3	弥生土器 甕	2区 SK05	口径　16.0	口縁部は強く外反し、端部は曲面を有する。端部付近の内面に1条の浅い凹線文を施す。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内外面：ハケ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③橙色	胴部外面の一部に煤が付着している。器肉は全体的に薄い。
27－4	弥生土器 甕	2区 SK05	口径　14.9	口縁端部は上下に拡張し、端面に4条の凹線文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を少し含む、 ②良　③灰白色	
27－5	弥生土器 甕	2区 SK05	口径　10.3	口縁端部は上方へ拡張する。	口縁部 内外面：ナデ	①2mm以下の砂粒を含む ②普通　③褐灰色	口縁部は焼成時に黒色化している。
27－6	弥生土器 甕	2区 SK05	不　明	口縁端部は上下に拡張し、端面に2条の凹線文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む　②普通 ③にぶい黄橙色	
27－7	弥生土器 器台 （受部）	2区 SK05	不　明	口縁部外面に6条の凹線文を施す。内外面に赤色塗装を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通　③にぶい赤褐色	
27－8	弥生土器 甕	2区 SK05	不　明	口縁部外面に4条以上の平行沈線を施す。 複合部の稜は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通　③灰黄色	
27－9	弥生土器 甕	2区 SK05	不　明	口縁部外面に5条以上の凹線文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通　③橙色	
27－10	弥生土器 甕	2区 SK05	不　明	口縁部外面に9条の平行沈線文を施す。 端部は丸味を帯びている。	口縁部 内外面：ナデ	①2mm以下の砂粒を含む ②普通　③浅黄橙色	
27－11	弥生土器 高坏 （脚裾部）	2区 SK05	不　明	脚裾部の外面に6条、端部に2条の沈線を施す。	外面：ナデ 内面：ケズリ 端部付近 内面：ナデ	①1mm以下の砂粒を少し含む ②良 ③灰白色	
27－12	弥生土器 底部	2区 SK05	底径　5.6	平底。	外面：ミガキ 内面：ナデ 底面：ナデ？	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③赤橙色	
27－13	弥生土器 底部	2区 SK05	底径　3.5	平底。器壁は底面から胴部にかけて大きく開く。	内外面：ナデ 底面：ナデ？	①2mm以下の砂粒を含む ②普通　③内面：にぶい黄橙色	外面・底面は焼成時に黒色化している。
28－1	土師器 甕	2区 SK05	口径　15.6	口縁端部は肥厚し、丸味を帯びている。	口縁部 内外面：ナデ	①0.2mm以下の砂粒を微量に含む ②良　③灰黄褐色	
30－1	弥生土器 広口壺	2区 SK06	不　明	口縁端部は肥厚し、端面に2条の凹線文と2段の刻目文を施す。 内面に波状文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む　②良 ③外面：褐灰色 内面：黒色	
32－1	弥生土器 甕	2区 SK07	口径　18.4	口縁端部は上方に若干拡張する。頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ハケ	①0.5mm以下の砂粒を少し含む ②良 ③にぶい黄橙色	外面の一部に煤が付着している。
32－2	弥生土器 甕	2区 SK07	口径　25.6	口縁端部は上下に拡張し、端面に2条の凹線文を施す。頸部は「く」字状に屈曲し、外面に突帯文を貼り付ける。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内面：ハケ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰黄褐色	胴部外面に焼成時の黒斑が残る。
35－1	弥生土器 高坏	2区 SK08	不　明	鍔部の上面にヘラ描きによる連続斜行文、端面に刻目文を施す。	鍔部 外面：ナデ？ 内面：ナデ	①2.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③浅黄橙色	
37－1	弥生土器 広口壺	2区 SK09	口径　26.5	口縁端部は下方に拡張し、端面に3条の凹線文を施した後に円形浮文を貼り付ける。	口縁部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい黄橙色	
37－2	弥生土器 底部	2区 SK09	底径　4.9	平底。	外面：ミガキ 内面：ナデ？ 底面：ナデ？	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	残存する内面全面に煤が付着している。
37－3	弥生土器 底部	2区 SK09	底径　6.4	平底。	外面：ミガキ 内面：ケズリ 底面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰黄褐色	外面、底面は焼成時に黒色化している。
38－1	弥生土器 高坏 （坏部）	2区 SK10	不　明	坏部の器壁はやや内傾気味に立ち上がり、端部に2条、側面に5条の凹線文を施し、上下に刻目文を施す。	坏部 外面：ミガキ 内面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を少し含む ②良 ③灰白色	
39－1	弥生土器 底部	2区 P3	底径　6.0	平底。器壁は胴部にかけて大きく開く。	外面：ナデ 内面：ナデ？ 底面：ナデ？	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	
40－1	弥生土器 甕	2区 P5	口径　18.8	口縁端部は肥厚し、端面に2条の凹線文を施す。	口縁面 内外面：ナデ 頸部以下 内外面：ナデ？	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③浅黄橙色	
41－1	弥生土器 甕 （頸部）	2区 P8	不　明	頸部外面に突帯文を貼り付け、その上にヘラ状工具あるいは貝殻により刻目文を施す。	頸部以下 外面：ミガキ？ 内面：ナデ？	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③浅黄橙色	
42－1	弥生土器 甕	2区 P15	口径　17.1	口縁部外面に6条の平行沈線を施す。 複合部の稜は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ナデ 内面：ケズリ	①1mm以下の砂粒を含む ②良好 ③浅黄色	

挿図番号	器　種	出土地点	法　量（cm）	形態・文様の特徴	手法の特徴	①胎土　②焼成　③色調	備　考
43－1	弥生土器 広口壺	2区 1層	口径　31.3	口縁端部は肥厚し、端面に2条、内面に6条の凹線文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①4㎜以下の砂粒を含む ②普通　③灰黄色	
43－2	弥生土器 広口壺	2区 1'層	口径　23.6	口縁端面に刻目文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1㎜以下の砂粒を含む ②普通　③にぶい橙色	
43－3	弥生土器 広口壺	2区 1'層	不　明	口縁端部は上下に拡張し、端面に3条の凹線文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①3㎜以下の砂粒を多く含む ②普通　③にぶい黄橙色	
43－4	弥生土器 広口壺 （頸部）	A7 2層	頸部径 12.0	頸部外面に突帯文を貼り付ける。突帯の凸部は指でつまみ上げて形成されたようである。	頸部 外面：ハケ 内面：オサエ、ミガキ	①1㎜以下の砂粒を少し含む ②良好　③外面：にぶい橙色 内面：にぶい黄橙色	
43－5	弥生土器 広口壺 （頸部）	2区 1'層	不　明	頸部外面に断面三角形の突帯文を3条施す。	頸部 外面：ナデ 内面：オサエ、ナデ	①0.5cm以下の砂粒を少し含む ②良好 ③にぶい黄橙色	
43－6	弥生土器 甕	B6 2層	口径　22.0	口縁端面に1条の凹線文を施す。頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ハケ 内面：ナデ	①1.5cm以下の砂粒を少し含む ②良 ③灰白色	
43－7	弥生土器 甕	B7 2層	口径　20.3	頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 外面：不明 内面：ナデ	①2㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	
43－8	弥生土器 甕	C7 1'層	口径　19.6	口縁端面に刻目文を施し、頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ	①0.5cm以下の砂粒を含む ②普通　③にぶい黄橙色	
43－9	弥生土器 甕	B5 1'層	口径　21.9	口縁端部は肥厚し、頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内外面：ハケ	①1㎜以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい黄橙色	
43－10	弥生土器 甕	A7 2層	口径　15.6	口縁端部は若干上下に拡張し、端面に1条の凹線文を施す。頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内外面：ハケ	①1㎜以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい黄橙色	内面の一部に煤が付着している。
43－11	弥生土器 甕	B5 1'層	口径　20.2	口縁端部は肥厚し、頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内外面：ハケ	①0.5㎜以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい黄橙色	
43－12	弥生土器 甕	B8 1'層	口径　16.6	口縁端部は肥厚し、頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ハケ 内面：ナデ	①0.5㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③外面：にぶい橙色 内面：にぶい黄橙色	口縁部外面の一部に煤が付着している。
43－13	弥生土器 甕	A7 2層	口径　24.0	口縁端部は肥厚し、端面に貝殻による刺突文を施す。頸部外面に突帯文を貼り付ける。	口縁部 内外面：ナデ	①1㎜以下の砂粒を含む ②普通　③にぶい黄橙色	
43－14	弥生土器 甕	C5 1'層	口径　20.0	口縁端部は肥厚し、端面に刻目文を2段施す。頸部外面に突帯文を貼り付ける。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内外面：ナデ	①1㎜以下の砂粒を含む ②良 ③浅黄橙色	口縁部外面の一部が焼成時に黒色化している。
43－15	弥生土器 甕	2区 2層	口径　26.4	口縁端部は上方に拡張し、端面に刻目文を施す。頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内外面：ハケ	①3㎜以下の砂粒を含む ②良好 ③にぶい黄橙色	
43－16	弥生土器 鉢？	2区 2層	不　明	口縁端部は肥厚し、外面に段を有する。	口縁部 内外面：ナデ	①1.5㎜以下の砂粒を含む ②良　③にぶい黄橙色	
44－1	弥生土器 甕	2区 1'層	口径　20.2	口縁端部は肥厚し、端面に2条の凹線文を施す。頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ナデ 内面：ハデ	①1㎜以下の砂粒を含む ②良 ③外面：にぶい黄橙色 内面：灰黄褐色	口縁部内面に焼成時の黒斑が残る。
44－2	弥生土器 甕	B6 2層	口径　15.0	口縁端部は上方に拡張し、端面に2条の凹線文を施す。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内外面：ナデ	①1㎜以下の砂粒を含む ②良 ③浅黄橙色	口縁部内面に焼成時の黒斑が残る。
44－3	弥生土器 甕	A7 2層	不　明	口縁端部は肥厚し、端面に2条の凹線文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①0.5㎜以下の砂粒を含む ②普通　③灰黄褐色	頸部付近の器肉は薄い。
44－4	弥生土器 甕	B7 1'層	不　明	口縁端部は肥厚し、端面に2条の凹線文を施した後に、刻目文を2段施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1㎜以下の砂粒を含む ②普通　③にぶい黄橙色	
44－5	弥生土器 甕	A7 2層	口径　22.6	口縁端部は上下に拡張し、端面に3条の凹線文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1㎜以下の砂粒を少し含む ②良　③にぶい黄橙色	口縁部外面が焼成時に黒色化している。
44－6	弥生土器 甕	A6 2層	口径　16.0	口縁端部は上下に拡張し、端面に2条の凹線文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1㎜以下の砂粒を含む ②普通　③にぶい黄橙色	器肉が薄い。
44－7	弥生土器 甕	B7 1'層	口径　22.0	口縁端部は上下に拡張し、3条の凹線文を施した後に、円形浮文を貼り付ける。頸部外面に突帯文を貼り付ける。内外面に赤色塗装の痕跡が残る。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ハケ 内面：ナデ	①0.5㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	

挿図番号	器　種	出土地点	法　量（cm）	形態・文様の特徴	手法の特徴	①胎土　②焼成　③色調	備　考
44－8	弥生土器 甕	A7 2層	不　明	口縁端部は上下に拡張し、端面に3条の凹線文を施した後に、円形文を貼り付ける。	口縁部 内外面：ナデ	①1㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③浅黄橙色	口縁部内面及び端面の一部が焼成時に黒色化している。
44－9	弥生土器 甕	A7 2層	口径　22.3	口縁端部は上下に拡張し、端面に3条の凹線文を施す。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ナデ 内面：ケズリ	①0.5㎜以下の砂粒を少し含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部外面及び端面の一部が焼成時に黒色化している。
44－10	弥生土器 甕	A7 2層	口径　20.4	口縁端部は上下に拡張し、端面に3条の凹線文を施した後に、刺突文を施す。頸部外面に突帯文を貼り付ける。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内面：ハケ	①0.5㎜以下の砂粒を少し含む ②良好 ③灰白色	口縁端面の一部が焼成時に黒色化している。
44－11	弥生土器 甕	A7 2層	口径　22.0	口縁端部は上方に拡張し、端面に2条の凹線文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1㎜以下の砂粒を含む　②普通 ③灰黄褐色	
44－12	弥生土器 甕	2区 1層	口径 約22.5	口縁部外面に2条以上の凹線文を施す。 複合部の稜は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ナデ 内面：ケズリ	①1.5㎜以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③にぶい黄橙色	
44－13	弥生土器 甕	B6 2層	不　明	口縁部外面に6条の平行沈線を施す。 複合部の稜は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ナデ 内面：ケズリ	①2.5㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③外面：赤面 内面：にぶい橙色	
44－14	弥生土器 甕	B6 1'層	不　明	口縁部外面に3条の凹線文を施す。複合部の稜は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ	①2㎜以下の砂粒を含む ②普通　③褐灰色	
44－15	弥生土器 甕	A7 1'層	口径　15.6	口縁部外面に4条の平行沈線を施す。 肩部外面に刺突文を施す。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内面：ケズリ	①5㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄褐色	口縁部内外面が焼成時に黒色化している。
44－16	弥生土器 甕	A7 1'層	口径　19.4	口縁部外面に5条の平行沈線を施す。 複合部の稜は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ナデ 内面：ケズリ	①3㎜以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい黄橙色	複合部の稜付近が焼成時に黒色化している。
44－17	弥生土器 甕	2区 2層	口径　18.4	口縁部外面に5条の平行沈線を施す。 複合部の稜は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ハケ？ 内面：ケズリ	①2.5㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③浅黄橙色	口縁部外面の一部及び内面が焼成時に黒色化している。
44－18	弥生土器 甕	A5 1層	口径　16.4	口縁部は端部に向かい先細りの断面を呈しており、外面に4条以上の平行沈線を施す。 複合部の稜は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内面：ケズリ？	①2.5㎜以下の砂粒を含む ②普通　③外面：にぶい黄橙色 内面：灰白色	
44－19	弥生土器 甕	B7 2層	口径　15.0	口縁端部に平坦面を有する。複合部は丸味を持ち、稜はない。	口縁部 外面：ナデ 内面：ミガキ 頸部以下 内面：ケズリ	①1㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄褐色	
44－20	弥生土器 甕	B7 1'層	口径　12.0	口縁部は先細りの断面を呈す。複合部の稜は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内面：ケズリ	①1㎜以下の砂粒をを少し含む ②普通 ③にぶい黄橙色	
44－21	弥生土器 甕	A7 1層	不　明	口縁端部は丸味を帯びて肥厚する。複合部の稜は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内面：ケズリ	①1㎜以下の砂粒を含む　②普通 ③にぶい黄橙色	複合部の稜付近が焼成時に黒色化している。
44－22	弥生土器 甕	A6 2層	不　明	口縁部は先細りの断面呈す。複合部の稜は斜め下方にと出する。	口縁部 内外面：ナデ	①2㎜以下の砂粒をやや多く含む ②普通　③にぶい黄橙色	
44－23	弥生土器 甕	B6 1'層	不　明	口縁端部は丸味を帯びている。 複合部の稜は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ	①2㎜以下の砂粒を微量に含む ②普通　③にぶい黄橙色	
44－24	弥生土器 甕 （胴部）	2区 2層	不　明	胴部最大径付近に貝殻による刺突文を2段施す。	胴部 外面：ハケメ 内面：ケズリ？	①2㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	
45－1	弥生土器 底　部	B6 2層	底径　10.6	平底。	外面：ミガキ 内面：不明 底面：ナデ	①7㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	器肉が厚い。
45－2	弥生土器 底　部	2区 1'層	底径　6.4	平底。	外面：ミガキ 内面：ケズリ？ 底面：ナデ	①2.5㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	外面及び底面の一部が焼成時に黒色化している。 底の器肉が薄い。
45－3	弥生土器 底　部	2区 2層	底径　7.0	平底。	外面：ミガキ 内面：ケズリ 底面：ナデ	①1㎜以下の砂粒を含む ②良 ③浅黄橙色	内面の一部が焼成時に黒色化している。
45－4	弥生土器 底　部	B6 2層	底径　7.5	平底。	外面：ナデ 内面：ケズリ 底面：ナデ	①1㎜以下の砂粒を含む　②良 ③外面：にぶい橙色 内面：灰黄褐色	底面の一部が焼成時に黒色化している。

挿図番号	器　種	出土地点	法　量（cm）	形態・文様の特徴	手法の特徴	①胎土　②焼成　③色調	備　考
45－5	弥生土器 底　部	A7 2層	底径　7.6	平底。	外面：ナデ 内面：ケズリ 底面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰黄色	
45－6	弥生土器 底　部	B6 2層	底径　6.0	平底。	外面：ハケ 内面：ケズリ 底面：不明	①2mm以下の砂粒を含む　②普通 ③外面：にぶい褐色 内面：褐灰色	
45－7	弥生土器 底　部	C7 1'層	底径　6.7	平底。	外面：ハケ 内面：ケズリ 底面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③外面：にぶい黄橙色 内面：灰黄褐色	
45－8	弥生土器 底　部	C7 1'層	底径　7.6	平底。	外面：ナデ 内面：ケズリ 底面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む　②良 ③外面：浅黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
45－9	弥生土器 底　部	B6 2層	底径　10.2	平底。	外面：ナデ？ 内面：ケズリ？ 底面：ナデ？	①3mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰白色	
45－10	弥生土器 底　部	C7 1'層	底径　7.4	平底。	外面：ナデ 内面：ナデ？ 底面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい黄橙色	外面及び底面の一部が焼成時に黒色化している。
45－11	弥生土器 底　部	B7 2層	底径　8.3	平底。器壁は胴部にかけて大きく開く。	外面：ミガキ 内面：ナデ 底面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい黄橙色	外面及び底面の焼成時に黒色化している。
45－12	弥生土器 底　部	B6 2層	底径　9.2	平底。	外面：ナデ？ 内面：ケズリ 底面：ナデ？	①4mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰白色	
45－13	弥生土器 底　部	B7 1'層	底径　5.0	平底。	外面：ミガキ 内面：ナデ 底面：ミガキ？	①4mm以下の砂粒を含む　②良 ③外面：褐灰色 内面：灰白色	底面の一部が焼成時に黒色化している。
45－14	弥生土器 底　部	A5 1層	底径　5.2	平底。	外面：ミガキ 内面：ナデ 底面：ナデ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	
45－15	弥生土器 底　部	B7 2層	底径　5.8	平底。	外面：不明 内面：ケズリ 底面：ナデ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい橙色	
45－16	弥生土器 底　部	B6 1'層	底径　10.8	平底。	外面：ナデ 内面：不明 底面：ナデ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③褐灰色	
45－17	弥生土器 甕	2区 不明	口径　5.8	口縁部は単純に外反する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ハケ 内面：ミガキ？	①1.5mm以下の砂粒子を含む ②普通 ③灰黄色	小形。 外面の一部に煤が付着している。
45－18	弥生土器 高　坏 （坏部）	B5 1'層	不　明	坏部の器壁はやや内傾気味に立ち上がり、端部は平坦面を有する。側面に3条の凹線文を施す。	坏部 外面：ナデ 内面：ナデ	①2.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	
45－19	弥生土器 高坏or器台 （脚部）	2区 1層	脚端径 14.8	脚裾部の端部は若干肥厚し丸味を帯びる。外面に数条沈線が施されていたようである。	脚部 外面：ナデ？ 内面：不明	①4mm以下の砂粒を含む ②普通 ③浅黄色	
45－20	弥生土器 低脚坏 （脚部）	2区 1'層	脚端径　4.6	脚端部は先細りの断面を呈している。	坏部 内面：ナデ 脚部 外面：ナデ 内面：ケズリ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③浅黄橙色	
45－21	弥生土器 注口土器 （注口）	A5 1'層	注口径　0.9	器壁は先細りの断面を呈す。	外面：ミガキ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通　③にぶい黄橙色	
45－22	弥生土製品 分胴形 土製品	B6 1'層	横幅　6.0 （推定） 厚さ　0.9	表面を縁取るように列点文を施す。断面は反りを呈している。	不明	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄色	表面は焼成時に黒色化している。 胎土は他の土器と似ている。
46－1	陶磁器 皿or碗	2区 1'層	不　明	口縁部は波状口縁類似の突起を持つ。染付があるが絵柄は不明である。	内外面：施釉	①緻密　②良好　③釉：白色 地：白色	
46－2	陶磁器 皿？(底部)	2区 1'層	不　明	口縁部外面はくびれる。	内外面：施釉	①緻密　②良好 ③釉：灰オリーブ色 地：灰白色	
46－3	陶磁器 碗（底部）	A7 1'層	高台径　6.4	厚く高い高台を削り出している。	内外面：施釉	①緻密　②良好 ③釉：オリーブ灰色 地：灰白色	
46－4	陶磁器 底　部	B7 1'層	高台径　4.3	削り出し高台。	内面：一部施釉	①0.2mm以下の砂粒を含む ②良好 ③釉：浅黄色 地：にぶい橙色	唐津焼き？
46－5	陶磁器 底　部	2区 1'層	高台径　4.2	削り出し高台。	内面：一部施釉	①0.2mm以下の砂粒を微量に含む ②良好　③釉：灰白色 地：にぶい黄橙色	唐津焼き？

挿図番号	器　種	出土地点	法　量（cm）	形態・文様の特徴	手法の特徴	①胎土　②焼成　③色調	備　考
46－6	陶磁器 碗 （底　部）	A5 1’層	不　明	削り出し高台。	内面：施釉	①0.2mm以下の砂粒を微量に含む ②良好　③釉：灰オリーブ色 地：灰黄褐色	唐津焼き？
46－7	土師器 坏	A7 1’層	口径：11.0 底径：5.0 器高：3.3	器壁は底部から口縁部にかけて大きく開き、先細りの断面を呈す。	内外面：回転ナデ？ 底部：ヘラおこし？	①4mm以下の砂粒を少し含む ②普通 ③にぶい黄橙色	
46－8	陶磁器 不　明 （口縁部）	A7 1’層	不　明	口縁端部は外へ折り返し丸味を帯びている。	内外面：施釉	①緻密　②良好 ③釉：オリーブ黄色 地：灰白色	
46－9	土師器 甕	B6 1’層	不　明	口縁端部は肥厚し丸味を帯びている。	口縁部 外面：ナデ 内面：ミガキ	①0.2mm以下の砂粒を微量に含む ②良 ③にぶい黄橙色	内面の一部が焼成時に黒色化している。
50－1	弥生土器 甕	H8年度 SK01	口径　16.2	口縁端部は上方に拡張し、端面の1条の凹線文を施す。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ハケ？ 内面：ナデ？	①1mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③にぶい黄橙色	
50－2	弥生土器 甕	H8年度 SK01	口径　16.8	口縁部は単純に外反し、端部は平坦である。	口縁部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通　③にぶい黄橙色	
50－3	弥生土器 甕	H8年度 SK01	不　明	口縁端部は肥厚し、端面に2条の凹線文と刻目文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②普通　③にぶい黄橙色	内外面は大部分が焼成時に黒色化している。
53－1	弥生土器 甕	H8年度 SK02	口径　18.4	口縁端部は上方に若干拡張し、端面に1条の凹線文を施す。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ナデ 内面：ハケ	①2mm以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい黄橙色	外面は大部分が焼成時に黒色化している。
53－2	弥生土器 甕	H8年度 SK02	口径　18.1	口縁端部は内傾して上方に拡張し、端面に2条の凹線文を施す。胴部には列点文を施す。	口縁部 内外面：ナデ 胴部上半 内外面：ハケ 胴部下半 外面：ミガキ 内面：ケズリ	①2.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	内外面は大部分が焼成時に黒色化している。外面の一部に煤が付着している。
53－3	弥生土器 底　部	H8年度 SK02	底径　5.2	平底。	外面：ミガキ 内面：ケズリ 底面：ナデ	①4mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	内面および底面の一部が焼成時に黒色化している。 底の器肉が厚い。
53－4	弥生土器 甕	H8年度 SK02	口径　25.9	口縁端部は上下に拡張し、端面に2条の凹線文を施す。頸部外面に突帯文を貼り付ける。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ハケ？ 内面：ハケ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③浅黄橙色	
53－5	弥生土器 甕	H8年度 SK02	胴部最大径 27.2 底径　7.3	胴部最大径付近に列点文を施す。	胴部上半 外面：ハケ 内面：オサエ 胴部下半 外面：ミガキ 内面：ケズリ 底部 内面：オサエ、ナデ	①2.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③外面：淡赤橙色 内面：浅黄橙色	外面の一部に煤が付着している。
55－1	弥生土器 壺or甕	H8年度 SK03	不　明	口縁端部は上下に拡張し、2条の凹線文と貝殻による刻目文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②普通　③にぶい黄橙色	
55－2	弥生土器 底　部	H8年度 SK03	底径　6.2	平底。	外面：ミガキ 内面：ケズリ？ 底面：ナデ	①2.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	外面および底面の一部が焼成時に黒色化している。
55－3	弥生土器 底　部	H8年度 SK03	底径　8.6	平底。	外面：ミガキ 内面：オサエ、ナデ？ 底面：ナデ	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	外面および底面の一部が焼成時に黒色化している。 底の器肉が薄い。
58－1	弥生土器 甕	H8年度 SX02	口径　20.4	口縁端部は若干肥厚し、端面に1条の凹線を施す。頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ハケ 内面：ナデ	①3.5mm以下の砂粒を多く含む ②普通 ③灰黄褐色	
58－2	弥生土器 甕	H8年度 SX02	口径　16.6	口縁端部は若干上方に拡張する。頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内外面：ハケ	①3mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰黄褐色	内面の大部分が焼成時に黒色化している。
58－3	弥生土器 甕	H8年度 SX02	口径　18.8	口縁端部は上方に拡張し、端面に1条の凹線文を施す。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ハケ？ 内面：ハケ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	口縁部外面の一部が焼成時に黒色化している。
58－4	弥生土器 甕	H8年度 SX02	口径　17.7	口縁端部は肥厚し、端面に2条の凹線文と刻目文を施す。 頸部外面に突帯文を貼り付ける。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ナデ？ 内面：不明	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰白色	

挿図番号	器　種	出土地点	法　量（cm）	形態・文様の特徴	手法の特徴	①胎土　②焼成　③色調	備　考
58－5	弥生土器 甕	H8年度 SX02	口径　18.8	口縁端部は下方に拡張し、端面に2条の凹線文を施す。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内外面：ハケ	①2.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい褐色	外面全面に煤が付着している。 頸部内面に口縁部形成時の段を有する。
58－6	弥生土器 底　部	H8年度 SX02	底径　5.0	平底。	外面：ミガキ 内面：ナデ 底面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰黄褐色	外面及び底面の一部が焼成時に黒色化している。
58－7	弥生土器 底　部	H8年度 SX02	底径　5.1	平底。	外面：ミガキ 内面：ケズリ 底面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	
60－1	弥生土器 甕	H8年度 P3	口径　17.0	口縁端部は内傾して上方に拡張し、端面に2条の凹線を施す。 頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内外面：ハケ	①0.2mm以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい黄橙色	内外面の一部が焼成時に黒色化している。
60－2	弥生土器 甕	H8年度 P3	不　明	口縁端部は上方へ若干拡張し、端面に1条の凹線を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通　③浅黄橙色	外面の大部分が焼成時に黒色化している。
60－3	弥生土器 甕	H8年度 P3	不　明	口縁端部は上方へ若干拡張し、端面に1条の凹線文と刻目文を施す	口縁部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む　②普通 ③にぶい黄橙色	
60－4	弥生土器 甕	H8年度 P3	不　明	口縁端部は内傾して上方に拡張し、端面に2条の凹線文を施す。 頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内外面：ハケ	①4mm以下の砂粒を少し含む ②良 ③にぶい黄橙色	
60－5	弥生土器 甕 （胴部）	H8年度 P3	胴部最大径 22.3	胴部は倒卵形を呈す。	胴部 外面：ハケ後ミガキ 内面：ハケ後ナデ	①4mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰黄褐色	外面の一部が焼成に黒色化している。 内面に煤が付着している。
60－6	弥生土器 甕 （胴部）	H8年度 P3	不　明	――――	胴部 外面：ハケ？ 内面：ハケ	①3mm以下の砂粒を含む ②普通 ③浅黄橙色	外面の一部に煤が付着している。
62－1	弥生土器 甕	H8年度 SD02	口径　15.0	口縁端部は若干肥厚し、端面は平坦である。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内外面：ハケ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄褐色	内外面に煤が付着している。
65－1	弥生土器 直口壺	H8年度 SD04	不　明	口縁部は頸部からほぼ垂直して立ち上がり、端部は肥厚し、平坦面を有する。	口縁部 内外面：ナデ？	①1mm以下の砂粒を含む ②普通　③灰黄色	
65－2	弥生土器 甕	H8年度 SD04	不　明	口縁端部は上方へ若干拡張し、端面は平坦である。頸部外面に突帯文を貼り付ける。	口縁部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	口縁部外面に端面が焼成時に黒色化している。
65－3	弥生土器 低脚坏	H8年度 SD04	脚端径　5.4	脚部は先細りの断面を呈している。1ヶ所に穿孔を有する。	坏部 内外面：ナデ 脚部 外面：ナデ 内面：ケズリ？	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	
66－1	弥生土器 広口壺	H8年度 SD05	口径　32.0	口縁端部は下方に拡張し、端面に3条の凹線文、3段の刻目文、円形浮文を施す。内面に斜格子文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③灰白色	
66－2	弥生土器 甕	H8年度 SD05	口径　19.2	口縁端部は肥厚し、丸味を帯び、外面に5条以上の平行沈線を施す。複合部の稜は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ナデ 内面：ケズリ	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄橙色	
66－3	弥生土器 甕	H8年度 SD05	不　明	口縁部内面に2条の沈線を施す。 複合部の稜は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ	①2.5mm以下の砂粒をやや多く含む　②普通　③にぶい黄橙色	
66－4	弥生土器 甕	H8年度 SD05	不　明	口縁端部は上方に拡張し、端面に3条の凹線を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①2mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通　③にぶい黄橙色	
66－5	弥生土器 底　部	H8年度 SD05	不　明	平底。	外面：ナデ？ 内面：ケズリ 底面：ナデ	①1mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③灰白色	
66－6	弥生土器 底　部	H8年度 SD05	底径　5.6	上げ底。	外面：ナデ 内面：ケズリ 底面：ナデ？	①0.3mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	底面は焼成時に黒色化している。
67－1	弥生土器 広口壺 （頸部）	H8年度 SD06	頸部径 14.0	頸部の器壁は外傾気味に立ち上がる。 外面に突帯文を施す。	頸部 外面：ハケ 内面：ナデ	①1.5mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通　③にぶい黄橙色	
67－2	弥生土器 甕	H8年度 SD06	口径　20.0	口縁部は単純に外反し、端面は平坦である。頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内外面：ハケ	①3mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	
67－3	弥生土器 甕	H8年度 SD06	頸部径 15.3	口縁部は単純に外反する。	口縁部 外面：不明 内面：ナデ 頸部以下 外面：不明 内面：ナデ	①0.3mm以下の砂粒を少し含む ②普通 ③にぶい黄褐色	内面は焼成時に黒色化している。 胎土が他のものとやや異なる。

挿図番号	器　種	出土地点	法　量（cm）	形態・文様の特徴	手法の特徴	①胎土　②焼成　③色調	備　考
67－4	弥生土器 甕	H8年度 SD06	不　明	口縁部は単純に外反し、先細りの断面を呈す。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内外面：ナデ？	①0.2mm以下の砂粒を微量に含む ②普通 ③にぶい黄褐色	外面の大部分が焼成時に黒色化している。胎土が他のものとやや異なる。
67－5	弥生土器 不　明	H8年度 SD06	不　明	端部は若干肥厚し、丸味を帯びている。	内外面：ナデ	①2mm以下の砂粒を含む ②普通　③灰黄褐色	外面は焼成時に黒色化している。
70－1	弥生土器 広口壺	A14 6層	口径　29.3	口縁端部は下方に拡張し、端面に2本1組の斜行文を施す。内面には複線斜格子文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通　③灰白色	口縁端面に焼成時の黒斑が残る。
70－2	弥生土器 広口壺	A11 6層	口径　28.4	口縁端部は下方に拡張し、端面に3条の凹線文、3個の円形浮文を施す。 内面には3個の円形浮文、突帯文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①2.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③浅黄橙色	
70－3	弥生土器 広口壺	B11 6層	口径　24.6	口縁端部は下方に拡張し、端面に4条の凹線文、2段の刻目文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通　③にぶい黄橙色	
70－4	弥生土器 広口壺	A11 1'層	不　明	口縁端部は上下に拡張し、端面に3条、内面に5条の凹線文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①2mm以下の砂粒を含む ②良　③灰褐黄色	
70－5	弥生土器 広口壺	A10 不明	口径　21.7	口縁端部は肥厚し、端面は平坦である。内面に突帯文、穿孔、複線斜格子文、列点文を施す。	口縁部 内外面：ナデ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	
70－6	弥生土器 壺	A12 6層	口径　17.6	口縁端面に平坦面を有す。口縁部外面に波状文、頸部外面に8条以上の沈線を施す。 複合部の稜は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部 外面：ナデ 内面：ケズリ	①3mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	口縁部内面の一部が焼成時に黒色化している。
70－7	弥生土器 壺	A14 6層	口径　10.7	口縁部は単純に外反する。外面に赤色塗装を施す。	口縁部 内外面：ナデ 胴部 外面：ハケ 内面：ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③外面：橙色 内面：浅黄橙色	
70－8	弥生土器 直口壺	A13 6層	口径　8.2	口縁部はやや外反して立ち上がる。	口縁部 内外面：ナデ 胴部 外面：ナデ 内面：ハケ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③浅黄橙色	
70－9	弥生土器 壺？ （胴部）	A12 6層	不　明	胴部外面に2条の沈線、刻目文、棒状浮文、斜格子文、円形浮文を施す。	胴部 外面：ナデ？ 内面：ナデ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	
70－10	弥生土器 壺？ （頸部？）	A11 6層	不　明	頸部外面に4段の列点文、6条の沈線、羽状文あるいは綾杉文を施す。	頸部 外面：ハケ？ 内面：オサエ、ナデ	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	
71－1	弥生土器 甕	A14 6層	口径　25.8	口縁端部は肥厚し、端面に2条の凹線文を施す。頸部は「く」字状に屈曲し、外面に突帯文を施す。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ハケ？ 内面：ナデ？	①3mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	内外面の大部分に煤が付着している。
71－2	弥生土器 甕	A10 6層	口径　27.0	口縁端部は内傾して上下に拡張し、端面に2条の凹線文を施す。 頸部は「く」字状に屈曲し外面に突帯文を施す。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ナデ 内面：ナデ？	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③浅黄橙色	
71－3	弥生土器 甕（頸部）	A11 6層	頸部径 25.0	頸部は「く」字状に屈曲し、外面に突帯文を施す。	頸部以下 内外面：ハケ？	①1mm以下の砂粒を含む ②普通　③赤橙色	
71－4	弥生土器 甕	A13 6層	口径　26.6	口縁部外面に8条以上の平行沈線を施す。 複合部の稜は斜め下方に突出する。頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内面：ケズリ	①1.5mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③にぶい黄橙色	
71－5	弥生土器 甕	A11 6層	口径　31.5	口縁端部は肥厚し、端面は平坦である。複合部の稜は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ	①1mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通　③にぶい橙色	
71－6	弥生土器 甕	A10 6層	不　明	口縁端部は上方に拡張し、端面は平坦である。頸部は「く」字状に屈曲する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内外面：ハケ	①0.5mm以下の砂粒を少し含む ②良 ③にぶい黄橙色	器肉は全体的に薄い。
71－7	弥生土器 甕	A14 6層	不　明	口縁端部は上方に拡張し、端面は平坦である。頸部の屈曲は緩い。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内外面：ナデ？	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③浅黄橙色	
71－8	弥生土器 甕or壺	A11 6層	不　明	口縁部外面に12条以上の平行沈線を施す。 複合部の稜は斜め下方に突出する。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 外面：ナデ 内面：ケズリ	①2mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③にぶい黄橙色	
71－9	弥生土器 底　部	A11 6層	底径　9.3	平底。	外面：ミガキ 内面：ハケ 底面：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	

挿図番号	器　種	出土地点	法　量（cm）	形態・文様の特徴	手法の特徴	①胎土　②焼成　③色調	備　考
71－10	弥生土器 底　部	A11 6層	底径　6.8	平底。	外面：ナデ 内面：ケズリ 底面：ナデ	①2㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③浅黄橙色	外面及び底面の大部分は焼成時に黒色化している。
71－11	弥生土器 底　部	A14 6層	底径　4.3	平底。	外面：不明 内面：ケズリ 底面：ナデ	①4㎜以下の砂粒を含む ②やや不良 ③灰黄色	全面で焼成時の黒色化が目立つ。 外面の一部に煤が付着している。
71－12	弥生土器 底　部	A10 6層	底径　4.6	平底。	外面：ミガキ 内面：ナデ 底面：ナデ	①3㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい黄橙色	底面の大部分が焼成時に黒色化している。 底の器肉が厚い。
71－13	弥生土器 底　部	A12 6層	底径　5.7	上げ底。	外面：ナデ 内面：ナデ、オサエ 底面：ナデ	①1㎜以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③にぶい黄褐色	内面の一部が焼成時に黒色化している。
71－14	弥生土器 底　部	A11 1層	底径　4.0	上げ底。	外面：ミガキ？ 内面：ナデ 底面：オサエ？	①0.5㎜以下の砂粒をやや多く含む　②普通　③外面：にぶい橙色 内面：灰黄色	
71－15	弥生土器 高　坏 （詰め土盤）	B10 1層	径　3.8	外面の中央に径6㎜、深さ5㎜の穴を有する。	内外面：ナデ	①0.2㎜以下の砂粒を少し含む ②普通 ③にぶい黄橙色	
71－16	弥生土器 高坏(坏部)	A12 6層	口径　18.0	口縁端部はほぼ水平方向に拡張し、端面に複線斜格子文を施す。	坏部 内外面：ナデ	①2.5㎜以下の砂粒を少し含む ②普通　③浅黄橙色	
71－17	弥生土器 高　坏 （坏部）	A11 6層	口径　32.4	口縁端部はほぼ水平方向に拡張し、端面に4条の凹線文、刻目文を施す。外面に削り出し突帯を施す。	坏部 内外面：ナデ	①1㎜以下の砂粒を少し含む ②普通 ③浅黄色	
71－18	弥生土器 鉢？	A12 6層	口径　29.8	口縁部は「く」字状にほぼ水平に屈曲する。 胴部外面に削り出し突帯を施す。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内外面：ナデ	①1㎜以下の砂粒を少し含む ②普通 ③にぶい黄橙色	口縁部内面の一部が焼成時に黒色化している。71－19と同一個体の可能性あり。
71－19	弥生土器 鉢？	B12 6層	不　明	口縁部は「く」字状にほぼ水平に屈曲する。胴部外面に削り出し突帯を施す。	口縁部 内外面：ナデ 頸部以下 内外面：ナデ	①2.5㎜以下の砂粒を少し含む ②普通 ③灰白色	71－18と同一個体の可能性あり。
72－1	弥生土器 把　手	A10 6層	長さ　5.3 断面径　1.8	断面はほぼ円形。 中央部縦方向に5条の沈線を施す。	表面：ハケ	①0.5㎜以下の砂粒を含む ②普通　③にぶい黄橙色	
72－2	弥生土器 把　手	A12 1'層	長さ　5.0 断面径　1.4	断面はほぼ円形。	表面：ヘラ調整？	①1㎜以下の砂粒をやや多く含む ②普通　③褐灰色	
72－3	弥生土器 把　手	A10 1層	長さ　5.9 断面径　2.0	断面はほぼ円形。	不明	①2㎜以下の砂粒を少し含む ②普通　③浅黄橙色	
72－4	弥生土器 蓋or低脚坏	B10 6層	径　3.5	1ヶ所穿孔を有する。	外面：ナデ 内面：ナデ？	①1㎜以下の砂粒を含む ②普通　③灰白色	
72－5	弥生土製品 球形土製品	A11 6層	径　1.6	完全な球形であったと思われる。 穿孔はない。	調整なし。	①0.2㎜以下の砂粒を微量に含む ②普通　③灰黄色	
72－6	弥生土製品 土　錘	B11 6層	長さ　4.5 幅　2.6 孔径　0.8	管状防錘形土錘。	表面：オサエ？	①1㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄色	
72－7	弥生土器 注口土器 （注口）	A11 6層	注口径　1.0	器壁は先細りの断面を呈す。	外面：不明	①1㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③浅黄色	
72－8	弥生土製品 分銅形 土製品	A13 1'層	横幅　3.7 （推定） 厚さ　1.0	施文はないと思われる。裏面は平坦である。	不明	①2㎜以下の砂粒を少し含む ②普通 ③にぶい橙色	胎土が他の土器と異なる。
72－9	弥生土製品 分銅形 土製品	A11 6層	厚さ　1.0	一部に表面を縁取る列点文が認められる。断面は反りを呈している。	不明	①0.5㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③灰黄色	胎土は他の土器と似ている。
72－10	弥生土製品 分銅形 土製品	A10 1層	厚さ　1.1	表面を縁取る列点文が認められる。 上端部から裏面に抜ける小円孔を2つ有する。断面は反りを呈している。	表面：ナデ？ 裏面：ナデ？	①0.5㎜以下の砂粒を含む ②普通 ③灰白色	胎土は他の土器と似ている。
73－1	須恵器 高台付坏	B11 1'層	高台径 10.4	高台の端部に1条溝を有しており、断面が凹状になっている。	内外面：回転ナデ 底面：回転糸切り後ナデ？	①0.2㎜以下の砂粒を微量に含む ②良 ③灰色	
73－2	須恵器 不　明 （口縁部？）	A11 1'層	不　明	外面に高台あるいは突帯状のものが付く。	内外面：回転ナデ	①0.2㎜以下の砂粒を微量に含む ②良 ③灰白色	

石　器　観　察　表

挿図番号	出土地点	器　種	遺存状態	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備　考
8－1	B4 3層	浮　子　？	一部欠	軽　石	4.6	4.4	2.3	19.0	中央に筋状の溝あり。
8－2	B6 2層	不　明	完	安山岩	4.2	3.1	2.5	44.2	1ヶ所に凹みあり。
33－1	2区 SK07	砥　石	一部欠	凝灰岩	12.5	7.6	4.6	750.0	1面に研磨面が残り、3条の磨き筋を有する。
33－2	2区 SK07	偏　平 片刃石斧	一部欠	千枚岩	6.2	3.4	7.0	27.0	斧身に磨き筋のような溝を有する。
33－3	2区 SK07	敲石or磨石	完	安山岩	11.8	9.8	4.2	757.0	片面と縁に使用痕が残る。
33－4	2区 SK07	台　石	完	安山岩	14.8	13.6	6.5	2100.0	片面の中央付近に集中して使用痕が残る。
47－1	2区 2層	凹　石	完	安山岩	10.4	9.2	4.2	735.0	両面の中央に凹みを有する。片面に磨いた痕跡、縁に敲いた痕跡が残る。
47－2	B7 1'層	石　核	――	碧　玉	4.8	3.3	3.1	58.8	剥離面が多数残る。
47－3	A6 1'層	砥　石	一部欠	流紋岩	7.2	4.6	2.2	118.0	2面に研磨面を有し、2ヶ所に刃跡を残す。
47－4	2区 2層	未製品？	――	桂乳石	2.8	2.3	1.4	7.5	一部に剥離面が残る。
54－1	H8年度 SK02	砥　石	一部欠	頁岩or泥岩	8.3	2.9	2.4	125.0	4面に研磨面が残る。
68－1	H8年度 SD06	不　明	一部欠	凝灰岩	6.6	5.1	2.0	97.1	使用痕は観察できない。
69－1	H8年度 P1	磨石？	完	安山岩	7.5	6.6	1.2	98.9	片面に研磨面が残る。
69－2	H8年度 P1	砥　石	完	安山岩	11.1	2.4	1.6	69.0	4面に研磨面が残る。
74－1	B13 6層	大　型 蛤刃石斧	一部欠	安山岩	13.5	6.2	4.5	600.0	柄の装着部に段を有する。
74－2	A10 6層	未製品	――	シルト岩	10.6	7.7	3.3	571.0	縁に剥離面が多数残る。
74－3	A12 6層	敲　石	一部欠	石英安山岩	6.4	3.8	4.5	139.0	縁に使用痕が残る。
74－4	A11 6層	乳棒状石斧	一部欠	緑色片岩	12.5	4.6	4.0	341.0	柄の装着用の段をわずかに有する。
75－1	A11 6層	砥　石	一部欠	泥　岩	6.8	6.5	0.9	69.1	3面に研磨面が残る。
75－2	A12 6層	石錘？	一部欠	泥　岩	5.2	5.6	2.3	87.0	端に両面から打ち欠いた痕跡が残る。
75－3	B13 6層	未製品？	――	玉　髄	2.5	2.9	0.5	3.1	弧状の縁に一部刃をつけた痕跡らしきものが残る。
75－4	H8年度 不明	未製品	――	黒曜石	3.7	2.9	1.9	15.9	剥離面が数カ所に残る。

第７章　白枝荒神遺跡における花粉，プラント・オパール分析

川崎地質株式会社　渡　邉　正　巳

１．はじめに

本報告は、出雲市教育委員会が遺跡周辺地域での古環境推定、特に遺跡内で検出された「腐植層」の堆積環境推定のために川崎地質株式会社に委託して実施した花粉分析、プラント・オパール分析の概報である。

白枝荒神遺跡は島根県中部の出雲市西部に位置し、西に浜山砂丘、南に神戸川を望む。

２．試料について

図１に示す調査区内の２地点において、出雲市教育委員会との協議の上、川崎地質株式会社が分析用試料を採取した。各地点の柱状図、および試料採取層準を図２、３の花粉ダイアグラム中に示す。No.２地点は「腐植層」の堆積環境を推定する目的で分析を実施し、「腐植層」の１試料のみの分析を行った。花粉分析はNo.１、２地点の全試料を対象とし、プラント・オパール分析はNo.２地点を対象として実施した。

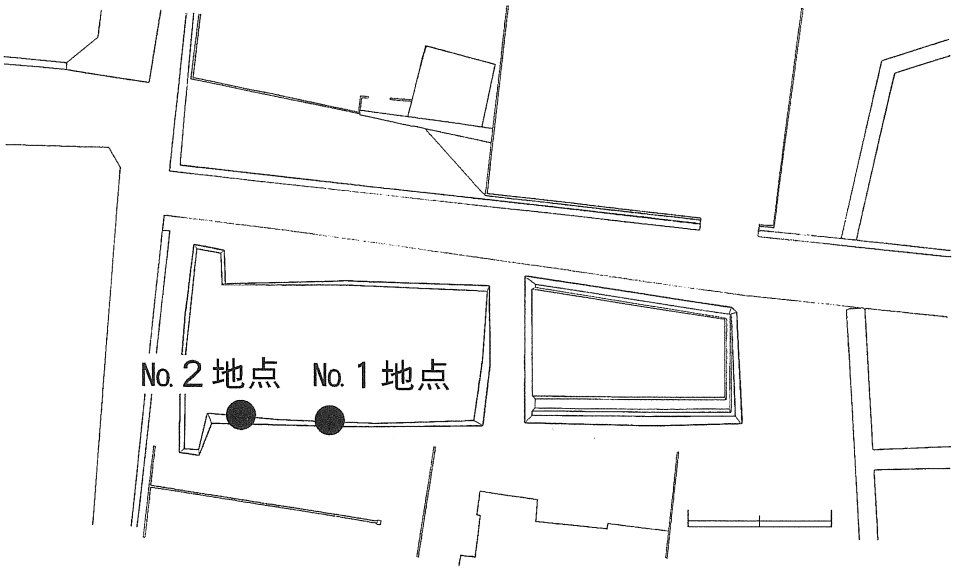


図１　試料採取地点

３．分析方法および分析結果

（１）　分析方法

花粉分析処理は渡辺（1995）に従い、プラント・オパール分析処理は藤原（1976）のグラス・ビーズ法に従った。

（２）　分析結果

花粉分析結果を図２、３、プラント・オパール分析結果を図４に示す。

花粉ダイアグラムでは、木本花粉を基数とし各種類の出現率を百分率で算出したものをスペクトルで表した。また木本花粉検出数の少ない試料については、出現した種類を＊で示した。

プラント・オパールダイアグラムでは、１ｇ当たりの検出数をスペクトルで表した。

白枝荒神遺跡2区

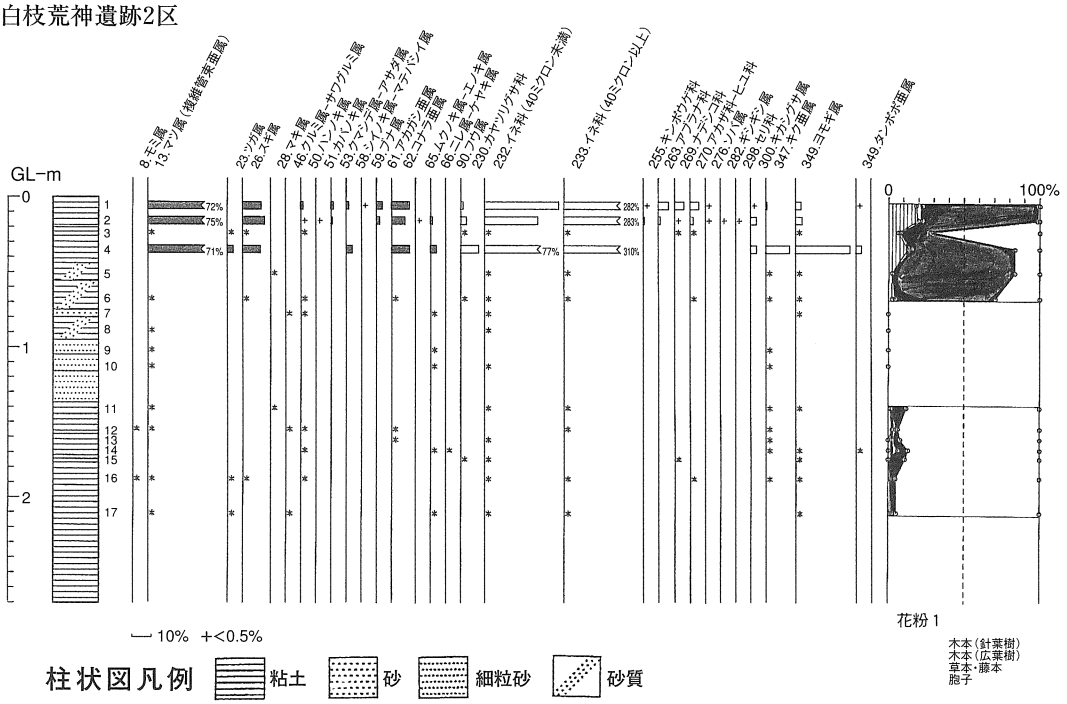


図2　No.1地点の花粉ダイアグラム

白枝荒神遺跡2区腐植層

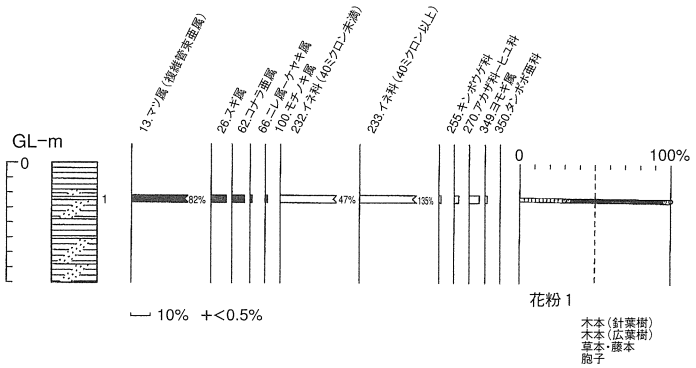


図3　No.2地点の花粉ダイアグラム

白枝荒神遺跡2区腐植層

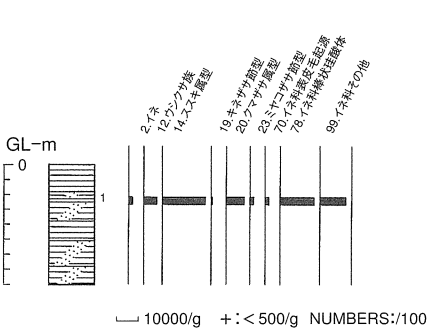


図4　No.2地点のプラントオパールダイアグラム

4．花粉分帯

一般には花粉分析結果より花粉帯を設定し、花粉帯を基に古植生を復元する。しかし、今回の試料の多くは花粉化石の含有量が少なく、統計処理に充分な花粉化石が検出できなかった。また、花粉ダイアグラムにスペクトルで示した4試料では、花粉組成にほとんど変化が認められなかったことから、今回は花粉分帯を行わなかった。

5．「腐植層」の堆積環境について

「腐植層」の成因についてトイレ遺構などという見方もあったが、寄生虫卵が認められなかった事から、この可能性は極めて低い。

一方多量の炭片が検出され、イネ科植物起源のプラント・オパール化石が多数検出された。このことから、炭片がイネ科植物に由来することが指摘できる。

ピット中に稲藁などの炭がまかれ（捨てられ？）埋められたことにより、「腐植層」が形成されたの

ではなかろうか。

6．花粉化石の検出量が少なかった原因について

花粉化石の検出量が少ない原因には、一般に以下の２つの要因が考えられている。

①　堆積速度が早かったために、花粉化石の含有量が極めて少なかった。

②　花粉化石は堆積時に充分含まれていたが、二次的要因により分解された。

①の場合には、花粉化石はもとより、胞子化石、他の有機物の含有量も少ないと考えられる。一方今回の場合、微少な炭片が大量に認められることから①の要因は考えにくい。

②の場合、分解の要因として主に以下の２つの要因が考えられている。

（１）　堆積中、あるいは堆積後に紫外線の影響により花粉膜が劣化し、花粉化石が消滅した。

（２）　堆積後、地下水の影響により酸化・還元環境におかれ、花粉化石が消滅した。

（２）　の場合、地層に酸化鉄の検出が認められるなどの現象が観察できる。しかし今回の観察では、明瞭な酸化鉄の検出は認められなかった。

したがって、今回の試料中に花粉化石が少なかったことの主な原因として、堆積中、あるいは堆積後に紫外線の影響により花粉膜が劣化し、花粉化石が消滅したことがあげられる。

連続的な炭片、および劣化花粉粒の検出は、いわゆる「土壌化」を示唆すると考えられる。したがって遺跡内は、水域から陸域、さらに水域と、不安定な堆積環境を何度か繰り返しながら、現代に至ったと考えられる。

7．各層準の堆積時期について

今回行った花粉分析の内、充分な量の花粉化石が検出された４試料では、いずれもマツ属（複維管束亜属）が卓越し、スギ属、コナラ亜属を伴う。また、イネ科（40ミクロン以上）が高率で出現する。

宍道湖地域での花粉組成変遷（大西，1993）では、マツ属（複維管束亜属）が卓越するのはイネ科花粉帯マツ亜帯であり、およそAD 1500～1930年頃と考えられている。このことから考えると、いずれの試料も近世以降の堆積物である可能性が指摘できる。

一方発掘の成果から、試料№２層準が弥生時代～中世の堆積物、試料№３層準が弥生時代以前の堆積物であると考えられており、花粉帯から推定される時期と矛盾する。

試料№２以深で得られた花粉化石には、耕作により下方に移動したものである可能性も否定できない。しかし、試料№３層準ではほとんど花粉化石が検出されていないにも関わらず、下位の試料№４層準では花粉化石の検出量が多ことから、花粉化石の移動の可能性は低いと考えられる。

今回得られた花粉組成からは、遺跡内での稲作と周辺の二次林化が推定されることからこれらの層準の堆積時期を確定することは重要である。今後、遺跡内での理化学的な年代測定、および継続的な花粉分析の実施が望まれる。

8．古植生復元

今回得られた花粉組成のうち、№１層準は従来の花粉分析結果と一致した。一方、前述のように№２層準以深で得られた花粉組成は、従来の花粉分析結果と異なった。

現状では、弥生時代以前から現代に至るまで遺跡内では稲作が行われ、中国山地縁辺部や北山山地はアカマツの二次林に覆われていたと考えられる。しかし、№２層準以深でのマツ属（複維管束亜属）

の出現は、遺跡北西部に広がる浜山砂丘などに分布したクロマツ林（海岸林）に由来するとも考えられる。

出雲市内では、花粉分析などの自然科学分析が行われだしたのが近年になってからであり、既存の資料も乏しい。このため、植生復元に係わる要因のうち、不明な事柄が多い。したがって、今後同遺跡内、あるいは周辺地域での継続的な分析による資料の蓄積が望まれるところである。

9．まとめ

今回の分析結果から、以下のことを考察した。

（1）　花粉化石の含有量が少なく、かつ炭片が多量に検出できた。この原因を追及する過程で、各層準の「土壌化」を推測することができた。

（2）　「腐植層」の形成過程を推定した。

（3）　試料№1～4層準の堆積時期について花粉組成から推定される時期と、考古学的な発掘成果から推定される時期の間で矛盾が生じた。

（4）　遺跡周辺の古植生を推定した。しかし今回の分析で得られた資料が断続的であり、今回行った古植生復元は今後修正をする必要がある。

今後、遺跡内、あるいは周辺地域での理化学的な年代測定、および継続的な花粉分析の実施が望まれる。

10．引用文献

藤原宏志（1976）．プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，15－29．

中村純（1974）イネ科花粉について，とくにイネを中心として．第四紀研究，13，p．187－197．

大西郁夫（1993）中海・宍道湖周辺地域における過去2000年間の花粉分帯と植生変化．地質学論集．39，33－39．

渡邉正巳（1995）40．花粉分析法．考古学ライブラリー65考古資料分析法，84－85，ニュー・サイエンス社，東京．

図表一覧

図1　試料採取地点

図2　No.1地点の花粉ダイアグラム

図3　No.2地点の花粉ダイアグラム

図4　No.2地点のプラント・オパールダイアグラム

第８章　平成６～８年度調査のまとめ

平成６年度調査から平成８年度調査については、下記の項目に沿って調査者の所見を述べ、当該調査のまとめとしたい。

当該調査区検出遺構の性格について

平成６年度から平成８年度調査の主な検出遺構は土坑と溝状遺構であり、ピットも検出しているが建物が建つものはなく、あまり生活臭のしない調査区であった。出土遺物のほとんどは弥生時代中期後半の土器片であるため、この時期が当該調査区で遺構が築かれた中核の時期を示していると思われる。また、平成７年度１区以西の出土量は平成５年度調査区と比較すると格段に減少する傾向にあり、平成６年度調査区以西では平成５年11月に行った試掘調査において遺構・遺物ともに検出されず、白枝荒神遺跡の西端を確認する結果となった。さらに、検出遺構の中で明らかに遺物を伴い時期を確定できる遺構としては、平成８年度調査区のSK02などを中心に土坑が抽出される。これらのことから、当該調査区は日本海に開けた入り海を望む、弥生時代中期後半から後期にかけての集落の西端に築かれた墓域であることが可能性の一つとして挙げられる。

土層堆積状況について

当該調査区では土層堆積状況観察用に計７ヶ所で深堀を行った。その結果、壁の崩壊により掘削が不可能となった１ヶ所を除き、６ヶ所において標高60cm付近で、三瓶山から神戸川によって出雲平野に供給された石英安山岩の砂層の上面を確認した。この上には大きく捉えて標高110cmまでは粘土層、標高260cmまでは砂層の堆積が認められる。土層をさらに細分し堆積状況を詳細に観察すると、Ａ１－Ａ15ラインではＡ15方向に土層が下がりながら堆積している状況が認められるのに対し、Ａ－Ｂ－Ｃラインでは長さ10m未満の確認であったが、ほぼ水平に堆積している。このことから、局地的な現象の可能性もあるが、南西方向へ下がりながら土層が堆積している様子が窺え、出雲平野が神戸川により、この方向に形成されていったことを想像させる。

遺構検出レベルについて

上記の堆積土を土台に、ある程度の削平を受けているが、遺構はほぼ標高280cm～300cm間で検出している。この検出レベルは出雲平野中央部では最も低い値であり、遺構が築かれた時期、つまり、弥生時代中期後半から後期にかけての集落造営可能な最低標高と考えられる。しかし、平成７年度調査に伴い実施した花粉分析では、遺構検出レベル以下の堆積土層からの花粉化石の検出量が少ないため、ある程度土壌化が進んでいた可能性があるという結果を得た。この結果もって即、弥生時代に標高３m以下の出雲平野中央部で集落造営が可能であったとは言えないが、平野周辺の平田市の源代遺跡で弥生時代中期の溝が、また、湖陵町の西安原遺跡で弥生時代終末から古墳時代中期の杭列あるいは木道がいずれも標高０m以下で検出されていること[註1]などを勘案し、一つの可能性として今後さらなる検討を加える必要がある。

分銅形土製品について

当該調査区において、４点の分銅形土製品が出土した。いずれも遺構に伴わず遺物包含層からの出土であり詳細を知る術はないが、矢野遺跡で１点出土しているほか近年の出雲市内の調査で、古志本郷遺跡で１点、正蓮寺周辺遺跡で３点出土しており出土例が相次いでいる。島根県内での出土数も29[註2]

点を数えることとなり、当地域と瀬戸内との交流を示す貴重な資料を追加する成果を得た。

引用・参考文献

田中義昭・西尾克己・広江耕史・山本　清・磯田由紀子　「出雲市矢野遺跡の研究（Ⅰ）」『山陰地域研究』第3号　島根大学山陰地域研究総合センター　1987

田中義昭・西尾克己　「出雲平野における原始・古代集落の分布について」『山陰地域研究』第4号　島根大学山陰地域研究総合センター　1988

中村唯史　「4．上長浜貝塚と周辺の古環境」『上長浜貝塚』　出雲市教育委員会　1996

『古代の出雲を考える3　出雲平野の集落遺跡Ⅰ』　出雲考古学研究会　1983

『古代の出雲を考える5　出雲平野の集落遺跡Ⅱ』　出雲考古学研究会　1986

『山持川川岸遺跡』　出雲市教育委員会　1996

正岡睦夫・松本岩雄編　『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』　木耳社　1992

『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5　南講武草田遺跡』　鹿島町教育委員会　1992

田中義昭　「山陰地方における弥生時代の海水準について」『島根大学地球資源環境学研究報告』第15号　1996

西尾克己・野坂俊之　「神西湖周辺の集落遺跡」『湖陵町誌研究』第4号　1995

東　潮　「分銅形土製品の研究（Ⅰ）」『古代吉備』第7集　1971

神原英朗　「集成4　分銅形土製品」『吉備の考古学的研究（上）』　1992

註1

平田市教育委員会　原俊二氏、湖陵町教育委員会　野坂俊之氏のご教示による。

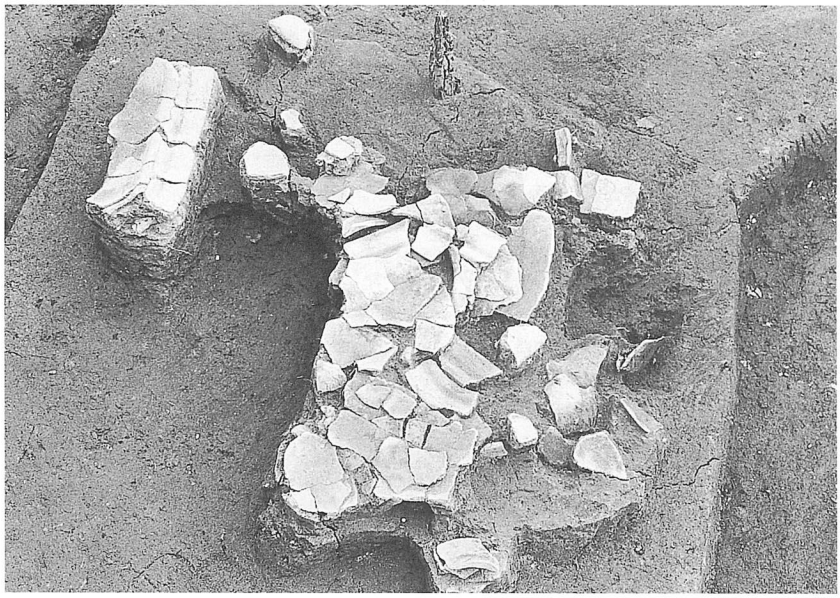
註2

分銅形土製品の島根県内出土点数は出雲市内で9点確認されているほか、米田がとりまとめたところ平成9年3月現在で次のとおりである。布田遺跡（松江市）8点、西川津遺跡（松江市）6点、タテチョウ遺跡（松江市）3点、石台遺跡（松江市）1点、十善遺跡（安来市）1点、鷸貫遺跡（東出雲町）1点。県内出土点数合計29点。

平成5年度調査区

図版1

1. Ⅰ区検出遺構

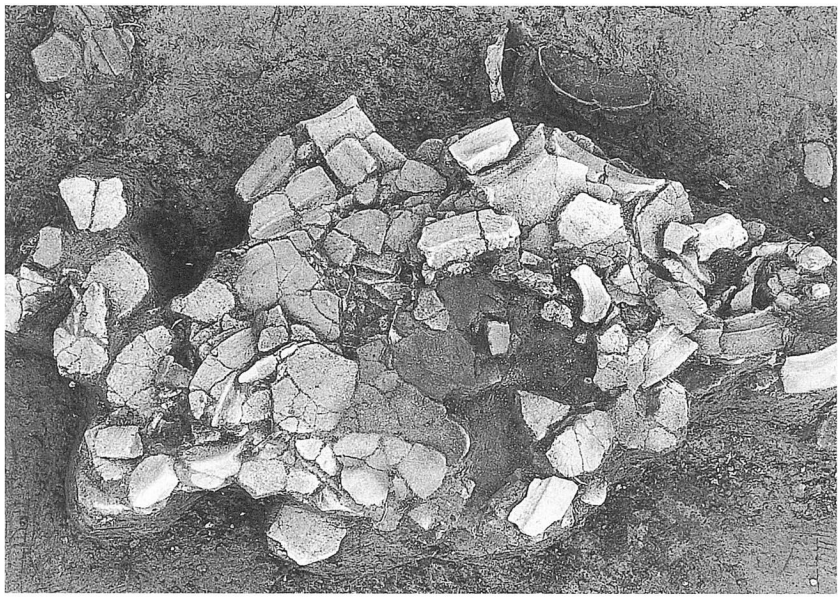


2. 土器群1出土状況

3. 土器群5出土状況

平成5年度調査区

図版2



1. 土器群5上位出土状況

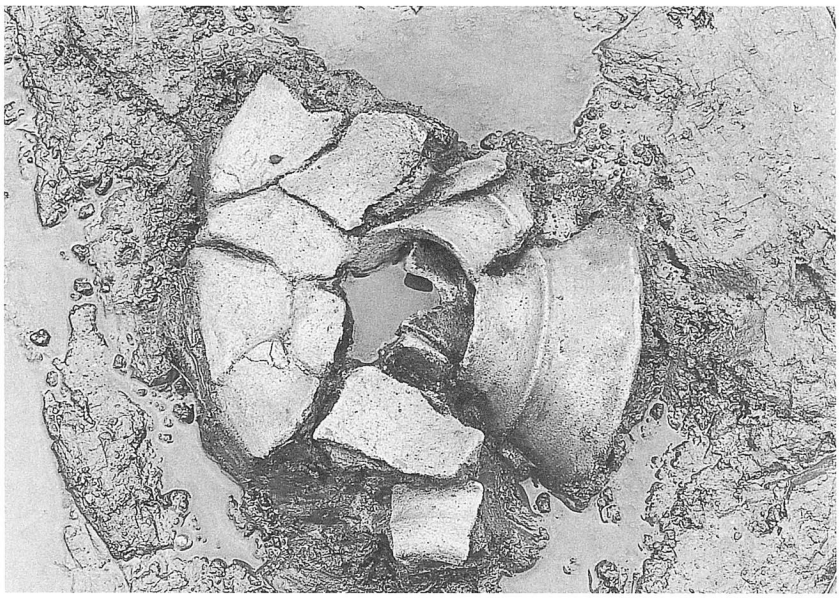
2. 土器群5下位出土状況

3. 土器群7出土状況

平成5年度調査区

図版3

1. 土器群7出土状況（近景）



2. 土器群7出土状況（近景）

3. 土器群9出土状況

平成5年度調査区

図版4

1. 土器群9出土状況（近景）

2. 土器群9出土状況（近景）

3. 土器群10出土状況